

平成 26 年度

教師海外研修報告書

～国際理解教育の授業実践事例集～

研修国

モンゴル国（東京都・群馬県・長野県教員）

エルサルバドル共和国（埼玉県・千葉県・新潟県教員）



はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）では、開発途上国の現状や日本との関係、そこに暮らす人々の生活や国際協力に対する理解を深め、学校における教育活動の一層の充実を図ることを目的に、教師海外研修を毎年実施しています。

平成 26 年度、JICA 東京国際センター及び駒ヶ根青年海外協力隊訓練所では、東京都、埼玉県、千葉県、群馬県、新潟県、長野県から 20 名の教員を募り、国内研修を経て、モンゴル国（以下、モンゴル）、エルサルバドル共和国（以下、エルサルバドル）の 2 か国に派遣しました。本報告書は、今年度の研修の概要及び帰国後の勤務校における授業実践の実例を中心にまとめたものです。

文部科学省国立教育政策研究所と JICA が実施した「グローバル化時代の国際教育の在り方国際比較調査」（2014 年）によると、近年、欧米の先進的な国々では、従来の知識伝達型の一斉授業から、生徒の主体性を重視した協働学習への転換が図られています。従来から重視されてきた系統的な知に加え、答えのない課題を与え、自ら考え、他者の意見に耳を傾け、それらを踏まえ、さらに発展的に考え止揚していくことにより、問題解決型の知を育成しようというものです。これは、国立教育政策研究所が試案として出した「21 世紀型能力」の思考力や実践力にあたるものと言えるでしょう。

本報告書で紹介されている授業実践は、正にこのような考え方を促進させる具体的で有効な事例となっています。日常の生活の繰り返しの中ではなかなか気づかないことで、生徒の目線や身の丈に合うテーマを与え、読んで、見て、聞いて、触れるような教材により疑似体験させていく。そして興味を持たせ、協働しながら学習させていく。是非参考にいただき、学校現場の先生方によって、このような国際理解教育／開発教育の授業実践が積極的に推進され、生徒の問題解決型の知の育成につながることを期待いたします。

結びに、本研修の実施にあたりご支援をいただいた外務省、文部科学省、各教育委員会並びに関係諸団体に感謝を申し上げますとともに、今後とも JICA が取り組む市民参加協力事業にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 27 年 3 月

独立行政法人国際協力機構（JICA）東京国際センター

所 長 佐々木 十一郎

目 次

はじめに	1
1. 研修参加者一覧	4
2. 教師海外研修概要	5
3. 派遣前研修	8
4. 派遣後研修	10
5. 研修参加者写真	11
6. 海外研修（モンゴル）	12
(1) 研修国の概要	12
(2) 海外研修日程	13
(3) 海外研修トピックス	14
(4) 私の1枚 in モンゴル	16
7. 海外研修（エルサルバドル）	18
(1) 研修国概要	18
(2) 海外研修日程	19
(3) 海外研修トピックス	20
(4) 私の1枚 in エルサルバドル	22

8. 授業実践 ～研修を生かした国際理解教育の事例～ 24

氏名 学校名	単元名	授業実施学年 授業実施教科	
芳賀 晶子 港区立青南小学校	せかいのくになかよし	小学校 1 年生 国際科	26
岩井 裕子 八王子市立横山第一小学校	世界の国へとびだそう！	小学校 6 年生 総合的な学習の時間、道徳、社会	32
吹越 菜央 小平市立小平第四小学校	たったひとつの まあるい ちきゅう	特別支援学級 1 ～ 6 年生 生活単元学習	38
石田 恒平 聖徳学園中学・高等学校	持続可能な開発のためのポスターづくり	高校 1 年生 美術	44
田中 聖子 東京都立田柄高等学校	Brightening the Future	高校 1 年生 コミュニケーション英語Ⅰ	50
川島 直子 東京都立山崎高等学校	国際社会の中の日本	高校 2 年生 コミュニケーション英語Ⅱ	56
小山 貴裕 群馬県立あさひ養護学校	日本とモンゴルの関係から、援助について 考えよう	高校 1 ～ 3 年生 現代社会	62
伊藤 須美子 木曽町立開田小学校	ぼくたち わたしたちの 木曽馬	小学校 2 年生 開田科、生活科	68
小木曾 一希 長野県上田高等学校	「援助」する前に考えよう	高校 2 年生 情報	74
正村 真一 上田学園 上田西高等学校	モンゴル理解・日本の国際協力の在り方	高校 3 年生 地理 B	80
今井 奈央子 川越市立今成小学校	日本、外国、自分を見つめよう	小学校 4 年生 道徳	86
樋地 香奈子 川口市立飯塚小学校	世界に目を向けて～これからあなたも世界 市民～	小学校 6 年生 総合的な学習の時間、道徳、社会	92
柿沼 秀典 宮代町立須賀小学校	ともに生きる～われら地球人～	小学校 6 年生 総合的な学習の時間、道徳、社会	98
山口 翠 所沢市立北野中学校	断ち切ろう、負の連鎖！	中学校 2 年生 地理的分野	104
田仲 永和 木更津市立金田小学校	日本とエルサルバドルは似ている？似てい ない？	小学校 3 年生 総合的な学習の時間	110
下村 圭 館山市立神戸小学校	つながろうエルサルバドル	小学校 4 年生 総合的な学習の時間	116
元吉 佑樹 千葉市立鶴沢小学校	世界で活躍する日本人、わたしたちの生活 と環境	小学校 5 年生 道徳、社会	122
沼田 麻人 松戸市立第四中学校	なぜ、日本は発展途上国に約 1 兆円も援助 するのか	中学校 3 年生 社会	128
渡辺 登 長岡市立才津小学校	世界の人々とともに生きる	小学校 6 年生 社会	134
駒沢 玲子 村上市立朝日みどり小学校	みんなちがって、みんないいね！！	小学校 5 年生 外国語活動、家庭科、道徳	140

9. 授業実践を終えて 146

10. 授業実践報告会 147

11. 学校・教員のための国際理解教育支援プログラム 148

おわりに 150

1. 研修参加者一覧

モンゴルコース（10名）

氏名	都県名	学校名	担当教科
芳賀 晶子	東京	港区立青南小学校	全教科
岩井 裕子	東京	八王子市立横山第一小学校	全教科
吹越 菜央	東京	小平市立小平第四小学校	全教科
石田 恒平	東京	聖徳学園中学・高等学校	美術
田中 聖子	東京	東京都立田柄高等学校	英語
川島 直子	東京	東京都立山崎高等学校	英語
小山 貴裕	群馬	群馬県立あさひ養護学校	現代社会
伊藤 須美子	長野	木曽町立開田小学校	全教科
小木曽 一希	長野	長野県上田高等学校	英語、情報
正村 真一	長野	上田学園 上田西高等学校	地理歴史・公民

エルサルバドルコース（10名）

氏名	都県名	学校名	担当教科
今井 奈央子	埼玉	川越市立今成小学校	全教科
樋地 香奈子	埼玉	川口市立飯塚小学校	全教科
柿沼 秀典	埼玉	宮代町立須賀小学校	全教科
山口 翠	埼玉	所沢市立北野中学校	社会
田仲 永和	千葉	木更津市立金田小学校	全教科
下村 圭	千葉	館山市立神戸小学校	全教科
元吉 佑樹	千葉	千葉市立鶴沢小学校	全教科
沼田 麻人	千葉	松戸市立第四中学校	社会
渡辺 登	新潟	長岡市立才津小学校	全教科
駒沢 玲子	新潟	村上市立朝日みどり小学校	全教科

海外研修同行者

氏名	所属	コース
濱野 清	文部科学省国立教育政策研究所	エルサルバドル
仲山 嘉彦	JICA 東京（学校教育アドバイザー）	モンゴル
中野 貴之	JICA 埼玉デスク	エルサルバドル
矢部 哲也	JICA 群馬デスク	モンゴル

2. 教師海外研修概要

■研修の目的

国際理解教育/開発教育に関心を持つ教員を対象に、国内での研修と開発途上国への訪問により、開発途上国が置かれている現状や国際協力の必要性、日本との関係に対する理解を深め、学校現場での授業実践等を通じて、次代を担う児童・生徒の育成（特に国際問題、相互依存、国際協力の必要性の理解促進等）に役立てていただくことを目的として実施します。

また研修参加後は、JICAと協力し、または自発的に教育現場で国際理解教育/開発教育の推進に活躍していただくこともねらいとしています。

[研修で修得を目指すスキル]

- ① 国際理解教育/開発教育の必要性を理解し、説明できる。
- ② 開発途上国が置かれている現状、国際協力の現場で起きている現状を理解し、説明できる。
- ③ 開発途上国と日本との関係、特に相互依存関係について理解し、説明できる。
- ④ 国際協力及びJICAの概要を理解し、説明できる。
- ⑤ 国際協力及び援助の必要性を理解し、説明できる。
- ⑥ 上述①～⑤を踏まえた国際理解教育/開発教育のカリキュラム・教材を作成できる。
- ⑦ 上述⑥のカリキュラム・教材を基に、国際理解教育/開発教育の授業を実施できる。
- ⑧ 参加型学習の手法を理解し、実践できる。

■主催：

独立行政法人 国際協力機構 東京国際センター（JICA東京）
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所（JICA駒ヶ根）

■後援：

外務省、文部科学省、各都県及び政令指定都市の教育委員会、各都県の私立中学高等学校協会

■研修国と募集人数

モンゴル：10名（東京都、群馬県、長野県の学校に所属の教員）
エルサルバドル：10名（埼玉県、千葉県、新潟県の学校に所属の教員）
※研修国は年度により異なります。

■研修内容

- ・日本においての座学・ワークショップの実施
- ・開発途上国（JICAの事業現場等）への訪問
- ・学校現場での国際理解教育/開発教育の授業実践

■研修日程

7ページに記載のとおり

■応募資格

次の資格をすべて満たす方とする。

- ① 東京都、埼玉県、千葉県、群馬県、新潟県、長野県の国公立、私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、高等専門学校（1～3年生を担当）、特別支援学校において教育活動に従事していること。
- ② 応募締切の時点で、年齢が満50歳以下であること。
- ③ 応募締切の時点で、教員経験年数が2年以上であること。
- ④ 原則として、所属する学校の校長の推薦があること。
- ⑤ 研修国の事情を勘案した上で、参加に耐えうる健康状態であること。
- ⑥ 過去に、本研修、JICA海外ボランティア、JICA専門家、ODA民間モニター／国際協力レポーター等で海外に派遣された経験がないこと

■参加要件

次の要件をすべて満たす方とする。

- ① 原則として、国内研修及び海外研修の全行程に参加可能であること。
- ② パソコンメールアドレスでの連絡（ファイルの送受信を含む）が可能なこと。
- ③ 帰国後、所定の期日内に海外研修報告書を提出することに同意すること。
- ④ 帰国後、本研修の定めた期間内に所属校において授業の実践を行い、当該授業の実践報告書を提出し、JICAのウェブサイトにて一般公開されることに同意すること。
- ⑤ 研修の目的を理解し、研修終了以後、研修で得られた成果をJICAが依頼する研修（あるいはセミナー）で報告する等、JICAが実施する国際理解教育／開発教育支援事業に協力可能であること。

■参加費用

（1）JICA負担

- ・ 国内交通費（自宅最寄駅／バス停から研修会場及び成田空港まで）
- ・ 国内宿泊費
- ・ 海外渡航費（含トランジットの際の宿泊費）
- ・ 査証料、空港使用税
- ・ 現地視察に必要な交通費及び入場料
- ・ 海外旅行保険加入費

（2）参加者負担

- ・ パスポート取得にかかる費用
- ・ 予防接種代
- ・ 食費
- ・ 現地宿泊費
- ・ 追加保険の加入費用（任意）
- ・ その他、上記(1)以外の費用

※平成26年度の募集要項は、JICA東京のホームページでご覧いただけます。

※平成27年度の募集要項は、4月中旬頃にJICA東京のホームページに掲載します。

■研修の流れ

◇派遣前研修

7月5日(土)・6日(日)

- ・研修の趣旨および JICA や日本の国際協力、訪問国に関する理解を深める。
- ・国際理解教育 / 開発教育への理解と参加型学習の手法の体験。
- ・研修における各自の役割の理解と、海外研修に向けて準備。



◇海外研修

■モンゴルコース : 8月4日(月)～13日(水)(10日間)

■エルサルバドルコース : 8月11日(月)～21日(木)(11日間)

訪問国の現状や国際協力の必要性、日本との関係について、実際の現場を訪問することで体験、理解する。また、授業実践に必要な教材の材料等を収集する。

※帰国後、海外研修報告書の提出



◇派遣後研修

8月24日(日)

海外研修の経験を生かした授業の実施・教材作成について考える。



◇授業実践

9月～12月(各勤務校において1回以上)

研修の経験を生かした授業を実施し、成果を各自で検証する。

※実施後、授業実践報告書の提出



◇授業実践報告会

12月～2月(各都県別に1回)

研修の成果(主に授業実践)について、教育関係者をはじめとする地域の方に報告する。



◇教師海外研修参加後(翌年以降)

研修の成果を生かして、各所属校および地域で国際理解教育 / 開発教育を推進する。

- ・授業 / 活動のブラッシュアップ
- ・JICA 国際理解教育 / 開発教育支援プログラムの活用
- ・実践者のネットワークへの参加 等

3. 派遣前研修

日時：平成 26 年 7 月 5 日（日）・6 日（日）

場所：JICA 地球ひろば・JICA 市ヶ谷ビル

目的：① 研修の趣旨および JICA や日本の国際協力、訪問国に関する理解を深める。

② 国際理解教育 / 開発教育を理解し、授業実践に用いる教材の作成方法を理解する。また、参加型学習の手法を理解する。

③ 研修における各自の役割を理解する。また、海外研修における各種手続き・準備内容を理解する。

【1 日目】

時 間	内 容	目 的	講 師・進 行
10:00	開会挨拶		JICA 東京地域連携課 佐藤 俊也
10:10	参加者・スタッフ紹介	研修に関わるメンバーを知る	
10:30	【講義】 JICA の開発教育支援事業と教師海外研修	JICA の開発教育支援事業と教師海外研修の目的および研修の流れについて理解する	JICA 教師海外研修担当
10:50	【講義】 JICA と日本の国際協力	JICA と日本の国際協力について理解する	JICA 東京地域連携課 佐藤 俊也
11:20	【講義】 JICA 開発教育支援事業プログラム案内	JICA の開発教育支援事業各種プログラムについて知る	JICA 教師海外研修担当
11:30	移動		
11:40	【JICA 地球ひろば体験ゾーン見学】 世界の課題と国際協力の必要性	世界の課題を把握し、国際協力の必要性を理解すると共に、実施例を知る	JICA 地球ひろば 地球案内人
12:10	昼食休憩		
13:00	【講義】 持続発展教育（ESD）と国際理解教育	カリキュラムにおける ESD 及び国際理解教育の位置付けを理解する	文部科学省国立教育政策研究所 濱野 清氏
14:00	〈校種別〉 【講義】 研修過去参加者の国際理解教育実践事例	研修の経験を生かした国際理解教育の実践事例を知る	春日部市立幸松小学校 内田 美希教諭 千葉県立佐倉高等学校 小島 江津子教諭
15:20	移動・休憩		
15:30	〈コース別〉 コース別自己紹介	研修に関わるメンバーを知る	JICA 国際協力推進員 JICA 教師海外研修担当
15:40	〈コース別〉 【諸連絡】 渡航ブリーフィング①（日程と準備）	海外研修の日程と必要な準備について知る	JICA 国際協力推進員 JICA 教師海外研修担当
16:00	〈コース別〉 【講義】 訪問国の概要、開発課題と JICA の活動	訪問国の概要及び開発課題とそれに対応した JICA の活動について知る	JICA 担当部職員
17:00	移動・JICA 東京チェックイン		
18:30	チームビルディング（懇親会）	研修関係者との関係を構築する	JICA 国際協力推進員
20:00	終了		



講義「JICA と日本の国際協力」の様子



講義「ESD と国際理解教育」の様子



講義「研修過去参加者の国際理解教育実践事例」の様子

【2日目】

時 間	内 容	目 的	講 師・進 行
9:00	【諸連絡】 渡航ブリーフィング② (保険加入手続き・航空券・健康と安全対策)	研修に関する手続きと、健康・安全対策について知る	JICA 教師海外研修担当者
9:30	【ワークショップ】 開発教育における参加型学習の教材・手法の体験	開発教育で使われる参加型学習を体験し、授業での活用につなげる	上智大学 田中 治彦氏
11:00	【講義】 開発教育における参加型学習の理念と授業への応用	開発教育における参加型学習の教材・手法について理解する 開発教育と国際理解教育の関係を理解する	上智大学 田中 治彦氏
12:00	昼食休憩		
13:00	〈コース別〉 【グループワーク】 役割分担の明確化	参加型研修について理解し、各自の役割を明確にする	JICA 国際協力推進員 JICA 教師海外研修担当
13:30	【個別ワーク】 授業実践計画の作成と検討	授業実践の計画を立てる	JICA 国際協力推進員 JICA 教師海外研修担当
14:30	〈コース別〉 【グループワーク】 授業実践計画の共有と検討	授業の実施に向けて必要な情報収集についてチームで検討する	JICA 国際協力推進員 JICA 教師海外研修担当
15:30	〈コース別〉 【グループワーク】 訪問先での交流プログラムの検討	現地の子どもたちとの交流プログラムの内容を検討し、必要な準備を明確にする	JICA 国際協力推進員 JICA 教師海外研修担当
16:30	休憩・移動		
16:40	【諸連絡】 今後の研修の流れと提出物について	研修の今後のスケジュールと報告書の作成・提出について理解する	JICA 教師海外研修担当者
16:55	閉会挨拶		JICA 学校教育アドバイザー 仲山 嘉彦
17:00	終了		



ワークショップ「開発教育における参加型学習の教材・手法の体験」の様子



グループワーク
「役割分担の明確化」の様子



グループワーク
「授業実践計画の検討と共有」の様子



海外研修に向けての決意表明の様子

4. 派遣後研修

日時：平成 26 年 8 月 24 日（日）

場所：JICA 地球ひろば

目的：海外研修の経験を生かした授業の実施・教材作成について考える。

時 間	内 容	目 的	講 師・進 行
10:00	開会挨拶		JICA 学校教育アドバイザー 仲山 嘉彦
10:10	【グループワーク】海外研修の体験の整理と共有	授業実践案の作成に向けて、海外研修の体験 / 素材を整理し、共有する	JICA 教師海外研修担当
11:30	【講義】 海外研修の体験を生かした授業づくり	海外研修の体験を生かした授業づくりと、ESD の視点での授業内容の整理について理解する	文部科学省国立教育政策研究所 濱野 清氏
12:30	昼食休憩		
13:30	【講義】授業の振り返りと報告書への記載について	PDCA サイクルに基いた授業の実施と報告書への記載について理解する	JICA 学校教育アドバイザー 仲山 嘉彦
14:30	【個別ワーク】授業実践案の見直し	海外研修の体験を生かして、海外研修前に作成した授業実践案を見直す	JICA 教師海外研修担当
15:00	休憩・移動		
15:15	【校種・教科別ワーク】授業実践案の共有と検討	授業実践案を校種・教科別メンバーで検討し、授業実践案の改善につなげる	JICA 学校教育アドバイザー 仲山 嘉彦 JICA 教師海外研修担当
16:15	休憩・移動		
16:30	【諸連絡】今後の研修の流れ	授業実践、県別報告会、報告書の提出について理解する	JICA 教師海外研修担当 JICA 国際協力推進員
16:50	【講話】国内研修・海外研修の終了にあたって		JICA 東京地域連携課 佐藤 俊也
17:00	終了		



グループワーク「海外研修の体験の整理と共有」の様子



講義「海外研修の体験を生かした授業づくり」の様子



講義「授業の振り返りと報告書への記載について」の様子



校種・教科別ワーク「授業実践案の共有と検討」の様子



講話「国内研修・海外研修の終了にあたって」の様子

5. 研修参加者写真

モンゴルコース



エルサルバドルコース



6. 海外研修（モンゴル）

（１）研修国の概要

正式名称：（和文）モンゴル国

（英文）Mongolia

首都：ウランバートル（Ulan Bator）

元首：ツァヒヤー・エルベグドルジ大統領
（2013年7月再任）

政体：共和制

面積：156万4,100平方キロメートル（日本の約4倍）

人口：約293万300人
（2013年、モンゴル国家統計委員会（以下NSO））

民族：モンゴル人（全体の95%）及びカザフ人等

言語：モンゴル語（国家公用語）、カザフ語

宗教：チベット仏教（ラマ教）等

通貨：モンゴル・トゥグルグ（MNT）

通貨レート：1米ドル＝1525トゥグルグ（2013年平均、NSO）

日本との時差：1時間

主要産業：鉱業、牧畜業、流通業、軽工業

GDP：11,516百万ドル（2013年、世界銀行）
一人当たりGNP：3,770ドル（2013年、世界銀行）

経済成長率：11.7%（2013年、NSO）

略史：1911年 辛亥革命、中国（清朝）より分離、自治政府を樹立

1919年 自治を撤廃し中国軍閥の支配下に入る

1921年 活仏（カツブツ）を元首とする君主制人民政府成立（人民革命）

1924年 活仏の死去に伴い人民共和国を宣言

1990年 複数政党制を導入、社会主義を事実上放棄

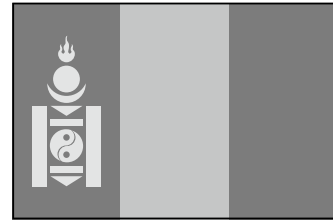
1992年 モンゴル国憲法施行（国名をモンゴル人民共和国からモンゴル国に変更）

気候：大陸性気候であり、年間を通じて雨量が少なく、空気が乾燥している。最も寒いのは1月（全国平均－20～－33度）、最も熱い時期は7月（全国平均18～28度）である。春（4～5月）は突風、砂嵐に悩まされる。

在留日本人：420人（2013年10月現在）

モンゴル国籍の外国人登録者数：5,180人（2013年12月現在）

青年海外協力隊の派遣開始：1991年



【参考資料】

・外務省「各国・地域情勢（エルサルバドル）」

<<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/elsalvador/index.html>>（2015年1月アクセス）

・JICA「国別生活情報(モンゴル)」

<<http://www.jica.go.jp/regions/seikatsu/ku57pq000005g185-att/Mongolia-p.pdf>>（2015年1月アクセス）

(2) 海外研修日程

期間：平成26年8月4日（月）～8月13日（水）

日	曜日	時間	訪問先・活動	主な面会者	場所
8月4日	月	午後	 成田発→ウランバートル着		
8月5日	火	午前	JICA モンゴル事務所	所長 加藤 俊伸	ウランバートル
		午後	日本大使館	参事官 林 伸一郎氏	
			市内視察と教材収集（メルクールザハ・ノミンデパート）		
8月6日	水	午前	 ウランバートル→ガチョルト地区		ガチョルト地区
			ロータス・チルドレンセンター	センター長 スグルグマ氏	
		午後	 ガチョルト地区→ウランバートル		ウランバートル
			新モンゴル高等学校	校長 ナランバヤル氏	
8月7日		午前	 ウランバートル→チョイル		チョイル
			第2区幼稚園 (JICA ボランティア活動視察)	青年海外協力隊 吉田 量子氏（幼児教育）	
		午後	 チョイル→ウランバートル		ウランバートル
8月8日	金	午前	 ウランバートル→バガノール地区		バガノール地区
			銀のハーン歴史博物館		
		午後	バガノール地区スポーツ委員会管轄クラブ (JICA ボランティア活動視察)	青年海外協力隊 池田 佳史氏（バスケットボール）	ウランバートル
			 バガノール地区→ウランバートル		
8月9日	土	午前	 ウランバートル→アルタンボラク村		アルタンボラク村
		午後	ゲルホームステイ体験		
8月10日	日	午前	ゲルホームステイ体験		
		午後	 アルタンボラク村→ウランバートル		ウランバートル
			中間振り返りミーティング		
8月11日	月	午前	ウランバートル市ゴミ廃棄場 (JICA 技術協力「UB 市廃棄物管理能力強化プロジェクト」サイト)	施設長 ブルトルチ氏	ウランバートル
		午後	淡水資源センター (JICA 無償資金協力「淡水資源・自然保護計画」サイト)	青年海外協力隊 横山 裕樹氏（環境教育）	
			モンゴル日本人材開発センター (JICA 技術協力「日本センタープロジェクト」サイト)	JICA 専門家 神谷 克彦氏 国際交流基金専門家 片桐 準二氏	
8月12日	火	午前	JICA モンゴル事務所（研修報告）		ウランバートル
		午後	ゲル地区における学校教育に関する講話	校長（104区小中高等学校） インフジャガダル氏	
			ゴビ カシミア工場 (JICA 過去支援サイト)		
8月13日	水		 ウランバートル発→成田着		

(3) 海外研修トピックス

◆市内散策と教材収集

現地の日用雑貨・食品を扱っている市場（メルクールザハ）と元国営のデパート（ノミンデパート）を訪問し、現地の生活を垣間見ると共に、授業実践に必要な教材を購入しました。



◆ロータス・チルドレンセンター

現地の NGO が運営する孤児院を訪問し、施設の見学と、遊牧民の教育問題についてのお話を伺いました。また施設の子ども達との文化交流を行い、日本の教員からは日本の遊び（「だるまさんが転んだ」、けん玉、折り紙、竹とんぼ、腕相撲）や文化（習字）を紹介し、子ども達からはモンゴルの踊りの披露がありました。



◆新モンゴル高等学校



新モンゴル高校は、日本式の教育を取り入れた私

立校で、生徒や教員が日本へ留学したり交流を行っています。学校は夏季休暇中でしたが、日本語の特別講習が実施されており、日本語クラスを見学した後、日本の教員による日本文化の紹介を行う授業を行い、生徒達との交流を図りました。

◆第2区幼稚園

青年海外協力隊員の活動する幼稚園を訪問しました。夏季休暇中で指導の様子は見学できなかったものの、隊員や同僚の先生方からモンゴルの幼児教育についてのお話をお伺いし、日本とモンゴルが抱える教育問題に関しての意見交換を行いました。



◆バガノール地区スポーツ委員会管轄クラブ

青年海外協力隊員の活動するスポーツクラブを訪問し、実際に指導している様子を見学させていただきました。隊員と指導を受けている生徒へのインタビューも行い、隊員と生徒達との信頼関係の厚さを感じる訪問となりました。



◆ゲルホームステイ体験

参加者は5つの家庭（ゲル）に分かれて1泊2日のホームステイを体験しました。乗馬や牛の乳搾り、家畜の世話、料理など遊牧民の体験を通して、モンゴルの伝統的な文化や自然と共存した生活につ

いて理解しました。



◆ウランバートル市ゴミ廃棄場

過去に JICA が技術協力を行ったゴミ廃棄場を視察しました。施設長による施設の説明と質疑応答に続き、実際の埋め立て地を見学し、モンゴルのゴミ処理問題の深刻さを実感しました。



◆淡水資源センター

JICA が無償資金協力により建設した淡水資源センターでは現在、青年海外協力隊員が環境教育に関する活動を行っています。隊員からモンゴルの環境分野での課題や協力活動に関する報告を聞き、センター見学を行いました。



◆モンゴル日本人材開発センター

目覚ましい経済発展を遂げるモンゴルにおいて、日本的経営を理解するビジネス人材の育成と日本との人脈形成の拠点として開設された通称「日本セン

ター」を視察し、センターで活動する日本人専門家にお話を伺いました。



◆ゲル地区における学校教育に関する講話

インフラ整備等が整っていないゲル地区での教育事情について、現地の学校の校長先生よりお話を伺い、目覚ましい発展を遂げる一方で、貧富の格差が広がっているモンゴルの課題についての理解を深め、教育の役割を考える機会となりました。



◆ゴビ・カシミア工場

日本の対モンゴル支援における初期の協力事業として、1977 年にカシミア製品の製造ライン一式への無償協力が行われた「ゴビ・カシミア工場」を視察しました。元国営の工場は 2007 年より民営化されており、日本の援助をきっかけに工場が自立発展している様子が伺えました。



(4) 私の1枚 in モンゴル



大草原の朝



ゲルでのホームステイの時、どうしても見たくて、寝袋をかぶり寒さをしのいで見た朝日。ゲルの煙突から出る煙は、お母さんが朝の支度をしているから。手前の小さな山の塊は、ストーブの燃料である牛の糞。ほとんどゴミを出さず、資源を大切にする遊牧民のエコな生活に、私たちが学ぶべきことがたくさんあると感じました。

名 前 芳賀 晶子 学 校 港区立青南小学校

悠久のシベリア鉄道



チョイルヘ向かう途中、デコボコ道で揺れるバスの中から撮影しました。なだらかな山々の稜線と大草原を縫うように走る姿が印象に残っています。中国との国境からウランバートル、そしてロシアとの国境へと続く線路。列車に乗っているのはどんな顔の人で、どんな土地へ行こうとしているのか。撮影後しばらく思いを馳せていました。

名 前 岩井 裕子 学 校 八王子市立横山第一小学校

小さな友だち

大草原の中でできた小さな友だち。今までのホームステイと違ったのはモンゴル語がわからないことで生じる『言葉の壁』。でも小さな友だちはそんなことはおかまいなし。彼が教えてくれたのは言葉は壁になんかならないこと。「友だちになりたい」という気持ちと「笑顔」さえあれば友だち。友だちになることが国際理解の第一歩。



名 前 吹越 菜央 学 校 小平市立小平第四小学校

言語は違ってても伝わるもの

世界各地で文化や価値観などを異にする人々が共存する現代において、文化や言語は違ってても伝わるものがあると思います。それは笑顔です。実際に孤児院を訪問した時に1番印象に残ったものは子どもたちの笑顔でした。



名 前 石田 恒平 学 校 聖徳学園中学・高等学校

ゲルスティ



無電化地域のゲルの住まいでは、太陽光発電パネルが大活躍です。意外にも、遊牧民生活には、携帯電話・テレビ・冷蔵庫など電化製品がありました。料理をするときは、ガスコンロも使います。一泊二日のゲルでのホームステイ生活は、驚きの連続で、生徒たちに話す興味深く耳を傾けていました。

名 前 田中 聖子 学 校 東京都立田柄高等学校

草原を走る少年



モンゴルのどこまでも続く草原、遠くに見える山々、点在するゲル。遊牧民の生活を体験した1泊のゲル滞在時間は、伝統料理のレクチャー、牛の世話、近くを流れる川の散策など、ゆったりと、そしてあっという間に過ぎて行きました。

名 前 川島 直子 学 校 東京都立山崎高等学校

ある青年との出会い



ガチョルト地区の孤児院で出会った青年。自閉症と思われる傾向と歩行障害をもち、他の子ども達と関わることなく、常に少し離れたところにいる。孤児院のスタッフの説明で、モンゴルでは「障がい者＝何もできない」という意識をもつ人が多いことを初めて知った。

先進国、途上国関係なく障がいをもった人が生き生きとできる社会をつくらねばと感じた。彼と出会えたことが私の大切な宝物になった。

名 前 小山 貴裕

学 校 群馬県立あさひ養護学校

馬との生活～馬は男のプライド～



遊牧民のゲルへホームステイをすると、1軒に数十頭の馬がいました。しかし、ゲルの隣には、トラックもバイクも車さえもあります。以前馬がしていた仕事の多くを機械がしています。それでも、モンゴルの方は馬と共に暮らしています。その理由は「馬は男のプライド」だからです。騎馬民族のプライドは、こうして継承されていくのだなと感じました。

名 前 伊藤 須美子

学 校 木曽町立開田小学校

写真に撮れない現実



研修8日目に視察した、ウランバートル市ゴミ廃棄場。

施設長の許可を取り、撮影していたが、「waste picker」（ゴミを拾う人：ゴミを拾い収入を得ている）に「こんな所を撮影するな！」とばかりに石を投げられた。彼らの気持ちを考えなかった自分の行為への失望と「それでも真実を生徒に伝えたい」と思うジレンマに駆られた。

写真には人は写っていない。分別の不十分なゴミと廃棄場周辺の「ゲル地区」（スラム）である。

名 前 小木曽 一希

学 校 長野県上田高等学校

モンゴル（ジャガイモ）の奇跡



ゲルステイをした時、娘さんがジャガイモを切っていた。モンゴル語を話せない私は、コミュニケーションをとろうと娘さんに向かって、「ジャガイモ」と。そうしたら周りの家族みんなが笑う。「何故？」と思いながら、さらに「ジャガイモ。ジャガイモ。」と連呼。そしてみんな笑う。後からガイドさんに聞いたら、娘さんの名前は「ジャガ」だった！偶然が「笑い」を引き起こし、人と「つながる」、モンゴルで起きたジャガイモの奇跡だった…。ちなみにモンゴル語で「ジャガ」は「幸せ」らしい。

名 前 正村 真一

学 校 上田学園 上田西高等学校

海外研修同行者より

モンゴルは「発展と伝統文化」が良く見て取れる国でした。経済発展を遂げている首都ウランバートルに対して、家畜と共に昔ながらの暮らしを続けている遊牧民の方々、そしてその狭間で生きるゲル地区の方々の様子も垣間見ることができました。我々はどうのような生活が人、環境、社会などにとって良いのかを模索してきました。実際に現場を視察し、体験することで「模索」が生まれるのではないかと思います。モンゴルで活動する青年海外協力隊員から

は、「実際に現場を見られた先生方に教わる生徒は幸せですよ」とのコメントをいただきました。私もそう思います。同行者として、人や物を介した日本の支援について理解いただけるようサポートさせていただきましたが、先生方の何事も吸収しようとする熱意や教材収集の貪欲さに支えられ、学びの多い研修になったと感じています。現場の視察は、すべての教員にできる経験ではありません。今回の研修に参加された先生方には、一人でも多くの児童生徒へと経験を伝えていただくことを期待しています。そして子どもたちが「日本」から「世界の中の日本」へと視野を広げることを願っています。

JICA群馬デスク 矢部 哲也

7. 海外研修（エルサルバドル）

（１）研修国の概要

正式名称：（和文）エルサルバドル共和国

（英文）Republic of El Salvador

首都：サンサルバドル（San Salvador）

元首：サルバドル・サンチェス・セレン大統領
（2014年6月就任）

政体：共和制

面積：2万1,040平方キロメートル（九州の約半分）

人口：約634万人（2013年、世界銀行）

民族：スペイン系白人と先住民の混血約84%、
先住民約5.6%、ヨーロッパ系約10%

言語：スペイン語

宗教：キリスト教（カトリック等）

通貨：米ドル及びコロン

※実際の流通は米ドルのみ

通貨レート：1米ドル＝8.75コロン（固定）

日本との時差：15時間

主要産業：軽工業（輸出向け繊維縫製産業）、農業（コーヒー、砂糖等）

GDP：24,259百万ドル（2013年、世界銀行）

一人当たりGNP：3,857ドル（2013年、中央銀行）

経済成長率：1.7%（2013年、中央銀行）

略史：1524年スペイン人侵入。

1560年グアテマラ総督領に編入される。

1821年スペインからの独立を宣言。同24年中米諸州連合に参加するも41年分離独立。

1970年代後半から内戦激化。

1992年政府とゲリラが和平合意に調印、内戦終結。

2001年1月及び2月に大地震が発生、死者1,259名、被災者150万人

気候：熱帯に属するが、首都サンサルバドルは海拔690mの高地にあり、年間を通じて低湿でしのぎやすい。雨季と乾季がはっきり分かれている。（雨季5～10月、乾季11～4月）

在留日本人：174人（2013年10月現在）

在日エルサルバドル人：109人（2013年6月現在）

青年海外協力隊の派遣開始：1968年



【参考サイト】

・外務省「各国・地域情勢（エルサルバドル）」

<<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/elsalvador/index.html>>（2015年1月アクセス）

・JICA「国別生活情報(エルサルバドル)」

<<http://www.jica.go.jp/regions/seikatsu/ku57pq000005g1oh-att/ElSalvador-p.pdf>>（2015年1月アクセス）

(2) 海外研修日程

期間：平成26年8月11日（月）～8月21日（木）

日	曜日	時間	訪問先・活動	主な面会者	場所
8月11日	月	午前	 成田発→ダラス経由→サンサルバドル着		
8月12日	火	午前	JICA エルサルバドル事務所	所長 立原 佳和	サンサルバドル
			 サンサルバドル→プエルト・エル・トリウンフォ		プエルト・エル・トリウンフォ
		午後	農林省水産開発局 (技術協力「貝類養殖技術向上・普及プロジェクト」活動視察)	JICA 専門家 可児 清隆氏	サンミゲル
			 プエルト・エル・トリウンフォ→サンミゲル		
8月13日	水	午前	東部総合リハビリセンター（JICA ボランティア活動視察）	シニア海外ボランティア 西田 尚氏（理学療法士）	サンフランシスコ・ゴテラ
		午後	農政省家族農業開発センター（JICA ボランティア活動視察）	シニア海外ボランティア 加藤 康雄氏（野菜栽培）	
8月14日	木	午前	サンタヘマ・カトリック校（JICA ボランティア活動視察）	青年海外協力隊 久保 元城氏（小学校教諭）	サンティアゴ・デ・マリア
		午後	サンペドロ・マサウア市立シャフィック・ハンダル記念サロン (JICA ボランティア活動視察)	青年海外協力隊 石田 夏樹氏（防災・災害救援）	サンペドロ・マサウア
			 サンペドロ・マサウア→サンサルバドル		サンサルバドル
8月15日	金	午前	在エルサルバドル日本大使館	大使 田良原 政隆氏	
			 サンサルバドル→サンビセンテ		サンビセンテ
		午後	国家小零細企業委員会一村一品運動アドバイザー 及び JICA ボランティアによる活動報告	JICA 専門家 内河 友規氏 青年海外協力隊 吉川 彩香氏（観光業）	
			市内散策と教材収集		
			 サンビセンテ→サンサルバドル		
8月16日	土	午前	中間振り返りミーティング		サンサルバドル
			 サンサルバドル→スチット		スチット
		午後	藍染体験および市内散策と教材収集		
			ホームステイプログラム		
8月17日	日	午前	パハロ・フロル語学学校（伝統料理作り体験）		サンサルバドル
		午後	 スチット→サンサルバドル		
8月18日	月	午前	国立工業技術高校（JICA ボランティア活動視察）	シニア海外ボランティア 石橋 洋二氏（工作機械）	サンサルバドル
			教育省	副大臣 Mr. Francisco Castaneda	
		午後	JICA エルサルバドル事務所（研修報告）		
			市内散策と教材収集		
			JICA スタッフとの懇親会		
8月19日	火	終日	 サンサルバドル発→ダラス着		ダラス
8月20日	水	終日	 ダラス発		
8月21日	木	午後	 成田着		

(3) 海外研修トピックス

◆農林省水産開発局

JICA 専門家の活動する水産局を訪問し、貝類養殖技術向上・普及プロジェクトの説明を受け養殖施設の見学を行いました。その後、プロジェクトを実施している漁村を訪問し、マングローブ林を利用した養殖の現場を視察し、現地住民の話も伺いました。



◆東部総合リハビリセンター

理学療法士であるシニア海外ボランティアの活動するリハビリセンターを訪問しました。ボランティアによる活動報告、施設見学と、リハビリテーションに携わる現地施設職員との意見交換も行われました。



◆農政省家族農業開発センター

シニア海外ボランティアの活動する農政省家族農業開発センターを訪問しました。ボランティアの行っている野菜栽培の指導についての説明を受けた後、施設・農場の見学を行い、エルサルバドルの農

業開発についての理解を深めました。



◆サンタヘマ・カトリック校

青年海外協力隊の活動する学校を訪問し、現地教員の授業見学、また5、6年生児童との日本文化交流を行いました。日本の教員達は、ラジオ体操をスペイン語で行い、また日本の昔遊びを児童と共に行いました。



◆シャフィック・ハンダル記念サロン

青年海外協力隊の活動する地域を訪問し、隊員の行う小学生を対象とした防災教育の取り組みを見学しました。日本発祥のカエルキャラバンと呼ばれる参加型アクティビティを通して、災害の多いエルサルバドルの子どもたちの防災意識を高める活動を実施していました。



◆一村一品運動アドバイザー活動報告

日本の大分県発祥の一村一品運動をエルサルバドルで広めている JICA 専門家の活動を伺いました。JICA が世界各国で実施している一村一品運動の普及の概要や、エルサルバドルでのケースについて話を伺いました。



◆ JICA ボランティアによる活動報告と市内散策

サンビセンテ市で活動する青年海外協力隊を訪問し、隊員の行う観光業における市内名所や名産物を生かした取り組みについて話を伺いました。またその後、地元の大学で観光業を学ぶ学生に市内を案内してもらい、地域の歴史や文化に触れることが出来ました。



◆ 藍染体験

エルサルバドルの伝統文化でもある藍染の体験を行いました。エルサルバドルにおける藍染の歴史や、日本の技術協力によって現地の伝統文化が継承されていることを学びました。



◆ ホームステイ

8つの家庭に分かれて1泊2日のホームステイを体験しました。一般家庭での交流体験を通じ、エルサルバドルの生活や文化に対する理解を深めることができ、エルサルバドルに新しい家族を作ることができました。



◆ 伝統料理<ププサ>作り体験

バハロ・フロル語学学校にて、伝統料理である「ププサ」作りを体験しました。また、語学学校教員によりエルサルバドルのダンスや、JICA ボランティアも受講するスペイン語の模擬授業も体験しました。



◆ 国立工業技術高校

シニア海外ボランティアの活動する国立の工業高校を視察しました。学校の施設見学を行い、また学生による研究発表を聴講しました。訪問を通して、エルサルバドルの工業教育への理解を深めることができました。



(4) 私の1枚 in エルサルバドル



ぼくの将来の夢は…



サンタヘマ小学校を訪問して感じたこと、それは「国は違っても子どもは同じ」ということ。熱心に勉強したり元気に遊んだりする姿は、日本の子どもたちと変わらないのだと感じました。そんな子どもたちを撮った中でも、特に気に入っているのがこの写真です。エルサルバドルも日本も、子どもたちの未来が明るくありますように。

名 前 今井 奈央子 学 校 川越市立今成小学校

ハッピーバースデー！

ホームステイ先のおばあちゃんがちょうど誕生日で、親戚や友人がたくさんお祝いに。翌日親友からプレゼントにももらったコンパクトで、嬉しそうにお化粧するおばあちゃん。その温かい人のつながりと笑顔は、やはり万国共通でした。自分の目の前にいる「一人」を大事にしていこうと、そこに幸せがあると感じた1枚でした。



名 前 樋地 香奈子 学 校 川口市立飯塚小学校

笑顔



学校訪問で児童と交流しているときの1枚。この子の家族や現地の教員が愛情をもって接しているから、自然と笑みがこぼれるのだと思う。日本の支援もその一因になっているはずである。

愛情をもってお互いに思い合って生きていく中で、世界中に笑顔があふれることを願う。

名 前 柿沼 秀典 学 校 宮代町立須賀小学校

サンビセンテ火山

現地の協力隊員に案内してもらった市内散策で登った塔からの景色。山登りが好きな自分にとっては、わくわくする景色で思わず山についていろいろ質問した。すると、「外国人は基本的には観光警察と一緒にないと登れません。」とのこと。エルサルバドルの治安の悪さが登山にも影響していると知り、びっくりした。



名 前 田仲 永和 学 校 木更津市立金田小学校

プブサ+笑顔=幸せ！

スチットの語学学校の先生たちとプブサ作り。国民食であるプブサと一緒に作って食べて会話したことでエルサルバドルの人と自分との距離が一気に縮まったような気がしました。笑顔あふれるコミュニケーションを通して感じたエルサルバドルはとっても温かかったです。



名 前 山口 翠 学 校 所沢市立北野中学校

未来へ続く署名



プエルト・エル・トリウフォ、マングローブ林の漁村にて、JICAの技術支援による稚貝の寄贈に署名する現地の漁師さんのリーダー。それを見守る若手のみなぎりは限りなく優しい。彼らの目には、未来へ続く道がおぼろげながらも見えるはず。そして、目には見えなくても、これをつなげる日本とエルサル、そして私と彼らのつながりもまた、確かにそこに存在していたのだ。

名 前 下村 圭 学 校 館山市立神戸小学校

願いをつなぐ歌声



防災教育実施校で子どもたちが歌ってくれた歌は、なんと日本語。阪神淡路大震災が起きた 1995 年に神戸で生まれ、今も大切に歌い継がれている曲『しあわせ運べるように』。歌の指導をした石田隊員の防災に対する思いが国境を越え、子どもたちに伝わっていることを、この歌を通じて実感した。

名前 元吉 佑樹

学校 千葉市立鶴沢小学校

よいところは同じです



エルサルバドル人の教師と生徒に囲まれ、教師として生き生きと仕事をしていた久保隊員。「エルサルバドルと日本の児童のよいところは同じです。前向きな気持ちはどちらの国の子供にもあります。それを伸ばしたいと思っています」という言葉が印象的でした。

名前 沼田 麻人

学校 松戸市立第四中学校

明日の子どもたちのために



JICA の支援で完成した牛乳の滅菌施設。ここで作られる牛乳が、近隣の小学校で行われているレクレーション（軽食時間）にて無料で配られるという。日本の支援が明日の子どもたちの健康を支えていることを知って感動しました。やるなあニッポン！

名前 渡辺 登

学校 長岡市立才津小学校

すてきな笑顔



エルサルバドルの人たちのすてきな笑顔。目が合うといつもにっこり微笑み返してくれる。海外初心者で緊張していた私の心を何度もほぐしてくれた。

笑顔は人の心をつなぐ架け橋だ。私は、エルサルバドルの笑顔を日本につないでいきたい。

名前 駒沢 玲子

学校 村上市立朝日みどり小学校

海外研修同行者より

日本ではあまり馴染みのない中米エルサルバドル。20年前に内戦を経験し、現在は多くの人々が海外へ出稼ぎ者に出してしまう現状や治安が不安定な問題があります。研修でも、そのような現状を垣間見る機会がありました。同時に、現地で活動する日本人、そしてエルサルバドルの人々の明るさや温かさに、たくさん触れることが出来ました。10日間という短い期間ではありましたが、エルサルバドルの様々な面に触れ、最大限に吸収されたのではないかと思います。

帰国後は、先生方による研修の経験を生かした授業が行われました。例えば、学校に行けないことで、どのような負の連鎖が起きるのかを考え、連鎖を断ち切る方法を議論する授業。またエルサルバドルの子どもに手紙を書く異文化理解の授業など、先生方それぞれが創意工夫を凝らした授業を行いました。

授業を受けた子どもたちにとっては、馴染みのない国だからこそ多くの新たな気づきがあり、世界が広がったものと思います。研修に参加された先生方が、エルサルバドルという新たな視点を通して、子どもたちの国際理解や多様な視点の育成に貢献されると期待しています。

JICA埼玉デスク 中野 貴之

8. 授業実践 ～研修を生かした国際理解教育の事例～

[ESD の視点に基づいた授業実践]

“持続可能な発展のための教育 (ESD)” の視点に基づいて授業を実施し、その視点について報告書内に記載しています。(ESD については、派遣前及び派遣後研修で文部科学省国立教育政策研究所 濱野清先生による講義を実施)

- ・「2. 単元の目標」
ESD で重視する 7 つの能力・態度に該当するものがあれば記載
- ・「3. ESD の視点」
該当する ESD の視点を丸で囲み、具体的な内容を記載

[ESD の能力・態度についての参考資料]

(派遣前研修配布資料)

文部科学省国立教育政策研究所 ESD リーフレット
(http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_leaflet.pdf)
(2015 年 2 月 1 日アクセス)

授業実践報告書フォーマット

	学校名:	● 実践教科等:
	氏名:	● 時間数 : 時間
	[担当教科:]	● 対象生徒 : ● 対象人数 : 人

1 単元名

2 単元の目標 (ESD の能力・態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性 | 相互性 | 有限性 | 公平性 | 連携性 | 責任性

4 単元の指導について

- (1)教材観
- (2)児童生徒観
- (3)指導観

5 評価規準

観点				
評価規準				
評価方法				

6 単元の構成

※本枠の授業内容詳細を「7 授業事例の紹介」に記載

時 限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1			
2			
3			
4			
5			

7 授業事例の紹介

小単元名【 】

- (1) 指導案
 (ア) 実施日時 ○○月○○日()第○限
 (イ) 実施会場 ○○○教室
 (ウ) 本時の目標
 (エ) 指導のポイント
 (オ) 本時の展開

授業 簡	指導内 容	学習活動	指導 形態	指導上 の 留意点	評価 (評価規準・ 評価方法)

- (2) 授業の振り返り
 (3) 使用教材
 (4) 参考資料等

8 単元をとおした児童生徒の反応/変化

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

10 教師海外研修に参加して

[PDCA サイクルに基づいた授業実践]

PDCA サイクルに基づいて授業を実施し、検証の結果を報告書内に記載しています。(PDCA サイクルに基づいた授業の実施については、派遣後研修で JICA 東京学校教育アドバイザー 仲山嘉彦先生による講義を実施)

・「9. 授業実施全体の成果と課題及び課題の改善策」

単元目標の達成状況を記載。PDCA サイクルにおける授業実施におけるチェック（検証）とアクション（改善）の一連のプロセスを具体的に記載する。また、8 で記載した児童生徒の反応 / 変化に関する所見に加え、学校全体や他の教員への波及、保護者の反応等があれば記載する。

※過去の本研修参加教員による実践事例を、JICA 東京ホームページに掲載しています。
<http://www.jica.go.jp/tokyo/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/>



学校名：港区立青南小学校

氏名：芳賀 晶子

[担当教科：小学校全教科]

- 実践教科等：国際科
- 時間数：全4時間
- 対象生徒：小学校1年生
- 対象人数：83人

1 単元名

せかいのくになかよし

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

- ・異文化に触れ合い、身近に感じることで、多様性を認め、他国の文化を尊重する態度を育むことができる。（つながりを尊重する態度）
- ・日本とは異なる文化的背景をもつ人々との交流活動において、あいさつをしたり、自分の思いや考えを表現したりして、楽しくコミュニケーションに参加することができる。（コミュニケーションを行う力）

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・モンゴルの自然や文化を知ること、世界には様々な文化や価値観があることに気付く【多様性】
- ・その土地の文化や価値観は、その土地の風土や環境と関わり合っていることに気付く【相互性】
- ・日本とモンゴルのつながりを知る【連携性】

4 単元の指導について

(1)教材観

港区では、平成 14 年度から国際理解教育の一環として「国際科」を実施している。国際科では、コミュニケーション能力の育成と共に、自国や他国の伝統や文化等についても学んでいる。

そこで、豊かな国際感覚を身に付けた人材を育てるために、本単元では、モンゴルを切り口に、多様性、相互性、連携性に焦点をあて、異文化理解と他者理解を深めていく。外国の文化を知り、体験することで、世界に興味をもたせたい。「新しいことを知って楽しい。」「世界っておもしろい。もっと知りたい。何かしたい。」という思いを十分に経験しておくことが、他者を理解し、他者と協力できる国際人を育てることにつながると考える。世界には様々な伝統や文化、自然や暮らしがあることを学ぶことで、児童の国際理解を深めていきたい。そして、今後、世界の様々な国や文化的背景をもつ人々に出会った時、それを肯定的に受け止め、良さや素晴らしさを見付けられるような素地を育てていきたい。

(2)児童生徒観

本校の第1学年の児童には、海外での生活を経験している児童や世界の様々な国にルーツをもつ児童も多く、異文化への興味や理解は高い。外国人講師による週 2 時間の国際科の学習も、毎時間楽しみにしており、英語でのコミュニケーションを積極的に楽しんでいる。

モンゴルについて知っている児童はほとんどいなかった。第2学年の国語の教材にあるモンゴルが舞台の「スーホの白い馬」の話の存在を聞いたことがあるという児童は数名いた。単元に入る前からモンゴルの写真を入れた暑中見舞いを出したり、教室にゲルの模型を置いたりしていたので、モンゴルへの関心が高まっていた。

発達段階の特徴として、まだまだ自分中心に考えるところがある。遠い外国のことについては、想像をするのが難しいことが考えられるので、指導方法を工夫していく必要がある。

(3)指導観

児童は、モンゴルについての知識はほとんどないため、学ぶこと全てが新鮮に感じられる状況を生かし、発見であふれた授業にしていきたい。また、体験することが学びに直結する低学年特有の発達段階を踏まえ、本物を見せたり体験をさせたりすることで、児童の理解を深めていきたい。授業の中で、モンゴルで購入した教材(民族衣装、馬頭琴、羊の骨の遊びであるシャガイ等)を有効に使い、見せたり、触らせたりして紹介していく。また、現地で撮影した映像や写真も授業の中で多く取り入れ、イメージをもたせやすくする。そして、モンゴル人との交流が何より児童の心に響くだろうと考え、モンゴル人ゲストティーチャーを招いての授業を第2時で行うことにした。

また、楽しく学習が進められるような振り返りカード(「青南パスポート」)を作成した。『「青南パスポート」をもっていれば、世界とつながることができる。たくさん書き込むことで世界ともっと仲良くなれる』と設定し、意欲づけをした。一斉授業や体験学習にて学習したことを、この「青南パスポート」に書きこむことで、個別の学びとして定着させるねらいをもたせた。



【青南パスポートの表紙と振り返りカード】

5 評価基準

観点	1. コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	2. 国際理解
評価規準	・モンゴルの文化に慣れ親しみ、楽しく活動に参加しようとしている。(1-1) ・モンゴル人ゲストティーチャーやモンゴルからのゲストに、進んでコミュニケーションを取ろうとしている。(1-2)	・モンゴルの言語や文化に触れ、関心を持つ。(2-1) ・日本とモンゴルのつながりを知る。(2-2) ・伝統や文化には様々な物があることに気が付き、それぞれの良さを見つける。(2-3)
評価方法	発言。 「青南パスポート」への記入。 授業への参加態度。	「青南パスポート」への記入。 授業への参加態度。

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルってどんなくに？	日本ではない国(モンゴル)に興味をもつ。 モンゴルの基本的なことを知る。	モンゴルの基本的な情報を知る。 (国の場所、国旗) 遊牧民について、クイズ形式で知る。 (家畜について、家(ゲル)について、民族衣装(デール)について)
2	モンゴルをたいけんしよう	「本物」のモンゴル文化に触れ、モンゴル(異文化)をより身近に感じる。	モンゴル人ゲストティーチャーを招き、モンゴルの文化を体験する。 (あいさつ、馬頭琴(楽器)、デール(民族衣装)、シャガイ(遊び))
3	つながっているね、モンゴルと日本	日本とモンゴルの支援の関係を知る。	日本のモンゴルへの支援を知る。 モンゴルで活躍している日本人(隊員のインタビュービデオと写真)がいることを知る。 モンゴルからの支援(3.11の時)を知る。
4	日本をしょうかいしよう	日本のことを身近に思っているモンゴルからのゲストに日本のことを紹介する	日本の遊び、住まい、衣服、音楽について、モンゴルと比較する。 モンゴルから来日したゲストに紹介する。

7 授業事例の紹介

小単元名【つながっているね、モンゴルと日本】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月17日(金)第1限、10月21日(火)第3限、11月4日(火)第3限
 (イ)実施会場 1年3組教室、1年2組教室、1年1組教室

- (ウ) 本時の目標 日本とモンゴルが互いに助け合ってきたことを知り、両国のつながりを理解する。
- (エ) 指導のポイント
- ・前時までは、モンゴルを知ることに関心をもち、本時では、日本とモンゴルの「つながり」をキーワードに展開させた。
 - ・写真や映像を使うことで、人や場所、現状などを想起させやすくした。
 - ・難しい言葉は、簡単な言葉に置き換えた。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	モンゴル(ウランバートル市)の写真を見せ、日本との類似点や共通点等を探させる。	モンゴル(ウランバートル市)の写真を見て、気が付いたことをあげる。	一斉	・「都市化」されていくモンゴルのイメージをもたせる。	モンゴルの生活に関心をもち、発言する。
展開 ① 15分	初・中等教育分野への支援である校舎の建設・設備について紹介する。	104番学校の校長先生が話していたことを聞き、日本が学校を建てる支援をしたことや、日本に感謝の思いをもっていることを知る。	一斉	・三部制から二部制に改善されたことなど、理解が難しいと思われる内容は、具体的に例を示して指導する。	日本からモンゴルへの支援を知る。(2-2)
	ウランバートル市ゴミ廃棄場での支援と、ウランバートル高架橋建設計画で建設された「たいようばし」を紹介する。	日本の国旗がモンゴルのゴミ収集車に付いていることに気づき、日本のゴミ廃棄についての技術支援を知る。また、橋の欄干にひらがなが書いてあることに気づき、日本の支援で橋が建てられたことを知る。	一斉	・モンゴルで、日本の国旗や日本語が見られるということに興味を抱かせ、日本とモンゴルとのつながりに気付かせる。	
展開 ② 15分	現在、モンゴルで活動している青年海外協力隊の隊員のインタビューを見せる。	現在、モンゴルのために活動している青年海外協力隊の存在を知り、隊員のインタビューを聞く。	一斉	・メッセージの要旨については、板書に掲示して補う。	モンゴルで活動する青年海外協力隊のことを知る(2-2)
展開 ③ 5分	東日本大震災時、モンゴルの日本に対する支援を紹介する。	東日本大震災の時に、モンゴルが日本を支援してくれたことを新聞記事から知る。	一斉	・国同士も互いに助け合うことが大切であることを気付かせる。	モンゴルから日本への支援を知る。(2-2)
まとめ 5分	「青南パスポート」に振り返りを書かせる。	初めて知ったこと、感想を書き、発表する。	個別 一斉		日本とモンゴルのつながりを知る。(2-2)

(2) 授業の振り返り

授業の最初に、フォトランゲージを行った。都市化されているウランバートル市の写真を見せたことは、

現在のモンゴルを示す上で効果的だった。前時までに学習してきた「遊牧民の国」モンゴルとは、印象が大きく異なり、「モンゴルにもビルがあるんだ」、「車があるんだ」など、素朴な発見があった。

支援については、日本がモンゴルに対して行った学校の建設や設備の支援を扱った。児童にとって身近であり取りかかりやすい話題だったといえる。ゴミ廃棄場の車には日本からの支援の証である日本の国旗があったり、「太陽橋」にはひらがなで「たいようばし」と書かれてあったり、自分たちが知っている「日本のもの」がモンゴルにあることを示すことができ、1年生にも理解できる分かりやすい教材として適していたと考える。また、実際に青年海外協力隊の隊員のインタビューも効果的であった。自分たち(日本の子どもたち)に向けたメッセージであったことも嬉しかったようだ。

改善点としては、内容が難しさである。「支援」を「助ける」としたり、具体的な例に置き換えて説明したりと、できる限り1年生に分かるようにしたつもりだったが、児童の反応や振り返りカードから十分な理解につながっていなかったと分かることがいくつかあった。言葉を簡単にするだけでなく、絵や模型など具体物を使って伝えるといった工夫が必要であると考ええる。

(3) 使用教材



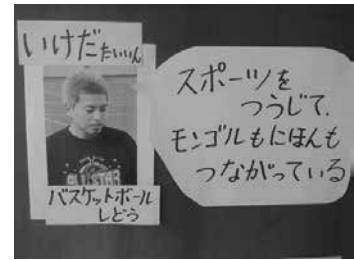
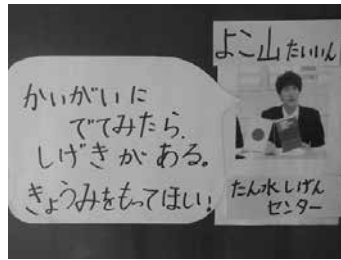
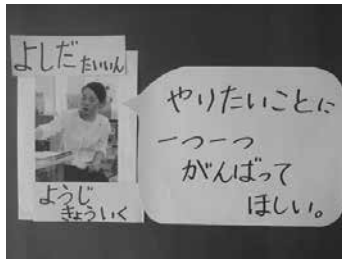
【フォトランゲージとモンゴルの学校についての板書】



【ゴミ廃棄場での支援】



【「たいようばし」の全体像(上)
モンゴル文字と日本語の欄干の対比(下)】



【青年海外協力隊の隊員インタビュー】

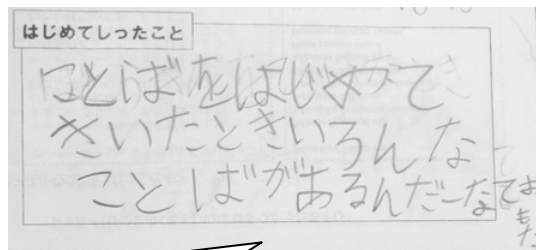
(4) 参考資料等

『産経新聞』2011年3月25日、朝刊、「モンゴル 公務員日給分の募金呼びかけ」

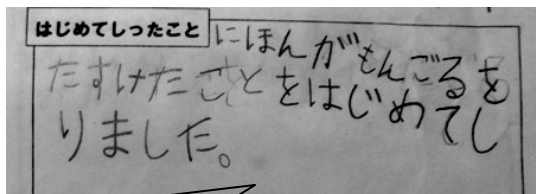
8 単元をととした児童生徒の反応/変化

毎時、振り返りとして、①初めて知ったこと、②感想、③仲良し度(5段階評価)を「青南パスポート」に記述させた。どの児童も、意欲的に書いている姿があった。自由記述である感想の欄に、8割を超える児童が、何らかの形で「モンゴルに行きたい。」「モンゴルのことをもっと知りたい。」と書いていた。

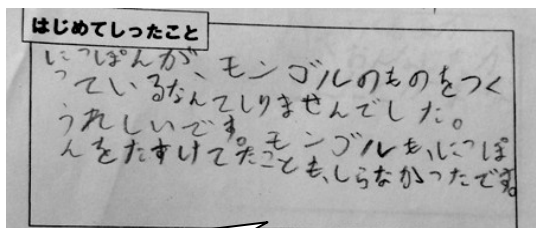
児童の感想



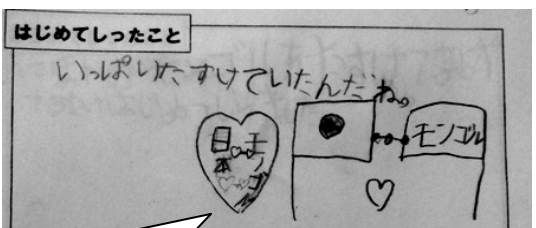
ことばをはじめてきたとき いろんなことばがあるんだなって おもった。



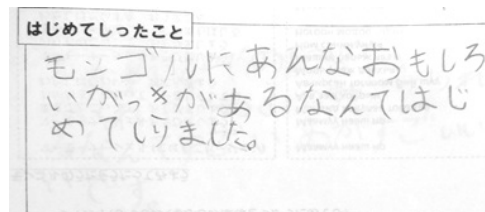
にほんがもんごるをたすけたことを はじめてしました。



にっぽんが、モンゴルのものをつくっているなんて しりませんでした。うれしいです。モンゴルもにっぽんをたすけてたことも、しりませんでした。



いっぱい たすけていたんだね。

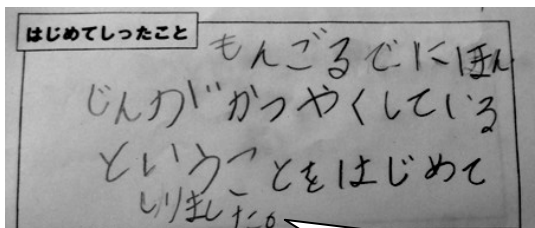


かんそう

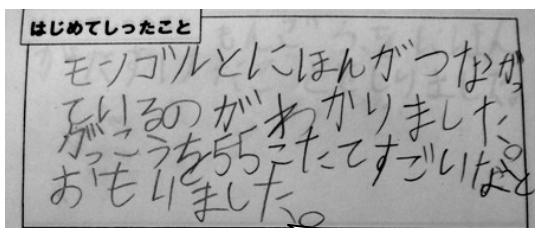
モンゴルにあんなのがあるなんてわたしもモンゴルにいてみたいくなりました。

モンゴルにあんなおもしろいことがあんなにあるなんて はじめてしました。

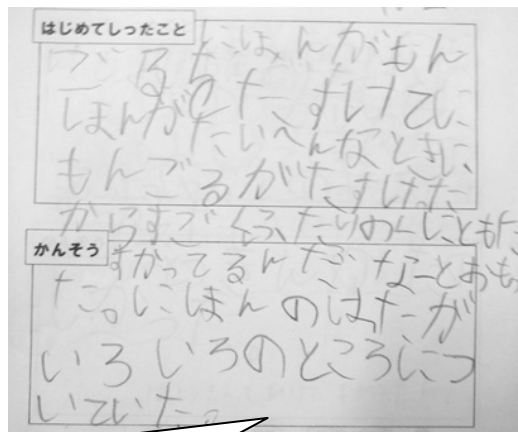
モンゴルにあんなのがあるなんて、わたしもモンゴルにいてみたいくなりました。



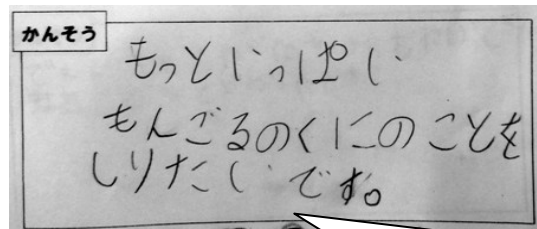
もんごるで にほんじんがかつやくしているということをはじめてしました。



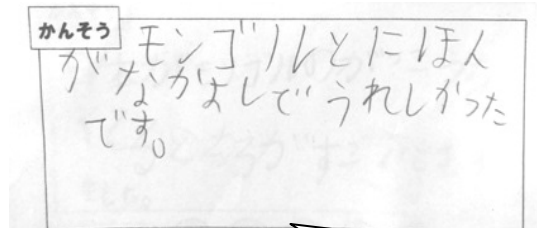
モンゴルとにほんが つながっているのがわかりました。がつこうを 55こたてて すごいなおもいました。



にほんがもんごるをたすけて にほんがたいへんなときに もんごるが(日本を)たすけたから すごくふたりのくにとも たすかってるんだなー とおもった。
にほんのはたが いろいろなところについていた。



もっといっぱい もんごるのくにのことを しりたいです。



モンゴルとにほんが なかよしで うれしかったです。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

授業実践の一番の成果は、児童の変容である。モンゴルを身近に感じることができ、世界の様々な文化があることを、体験を通じて学ぶことができた。外国のことをもっと知りたい、行ってみたいという異国や異文化に対するプラスの感情を育てられたことは、今後、国際理解教育をすすめる中で大きな強みになると考える。

今回の授業実践に当たり、港区の設置する国際科について改めて学び、学習指導計画を作成した。また、ゲストティーチャーを呼ぶこと等、年度当初の予定にはなかったことであるだけに、その必要性や手配の方法など、様々な機関や人の協力を得て実現することができた。

授業の実施については、常に校内に対し公開をした。自分の担任する学級については、保護者にも積極的に公開し、協力と理解を得ることができた。

授業後の検証については、参観してくれた他の教員に意見をもらうなどし、児童の反応や分かりにくかった点などを明らかにしていった。毎時、児童の書いた振り返りカードを分析し、分かりにくかった点などを明確にした。

3学級分の国際科の授業を受け持つことができたので、毎時、授業内容の改善や修正を行いながら次の学級で実施することができた。児童の書いた振り返りカードや実態をもとに、何がもっと知りたいのかを探り、映像資料の追加など、修正を加えていった。今後も、自分だけではなく他の教員も活用できる汎用性のある教材として残すために、教員向けの説明を加える等改善していく必要があると考える。

10 教師海外研修に参加して

私はこの研修に、自分自身の視野を広げたい、子供たちに世界の素晴らしさや困難な状況を伝えたい、国際理解や国際協力の輪を広げたいという思いをもって参加した。

研修を終えた今、この経験は、私の想像をはるかに超える価値のあるものとなった。人との出会いや、人や国同士のつながり、自然や文化の素晴らしさを肌で感じることは大きな財産である。また、モンゴルでの体験を子供たちに伝えていくという使命があったからこそ、今回の学びを振り返り、改めて調べたり、考えたり、教材化するという経験ができた。子供たちの、「モンゴルのことをもっと知りたい。」「モンゴルに行きたい。」「先生、また授業やって。」といった反応から、少しでも国際理解の種がまくことができたのかなと嬉しく思っている。

ここで学んだことに満足するのではなく、今後、教師として、また一人の人間として、さらに成長できるようこれからも挑戦し続けたい。



MONGOLIA

学校名：八王子市立横山第一小学校

氏名：岩井 裕子

[担当教科：小学校全教科]

●実践教科等：総合的な学習の時間、道徳、社会科

●時間数：25時間（総合21、道徳3、社会1）

●対象生徒：小学校6年生

●対象人数：40人

1 単元名

世界の国へとびだそう！

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

【学習方法に関すること】

ア モンゴルの人々や、文化、社会について知り、世界の国々への興味・関心をもつ。（進んで参加する態度）

イ 学習課題について、収集した様々な情報を取捨選択しながら調べる。（批判的に考える力）

【自分自身に関すること】

ウ 自分自身の生活と外国とのつながりを貿易や技術協力などから理解する。（つながりを尊重する態度）

【他者や社会とのかかわりに関すること】

エ モンゴルにおける問題について理解し、解決するために互いの考えを尊重しながら伝え合う。（コミュニケーションを行う力）

オ 世界で活躍する日本人の姿から、自分の生き方について考える。（他者と協力する態度）

カ JICAのモンゴルへの技術協力や、日本が海外から支援されてきた過去を知り、「国際協力」のよりよいあり方について考える。（未来像を予測して計画を立てる力）

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

ア 日本と世界の国々の文化などについて、相違点があることに気づく。（多様性）

イ 日本とモンゴル、また、世界の国々が互いに助け合っていることを理解し、つながりの大切さを学ぶ。（連携性）

ウ 国際交流や国際協力の事例から、行動するうえで大切なことは何か考える。（責任性）

4 単元の指導について

(1)教材観

- ・視覚的資料を用いた学習活動として、児童が主体的に活動に参加するために、フォトランゲージをとともに、モンゴルでの様子を想起しやすくさせる。
- ・他者の意見を尊重する態度を高めるためのグループ学習として、自分の考えをもつとともに、他者の考えも共感的に受け入れる態度を養うことをねらいとする。
- ・児童の「知りたい！」を中心に据えた児童主体の学習内容として、授業の振り返りごとに、「疑問に思ったこと、知りたいと思ったこと」をワークシートに記入し、次回の学習活動の流れの中で生かしていくことで、教師主体の学習指導から、児童が自ら学習課題を設定できる授業づくりを行う。

(2)児童観

本学級の児童は、新しい知識を得ることについて、素直に喜ぶ姿が多く見られる。しかし、自分自身の生活から得た価値観で物事を考える様子も見受けられる。モンゴルの遊牧民の生活を紹介する授業では、とすると、自分の日常生活とかけ離れた食生活に接したときに「汚い。」等の誤った理解をしがちである。そのような理解につながらないための配慮が必要である。

本単元に入る前に、八王子市が作成した国際理解教育プログラム「八王子の食卓から世界を知ろう」をもとに、日本の食糧自給率と小麦とエビの輸入先を予想する学習を1時間行った。小麦の輸入先である、オーストラリア、カナダ等はすぐ出たのに対し、エビの輸入先である、タイ、ベトナム等に

については解答が出なかった。これについて、「小麦の輸入先の国は有名だから知っている。」「エビの輸入先の国については、有名ではないのでよく知らない。」という意見が出た。このことから、児童の知識の偏りや日本と世界とのつながりに関する意識の薄さが窺えたので、本単元を通し、世界の多様性や、世界と日本との相互関係を児童に意識させ、視野を広げさせたい。

(3) 指導観

本単元の主題から、世界へとびだそうとする意欲を児童にもたせたいと考える。そのためには、世界の広さや多様性に関する多くの情報から、有益な知識を習得させることが重要である。そこで、遊牧民の生活の良さや工夫を正しく理解するために、『地球の食卓』を取り入れる。世界には様々な食文化があり、一つの国の中にも多様な生活様式があることに気づかせたい。第15時からの「一人一か国調べ」では、児童が生き生きと調べ学習に取り組めるよう、本校の図書室の本だけでなく、市の図書館から借り入れ用意する。

社会科では、学習指導要領内容(3)「世界の中の日本の役割」と関連させ、ODA や国際連合について学習する。世界における国際協力の取組を理解することで、本時の学習へつなげたい。

また、道徳の学習指導要領内容(4)の「主として集団や社会との関わりに関すること」に含まれている「国際理解、親善」の項目と関連付けて授業を行っていく。光村図書の副読本「きみがいちばんひかるとき」(6年)に収められている「ちがいをこえて」(第12時)と「ブータンに日本の農業を」(第14時)を扱い、外国の人々や国との関わりについて学習する。

本時で行う国際協力の授業において、児童に気づいてほしいことを、主に①お互いの国で支え合っているという相互性、②相手のニーズを考えた支援をしていくことの二点とした。本単元の指導を通して、児童一人一人が、世界へ目を向けつつ、さらに、互いの違いを認め受容する態度を養い、学校生活での友達との関わりの中で協力する姿につながることを期待したい。

5 評価規準

総合的な学習の時間の評価規準(社会科の評価規準及び道徳の内容項目も含む)

観点	学習方法		自分自身	他者や社会との関わり
	課題設定	思考・分析	自己理解	他者理解
評価規準	①学習活動を通して課題を設定している。 【2-ア, 3-ア】 ②世界の国々との国際交流や国際協力の様子に関心をもち、意欲的に調べている。 社	①課題解決に必要な情報を収集し、整理したり分析したりして思考する。 【2-イ】 社 ②日本と外国のつながりについて、思考・判断したことを、視覚的資料や言語で適切に表現している。社	①モンゴルについて学習してきたことを振り返り、自分の生活が外国と関わっていることを理解する。 【2-ウ, 3-イ】 ②他国の人々と共に生きていくためには、異文化理解が大切であること、我が国が世界において果たしている役割を理解する。社 ③自分自身の生活を見つめ直す。〔道徳内容(4)〕	①課題解決に向けて自分の考えを伝えるときにも、友達の考えを尊重してコミュニケーションをする。 【2-エ】 ②どのように世界と関わっていくのか考えるために、友達の考えや協力隊員の活動への考えを参考にし、解決している。 【2-オ, 3-ウ】 ③相手の立場や気持ちになってものごとを考えている。〔道徳内容(4)〕
評価方法 (評価の視点)	①ワークシートへの記入 ・遊牧民の生活を探る。 ・ウランバートル市の生活を探る。	①ワークシートへの記入 ②調べ学習の様子の観察 ③作成した発表資料と発表内容 ・集めた情報を取捨選択している。	①ワークシートへの記入 ②調べ学習へ自主学習での取り組み。 ③一斉指導の場面での自分を振り返る感想、意見の発表。	①ワークシートへの記入 ②グループ活動の観察 ・主体的に参加しようとする態度。 ・コミュニケーションを行う姿。

【2- 】は単元の目標、並びに、【3- 】はESDの視点を示す。

6 単元の構成

時限	単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルの遊牧民の生活を知ろう (道)	・モンゴルってどんな国？	モンゴルについて興味をもち、知りたいことや考えたことを表現することができる。
2		・遊牧民はどんな生活をしているのだろう？	遊牧民の暮らしに興味や疑問をもつことができる。
3		・遊牧民の生活の工夫を見つけよう	遊牧民の人々の思いや、生活様式の工夫を知り、共感的に考えることができる
4		・学校に行くということについて考えよう	世界には、学校に行くことが難しい地域があることを知り、学校へ行けないとどんなことで困るか考えることができる。
5	世界の国々の食文化を知ろう	・『地球の食卓』 「国あてクイズ」 ・他の国に住む人々の生や食事について考えよう①	①「地球の食卓から」に載っている、世界の食卓の写真を見て、グループで一枚選ぶ。 ②選んだ写真に載っている、一週間分の食料の内容、家族や住居の様子から気づいたことを書き出す。 ③気づいたことをグループ毎に発表する。
6		・『地球の食卓』 「国あてクイズ」 ・他の国に住む人々の生活や食事について考えよう②	①前時で選んだ写真について、どこの国の食卓なのか予想を立てる。 ②その国だと思った理由を述べる。 ③正解を知り、他のグループの選んだ国と似ている点や異なる点を探し伝え合う。
7		・『地球の食卓』 「国の中の多様性」 ・同じ国の異なる地域に住む人々の生活を見比べよう①	①中国、オーストラリアの国の、それぞれ異なる地域に生活する2家族の写真を見比べ、似ている点や異なる点を探す。 ②違いが生まれる背景について考える。
8		・『地球の食卓』 「国の中の多様性」 ・同じ国の異なる地域に住む人々の生活を見比べよう②	①日本の異なる地域に生活する2家族の写真を見て、似ている点や異なる点を探す。 ②同じ国でも、都市部と郊外や、文化などによって、食卓が異なることを理解する。
9	生活する上での問題点	・ウランバートルはどんな都市なのだろう？①	モンゴルの首都がどのような様子か知り、そこで生活する人々の特徴を衣食住から考えることができる。

10		・モンゴルの国ではどんな問題があるのだろうか？	ウランバートル市郊外の道路、渋滞、ゲル地区やゴミ処理場の様子から、困っていることや問題点を考えることができる。	①ウランバートル郊外の、陥没した道路、大気汚染、ゴミ処理場、ゲル地区などの写真から、モンゴルでどんなことが問題になっているのか考える。 ② ①で出た問題について、どうしたら良くなるか考え、意見を出し合う。
11 (社)		・モンゴルの問題について、日本はどんなことをしているのだろうか？	ODA、JICA、青年海外協力隊の活動について知り、日本のモンゴルへの援助活動について考えることができる。	①ODA や JICA について確認する。(教科書下 P92～105.) ②太陽橋や火力発電所の建設、ゴミ処理場での作業車など日本の技術支援が入っていることを知る。 ③モンゴルで青年海外協力隊として活動されている方を紹介する。
12 (道)	広げよう国際理解	・世界の人々と共に「ちがいをこえて」	相手の気持ちを大事にしながら、自分の意見を素直に伝えることで、互いに認め合える関係になると理解することができる。	①教材文を読み、人種の異なる友達との関わりと、日本人同士の友達との関わりとの相違点を探す。 ②他人と違った行動をする友達への関わり方について、全体で意見を出し合う。 ③一人一人違うということを受け入れ、どのように行動に表すか、全体で話し合う。
13 本時		・「国際協力」のあり方について考えよう	国際協力をするうえでの難しさに気づき、国際協力の必要性について考えることができる。 国際協力において大切な点は何か考えることができる。	①日本から海外への支援費と日本が抱える国債を紹介し、国際協力の必要性について疑問を提示する。 ②かつて日本も被支援国であったことや、震災のときにモンゴルなどの海外の国から支援を受けていたことを知る。 ③国際協力の必要性、また、大切にしないことについて考え、ワークシートに記入する。 ④グループ、全体で発表する。
14 (道)		・世界の人々と共に「ブータンの国に農業を」	ブータンの国に合った農業のあり方について真剣に考える西岡さんの姿から、国際協力で大切なことについて考えることができる。	①教材文を読み、ブータンがどんな様子の国なのか理解する。 ②西岡さんの活動や人々への思いについて考える。 ③国際協力において、大切なことは何か考え、友達と意見を伝え合う。
15 ～ 21	多くの国々を知ろう	・他の国について調べ、日本とのつながりを探そう！	他の国について興味を広げ、知りたいことや、日本とのつながりを調べることができる。 また、収集した情報を整理することができる。	①自分の興味をもった国を一カ国選び、国土の様子、産業、人々の生活について関連本やインターネットを活用して調べる。 ②日本とのつながりについて調べ、自分の意見をまとめる。 ③発表資料を作成し、原稿の準備をする。
22 ～ 25		・みんなの調べた国を発表しよう！	友達の発表を聴き、自分の収集した情報を比較したり、世界の国の多様性に気づいたりすることができる。	①自分の調べた内容を、クラス全体に発表する。 ②友達の発表を聴き、世界の国の多様性や日本とのつながりに気づく。

7 授業事例の紹介

小単元名【「国際協力」のあり方について考えよう。】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月21日(金)第2限

(イ)実施会場 6-3教室

(ウ)本時の目標

・国際協力の必要性について考え、国際協力において大切な点は何か考えることができる。

(エ)指導のポイント

- ①研修で撮影した写真を用いて、視覚的な面から児童の思考を深めさせる。
- ②児童の多様な考えを引き出させるためにワークシートを活用する。
- ③グループ活動を通して、互いの意見を交流させる。
- ④ダムや新幹線等の写真を見せ、日本が受けてきた過去の国際協力を子ども達が身近に感じられるようにする。

(オ) 本時の展開 (PP…パワーポイント)

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
5 5 10 15 10	国際協力に当てている額や、支援国などについてクイズを出す。 東海道新幹線開業についての資料、モンゴルが日本へ義援金を送った記事を紹介する。 国際協力はどうしてするのか考える。 自分の考えを発表し、友達の考えを聴いて、さらに考えを深める。 今日の学習で考えたことをまとめる。	①国際協力に関するクイズについて考える。 ②かつて日本も被支援国であったことや、震災のときにモンゴルなどの海外の国から支援を受けていたことを知る。 ③どうして国際協力をするのか考え、ワークシートに記入する。 ④グループ、全体で発表する。 ⑤今日の学習から初めて知ったこと、疑問に思ったことなどをワークシートに記入する。	PP ワークシート グループ話し合い 全体発表 ワークシート	活動内容を簡略して紹介し、児童の思考を補助する。 日本が昔も今も世界の国から支援を受けていたことを知らせ、国際協力の必要性へ思考をつなげていく。 どのように考えたらよいか困っている児童に、補助資料を配付する。 友達の考えから、新たに気づいたことなどを、メモするように促す。 友達の意見も参考に、自分の意見との相違点を挙げるように促す。	ワークシート 【2-ウ, 3-イ】 グループでの意見交換を観察 【2-エ】 【2-オ, 3-ウ】 ワークシート

(2) 授業の振り返り

日本が過去に世界の国々から支援をされていたことについて、児童が驚き、その後の話し合いが活気あるものになった。また、日本が開発途上国に支援しているだけでなく、日本も支援されていたことを知り、国際協力は相互に関わっていることを理解し、考えが深められた。

(3) 使用教材

パワーポイント

- ・資料: JICA「日本・途上国相互依存度調査」(2009年)
- ・写真: 「CARE 基金」「黒部ダム」「東名高速道路」「東海道新幹線」
- ・新聞記事: 「海外から日赤への義援金」(2013年4月4日2時10分朝日新聞デジタル)
「モンゴル 公務員日給分の募金呼びかけ」(2011年3月25日産経新聞)

(4) 参考資料等

- ・JICA「国際協力の目的について」〈<http://www.jica.go.jp/aboutoda/basic/01.html#a03>〉
(2015年1月10日アクセス)
- ・外務省「国際協力: 政府開発援助 ODA ホームページ ODAとは?」(2015年1月10日アクセス)
- ・日本の ODA 拠出先上位 10 か国(2012 年)
〈http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/oda/oda_jisseki.html〉
- ・ODA ちよつといい話 二話〈http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/hanashi/story/1_2.html〉
- ・財務省「日本の財政を考える」〈<http://www.zaisei.mof.go.jp/>〉(2015年1月10日アクセス)
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター(2015年1月10日アクセス)
「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校)」
〈http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/01_sho_sougou.pdf〉
- 「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校 社会)」
〈http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/02_sho_shakai.pdf〉

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

＜授業実施後の生徒の感想＞

- ・協力隊員を見て、他国で困っている人がいたら勇気をふりしぼって助けていきたいと思いました。
- ・学習前は、その国は貧しいのだな、としか思っていなかったけれど、学習後は少し助けてあげたいなと思えるようになった。少しでも、その貧しい国を助けられるチャンスがあるなら、少しでもいいから助けてあげたい。
- ・この学習をする前は全然世界に目がいきませんでした。けれど、1つの国を学習したら心に火がついてたくさんの国のことを知り、自主学習ノートでもたくさんの国を勉強しました。テレビのニュースで「〇〇国が・・・」というフレーズを見てしまうと、見入ってしまいます。ときどき、今外国ではどのようなことが起きているのかな？と考えます。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

(1) 成果

ア 児童の変容について

- ・開発途上国について、「有名ではないから知らない。」という消極的な反応だった児童の半数近くが、一人が一カ国調べる学習に入るときに途上国や馴染みのない国を選択していた。また、日本も恩恵を受けていることを身近に感じさせることができた。
- ・モンゴルの学習に触発されて、一人が一カ国調べる学習が充実した。さらに、家庭で主体的に調べてくる児童も見られるようになった。
- ・道徳の授業から自分自身を振り返り、あまり耳慣れない国々の人々への関心が高められた。その国に暮らす人々の立場に立って考える活動を通して、自分の生活を見つめ直し、学級の他の児童を思いやる気持ちがさらに高められた。

イ ESD の視点による学習指導の成果について

コミュニケーションを行う力を培うために、毎回グループ活動を取り入れた。その結果、友達の意見を聴いて自分の疑問が解決する場面が表れた。また、日本と世界の国とのつながりを尊重する態度や学習課題に意欲的に取り組む姿勢が培われた。

(2) 課題

今回の実践では、児童の変容が見られた。今後、一層の充実のために次の3点を課題とした。

- ア 国際交流や国際協力に関する学習は、社会科、食育、道徳、さらにキャリア教育など多岐に渡るので、教育活動全体を通して横断的に実施できる年間導計画を立てていくこと。
- イ 日常生活への生かし方として、児童が自分自身の生活の中に、学んだことをどのように生かしていくのか、より具体的に想起して学習内容を計画していくこと。
- ウ 実際に海外で研修してきたことを踏まえ、当事者以外の教員でも使用できる教材作るとともに、学習活動の場を設定し、国際協力に関するよりよい学習活動を他の教員へ広げていくこと。

(3) 課題の改善策

- ・他教科、多学年の学習内容と関連付けた学習指導計画を立てることにより、研修に参加した教師だけでなく、他の教師や学校全体に広げていくことができると考える。
- ・児童が学習で得たことを、どのように生かし行動していくか、発達段階に応じて考えていく。
- ・現地で得た多数の写真や資料を精選し、どの教師でも利用しやすい教材を作成する。調べ学習では、知りたいことについて、一つの情報源に頼らないなどの指導方法を取り入れていく。

10 教師海外研修に参加して

これまで国際協力について授業をするたびに、自分自身の言葉で児童に伝えられるものが何もないと感じていた。開発途上国への知識や理解に欠けている自分が、このまま教えていいのだろうかと思っていたところ、本研修に参加することができた。初めてのモンゴルは、あっという間の10日間であったが、非常に多くのことを考えさせられた。日本と世界の国々のつながりについて深く考えるきっかけになり、国際協力に携わる人々の輝く姿を見つめながら、私は何ができるだろうかと反芻した。私の答えは、児童に何を学ばせ、どのような姿になってもらいたいのか考えながら授業をすることが国際協力だ。以前とは違い、児童に伝えられるものができたのが今回の研修の大きな成果である。



MONGOLIA

学校名：小平市立小平第四小学校

氏名：吹越 菜央

[担当教科：小学校全科]

- 実践教科等：生活単元学習
- 時間数：4時間
- 対象生徒：特別支援学級(全学年)
- 対象人数：19人

1 単元名

たったひとつの まあるい ちきゅう

2 単元の目標 (ESD の能力・態度)

1～3年生

- ・自分たちの国とそれ以外の国があることを知る。(多面的・総合的に考える力)
- ・モンゴルの学習を通して他国の言葉、食べ物、着るもの、遊びに興味をもつ。(繋がり尊重する態度)
- ・実物に触れ、五感を使って新しい体験や発見をすることができる。(進んで参加する態度)

4～6年生

- ・モンゴルについて知ることによって世界の国々に興味・関心をもつ。(進んで参加する態度)
- ・モンゴルの学習を通して他の国と自分の国との生活や文化の違いを知り、自分の生活を振り返る。(繋がり尊重する態度)
- ・モンゴルで衣食住に必要なものの実物を見たり、触れたり、口にしたりと五感を使って異文化に触れることでより興味・関心を高める。(多面的・総合的に考える力)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・日本との生活の違いに気付く。【多様性】
- ・外国の生活を知ることによって異文化を受け入れ、自国の文化に興味・誇りをもつ。【相互性】

4 単元の指導について

(1)教材観

特別支援学級である本学級で発達段階の異なる全学年の児童に、同じ空間でどのように伝えていくのかということを大きな視点として考えてきた。これまでの彼らとの関わりや教科指導を通して、彼らは視覚的に見たり、実際に触れたりしながら体験的に学ぶことで理解を深めることができることを実感している。このようなことから本単元ではモンゴルについての学習を通して、国際理解の第一歩として日本とは異なる外国の生活や文化を、人間が生きていくうえで必須となる「衣食住」をテーマにしてできる限り本物に触れ、体験的に学べるようにする。モンゴルにおける実際のものをできるだけ多く見せたり、触れたりして児童が五感を使って異文化に親しむことができるように設定した。

「衣食住」の①の部分では、モンゴルの日常生活で使われている本物を見せていく中で、民族衣装のデールを着る体験をし、②の部分ではモンゴルの伝統料理であるボウズ作りを行い、スーテータイとともに食べ、③の部分では遊牧民の家であるゲルの中に入り、遊牧民生活を自身の身を以て体験する。体験活動を通してモンゴルの生活や文化を知り、そこから自国への理解を深め、他者を理解することに繋げていけると考える。更に途上国である「モンゴル」と先進国「日本」の生活の違いから互いの良さに気付き、日本を誇りに思う気持ちをつくるきっかけとする。

(2) 児童生徒観

本学級の児童は幼い頃にアメリカに住んでいた経験のある児童が1名おり、卒業生にはフィリピン人を母にもつ児童もいる。また国旗に非常に強い関心を示している児童や、名前をローマ字で書くことがかっこいいと感じ、英語に興味をもっている児童もいる。このように様々な国に関して興味を抱いている児童が少なからずいる。2年生以上を対象として月に1回程度行っている外国語活動の時間には、歌やゲーム、ダンスを取り入れながら英語を通して異文化に親しんでいる。回数を重ねるごとに英語を発することに抵抗を示す児童が減り、簡単な受け答えを英語やジェスチャーを使ってできるまでになっている。体験や五感を使っでの活動の成果として、やはりダンスや手遊びなどで体を動かしながら言語を取り入れることで、「楽しい」という思いとともに理解し易くなっている様子が見て取れる。そしてイースターやハロウィン、クリスマスなどの行事的な活動では飾りを作ったり、歌を歌ってゲームをしたりと体験できる機会を設けてきた。「楽しい」と思える体験から外国に対して抵抗なく身近に感じられるようになってきていると感じている。

また、全学年が在籍しているという利点から、高学年が低学年をサポートするということが当たり前でできる児童が多くいる。このようなことから、今回の体験的な活動にも縦割りで活動する機会を多く取り入れ、異学年同士が共に学べる環境づくりも大切にしたい。

(3) 指導観

社会のグローバル化が進み、個人の生活においても外国人と触れ合う機会が増えた。このような状況の中で、言語や文化の異なる人々を理解し、協力し合いながら共に生きていくことで世界の平和を実現していくことが重要である。その第一歩として国際理解教育や外国語活動を通じて広い世界を知ることの楽しさ、世界の人々と出会い、繋がることの素晴らしさを、将来を担うたくさん子どもたちに伝えたい、という思いがある。そんな中「教師海外研修」において、特別支援教育にも国際理解教育にも必要なことの共通点に気付くことができた。それは「他者理解と自己理解。そこから繋がる地球の幸せな未来」であり、これは私自身が子どもたちに伝えていきたいことである。相手の気持ちを汲み取ったり、自分の気持ちを表現し、人とのコミュニケーションをとることを苦手とする特別支援学級の子どもたちにとって他者との関わり方を学んだり、自分の思いを相手に上手に伝える方法を学ぶことはとても大切である。様々な場面での関わりの中から相手を理解することで自己を理解し、互いにとってより良い関係を築いていくことは、彼らがこれから社会に出ていき、生きていく上で絶対に必要なスキルである。そしてこれは国際理解教育にも言えることであると考えます。

地球にはたくさんの国があり、他国を知ることによって自国に対しての理解を深め、互いに支え合い、相互依存しながら幸せな地球の未来を目指している。「他者理解・自己理解」を深めることによって新しいものの見方や生き方もできる。丸い地球に住む世界中のみんなが互いの違いを認め合い、理解し、更に自己理解を深めていくことができれば人々はもっと協力し合い、幸せな世界の実現に繋がると考える。このような視点をもって国際理解の指導にあたる。

5 評価基準

観点	他国の生活や文化に対する関心・意欲・態度	他国の生活や文化に対する思考・判断・実践	他国の生活や文化に対する気付き
評価規準	[1～3年生] 実物に触れ、体験活動を通して新しいことを知る楽しさを感じている。 [4～6年生] 体験的活動を通して外国には様々な生活や文化があることや日本との違い、その良さについて興味、関心をもち、進んで活動に参加している。	[1～3年生] 体験的活動を通して自分が感じたことを言葉や身体で表現することができる。 [4～6年生] 体験的活動を通して外国の様々な生活や文化に対して自分の思いや考えをもっている。	[1～3年生] 体験的活動を通して世界にはたくさんの国があり、他国には日本とは違う生活や文化があることに気付いている。 [4～6年生] 体験的活動を通して他国と自国の相違点や共通点を知り、多様なものの見方や考え方があることに気付いている。
評価方法	学習の様子	発言	学習の様子・発言

6 単元の構成

※本単元では、全学年に対して一斉に授業を実施したため「全学年で学習を行うにあたっての留意点」の欄を追記した

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容	全学年で学習を行うにあたっての留意点
1	体験しよう！ 草原の国モンゴル 『衣食住』	[1～3年生] ○地球儀を使った学習を通して自分たちが生きる地球だということを知り、興味をもつ。 ○モンゴルにおける様々な実物に触れることで日本とは違うモンゴルという国を知る。 [4～6年生] ○丸い一つの地球にはたくさんの国が存在することを知る。 ○たくさんの国の中のモンゴルを通してモンゴルの生活や文化に興味をもつ。	①地球儀を使って私たちが住む地球は丸いということや、日本をはじめ、丸い地球の中の様々な国の位置を知る。 ②日本で活躍するモンゴル人力士の写真を掲示し、彼らの国モンゴルと日本の違いをパズルゲームを通して知る。 ③パズルを完成させた後、それらの実際のものを見たり、触れたりしながらより理解を深める。	・丸、三角、四角の物に実際に触って地球の形を理解できるようにする。 ・縦割りグループで高学年を中心にして、どうしてモンゴルカードだと思うのか、どうして日本カードだと思うのか意見を出し合いながらパズルのカードを完成させる。
2	行ってみよう！ モンゴルのゲルのお家 『衣食住』	[1～3年生] ○中庭に建てられた実物のゲルの中に入り、自分の住む家とモンゴルの家の違いに気付く。 ○夏休みのお手伝いを思い出し、自分が家族の為にできるお手伝いを考える。 [4～6年生] ○中庭に建てられた実物のゲルの中に入り、体験を通して自分の住む家と比べ、自分たちの生活との相違点や共通点に気付く。 ○ゲルに住む子どもたちの生活を知り、自分の家族の中での役割を振り返る。	①中庭に建てられた実際のゲルを見たり、中に入ったりして遊牧民の家の生活を体験をもって知り、日本の家との違いを感じる。 ②日本の家にあるものとモンゴルの家にあるものをイラストカードを使って考える。そこから日本とモンゴルの生活の共通点と相違点に気付く、考えを深める。 ③ゲルに住んでいる子どもたちの生活を知り、自分自身の家族の中での役割を考える。	・実際のゲルを見ることで、より具体的に遊牧民の生活のイメージを膨らませることができる。そして日本にもモンゴルにもある物と異なる物があることに気付けるようにする。 ・夏休みの宿題だったお手伝いを思い出すことで考えやすくする。
3 4	食べてみよう！ モンゴル料理 『衣食住』	[全学年共通] ○モンゴルの伝統料理「ボウズ」を実際に作り、味わうことでモンゴルの食文化に触れる。	①縦割りグループに分かれ、リーダーの児童を中心に手順を追って作業を行う。 ②蒸し器で蒸す際は教師や介助員が行い、児童はその様子を観察する。 ③出来上がったらみんなで揃って「いただきます」をする。また、モンゴルのお茶「スーテーツアイ」も一緒に飲む。	・縦割りグループで番号を決め、その番号ごとにそれぞれの仕事を与える。グループの中での自分の役割を理解しながら作業を進められるようにする。

7 授業事例の紹介

小単元名【行ってみよう！モンゴルのゲルのお家】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月25日(土)第2限 ※学校公開日

(イ)実施会場 ならのみ学級 大教室・中庭

(ウ)本時の目標

1～3年生

○本物のゲルの中での体験からモンゴルと日本の家の違いに気付く。

○家族の中での自分の役割として自分にできることを考える。

4～6年生

○実物のゲルでの体験を通して自分の家と比べ、それぞれの生活の違いを知り、モンゴルのゲルでの生活から自分の生活を振り返ることができる。

○ゲルに住む子どもたちの生活を知り、自分の家族の中での役割を考えることができる。

(エ)指導のポイント

本物のゲルを中庭に建て、その中で授業を展開することによって、写真やイラスト、教師の話からでは伝わりにくいモンゴルの雰囲気を感じることができ、より理解を深めることができると共に日本との違いに気付きやすくなり、日本の良さ、他国の文化の良さに気付くことができる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	1・前回の学習で使った教材を提示し、モンゴルの学習をしたことを思い出させる。	1・前時の学習の振り返りをする。	全体指導	○前時で使用したモンゴルの国旗や力士の写真、ゲルの写真を見せながら思い出させる。	★国旗や力士、ゲルの写真を見て前回学習したモンゴルを思い出そうとしている(学習の様子)
	どこでもドアでモンゴルへ行こう！				
	2・アニメキャラクターのイラストを掲示し、「どこでもドア」を見せ、これを使ってモンゴルに行くことを伝える。	2・アニメキャラクターの「どこでもドア」を見て本当にモンゴルに行くんだ、という雰囲気を味わう。		○アニメキャラクターに「どこでもドア」借りてきた設定にし、ドキドキした楽しい雰囲気を作る。	★前の人との間隔に気をつけて、静かに落ち着いて移動している。(学習の様子)
	3・教室で並ばせて中庭へ移動する。ゲルが見えないよう手前で止まり、「どこでもドア」の中を低学年から一人ずつくぐるよう指示する。	3・教室で静かに並び、中庭へ移動し、一人ずつ「どこでもドア」をくぐってゲルの中に入る。		○興奮した気持ちがありながらも静かに落ち着いて移動できるよう声をかける。また低学年から順番を守ってドアをくぐるようにルールを確認する。	 どこでもドア
展開 20分	『ゲルの中での学習活動』				
	4・ゲルの中に入り、ホワイトボードに注目させる。ホワイトボードに貼られたイラストカードを、モンゴルの家にあるものと日本の家にあるものに分けることを伝え、子どもたちの考えを引き出す。	4・ゲルの中に入り、日本の家にあるものとモンゴルの家にあるものにイラストカードを分ける。	全体指導	○日本と同じものもあり、違うものもあることに気づけるように両方のイラストカードを提示する。	 ゲルの中での学習活動の様子
	5・特に以下の3つについて詳しく触れる。 ・トイレ ・水(水道) ・馬	5・特に日本の生活とは大きく異なる3つについて写真を見ながら違いに気付く。 トイレ→青空トイレ 水→水瓶にためて使う。 馬→日本で言う車の役割		○写真を使って目で見て違いがよくわかるようにする。	★モンゴルのゲルの家には日本とは異なる生活習慣があることを理解している。(発言・学習の様子)

まとめ 15分	6・小さな子どもが手伝いをしている写真を提示する。また、その様子を見て思ったことや感じたことを発表させる。また、夏休みに家庭で行ったお手伝いを思い浮かべよう促す。 7・自分の家で家族の一員としてできることを考え、発表させる。その際に、夏休みに行ったお手伝いを参考に考えさせる。 8・挨拶をした後に何をすれば良いのか指示を出してから終わりの挨拶をする。	6・小さな子どもが手伝いをしている様子を見て思ったことや感じたことを手を挙げて発表する。また、夏休みの宿題だったお手伝いを思い出す。 7・自分の家で家族の一員としてできることを、夏休みのお手伝いを参考に考える。	全体指導	○小さな子どもがお手伝いをしている写真に注目させる。 ○自分が夏休み行ったお手伝いを思い起こさせる。	 実際に提示したお手伝いの写真 ★家族の一員として自分ができていることを発表することができる。（発表）
------------	--	---	------	--	--

(2) 授業の振り返り

今回の授業実践では、視覚的に見たり、実際に触れたりしながら体験的に学ぶことで理解を深めることができるという特別支援学級の児童の特性を一番に考え、「可能な限り本物に触れることで他国に対する理解を深めて欲しい」、という思いをもって授業計画を立て、実践を行った。

このようなことから行き着いたのが「校庭にゲルを建ててその中で授業を行う」というものであった。日本でゲルを貸してくれる方を探しまわり、費用の問題や輸送の問題等たくさんの困難に合い、なかなか見つかることができなかった。そんな中、私自身が宮城県石巻市にて東日本大震災のボランティアを行ってきた縁で、震災当時折りたたみ式ゲルを仮設住宅の代わりとして建てていた方とコンタクトを取ることができた。そして、教育の分野でゲルを使うことを喜んでくださり、快く受けて頂けることになり、今回の授業が実現した経緯がある。授業作りをしていく上でも人の繋がりを強く感じ、それが国際理解教育に繋がっていくことを改めて感じることもできた。子どもたちが実際のゲルを見て、中に入って体験することで身を以て日本とは違う生活や環境を知り、理解を深めることができたとともに、校庭にあんなにも大きなゲルが建っていたという事実が子どもたちの目に強烈に焼き付いたと感じている。その一方で、1年生から6年生までの児童が在籍する特別支援学級での授業であるため、学年ごとにねらいや評価基準が異なる中で一つの授業を展開していく難しさを感じた。

(3) 使用教材

第1時：「体験しよう！草原の国モンゴル」

20枚のカードをモンゴルの物と日本の物に分けて、パズルを完成させる。分けたカードを間違いなく並べることができれば、カードを裏返した時にそれぞれの国旗のイラストが完成する。



第2時：「行ってみよう！モンゴルのゲルのお家」

中庭に建てた折りたたみ式ゲル(ゲルの中には国旗や写真、民族衣装を展示。写真にはその写真から伝えたいことを一言コメント付きで掲示。)



第3、4時:「食べてみよう! モンゴル料理」

モンゴル伝統料理であるボウズを保護者と共に作り、食べる。モンゴルで購入したボウズの素を使って調理することでよりモンゴルに近い味を再現することができた。またスーテーツアイの味も体験。



←ボウズの素

(4) 参考資料等

・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「領域・教科を合わせた指導『生活単元』」

< <https://www.nise.go.jp/portal/elearn/seikatutangen.html> > (2014 年 8 月 30 日アクセス)

・長崎県教育センター「はじめて特別支援教育にたずさわる先生方へ」

< <http://www.edu-c.pref.nagasaki.jp/syogaizi/syogaizi.htm> > (2014 年 8 月 30 日アクセス)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

児童の反応(日常生活の中での会話から出てきた言葉)

・「先生、昨日テレビでモンゴルみたよ!」

・「昨日おばあちゃんとお相撲さん見たよ。」

・「モンゴルって日本よりもっと寒いのかな?」

・「モンゴル料理また教えてね!」

日頃の会話の中からモンゴルについて話してくれる子どもが増えた。図書の時間には自らモンゴルのことが書いてある本を探して読んだり、モンゴル料理を調べたりする児童もあり、興味をもって質問してくることが増えた。また、月に1回程度行っている外国語活動では学習した単語について、英語だけでなく「モンゴル語では何て言うのかな?」などと言語にも興味をもっている。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

保護者の反応

・モンゴル料理体験の影響からか翌日から家で食事作りを手伝うようになった。

・大人の私たちも授業を見ていて楽しかった。モンゴルの生活から大切なものが見えて良い。

・帰宅してから子どもが、習ったことを楽しそうに話してくれた。親である自分自身も楽しかった。

・ゲルの展示がとても良かった。今までにない体験をしているような授業だった。

成果

・理解を深める為にできる限り本物を使って授業を行うことで興味や関心をもつことに繋がった。

・「衣食住」をテーマに五感を使ってモンゴルを感じることで、自分の生活との違いに気付き、自らモンゴルについて調べたり興味をもって質問したりしてくるようになり異文化への、興味・関心を高めた。

・全校児童にゲルを解放し、体験させることで多くの児童がモンゴルという国を知り、そして日本との違いに気付き、異文化に触れるきっかけを与えることができた。今後も学校全体を巻き込んでいく。

課題と改善策

特別支援学級で全学年が在籍する中での国際理解教育の難しさを痛感した。焦点をどこに当て、何を身につけさせたいのかを、学年ごとや児童一人一人の特性によってもっと細かく考え、発達段階に合わせた活動を行う必要がある。その為に、場合によっては学年ごとに分けて授業を行うことで理解を深める。将来を担う子どもたちに国際的な視野をもたせるためには学校全体で異文化に触れるきっかけを作り、取り組んでいくことが重要である。そのために、地域に住む外国人の方、外国籍の児童やその保護者と連携しながら様々な形、方法で国際理解におけるアプローチを行っていく。

10 教師海外研修に参加して

この研修では校種も専門教科も違う先生方と活発な意見交換や情報共有ができたことが利点だ。同じものを見たり、聞いたり、体験したりしても感じ方が異なり、そこから自分の考えを深めることができた。素晴らしい仲間ができたことは私の一生の宝だ。また、たくさんの人と出会う中で、国際理解に必要なのは「人と人がより良い関係で繋がっていくこと」であると感じた。人との繋がりの中で相手を理解し、受け入れ、自己を振り返ることができる。そしてそこから日本の良さを見出していくことができる。このような視点も大切にしながら今後の授業実践に生かしていく。

また、今回の授業実践を学校公開日に設定したことにより保護者や地域の方にも途上国の生活を知ってもらい、国際理解教育の大切さを知るきっかけを作ることができたことも成果の一つであった。



MONGOLIA

学校名：聖徳学園中学・高等学校

氏名：石田 恒平

[担当教科：芸術(美術)]

- 実践教科等：美術
- 時間数：5時間
- 対象生徒：高校1年生
- 対象人数：30人

1 単元名

持続可能な開発のためのポスターづくり

2 単元の目標 (ESD の能力・態度)

- ・異文化理解への興味・関心を高める。(異文化理解に対する能力)
- ・日本とモンゴルの関係性について学びポスター制作を行う。(つながりを尊重する態度)
- ・開発途上国が置かれている現状や問題点などを把握し、情報を収集・選択・判断し、自己の考えを発信することができる。(多面的、総合的に考え行動する能力)
- ・日本とモンゴルのよりよい関係作りに貢献するために、交流の中で話し合い一緒に何が出来るのかを考える。(他者と協力する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・一人一人が日本とモンゴルの文化や価値観、生活の違いに気づく(多様性)
- ・一人一人が地域や世界で、異なる文化をもつ人々や異なる状況にある人々の存在を認めて理解し、多様性を尊重できる。(相互性)
- ・一人一人が日本とモンゴルのつながりについて気づき、何に対して協力できるのかを考える。(連携性)
- ・一人一人が異文化理解への興味・関心を高め、自分たち一人ひとりが望ましい方向に変化させるために社会の一員として行動し、果たさなければいけない事を理解し、そして行動できる。一回で終わらせるのではなく継続できる事が大切(責任性)

4 単元の指導について

(1)教材観

- ・本校の教育目標である個性・創造性・国際性を高める教育。
- ・単にモンゴルに対する知識や情報を与えるのではなく、実際にモンゴルにポスターを送るという作業を通して、モンゴルへの貢献という実践の心を高めることを目的とした教育。
- ・芸術という教科を通し個性・創造性を高める教育。

(2)児童生徒観

- ・授業を行う前は、異文化に対して興味関心をもっている生徒が少なかったが、授業後は生徒の様子や発言などからも異文化理解に対する意識が高まった。
- ・コミュニケーションをとることが苦手な生徒たちである。国境を越えても、自分の考えや想いを絵や言葉にして伝えることを体感する中でこのような苦手意識を克服させたい。

(3)指導観

- ・日本だけではなく、他の国を知ることや世界に目を向け世界の現状について知ることの大切さを伝えることに留意して指導にあたる。
- ・国際社会の一員として世界にどのように貢献することができるのかを伝えることに留意して指導にあたる。
- ・現地の生徒とのやり取りを通して連携性を高め、関係性を構築することに留意して指導にあたる。

5 評価規準

観点	授業への関心・意欲・態度	思考・判断・表現	創造的な技能	異文化理解に関する知識・理解
評価規準	・グループの中で、自分の課題を決め、学習できたか。 ・自分の考えや想いを制作を通じて形にすることができたか。	・学習を通して、異文化理解について考えることができたか。	・自らの発想意図を形にする芸術的表現の工夫ができたか。	・異なる文化に興味をもって、理解し、深めることができたか。
評価方法	・宿題やその他の提出物 ・学習の様子 ・発言や取り組み	・どのような意図でデザインしたか。	・ポスター制作	・ハンドプリントによる知識や理解度

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7 授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	[モンゴルってどんな国 PART1] ○教師海外研修への参加動機 ○JICA の活動内容 ○モンゴルクイズ ○フォトランゲージ ○青年海外協力隊の活動について	・日本との相違点や類似点などを見つけさせ、これから行う課題に対しての意図を理解し、興味・関心をもたせる。 ・青年海外協力隊の活動の様子を知り、人のために何かをすることについて考えさせる。	・研修で体験してきた事や写真、プリント、資料などを生徒たちに提示し、モンゴルの概要を知る。 ・グループに分かれ、フォトランゲージやモンゴルクイズなどを行い意見交換を行う。 ・青年海外協力隊のインタビュー映像をスライドで見せ、青年海外協力隊の方の活動の様子を知る。 ・宿題としてモンゴルについて自分たちで調べさせる。
2	[モンゴルってどんな国 PART2] ○モンゴルのアートに触れてみよう	・モンゴルの伝統文化や芸術作品に触れ、国々の文化に興味をもたせる。 ・気づいたことや感じたこと、調べてきたことを班ごとに発表し、全体で共有する。	・モンゴルで見つけた絵画や作品などを生徒たちに提示する。また、実際に購入してきたものを生徒たちに提示する。 ・モンゴルと日本の伝統文化の違いや気づいた事や感じたことを話し合わせる。 ・次項以降行うポスター制作でどんなテーマにするのかを話し合う。 ・日本とモンゴルお互いに理解する事ができるポスター作り
3 4 5	[ポスターをつかってモンゴルに送ってみよう！] ○意見交換 ○発表 ○ポスター制作	・日本の共通点や相違点について話し合う。そこで生徒たちに発表させ、イメージを膨らませる。 ・ポスター制作を行う上でグループごとにテーマを決めさせる。	・ポスター制作を行う上でどんなテーマにするのかを再度話し合わせ、各班ごとに発表させる。 ・テーマが決まったら下描きをする。言葉やメッセージなどはモンゴル語で書く。 ・今までの学習を振り返り、各班ごとに発表する。
今後の予定	・モンゴルの人の感想を聞き、感想について話し合う。話し合った事についての感想をまたモンゴルへ送る。メッセージが通じた場合には良かった点や他にも活かすことができないか話し合う。また通じなかった場合には何が足りなかったかについて話し合う。(2月に実施予定)		・1月にポスターをモンゴルに送る。 ・フィードバックを行う。 ・他教科・他学年との連携。高校2年生の総合の授業で JICA の方にご来校いただき、開発途上国に対して何ができるかを班で話し合い、プレゼンテーションを行う。

7 授業事例の紹介

小単元名【モンゴルってどんな国？相互理解のためにモンゴルのアートに触れてみよう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月13日(水)第3限

(イ)実施会場 芸術室(美術室)

(ウ)本時の目標 多様な文化や価値観に気づき異文化を理解する。

(エ)指導のポイント

- ・生徒たちが興味・関心がもてるよう、モンゴルで見つけた絵画や作品や実際に購入してきたものを生徒たちに提示する。
- ・モンゴルと日本の伝統文化の違いや共通点、気づいたこと、感じたことを話し合う。
- ・ポスター制作を行う上で、普段の美術の制作のように個人の制作とは違い、お互いに質問や意見交換をし合うことで、学習を深める切掛けにつながる。
- ・単に自分たちが好きなものを描かせるのではなく、お互いに相互理解を深めることに気付かせる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	・題材についての説明	・前回までの内容を再確認する。	スライド	・前回の授業の確認 ・題材についての説明	意欲や態度
展開 15分	・モンゴルで見つけた絵画や作品などを生徒たちに提示する。	・モンゴルと日本の伝統文化の共通点や気づいた事、感じた事を話し合う。 ・ワークシート	机間 巡視	・課題に取り組み始めてから再度、意識してもらいたいことや条件などの説明を加える。 ・単に自分たちが好きなものを描かせるのではなく、お互いに相互理解を深めることに気付かせる。	・作業への取り組み ・ワークシートやプリント記述内容 ・話し合いへの参加態度
展開 15分	・ポスターをモンゴルに送る意味や目的とは何か	・ポスター制作で相互理解をテーマに班ごとで話し合う。 ・ワークシート			
まとめ 10分	・文化の多様性について	・班ごとに発表し、全体で共有する。	発表	・自分の考えを述べ、他者の意見を聞き、深め合えるような場をつくる	各班の発表の様子

【授業実践の様子】



文化の多様性について説明



モンゴルの生活を学ぶ



ポスター制作で相互理解をテーマに班ごとで話し合う



モンゴルで購入した画集など



モンゴルで見つけた絵画や作品

(2) 授業の振り返り

良かった点

- ・私が思っている以上に生徒たちは外国についてとても興味・関心をもっており、異文化理解に対する意欲が高いことを知った。
- ・授業の中で、現地で購入してきた絵画や伝統作品や実際に撮ってきた写真や動画を教材として活かす事ができ、生徒の興味・関心につなげることができた。
- ・ポスター制作を行う過程で、意見や発表を行ったが、積極的に発言してくれたことで良い意見がたくさん出た。

改善点

- ・美術の授業は週に1時間と他教科に比べると非常に時間数が少ない。1週間空いてしまうと生徒が前回の授業で行った内容を思い出したり、作業にとりかかるまでに時間がかかってしまう。そのため、次週の授業で何をして、どこまでやるのかなどのきちんと指示を伝える事ができたら良かったと思った。また、伝えたい事や考えさせたいことをもう少し厳選できれば、ゆとりある授業になったと思う。今後はその点を改善し授業に活かしていきたい。

(3) 使用教材

【教材①】モンゴルで見つけた絵画や作品 《リサイクルアート》



A. パソコンのキーボードを使ったベルトのバックル



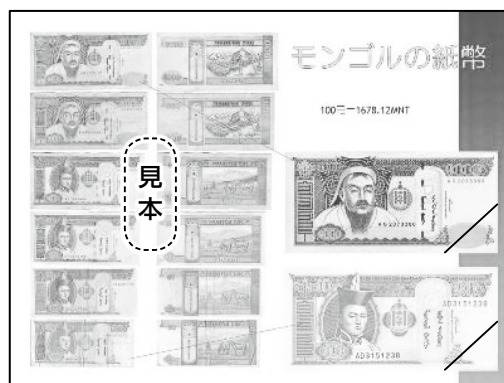
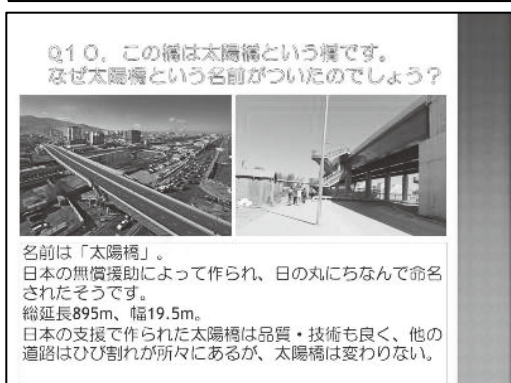
B. スプーンや金属から作られたバイクの模型



C. 馬だけで描かれた絵画

(A,B: 淡水資源センターに展示されていた作品) (C: Tuushin Hotel に飾られていた作品)

【教材②】パワーポイント抜粋資料



(4) 参考資料等

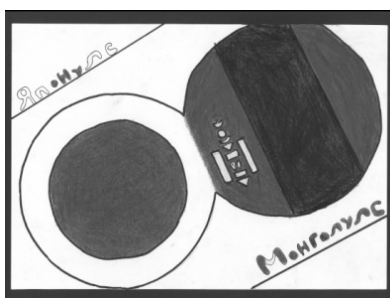
- ・「ESD QUEST イーエスディークエスト」 文部科学省
- ・「わたしたちの地球と未来 モンゴル国」 財団法人 愛知県国際交流協会
<http://www2.aia.pref.aichi.jp/koryu/j/kyouzai/PDF/H20/mongolia.pdf> (2015 年 1 月 10 日)
- ・『地球の歩き方 モンゴル』 地球の歩き方編集室、ダイヤモンド・ビックス社、2013 年
- ・『現代モンゴルを知るための50章』 小長谷有紀・前川愛編著、明石書店、2014 年

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

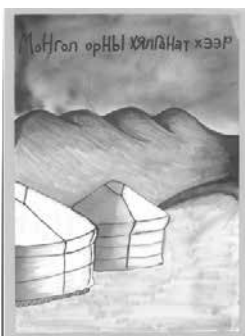
＜生徒たちの感想＞

- ・異文化を理解することは、自分の国についても理解することにつながるということに気付いた。
- ・実際に自分たちが描いたポスターを送るという事でしたが、モンゴルの学校の子たちがどんな反応をするのか、とても楽しみです。
- ・ポスターを送ることで、日本のことも色々知ってもらい、モンゴルの人達とも交流をもちたい。
- ・日本とモンゴルの絵や作品からも共通していることや違いを見つけることができた。

＜生徒たちの作成した作品＞



日本国とモンゴル国



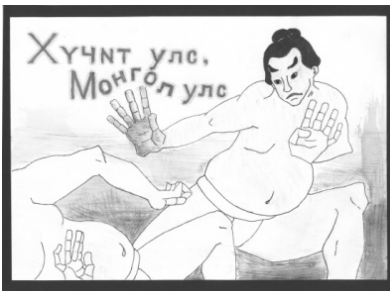
モンゴルの草原



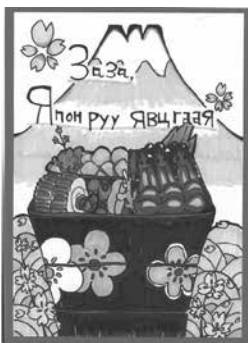
自然を愛す



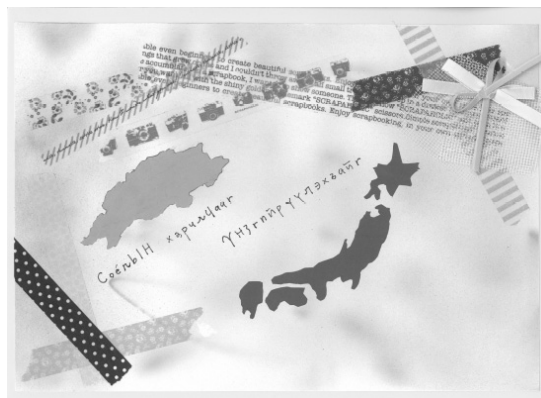
日本とモンゴル



強い国 モンゴル



文化のつながりを深めよう!



さあ！日本へおいで

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

〈Plan〉モンゴルを素材として異文化への理解を深め、自分たちに何ができるのかを考えさせる。

〈Do〉相手の国の理解や最初のモンゴルに対するイメージを授業実践を通じて気付かせ、ポスター制作を行う。

〈Check〉ポスターを描いている過程で、どのような表現が相手の国に対して受け入れられるのか、また、どんな表現が適切なのかを話し合いの様子から確認する。

〈Action〉完成したポスターをモンゴルへ送り、感想を聞いてそれを Planへ反映させる。また、授業ではテーマが絞られすぎてしまい、同じようなテーマが多かったので、今後は異なる視点を大切にして取り組ませることを次回の〈Plan〉に加える。

成果

- ・今回の授業実践では、最終的にはモンゴルの学校にポスターを送るということが目的であったが、そこまで至る過程の中で生徒たちに相互理解や国際協力の大切さなど、たくさんの事を伝えることができた。また、授業の中で、生徒の反応や熱心に取り組んでいる様子を見る事ができ、教える事の楽しさを改めて感じた。
- ・今までは自分の描きたいもの、自分のための制作が多かったが、今回は相手のことを想ってポスターを描いた。また、一人ではなく、お互いに意見を出し合い、共同制作することによってより良い作品作りにつながった。普段の学校生活の中でも意見のぶつかり合いなどはあるが、みんなで協力することにより、より良いものを作り上げていくことの大切さを気づかせられた。
- ・普段の生徒との関わりの中で、教師海外研修での話題や海外に関する質問などを聞いてくる生徒が増えた。美術の授業を選択していない生徒からも、教師海外研修での話を聞かれることが増えた。また、生徒からの話も伝わり、保護者の方にも授業実践を示すことができ、非常に嬉しく思っている。
- ・今回はモンゴルの文化に興味をもち、モンゴルの人たちとコミュニケーションをとりたいという段階までたどり着いた。今後は最終的な目的である持続可能な開発につなげていきたい。

課題

- ・ポスター制作を行う上でテーマを班ごとに決めさせたが、結果として同じようなテーマが多くなってしまった。今後は違う視点からも意見交換ができるような取組みをさせていきたい。
- ・ポスターを送るということは実現できたが、次の段階として実際に送ったポスターがどう使われているのか、モンゴルの生徒たちの反応はどうだったかなど感想をやり取りしていきたい。また、可能であれば今度は逆にモンゴルから日本にポスターを送ってもらったり、ネットを使った交流も行っていきたい。翌年の高1に同じ活動を行い、持続可能な活動を行っていきたい。
- ・今回は美術の授業の中で行ったが、総合の授業や英語の授業など、今後は他教科や学年の先生方とも連携し、取組を持続発展させていきたい。

10 教師海外研修に参加して

今回の研修は、まさに「百聞は一見にしかず」だった。事前の国内研修で学習したことや考えたことが実際に見たり体験したりしたこととリンクして、学びが広がる瞬間がたくさんあり、改めて学ぶことの楽しさを知った。私が感じたことは、モンゴルと日本で言葉や文化は違ってもお互いに共通し、つながる場面が多々あったということだ。単に「この国のここが違う」「ここが同じ」だけではなく、その両方を知ること、理解することで、はじめて相互理解につながり、真の国際協力につながっていくのだと感じた。

本校では国際交流が盛んだが、今までは欧米中心に考えられがちであった。しかし、今年度はベトナム研修旅行も行われ、ハノイの JICA 事務所訪問も行った。また、来年度からはカリキュラムに中国語を導入するなど、学校全体としてアジア諸国に方向性を向けようと動いている。

生徒たちにも、単に外国へのあこがれだけでなく、国際社会の一員として世界にどのように貢献することが出来るかという意識をもって欲しいと思っている。今回、教師海外研修に参加して、自分の経験したことや学んだことをこれからも生徒たちに提供していきたい。

今回の研修に参加し、校種の異なる先生方やたくさんの方と出会うことができ、大変貴重な体験になった。この研修での体験は一生の思い出になることだろう。この経験をこれからの教員人生に活かしていきたい。



MONGOLIA

学校名：東京都立田柄高等学校

氏名：田中 聖子

【担当教科：外国語（英語）】

● 実践教科等：コミュニケーション英語Ⅰ

● 時間数：9 時間

● 対象生徒：高校 1 年生

● 対象人数：195 名（5 学級）

※複数の単元で授業を実施したため、単元名①および②として記載した

1-①単元名

Brightening the Future（未来を照らしながら）

※教科書“Grove English CommunicationⅠ”第5課 導入部分

2-① 単元の目標（ESD の能力・態度）

- （ⅰ）自分たちの国のことに目を向ける一方で、持続可能な社会の実現においては地域や世代を多様な事柄が公平・平等にいきわたるために、自分たちにはなにができるか考える【批判的に考える力】
- （ⅱ）さまざまな角度から物事を思考し、高校生である自分たちにできることは何か、また今後の未来像を予測してより良い解決策はどんなことが可能であるかを主体的に考えまとめる【未来・将来を見据えて、予測に基づき考える力】
- （ⅲ）現在、開発途上国が抱えている諸課題に対し意見交換し、まとめることを通じてモンゴルについての理解を深める【他者と協力する力】
- （ⅳ）日本とモンゴルの相互依存の関係に気づき、現状を知る【つながりを尊重する態度】

3-① ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・「モンゴル」という開発途上国の現状を知り、相互理解をしていくことの肝要さに気づく（多様性）
- ・各種情報も各国の教育も循環したり、変容したり、お互いに高めあっている現状を知る（相互性）
- ・日本と開発途上国が山積している課題に対し、力をあわせ協働していることを知る（連携性）

4-① 単元の指導について

（1）教材観

単元中の本文においては、モンゴルの電力事情と大気汚染という問題に対し、高校生ができることを考え実践に移すという内容が主軸にある。ESD（持続可能な発展のための教育）に基づく授業を通して生徒が物事を多面的にとらえることができるようになってほしいという願いをもち、構成した。自分たち高校生にも一歩を踏み出すことができ、さらに国際社会の中で広く活躍し、役割を果たすことができるという有用感を感じさせ、主体的に考える視点をもつことに重点をおいた。

（2）児童生徒観

外国につながるのがある生徒が多数在籍している学校のため、普段の授業はもちろん、あらゆる学校生活の場面においても、異文化理解・国際理解、国際交流など、外国に目を向ける機会が非常に多い点が本校の特徴である。とくに本校普通科外国文化コースでは、外国につながるのがある生徒の割合は高く、生徒の中にも JICA の活動について理解が深かったり、ボランティア活動に積極的に携わりたい気持ちをもつ者が一定数いたり、今回の教師海外研修に基づく授業に対して非常に積極的であった。

（3）指導観

国際社会に貢献する生徒の育成をめざし、開発途上国の現場・現状を伝えるだけでなく、教師から還元される内容を生徒たちのなかで理解を深め、何らかの形で自ら発信できるような場を設定するよう授業を構成した。授業の内容に連続性をもたせるため、今後 3 学期までかけて、「国際協力」などのキーワードを念頭に、総合的な学習の時間やホームルームの時間を有効活用し、今回の学びが単発のものにならないようにする。

5-① 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	意欲・関心を示し、意欲的な態度をもって授業に臨んでいる。	めあてをもって取り組み、意見をまとめたり考えを深めたりしている。	自分の考えをまとめ、相手に伝わるように伝達できる。	「継続した支援」「相互依存」などキーワードの理解をし、適切に用いる。
評価方法	観察・ワークシート	ワークシート	発言・感想文	アンケート・発言

6-① 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	【モンゴルについて理解を深める】国の概要・支援の内容などを知り、自分たちにできることの意見をまとめる。	・電力問題・大気汚染など多くの課題と向き合うモンゴルの現状を的確にとらえる。 ・JICA 事業の現地への関わりを知る。	①JICA およびモンゴルという国についての理解を深める。 ②モンゴルを支援するには、どのようなことが考えられるか意見をまとめる。
2～7	教科書 5 課 “Brightening the Future”の本文内容理解・文法事項の学習・音読・ふりかえり		

7-① 授業事例の紹介

小単元名【モンゴルについて理解を深める】

(1) 指導案

(ア)実施日時 9月10日(水)第3限他 ※授業外の文化祭での展示は9月19日(金)～20日(土)

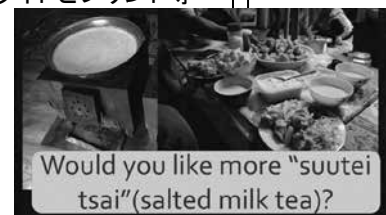
(イ)実施会場 1年4組教室他

(ウ)本時の目標 モンゴルの概要・日本の支援・JICAの活躍などを知る。

(エ)指導のポイント 導入段階で国の理解を深め、スムーズな本文内容理解につなげる。

(オ)本時の展開 スライドや写真等視聴覚教材を積極活用し、国の概要についてはもとより、モンゴルを取り巻く支援のあり方及び抱える課題について深く知る。

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	導入1 導入2	・フォトランゲージ 1 たいようばし(ウランバートルにおける無償資金協力) 2 ゴミ処理施設(ウランバートルにおける技術協力)	一斉および班活動・発表	使用写真の選定 地図の活用 1 わかりやすく理解しやすい説明と平易な英語 ・ワークシートのレイアウトの工夫 2 視聴覚教材の活用 ・訪問した新モンゴル高校2年生数人と大学生同行者(ケル滞在時)の英語での発話の内容を聞き取る。 3 現地調達の教材 ・現地の貨幣および国独自のお茶“スーテツァイ”試飲など 4 スライドとプリント等	態度 発言 ワークシート 感想文 アンケート 等
展開 30分	1 研修の目的 2 JICAの活動 3 国についての理解深化 ・言語 ・通貨 ・気候 ・民族衣装 ・地方と首都の比較 ・環境問題 ・各国からの支援の様子など	・モンゴルはどんな国か。 1 「モンゴルのイメージ」を共有する/JICAの支援紹介 2 モンゴルの場所や首都の確認等…地図・スライド等を用いて位置関係・民族衣装・通貨等について幅広く伝える。 3 英文を取り入れた活動 ・英語による教師の説明聞きとり&書き取り 等 ・クイズなどのアクティビティ ・モンゴルの高校生の英語の聞き取り等			
収束 10分	ふりかえり 次時の予告	・JICAの活動の確認 ・感想等の発表活動 ・モンゴルが抱える深刻な大気汚染の問題をはじめとする環境問題について予告をし、ワークシートを回収する。		教科書の挿絵の拡大写真(5課) ワークシート	



授業外	飛翔祭(文化祭)における教師海外研修参加報告(モンゴルの概要とJICAの活動について)	学年既習事項であるモンゴルの環境に関する情報・首都と地方の格差問題といった国の概要から、JICAの支援、民族品コーナーの設置、関連書籍の紹介等、多角的に展示方式で紹介する。	展示	興味をもった生徒・来校者の質問に答えたり、研修での学びを伝えたりすることの時間を設け、国際問題、国際協力の必要性に気づく生徒らに対し働きかける。	
-----	---	--	----	--	---

※単元①については以上

1-② 単元名

JICA ～青年海外協力隊の活躍～

2-② 単元の目標 (ESDの能力・態度)

- (i) 教材(開発教育関連学習)を通じて、支援のありかたについて考察し、持続可能な社会づくりに関わる課題を見つける【多面的総合的に考える力】
- (ii) 主体的に世界のために活躍する人材について知り、自らのキャリアプランにも言及した内容を生徒同士で発表をし、他者の意見に耳を傾ける【コミュニケーションを行う力】
- (iii) JICAを通じて世界で活躍する日本人の声を聞き、自分のキャリアについて具体的に考えて、自らの未来像を描き、そこに到達するためには今、何が必要かを考え実行に移そうとする【進んで参加する態度】
- (iv) 開発途上国の諸問題を地球規模の課題(グローバルイシュー)としてとらえ、解決の手立てに目を向けて、改善策などを立案する【つながりを尊重する態度】

3-② ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・国際協力や開発途上国での暮らしについて理解するとともに、そこでできる支援について理解を深めた上で、「支援すること」とは、互いに働きかけ、さまざまな事柄が関わりあっていることを知る(相互性)
- ・JICAの持続可能な支援に向けたビジョンについて青年海外協力隊員の声からヒントを得る(有限性)
- ・持続可能な社会の実現のために、日本が国際社会で重要な役割を果たしていることを知る(責任性)

4-② 単元の指導について

(1) 教材観

『現地のニーズにあった支援とはなにか』という発問が中心である。モンゴルに派遣されている青年海外協力隊員の声聞き、キャリアを考える一助とする。研修中に撮影した現場の写真や動画で学びに臨場感をもたせる。既習事項として9月のコミュニケーション英語Ⅰの授業実践および同月下旬の飛翔祭(文化祭)での発表展示+11月の総合的な学習の時間(青年海外協力隊ストーリーその1)と12月の実践まで数回積み重ねがあったため、学びに連続性が生まれスムーズな授業展開となった。

(2) 生徒観

生徒には9月のコミュニケーション英語Ⅰにおける授業実践・同月の飛翔祭(文化祭)での発表展示において、モンゴルという国の概要・日本と開発途上国の相互依存の関係など、多角的に学び、意見を発表しあったり、話を聞いたり展示を見たり、自ら調べたりする過程で感想文やアンケートを実施した。それらの一部から、「キャリア教育と関連させてほしい」「もっと青年海外協力隊の活動が具体的に知りたい」という好奇心が生徒たちから自発的に出てきたほど、意欲的に学びを深めている。

(3) 指導観

キャリア教育については、4月当初から継続した学習を展開しており、進路部と学年が連携して授業を構成し、「進路の手引き」を用いたり、先輩講話を実施したり、班活動にて意見交換をしたり等の積み重ねがある。更に11月の総合的な学習の時間の単元においては、「青年海外協力隊ストーリー」という外部講師の授業があった。そのため、1学年のうちから高校卒業後の進路選択を考えることが身についている生徒も多く見受けられるので、12月には、実践として“青年海外協力隊隊員の活躍の紹介+継続的な支援のあり方”を中心にした学習を行い、青年海外協力隊ストーリーその2と位置付けて生

徒のキャリア教育の一助となるよう授業の目標を定めた。

5-② 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	国際社会の一員として当事者意識をもつことができる。	相手のニーズを理解しよりよい支援を考えることができる。	めあてを明確にして話しあい活動を進めることができる。	青年海外協力隊についての確に理解できる。
評価方法	態度・発言	話し合いでの発言	プリントおよび発言	プリントおよび発言

6-② 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	【青年海外協力隊ストーリーその2】青年海外協力隊の声を聞こう	現地にて活躍する日本人の生の声を聞き、国際協力について理解を深める。	国際貢献のあり方を模索し、日本の援助活動について理解し、適切な支援について考えを発表する。
2	フォトランゲージ	写真を使い背景にあるものなどに目を向け考える。	前回学んだ「現地のニーズにあった支援」について、意見交換をする。

7-② 授業事例の紹介

小単元名【青年海外協力隊ストーリーその2(教師海外研修を通じて見たモンゴルの現状と課題)】

(1) 指導案

(ア) 実施日時 12月24日(水)第3限 他

(イ) 実施会場 LL教室

(ウ) 本時の目標 国際貢献のあり方を積極的に考え、主体性をもって自らのキャリアを考える。

(エ) 指導のポイント 視野を広め開発途上国への関心を一層高め、自分たちにできることを模索させる。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	導入1 導入2	・9月の授業の振り返り ・フォトランゲージ 1 体育指導をしている隊員の姿 2 体育館の床 3 首都と地方の道路の違い等	TT・講義＋話し合い	・各学級から集めた授業の感想文の内容共有 キーワードをおさえる。 『現地のニーズ』 『国際協力』 『自らの生き方・あり方』	- 姿勢 - 発言 - ワークシート記入 - 話し合い活動 - 発表活動 - 知識理解の定着度 - 学習活動の観察 - 授業に対する参加意欲
展開 30分	1 ワークショップ形式の教材 2 JICAの活動 3 青年海外協力隊についての理解深化 ・幼児教育の現場 ・体育指導の現場 ・環境教育の現場	・支援をする前に考えるべきことは。 1 ワークショップ活動…話し合い&まとめ・発表 映像を視聴して自らの考えをまとめ、発表する 1 活動映像の視聴 2 異文化の地域で活躍する青年海外協力隊のインタビューを聞き、メモを取り感想をまとめる。(体育指導の現場)			
収束 15分	まとめ・ふりかえり 次時の予告	・感想を述べあう中で互いに国際教育について考えを深める。 ・3学年時に行う“異文化理解”の授業内容について、紹介をする。		・次時以降も教科書の単元に出てくる開発途上国での青年海外協力隊について取り上げることを予告する。	

授業の様子



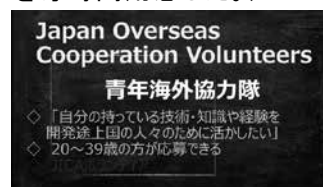
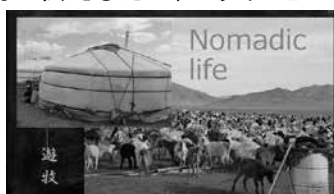
- (左)前授業の振り返り
(中)ゲストティーチャーの紹介
(右)感想の記入

(2) 授業の振り返り

9月の授業実践と飛翔祭(文化祭)での展示発表の振り返りなどに基づき、PDCA サイクルを意識して12月の授業実践につなげた。どちらも授業のねらいの設定を明確にめあてを授業冒頭で伝え、見通しをはっきりもたせることとし、国際協力の本質を問うことをねらいにした。限られた時間内では触れることができなかった内容については、今後のコミュニケーション英語Ⅰの授業内でも、それ以降でも少しずつ紹介をし、その都度ふりかえりカードを記入させたり、ノートへ感想を書かせたりすることで、学習状況を把握していく。担任している1学年外国文化コースの学級においては、さらに積極的な関わり方が可能であるので、今後は折をみて発信を続けていく予定にしている。

(3) 使用教材

スライドの一部(効率的かつ効果的に伝えるため、スライドとプリントを毎時間用意した。)



(4) 参考資料等

- ・『モンゴルの子どもたち(世界の子どもたちはいま)』西村佐二 学習研究社(2002)
- ・『もっと知りたい国 モンゴル』西村幹也 心交社(2009)
- ・『モンゴルを知るための65章【第二版】エリア・スタディーズ』金岡秀郎 明石書店(2012)
- ・『図説 モンゴル歴史紀行』松川節 河出書房新社(1998)
- ・『地球の歩き方 モンゴル』地球の歩き方編集室 ダイアモンドビッグ社(2013)
- ・『夢と希望の大国! モンゴル(コミュニティ・ブックス)』ダッシュンク ケレルマ 日本地域社会研究所(2013)
- ・“Lonely Planet Mongolia”(英語)ペーパーバック Michael Kohn Lonely Planet(2011)
- ・『隊員たちの声』制作 教師海外研修(首都特区バガノールでの体育指導)(2014)
- ・『世界の食卓 世界24か国の家族のごはん』TOTO 出版(2012)
- ・『開発教育実践ハンドブック 参加型宅習で世界を感じる』NPO 法人 開発教育協会(2013)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

モンゴルの衣装や音楽・飲み物、食べ物をはじめでの生徒が多く、現地で入手した教材の活用が非常に効果的で、具体物を介したことで異文化理解をさらに深めていたのが印象的である。また受動的なだけでなく、アクティブに班活動をし、活発な意見交換等を通し、自分たちで考えたり、感じたことを言葉で相手にわかるように発信することの楽しさを体感していた。高校生の自分たちにできることを考え、主体的に行動しようとする姿勢をもつ者が増えた点が変容と言える。特に、高校生である自分たちに年齢の近い海外協力隊員の声を聞き、意見交換をする活動を入れたことにより、自分自身のことに置き換えて意識をもって授業に参加している生徒もいた。今回はモンゴルという近くて遠い国を題材としたが、今後使用する英語教科書の中でも、様々な国が取り上げられることが予想される。そうした中で、教科横断的に物事を考え、開発途上国だけでなくその他の国々に対し、何か自分たちでできることを思考し、模索していくことこそが本当の国際理解教育/開発教育につながると実感することができた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

●全体の成果

「JICAの支援を持続させるためには、一つの方法として青年海外協力隊という形で自分たちにもできることがあることが分かった」「国際社会の一員としての自分自身のあり方を見つめることができ、将来のことを考えて今行動することが大切だと改めて感じた」等の感想が聞かれ、国際協力をより身近に捉え、

一歩を踏み出そうとするきっかけとなったようである。授業をする側としても、どんな題材でも伝え方を工夫することで深く考えさせることができるという経験ができた。日本に目を向けた生徒も見受けられたので、今後の授業実践においても、国内国外問わず相互に win-win な関係の構築をどのようにしていったらいいか、自分たちにできることはなにか、どうしたらより有効かの意見交換等を行っていく。

●課題および課題の改善策

P<計画>

・学習計画を立て、授業のねらいを明確にし、TT で展開する場合には綿密な打ち合わせのもと指導案を作成した。

・3 学年での『異文化理解』の授業を見通して、次年度以降の授業においても日々の学びの中で、「国際理解」というキーワードに対して、今回の体験を含め、広い視野から伝え続けることを計画している。

D<実施>

・ねらいを達成するための一つの方法として、開発途上国と日本の違いに目をむけ、課題をしっかりとらえることができるようスライド・動画・拡大写真等を用いた。

・具体的な現地の様子や JICA に携わる人々の話を盛り込み、生徒の反応・理解の状況を見ながら、授業を展開した。

・授業を TT で行う際、各教員が意見を出し合ったり、改善策を話しあったりして、常に振り返りながら進めた。

C<検証>

・事前事後アンケートを行い、授業中もワークシート等のみとりを行い、理解の状況をこまめにチェックした。

・自己評価を行うことに加え、他の教員から意見・助言を聞き、次の授業では改善するようつとめた。

A<改善>

・時間数確保および、考査等にむけての授業進度の兼ね合いが懸案事項であったが、授業時間内で伝えきれなかったことは、学級担任をしているクラスの生徒に対してはホームルームの時間を通じて伝える機会を設けることが何回かできた。他の学級においてはそれも実現できないと予測したので、9 月末の飛翔祭(文化祭)において発表する場を設け、全校に発信することとした。

・授業時間の捻出については、課題を多く抱えているものの、研修で得た内容を生徒にぜひとも還元したいという気持ちが強く、担任している学級内においては、教室後ろの黒板および掲示板上にモンゴルコーナーを設け発信を続けた。他教科との横断的なつながりの方法も模索し、11 月の総合的な学習の時間における学びを一層深めるため、12 月に 11 月の学習内容の第二弾という位置づけで授業を実践し、キャリア教育と関連させたり、ボランティア活動について考えを深めたりし、全体的なまとめを行うことができた。なお、PTA 発行の本校ニュースレター(No.78)にも今研修のコラムを掲載してもらうことができ、あらゆる場面で研修内容を還元していく方法にも挑戦することができた。

・1 学年 5 学級のうち外国文化コース 2 学級でのみの実践となった授業もあったので、意見の多様性に欠けたので、3 学期に普通科でも行う予定としている。

10 教師海外研修に参加して

国際理解教育・開発教育のねらいをポイントを絞って理解することができたとともに、ESD(持続可能な発展のための教育)の授業の構成の仕方や手順・教材集めのポイントなどについて仲間やアドバイザーの先生と意見交換する中で深めることができた点が大変有益であった。ESD(持続可能な発展のための教育)の視点を持ち、学習過程で、生徒間でコミュニケーションをとり合い、互いに意見を共有し合う場面を多く設けるという一連の流れは、今後のあらゆる単元の授業展開にも応用がきく手法だと感じる。

国際理解教育・開発教育は、国際社会を生き抜き次代を担う生徒にとって、彼らの主体性を高め、自ら考える姿勢をもって、国際貢献を果たしていく素地を養うために必要不可欠な内容であると思う。

今研修は、多岐にわたる充実したカリキュラム内容での学びに加え、一人では調達できなかった教材や今回の実践で使用した動画収録・動画編集など、生徒に還元するためのさまざまな手段についても仲間とアドバイザーの先生と話し合い、意見交換をし、使用教材の精度を高めることもでき、授業実践へのイメージをふくらますことができた。

「百聞は一見にしかず」ということばの通り、実際に見て体験し、経験したことを語る授業においては、生徒の反応も普段の様子とは違って見え、興味関心を高めることができたように思う。時間的制約などもあるが、それらを超えていかに工夫して、生徒にわかりやすい形で還元するか、というあつい気持ちをもって授業実践に臨むことができ、学びが非常に多かった。今後は、勤務校において積極的に国際理解教育を担っていきたいと考えている。



MONGOLIA

学校名：東京都立山崎高等学校

氏名：川島 直子

[担当教科：英語]

- 実践教科等：コミュニケーション英語Ⅱ
- 時間数：3時間
- 対象生徒：高校2年生
- 対象人数：30人

1 単元名

国際社会の中の日本

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

- ・話し合いを行う中で、他者との価値観、意見の違いに気づく。（多面的、総合的に考える力）
- ・ワークショップを通して、社会と教育が相互に関連し、影響していることに気づく。
（多面的、総合的に考える力）
- ・モンゴルの現状を知り、持続可能な援助の必要性に気づく。（未来像を予測して計画を立てる力）

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・モンゴルの文化について知り、異文化に対して興味を持つ【多様性】
- ・日本と世界の相互依存関係に気づく【相互性】
- ・開発途上国の問題を解決するために、日本や自分にできることを考える【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

モンゴル研修というまたとない機会を得て手にした現地の情報や、写真やビデオといった視覚教材を用いた。モンゴルという国はどんな国であるか、また発展途上国や他の国の暮らしはどのようなものであるか、またそれらの国と日本とのかかわりを考えさせるのに適した生きた教材である。また JICA のホームページからも関連するニュースを紹介した。

(2)児童生徒観

コミュニケーション英語Ⅱのスタンダードクラスであるため、語学や海外に関心がある生徒が多い。英語での導入もゆっくりであれば全員が聞き取ることができる。またペアワークやグループでの学習を普段から取り入れているため、グループ活動は活発に行うことができる。英語を話す国だけではなく、多様な国のことを知り理解するきっかけとなるようモンゴルの事例を通して考えさせたい。

(3)指導観

学期始めは自己紹介や夏休みについてなど、また習った表現を用いるなどスモールステップをふませながら達成感を得られるよう英語でのスピーチをさせている。1学期の自己他己紹介に続き、2学期は教員のモンゴルでの体験について話し、生徒はそれを参考にショートスピーチを作成・発表するところから始めた。

5 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	理解
評価規準	しっかり話を聞いているか。	自分の意見をしっかりと述べているか。	振り返りシートにまとめをきちんと記入しているか。
評価方法	観察	発言・ワークシート	ワークシート

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	How was your summer vacation? (あなたの夏休みは?)	・教員の夏休みについてのスピーチを聞き、自分の夏休みについてまとめる。	・教員がモンゴルで撮影した写真を見て、モンゴルや遊牧民の暮らしについて知る。 ・自分の夏休みについて発表する原稿を作る。
2	Let's cook Mongolian food! (モンゴル料理を作ってみよう!)	・モンゴルの伝統料理について知る。 ・前回の授業で作成した原稿を用いて、聞く人に伝えるように発表する。	・モンゴルの伝統料理であるホーショールの作り方をリスニングで知る。 ・自分の夏休みについて発表する。また他の人の発表を聞く。
3	Nobel Peace Prize and developing countries (ノーベル賞と発展途上国)	・ノーベル賞について知る。 ・寄付をすることの意味について考える。 ・発展途上国の課題を知り、解決策を考える。	・ノーベル賞を受賞した日本人3名とマララさん及び JICA の援助について知る。 ・ワークショップ「援助する前に考えよう」内のワーク1「1枚の看板」を実施する。 ・モンゴルの孤児院の子どもの写真を通して、モンゴルの抱える問題について考える。

7 授業事例の紹介

小単元名【 Nobel Peace Prize and developing countries(ノーベル賞と発展途上国)】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月15日(土)第3限

(イ)実施会場 3B 教室

(ウ)本時の目標 発展途上国の課題について考える

(エ)指導のポイント

・ニュースの題材を用いて生徒の興味・関心を高める。

・実際の写真を効果的に用いて、日本と発展途上国の関係を考えさせる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	ノーベル賞について英語で話す。	ウォーミングアップとして、ニュースで紹介されていたノーベル賞について英語で話を聞く。	全体指導	話題となっているニュースを英語で聞く体験があまりないため、なるべくゆっくり話す。 生徒が理解できているか、問いかけをしながら話す。	しっかり話を聞いているか。
展開 30分	青色 LED を開発した日本人と JICA の活動について説明する。	青色 LED を開発した日本人3名と平和賞を受賞したマララさんについて知る。 JICA の援助現場の写真を見て、LED ライトが発展途上国の暮らしに役立っていることと、日本の援助によって普及が進んでいることを知る。	グループ活動	実際の写真を見せて、ノーベル賞が発展途上国の暮らしに役立っていることを理解させる。	自分の意見をしっかりと述べているか。 ワークシートの記入内容。
	グループにワークシートを配布する。 ワークショップを実施し、寄付をすることの意味について考えさせる。	ワークショップ「援助する前に考えよう」内ワーク1「1枚の看板」の実施を通して、自分であれば寄付をするかどうかについてグループで話し合う。		寄付について正解はないこと、どのような形の寄付が発展途上国に良いものとなるかを考えさせる。また他人の意見も聞き、自分の行動と照らし合わせて考えさせる。 困っている人にお金を与えることだけがよいことではないことを理解させる。	

まとめ 5分	発展途上国の課題を紹介し生徒自身で解決を考えさせる。 振り返りシートを配布し、記入させる	教員がモンゴルで撮影した孤児院の子供の写真を見せ、モンゴルの抱える問題について考える 本日紹介した3項目について感想や意見を書く。	グループ活動 ワークシート記入	ただ「かわいそう」とならないように、モンゴルの現状と援助の形について具体的に考えるよう指導する。 援助の実情やニュースで何気なく知っていたことの裏に日本と世界のかかわりがあることを気付かせるよう、声掛けをする。	自分の意見をしっかりと述べているか。 振り返りシートにまとめをきちんと記入しているか。
-----------	---	--	------------------------	--	--

(2)授業の振り返り

授業実施日に合わせてその週のニュースをうまく授業に取り入れることができた。英語のみでは理解が難しい部分については日本語で説明しながら紹介した。またグループで意見を交換させることで、生徒にとって身近な問題となり多くの意見を引き出すことができた。

[生徒達の意見・感想]

1. Nobel Prize

【問い】青色 LED の開発で日本人3名が、平和貢献の分野でマララさんがノーベル賞を受賞しました。青色 LED が発明されたことによって発展途上国の国々にも灯りがとまり、その光で子供たちが勉強している写真を見ての感想を述べてください。

【生徒の感想】

- ・LED ができて、私の生活は全く変わらなかったけど、モンゴルなどライフラインがしっかり出来ていない場所にしてみたら、とてつもなく大きな変化だったんだなと思った
- ・青色 LED は構造が他の色と比べて難しいらしいけど、もっと普及すればもっと貧しい国でも使えるようになると思う。
- ・マララさんは命を狙われながらも、みんなのために精一杯動いていて、とても感動したし、自分はものすごいちっぽけだなと思ったので、小さな事から始めたいなと思った。

2.寄付する？しない？

【問い】発展途上国を旅行中に「この村の学校のために10ドル寄付をお願いします」という看板を見つけました。あなたなら、どうしますか？

【寄付をするという生徒の意見】

- ・1200 円ぐらいなら出せるから。
- ・日本人の「思いやり、助け合いの心」
- ・子どもは好きだし、協力したいと思ったから。
- ・怪しいから半分の5ドルにした。
- ・払うけど、他の国に頼ってばかりではダメかな。
- ・自分でその場所に行って、その村の状況が悪かったら寄付する。

【寄付をしないという生徒の意見】

- ・自分の寄付したお金がどこに使われるかわからないから。
- ・看板ひとつでは疑わしいから。人の信用を得るのはたいへんなこと。

3. Your idea

【問い】前授業から続いて、教員が訪れたモンゴルの紹介をしてきました。今日は孤児院に住む1人の少女の写真を見ましたが、18才で施設を出た後に仕事に就けず、ストリートに戻ってしまったり、マンホールで暮らす人もいます。どのような取り組みをしたら、防げるでしょうか。またこれらの写真を見た感想を述べてください。

【生徒の意見】

- ・仕事や技術をモンゴルへ教える。

- ・外国からの支援を受けて、(子どもたちに)いろいろな体験をさせる。
- ・(子供たちが)現地ガイドになる。
- ・ボランティアも良いが、(発展途上国の人たちも)少しは自分たちで頑張った方がいいと思う。
- ・格差が生まれるのは仕方のないこと。
- ・寄付してもその国が変えようとしなければ、何も変わらない。
- ・モンゴルの一部に寄付やボランティアに行っても、国全体が豊かになるわけでもなく、他の世界中の発展途上国は貧しいままだと思うので、よく考えてみないと何が役に立つことかはわからない。
- ・大きくて他を見れるくらいの余裕がある国と併合する。
- ・(孤児院でパン焼き器が寄付されたので)パンの原料の小麦粉を寄付する。
- ・そういう状況があることをみんなに知ってもらうことが大事。知らなければ何もできないと思うので。
- ・就職、住む場所、生きられるまでサポートする施設をつくる。格差をなくす。

(3)使用教材

- ・現地で撮影した写真



モンゴルで撮影した孤児院の少女

- ・ワークショップ用記入用シート(グループに1枚配布)

2-3,2-4 Communication English	
The Nobel Prize and Developing countries	
【 寄付する？しない？ 】 発展途上国を旅行中に、「この村の学校のために10ドル寄付をお願いします」という看板を見つけました。あなたなら、どうしますか？ (寄付は強制ではありません、グループで自由に話し合ってください。) メモをとりましょう。班ごとに出的意見を後で発表してもらいます。	
[金額]	
[理由]	
[グループの合計]	

・振り返りシート

2-3,2-4 Communication English

The Nobel Prize and Developing countries

[振り返りシート]

Class No. Name _____

今日の授業を振り返って、学んだことや考えたことを書きましょう。

1. The Nobel Prize

2. 寄付する？しない？

3. Your idea
 モンゴルの孤児院の少女たちの写真を紹介しました。18才になって院を出たあと、ストリートやマンホールに住んだり、住むところや仕事が見つけられず、院に戻ってきてしまう子もいます。彼女たちがこの後も幸せに暮らしていくには、どうしたらよいでしょうか。
 また今までに見たモンゴルの課題(環境・ゴミ・経済など)を解決するためのアイデアや意見を書いてください。

(4) 参考資料等

- ・『「援助」する前に考えよう-参加型開発とPLAが分かる本-』田中治彦、開発教育協会(2006年)
- ・JICA「Delivering Innovation 世界を変えるイノベーション」
 <<http://www.jica.go.jp/publication/pamph/pdf/led.pdf>> (2015年1月20日アクセス)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

生徒からは思ったより多くの意見が出たことに驚いた。また、グループ協議が活発に行われたため、様々な意見を引き出すことができ、生徒の可能性について感じることもできた。授業後の生徒は、12月に実施されたユニセフの講演会後のアンケートでも高い関心を示していた。内向きな生徒が多いと言われているが、この授業をきっかけに発展途上国の問題を考えたり、日本と他の国のつながりについてさらに意識し関心を高めてくれることを期待したい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

コミュニケーション英語の授業では、英語で日ごろからニュースや季節の話題を紹介しているが、モンゴルの話は生徒にとって大変興味深いものであったようだ。夏休み明け1回目の授業ではモンゴル滞在の話のあとにモンゴルについて知っていることを生徒から発表させたが、朝青龍を始めいろいろなものが出た。教員が実際に行った体験を話したり、写真を見せることでより関心を持たせることができた。

授業ではグループワークを通して生徒たちに考えさせる時間をなるべく多くとった。適切な題材を、適切な形で提供することにより、生徒たちは自分の意見を述べたり発表するにいたった。また本学の2学年の教員でベトナム視察に参加した者がおり、学年の総合の時間で12月にユニセフの講演会があった。それに先駆けてこのクラスでは発展途上国の現状について予備知識として紹介し深めることができた点が良かった。

「持続可能な社会づくりについて理解し自分たちができることを考える」ことの第一歩としての目標は達成できたが、課題としては2学年および3学年の一部で限られた時間での授業実践だったため、文化祭など全校的な行事を活用し、さらに内容を深めて紹介ができればよいのではないかと考える。

10 教師海外研修に参加して

・発展と課題

若い世代は教育を受けるためにウランバートルに移住し、そのことがウランバートルへの一極集中およびインフラが追い付かない、交通渋滞、中国の5倍とも言われる大気汚染など様々な問題を引き起こしている。その一方で、昔ながらの遊牧民のゲルは減少し、伝統文化の継承が危ぶまれている。日本の京都などにも当てはまるが、都市の発展と伝統文化保存のバランスをどうとっていくかは大きな課題であると感じた。

・先進国の役割とは？

モンゴルはその厳しい気象条件などから、整備したアスファルトが1年で壊れてしまうこともあるという。日本の技術は生かせないのか。また環境破壊や大気汚染問題は日本も経験してきたことである。なぜそのようなことがまた他の国で繰り返されてしまうのか。ゴミの分別などから始め人々の意識を変えるには長い時間が必要であると感じた。



MONGOLIA

学校名：群馬県立あさひ養護学校

氏名：小山 貴裕

〔担当教科：現代社会〕

- 実践教科等：現代社会
- 時間数：7時間
- 対象生徒：高等部1、2、3年生
- 対象人数：7人

1 単元名

日本とモンゴルの関係から、援助について考えよう ～遊牧民に援助は必要？不必要？～

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

- ・モンゴルの文化や人々の生活を知ることを通して、異文化や異文化に住む人々への興味・関心・理解を高める。
(つながりを尊重する態度)
- ・自分たちの生活とモンゴル人の生活を比較し、分析することで自分たちの生き方を振り返る。
(批判的に考える力)
- ・援助について、援助する側される側の立場に立って多面的に考え、両者にとってよりよい援助とは何かを考える。
(多面的・総合的に考える力)
- ・JICAの活動内容を知り、日本が行う国際貢献の実態と課題を理解する。(つながりを尊重する態度)
- ・発展途上国の課題だけでなく、自分自身の課題にも向き合い解決しようとする態度を養う。
(すすんで参加する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・日本とモンゴルの生活や文化の違いを理解して、それらを尊重する。【多様性】
- ・日本とモンゴル、先進国と開発途上国の相互依存関係について理解する。【相互性】
- ・日本が行う国際協力の内容を知り、必要な援助について考える。【連携性】
- ・遊牧民の生活や考え方をすることで、自分の未来、幸せについて主体的に考える。【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

今日の国際情勢において、「異文化理解」は重要なキーワードになっている。2020年には、東京オリンピックが行われる予定であり、日本政府はそれまでに外国人観光客を2000万人にする目標を立てている。また介護職にも東南アジアの人材を雇用する政策が行われている。つまり、日本国内でも異文化に触れる機会が増えているのが実情である。それは、本校の肢体不自由児も例外ではなく、「異文化理解」が必要となっている。また、グローバル化が進んだ日本では、外国の文化を知る機会が増え、生活様式も日本古来のものでなく、欧米式のライフスタイルに変わりつつあり、その中で、日本の良さや逆に日本に足りないことが見えにくくなっている。それは、日本という大きな視点だけでなく、個人の視点であっても同じであると考えている。そこで、外国の文化を知ることで、自分の生活と他国の生活を比較し、自分の生き方を振り返るきっかけとし、よりよい生き方を模索できるのではないかと考える。

しかし、肢体不自由児の特別支援教育で国際理解教育の実践例は決して多くない。そこで、本研修の経験を生かして、特別支援教育だからこそできる国際理解教育の実践のために本単元を設定した。

本単元では、高等学校指導要領の第3節公民、第2款第1現代社会の内容にある「自ら人間としての在り方生き方について考察する力」や「国際社会における日本の果たすべき役割及び日本人の生き方について考察させる」ことを踏まえて目標を設定した。また、本校の学校教育目標である「個々の実態を踏まえ、主体的に自己の力を発揮して、よりよく生きる力を培う」ために自分の障がいと向き合いながら「よりよく生きる」、つまり幸せになるためにどうしたらよいのかを考えさせたい。

具体的には「援助のあり方」について焦点を当てて単元構成を考えた。日本がモンゴル(開発途上国)に対して行う政府開発援助(ODA)について知り、その中で援助をするときに大切にすべきことを考えさせたい。また、日本は世界でも最も援助額が多い国の一つであるが、東日本大震災があった2011年には、世界で最大の被援助国となった経験から、援助する側とされる側がいつ変化するかかわらな

い現状がある。これは生徒が障がいのため移動や排泄などの援助を必要としているが、一方で日本国民として直接的、間接的に開発途上国に対して援助を行う立場でもあることと似ている。そのため、本校生徒は日本の援助のあり方を援助する側とされる側の両面からとらえることができるのではないかと考えた。そして、その両面から援助のあり方を考え、援助の改善点を見つけることで、生徒たちが身の支援を受けるときに本当に自分に必要な援助を受けるためにはどうしたらよいかが見えてくるのではないかと考えた。また、モンゴルの遊牧民と自分達の生活や幸せに関する考え方を比較することで、本当の幸せとは何なのか、どうしたら幸せになれるのかを話し合いをしながら追求していきたい。

(2) 児童生徒観

対象生徒は高等部の1～3年で、1年男子3名、2年男子1名、2年女子2名、3年男子1名の計7名である。いずれも障がいによって下肢や上肢に麻痺があったり、進行性筋疾患のため全身の筋力が低下したりしている。そのため、移動では7人とも日常的に車イスや歩行補助具を使用している。また、教科書やノートの準備や排泄や更衣の一部に介助を必要としている生徒もいる。また、ワークシートへの記入や吃音のため発表にも時間がかかったりする。7人とも知的障害のない高等学校に準ずる課程の生徒であるが、知識や理解力、表現力は大きく個人差が見られる。

本生徒達は、海外の生活や文化に興味をもっている。テレビ番組で旅番組をよく視聴していたり、担任の海外旅行の話をよく聞き、質問をしたりしている。しかし、本単元に関わるモンゴルのことや日本が行う国際援助の実態をよく知っている生徒はいなかった。また、卒業を控えた3年の生徒を筆頭に卒業後の生活に不安を抱く生徒も少なくない。

(3) 指導観

上記に記述したように対象生徒は障がいをもっているために、普段の生活で担任を含め多くの人から援助を受けて生活している。そこで、本単元では援助をする側される側の両面から考察していきたい。そうすることで国際援助というマクロな視点だけでなく、生徒自身の実体験から援助について考えることができ、それが援助を受ける生徒自身の生活も見直すきっかけになるのではないかと考えた。また、興味・関心をもちやすい遊牧民の生活から援助がもたらす生活の変化などを学び、援助と幸せの関係性や自分の未来について考察させたい。本単元では、自身の障がいと向き合い、将来について考える機会をもつため、個々の自体に応じた精神面の配慮が必要である。そのため、授業中に投げかける言葉を精選し、T2と協力して生徒の精神的な負担を軽減するような働きかけを行っていきたい。

5 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	モンゴルの文化や国際援助に対する関心を高め、そこからよりよく生きるために、自分の生き方や幸せについて考察を深めようとしている。	モンゴルへの援助を援助側、被援助側の両面から考察し、よりよい援助のあり方を判断して、その過程や結果を様々な方法で表現している。	援助に関する諸問題について考察し、自分の言葉でまとめて記述し、他者に伝えるように発表しようとしている。	JICAの活動内容を知り、日本が行う国際貢献の実態や課題を解決する方法をについて理解し、その知識を身につけている。
評価方法	学習の様子 ワークシート 授業中の発言	ワークシート 授業中の発言	授業中の発表 ワークシート 学習の様子	テスト ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	○モンゴルについて知る	モンゴルの文化、風俗、生活様式などに対して興味関心をもつことができる	・モンゴルについて知っていることを挙げる。 ・モンゴルクイズ(国旗、言語、食べ物、服などを紹介) ・モンゴルの様子を知るために、ウランバートル(都市部)や遊牧民の生活風景(地方

			部)の写真や動画を見せる。
2,3	○援助について考える	援助に対する自分の考えをまとめて、発表できる。	・ワークショップ『「援助」する前に考えようー参加型開発とPLAがわかる本』(原作:田中治彦、発行:開発教育協会)の「アイコさんのバーン村への支援から考える」を行う。 ・「必要な援助とは？」を考える。
4	○日本の援助って何してるの？	ODAの内容やJICAの活動を理解できる。 援助をする側される側の両面から“必要な援助”について考えることができる。	・ODAの内容やJICAの活動を知る。 ・青年海外協力隊(池田隊員:バスケットボール指導)の活動を知るために映像資料を観る。 ・青年海外協力隊(池田隊員)の指導を受けた現地の人達の想いを知る。 ・援助を受ける側の立場になって、必要な援助を受けるためにはどうしたらよいかを考える。
5	○援助ってなぜするの？	「なぜ援助をするのか」という問いに対して自分の考えをまとめて、発表できる。	・現在、日本は多額の借金を抱えているのにも関わらず「なぜ援助をするのか？」を教師が提示した資料をもとに考え、発表する。 ・日本から開発途上国への援助で、日本が受ける恩恵について考える。 ・先進国と発展途上国の相互依存関係について知る。
6	○遊牧民の生活と自分の生活を比較しよう！	遊牧民の生活と自分の生活を比較し、類似点や相違点を見つけることができる。	・遊牧民の生活を撮った写真を用いて、フォトランゲージを行う。 ・遊牧民の生活様式や1日の生活の様子を知る。 ・遊牧民の生活と自分たちの生活を比較して、類似点や相違点をまとめる。
7	○遊牧民の生活に援助は必要？	遊牧民の生活から、援助と幸せの関係性について考えることができる。	・遊牧民に対して援助は必要か、不必要かを考える。 ・必要であればどんな援助が必要か考える。不必要であればなぜ不必要なのか考える。 ・遊牧民へのインタビューを観る。 ・「援助は人を幸せにするのか？」という問いに対して自分の考えをまとめる。 ・援助と幸せの関係性について考える。

7 授業事例の紹介

小単元名【遊牧民の生活に援助は必要？】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月21日(火)第2限

(イ)実施会場 高等部1組教室

(ウ)本時の目標

○遊牧民に対して援助の必要性について自分の考えをもち、発表できる。

○既習の学習から、援助と幸せの関係性について自分の考えをまとめることができる。

(エ)指導のポイント

遊牧民への援助の必要性から、援助が人を幸せにするのかを考えさせるところ。そこから日常生活の中で援助を受けることがある生徒たちが、どのような援助を受けることで自分自身が幸せになるかについて考えるきっかけにしたい。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	○援助に関する既習のキーワードを白板に貼り、前時までの学習内容を振り返る。	○前時までの学習内容を復習する。	一斉	・T2と協力して、支援が必要な生徒を介助したり、姿勢を保持できるようにしたりする。	
展開 17分	○右記の発問をする。T2とともに机間指導を行い、書き進められない生徒に対して前時の学習内容を思い出させる働きかけをする。	○「遊牧民に対して援助が必要か不必要か」を考える。必要であればどんな援助が必要か考え、不必要であればその理由を考えて、ワークシートに記述する。そして、自分の考えを発表する。		・生徒の考える時間やワークシートに記入する時間、発表の時間を十分にとる。 ・発表のファシリテーターをT1が行い、T2は発表内容を板書していく。 ・吃音がある生徒の発表では、本人の考えに沿って補足説明する。	○遊牧民に対する援助の必要性について考え、自分の意見を発表する。 (ワークシート・発表)
3分	○右記の発問をすることで援助と幸せの関係性について想起させる。	○「遊牧民の生活は幸せであるか」を考え、幸せか幸せでないかを判断する。		・この発問に対しては時間をかけずに直感的に判断させる。	
3分	○遊牧民へのインタビュー内容をPowerPointで提示する。	○遊牧民の幸せについての考え方を知る。		 ↑ 遊牧民へのインタビュー内容の紹介	
17分	○右記の発問をする。T2とともに机間指導を行い、書き進められない生徒に対して本時や前時までの学習内容を思い出させる働きかけをする。	○「援助は、人を幸せにするのか」を考える。幸せにする、やや幸せにする、どっちとも言えない、やや不幸せにする、不幸せにする、から選択し、理由をワークシートに記述する。そして、自分の考え方を発表する。			○援助と幸せの関係性について自分の考えをもつことができる。 (ワークシート)
まとめ 5分	○板書してある生徒の意見を中心に本時のまとめを行う	○板書してある他の生徒の考え方と自分の考え方を比較しながら、本時のまとめを行う。		・担任の押しつけにならないように注意しながらホセ・ムヒカ大統領の言葉を紹介する。	



←援助と幸せの関係について真剣に考える本生徒。

遊牧民の生活が幸せかどうかを判断させている場面 →



本時では、既習の学習内容をもとに、「遊牧民に対して援助が必要か、不必要か。」「援助は、人を幸せにするのか。」の発問を中心に援助の必要性や援助と幸せとの関係性を考察させた。担任の説明を極力減らし、考察し、発表する時間を十分にとった。本時の終盤、「援助は、人を幸せにするのか。」を考え、ワークシートにまとめている途中で一人の女子生徒が泣き出すことがあった。後から女子生徒に理由を聞くと、「自分が受けてきた支援で嫌なことがあった。」「フィリピン(女子生徒は日本とフィリピンのハーフ)に戻ったとき、日本の援助のことで責められた経験がある」などを語ってくれた。自分の経験と本時または既習内容を結びつけて“援助のあり方”について深く考えることができていた。この女子生徒以外にも、自分の生活を振り返って援助について考え生徒がいた。

- ・援助する側される側双方の顔が見えても、進んで援助を行っても必要とされる援助を行わなければ幸せにはならない。現地の方が慣れた生活を援助によって崩してしまった場合、それは不必要な援助になる。

これまでの学習が生かせる学習内容であった。援助の本質について話し合いを重ねてきたため、どの生徒も担任の発問に対して、しっかり考え、自分の意見をまとめることができていた。遊牧民の生の声を提示できたため、援助をする側される側の両面の想いを共有できた。また、遊牧民への援助からスムーズに援助と幸せの関係性、つまり現在の自分を取り巻く支援環境を考えるきっかけになったのではないかと思う。

遊牧民のインタビュー内容を生徒に提示するとき、インタビュー風景を撮影した動画を使用した方がより真実味があり、より生徒の心に響いたのではないと思う。動画に雑音が入り音声小さかったため、そのまま生徒に提示できなかった。インタビューなどの映像資料を集める段階から生徒に見せることを意識するべきであった。また、画像の編集を丁寧に行うことで、生徒に提示できる資料になったのではないと思う。

国際理解ワークシート3

高等部 名前

<遊牧民の生活に援助って必要?>

Q 1. 遊牧民に対して、援助は必要?それとも不必要?

(必要 やや必要 やや不必要 不必要)

<理由>

Q 2. 援助は、人を幸せにするのか?

(幸せにする やや幸せにする どっちとも言えない やや不幸にする 不幸にする)

<理由>

(4) 参考資料等

- ・Hana.bi サイト「リオ会議で最も衝撃的なスピーチ：ホセ・ムヒカ大統領のスピーチ（打村明日本語訳）」
＜<http://hana.bi/2012/07/mujica-speech-nihongo/>>（2014 年 10 月 10 日アクセス）

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

本単元の学習を始める前は、生徒達はモンゴルについて曖昧な知識しかなく、日本が行う国際援助についてはほとんど知らなかった。しかし、本単元の終盤になると、モンゴルの実態を踏まえて、援助について深く考えることができていた。以下は、本単元の最後に生徒が書いた「この学習を通して学んだこと、考えたこと、感じたこととは？」の回答である。（一部抜粋）

- ・僕たち先進国の生活が基準ではなく、その地に住む人々によって感じ方が異なるので、一人一人の意見を尊重していきたい。
- ・援助は必要以上に行くと、援助される人たちが欲深き人間になってしまうと感じた。
- ・今回の学習はモンゴルの援助が中心であったが、それ以外の国に対する援助はどうしていくべきか議論したい。
- ・必要とされる援助をしなければ人は幸せになれない。援助を受ける現地で、現地の人々が慣れた生活を援助によって崩してしまった場合、それは不必要な援助になることがわかった。

生徒達の中で「援助が必要（と思われる）＝不幸せ」ではなく、援助が押しつけにならず、現地のニーズに合った援助が必要だという意見が多く出てきた。これは、途上国に対するものだけでなく自分自身の現状にも投影しているのではないかと感じた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

生徒達は、援助について多面的に捉えて、「必要な援助」について深く考えてきた。そして、生徒自身の「必要な援助」はどうあるべきかを考え、どのような援助が自分の幸せにつながるのかを考えるきっかけになったと思う。今後、生徒達が進路選択や生き方について迷ったときに本授業実践が少しでも役に立てば、それが成果なのではないかと考える。

○本単元における PDCA サイクル

段階	項目
P 計画	①学習指導計画を作成した。②実施クラスの学習状況や障がいの実態把握をした。 ③高等学校指導要領や学校教育目標、担任の思いをもとに授業のねらいを設定した。 ④学習指導案を作成した。
D 実施	①ねらいに基づいて、モンゴルで得た資料を教材にした。 ②生徒の状況に応じて、授業の時間配分を変えたり、追加の教材を提示した。 ③ワークシートに考えを記入させた。④授業を学校内外に公開した。
C 検証	①ワークシートや授業の発言、テストをもとに評価基準に照らし合わせて評価を行った。 ②管理職や T2、授業を参観した教師から助言を得た。③授業を振り返り自己評価を行った。
A 改善	①検証をもとに新たな教材を作成したり、映像資料の質を高めたりした。 ②生徒が学習状況を把握できるようにするため振り返りカードを新たに作成した。 ③生徒の生育環境、障がいの実態のより一層の把握に努めた。

10 教師海外研修に参加して

今回、本研修に参加した動機は、「肢体不自由がある生徒に世界を体感させたい」と「教員として自分の武器になるものがほしい」であった。前者は、モンゴルで得た様々な教材を提示し、私自身が行った体験談を話し、国際協力の現場で活動する人の様子を見る、そして自分の生き方を考えるなど、有意義な時間を生徒に与えることができたのではないと思う。後者は、今まで教員として自信をもって指導できることが少なかった私に、国際理解教育や ESD の視点での授業づくり等で少しの自信を与えてもらった。そして、本研修で私が獲得したものの中で最も貴重だったのが“人とのつながり”である。モンゴルで出会った人やモンゴルの人たちのために一生懸命働く青年海外協力隊の方々、情熱をもって開発援助を行う JICA 関係者、そして 10 日間の濃密な時間をともに過ごしたモンゴルチームの仲間達、本研修を通して出会ったすべての人から影響を受け、モチベーションをもらい、学ぶことができたこと心から感じている。これからも、この教師海外研修でできたつながりを大切に子ども達への国際理解教育の普及を進め、自分自身も青年海外協力隊などの国際協力にも参加していきたい。



MONGOLIA

学校名：木曾町立開田小学校

氏名：伊藤 須美子

[担当教科：小学校全教科]

● 実践教科等：開田科・生活科

● 時間数：7 時間

● 対象生徒：小学校2年生

● 対象人数：11人

1 単元名

体験してみよう・比べよう・調べよう～モンゴルと開田高原～

「ぼくたち わたしたちの 木曾馬」

2 単元の目標（ESD の能力・態度）

・モンゴルや世界の文化や生活を知ることを通して、異文化への興味・関心を高める。

（つながりを尊重する態度）

・モンゴルの人たちと暮らす「モンゴル馬」と開田高原で古くから共に暮らした「木曾馬」を比較し、その違いと共通点を知る。

・モンゴルの人たちが馬に抱く「誇り」を知り、「木曾馬」に対しても、誇りや愛着を持つ。

（多面的、総合的に考え行動する能力）

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

・日本とモンゴルの文化や生活、価値観の違いに気付く。【多様性】

・日本（開田高原）とモンゴルの共通点に気付く。【相互性】

・モンゴルの人々と馬との生活や考え方から、木曾馬に対して誇りや愛着を持つ。【連携性】

4 単元の指導について

(1)教材観

開田小学校は標高1136mに位置し、全校児童数が80名足らずの小規模・僻地校である。地理的な面から開田高原は他地区より閉鎖的な面があり、都心との交通・経済の格差も大きい。そんな開田高原の児童にとって、「海外」とはとても遠い存在である。だからこそ、「高原・馬・冬の寒さ」など開田高原と共通点が多い、モンゴルという国に触れることを通して、子どもたちにとって遠い存在である「外国」を自分たちと繋がっている世界として感じられるようになって欲しいと考えた。

また開田小学校では、本年度からふるさと・6年間で郷土・開田を学ぶ「開田科」が始まった。2年生では8種しかいない日本原産種である「木曾馬」の学習を行う。開田高原はこの木曾馬の産地として栄えた場所だ。しかし、戦時中に農耕馬の木曾馬ではなく軍用馬の飼育を余儀なくされたことと、機械化が進み馬の必要性が低下したことにより、昭和初期には木曾地方に数千頭いた木曾馬は急激に衰退した。現在では、全国で150頭ほどが残されている。それに比べてモンゴルでは人口が約300万人なのに対し、今も300万頭の馬を飼育している。遊牧民のゲルに訪れてみると、車もバイクもトラックもあった。それでも馬が一家に数十匹いるのだ。その理由を尋ねると「馬は男のプライドだから」という答えが返ってきた。この返答にモンゴルと開田高原の馬の現状の違いを感じた。だが、木曾馬に対しても誇りやプライドを持っていた方はこの開田にもたくさんいたはずだ。モンゴル馬と木曾馬を比較しながら、木曾馬の力強さ、歴史、木曾馬と生活した方の想いに触れながら、自分たちにとっての「木曾馬」を見つけて欲しいと考え、本単元を設定した。

(2)児童生徒観

2年生の児童にとって外国とはとても遠い存在である。知っている国も「アメリカ」「フランス」「イギリス」など先進国だけであり、またその国がどこにあり、どういった文化を有しているかは、知る機会自体が乏しい。掲示板等にモンゴルクイズを掲示したり、モンゴルで購入した教材を置いたりして、まずは外国に興味を持てるように工夫した。

○2年生と「モンゴル」という国との出会い

本学級の児童は、7月の音楽会に向け「スーホの白い馬」を学習しており、このお話を通して、モンゴルという国があること、草原が広がっていること、牛や羊や馬を飼って生活していること、競馬があること、馬頭琴などを知った。今まで海外の作者の物語は多く扱ってきたが、海外の郷土にどっしりと根ざした物語は初めてで、この物語の学習を通して、モンゴルという国に対して関心を高めた。

○2年生と木曽馬

開田小学校から1キロほど離れた所に「木曽馬の里」という、木曽馬の保護センターがあり、30頭ほどの木曽馬が飼育されている。子どもたちは保育園の頃から木曽馬にえさをあげに行ったり、乗馬したりしている。特定の木曽馬に愛称を付けて可愛がっている子もいる。だが、子どもたちにとっても木曽馬はキャラクター的な扱いで「木曽馬の里に行ったら会える動物」という認識で、中には馬と共に生活していた歴史があることや、木曽馬の特性などを知らない児童も多い。大きい動物を怖がり、えさをあげられない児童も数名いる。

(3)指導観

○体験的活動を多く取り入れる。

児童にとって遠い存在の「外国」を扱うため、できるだけ体験活動を多く取り入れ、楽しみながら違いや良さを体験できるようにする。また、体験は少人数グループで行い、楽しさや発見をすぐにつぶやきで共有できるようにする。「服・食・遊び」など、体験の前には、臭い・形・大きさなどから、どんな時に使う服か、どんな味がするのか、どんな遊び方をするのか、など必ず予想を立てる。予想は自分たちの経験から出てくるものなので、予想と結果の違いから、文化や郷土の多様性や驚きを発見できるようにする。

○身近な方にゲストティーチャーとして来て頂く。

木曽馬とモンゴル馬を扱う授業では、子どもたちが木曽馬との暮らしをより身近に感じられるよう、祖父母にゲストティーチャーとして授業に参加して頂く。また、モンゴル馬のことを紹介する際には、ゲルで撮影したインタビュー映像を見せるなどして、具体的に子どもたちに伝えていく。

5 評価規準

観点	生活(開田科)への 関心・意欲・態度	活動や体験についての 思考・表現	身近な環境や 自分についての気付き
評価 規準	・モンゴルの服、食、遊びに関心を持ち、楽しく活動しようとしている。(1～3限) ・木曽馬やモンゴル馬に関心を持ち、進んでインタビューをしたり、両者を比べて違いや共通点を発見したりしようとしている。(4～5限) ・インタビューや木曽馬体験を通して、木曽馬に対して親しみや愛着を持って接しようとしている。(6～7限)	・モンゴルの服、食、遊びに対して、自分なりに予想を立てたり、体験して思ったことを友だちと伝え合ったりする。(1～3限) ・木曽馬とモンゴル馬を比べるなかで、違いや共通点を見つけたり、自分の考えを持ったりして、文や言葉で伝え合っている。(4～5限) ・木曽馬と触れ合う中で、木曽馬の力強さや、穏やかさ、木曽馬と生活する人たちの工夫を知り、自分の言葉や文に表している。(6～7限)	・それぞれの地域に、それぞれの地域に根ざした服、食、遊びがあることに気付いている。(1～3限) ・ゲストティーチャーの方の話を聞いたり、丸山観音へ行ったりする中で、開田の人達が木曽馬と家族のように過ごしていたことに気付いている。(4～5限) ・木曽馬と触れ合う中、木曽馬の力強さや、温かさを感じ、木曽馬がいる開田の良さに気付いている。(6～7限)
評価 方法	発言 行動 ワークシート	ワークシート インタビュー	ワークシート 行動

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7 授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	体験してみよう① 世界の民族衣装	楽しみながら、それぞれの地域に合った服装があることを知る。	モンゴル・インド・ネパールなどの民族衣装を着て写真を撮る。 【民族衣装：JICA 駒ヶ根より借用】
2	体験してみよう② モンゴルの味	スーティツアイやアールールなど、モンゴルの食を体験し、味の特徴を知る。	モンゴルから持ち帰ったスーティツアイやチーズを試食する。最初に形や匂いから味の予想をし、食後に感想を伝え合う。
3	体験してみよう③ モンゴルの遊び	シャガイを使って、モンゴルの遊びを楽しむ。	羊の骨を使ったモンゴルの伝統的なおもちゃシャガイを使って、「占い」「シャガイはじき」「シャガイ積み」をする。
4	比べてみよう① モンゴル馬と木曽馬	木曽馬とモンゴル馬を比べ、同じところや違うところに気づく。	ゲストティーチャーに昔木曽馬と共に生活していた祖父母を招き、木曽馬との生活をインタビューする。教師がモンゴル馬のことも紹介する。
5	調べてみよう① 猿引きの絵馬 【丸山観音】	丸山観音に奉納されている猿引きの絵馬を調べる。 昭和33年に撮影された特集映像を見る。	丸山観音へ行き、ゲストティーチャーの方が教えてくれた魔除けの「猿引きの絵馬」の物語を調べる。
6 7	体験してみよう④ 木曽馬の力 【木曽馬の里】	12人で馬車に乗り、木曽馬の力強さを体感する。 木曽馬と触れ合う。 中川さんにインタビューをする。	12人の体重を足して予想実験を行い、予想を立ててから馬車に乗る。 馬の体重測定やブラッシング、えさやりなど、木曽馬との触れ合いをする。

7 授業事例の紹介

小単元名【 体験してみよう③モンゴルの遊び 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月17日(金)第2限

(イ)実施会場 2年生教室

(ウ)本時の目標 楽しみながら、シャガイを使ったモンゴルの遊びを体験する。

(エ)指導のポイント

・「シャガイ」は何から作られたか予想したり、実際にシャガイを使って遊んだりして、楽しく活動する。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	シャガイを1人1人に渡し、何で作られたかという道具なのかを予想させる。	○シャガイを手に取り、触ったり匂いをかいだりしながら何から作られた、どんな道具かを予想する。 ○予想を伝え合う。	グループ	●子どもたちの様子に応じて、 ①動物の骨であること ②4面それぞれに形の特徴が違うこと ③4つ合わせて使うことなど、ヒントを出す。	○シャガイに関心を持って、予想している。
展開 ① 15分	シャガイ遊びのやり方を紹介する。 【シャガイ占い】	○シャガイを使って、運勢占いをする。	一斉 グループ	●占いの結果表を用意する。(2年生に分かりやすいよう、言葉は若干修正した。)	○シャガイを使った遊びに関心を持ち、楽しく活動しようとしている。
展開 10分	【シャガイはじき】	○シャガイはじき(牛は牛、羊は羊など、その面同士で当てたら、シャガイを取れる遊び)をする。	グループ	●日本の「おはじき」の遊びと似ていることを伝える。	

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	児童と共に、参観者にシャガイを紹介する。	○グループに分かれて、参観者と一緒に「シャガイ占い」を行う。	グループ	●グループごと、参観者にシャガイの紹介をするよう促す。	
展開 30分	インタビューを通して、木曽馬とモンゴル馬の飼われ方の違いを比較する。	○ゲストティーチャーの関原さん、青木さんのお2人に11項目のインタビューをする。 ○木曽馬に対する回答と、モンゴル馬の回答を比較する。	一斉	●木曽馬に対する回答は、予想を出し合っておく。 ●モンゴル馬への回答は、教師が見たり聞いたり調べたりした内容を伝える。	○自分達が見たいことを、自分なりの言葉でインタビューしている。
まとめ 10分	インタビューして分かったことや、比較して分かったことをまとめる。 次時のめあてを持つ。	○モンゴル馬と木曽馬を比べて分かったことをワークシートにまとめる。 ○分かったことや、もっと知りたいことを伝え合う。 ○関原さんが持ってきて下さった「開田の昔話」と「猿引きの絵馬」の話聞く。	個人ワークシート 一斉	●比べる視点が見つけられない子には「毛の色で名前をつける」ことや、「飼っている場所」に注目させる。	○インタビューして分かったことから、木曽馬とモンゴル馬の違いや共通点に気付いている。

(2) 授業の振り返り

段階	項目
P 計画	・ゲストティーチャーにインタビューしながら、木曽馬とモンゴル馬を比べ、違いや共通点を見つける。その中で木曽馬の特徴（木曽馬らしさ）に気付く。(計画) ・木曽馬の身近さに気付けるよう、ゲストティーチャーは子どもにとって身近な祖父母に依頼した。(工夫) ・イメージを持ちやすいように、モンゴル馬の回答は電子黒板で写真を見せる。(工夫)
D 実施	・モンゴルで体験したり見たり聞いたりしたことを生かし、上記指導案の通り授業を行った。
C 検証	・児童は木曽馬の回答を知った後は「モンゴル馬ではどうなのか」と、モンゴル馬を意識しながら活動を進めていた。(成果) ・参観していた保護者からも「知らなかったことが知れて大人も楽しかった」「モンゴルの方が馬を大事にしていることを知ると、私も木曽馬が恋しくなった」と感想を頂いた。(成果) ・活動が授業時間内に終了しなかった。また似ている質問項目があり、回答比較に混乱が見られた。(課題)
A 改善	・ゲストティーチャーの方と打ち合わせを綿密に行い、それぞれの馬の特性を比較できる質問を5問ほどに精選し、焦点化して比較ができるようにする。(改善点) ・回答に対して、さらに質問する時間を設ける。(改善点)

(3) 使用教材

・木曽馬とモンゴル馬 比較ワークシート

木曽馬とモンゴル馬

項目	木曽馬	モンゴル馬
1. 大きさ		
2. 毛色		
3. 飼われ方		
4. 使われる場所		
5. 飼育者の気持ち		
6. 馬の気持ち		
7. 馬の力		
8. 馬の音		
9. 馬の匂い		
10. 馬の姿		
11. 馬の鳴き声		
12. 馬の動き		
13. 馬の寝姿		
14. 馬の食餌		
15. 馬の排泄物		
16. 馬の病気		
17. 馬の死		
18. 馬の生		
19. 馬の心		
20. 馬の魂		

・モンゴル馬の紹介スライド(抜粋)



【仕事：人や物を運ぶ】【子馬をゲルの近くに繋いでおく】



【馬は5頭～50頭飼う】 【つむじ、毛の色で馬を見分ける】 【多様な毛色をしている】

(4) 参考資料等

『子馬の一日』 撮影・文 大久保 緑 (株)ヤマチ印刷所 2012 年

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

○モンゴルや諸外国に対する反応・理解

子どもたちは授業を通してモンゴルという国に興味関心を高めていた。図書室でモンゴルが載っている本を探したり、新聞にモンゴルのことが載っていると、「モンゴルのことが載っていたよ。」と伝え合ったりしている。また、本校の ALT の先生はカナダ出身だが、「カナダはどんな国なの?」「何を食べるの?」と、聞いている子もいた。2 年生の児童にとって、「日本以外の国」を意識しながら生活していることが大きな変化だと感じた。

○木曾馬に対して

ゲストティーチャーへのインタビューをきっかけに、木曾馬の馬車に全員で乗ったり、体験ブラッシングをしたり、えさをやったりとたくさん木曾馬との触れ合いを行った。触れ合えば触れ合うほど、木曾馬との距離は近くなり、はじめはえさをあげられなかった児童が木曾馬のお腹に耳を当てて「ぽこぽこって音がしているよ」と発見したり、30頭いる木曾馬の名前をほとんど覚え見分けられる子が出てきたりと、木曾馬への愛着を深めたり、身近なところに木曾馬がいることの良さに気付くことができた。



モンゴル馬のこと
(教師の体験・本などの情報)

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

〈成果〉

図書室で外国の本を手にとって民族衣装のページを見たり、ニュースで見た外国のことを伝え合ったりする姿が見えるようになった。本単元の授業を通して、生活の一部に諸外国を意識して生活するきっかけを持てたことが大きな成果であると感じた。

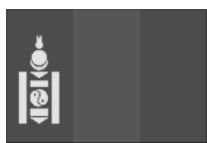
また木曽馬という、郷土に根ざしていながら生活の中での関わりが減ってしまった動物を、今も人と共に暮らすモンゴル馬と比較することで、木曽馬への感謝や、木曽馬の力強さ、木曽馬がいる開田の良さを発見することができた。

〈改善策と継続〉

今回は時数の関係上、モンゴルの文化的側面にしか焦点を当てることができなかった。次年度も継続的に国際理解教育を行い、日本がしている支援やモンゴルで活躍している青年海外協力隊の活動、モンゴルが抱えるゴミやインフラなどの諸問題、などを題材に多方面から授業を行いたい。

10 教師海外研修に参加して

この研修は、私にとってかけがえのないものとなった。何よりも刺激を受けたのは、一緒に研修を行った仲間だった。12人で10日間を過ごしたが、10日間あれば、日本との違い、驚き、感動、時にはハプニングに遭遇する。同じ事象に遭遇しながら、感じ方や発見は12人それぞれに違う。その思いを12人で共有するだけで、同じことでも受け取り方や、授業での生かし方がこんなにも違うものかと驚かされた。きっと行く先の国はモンゴルでなくてもどこでもいいのだと思う。まずは比べる、体験する、発見する、考える。どんなことに対しても課題を見つけ、自分なりのアプローチを見つけ、掘り進めていくことの大切さに気付かされた、10日間であった。



MONGOLIA

学校名:長野県上田高等学校

氏名: 小木曾 一希

[担当教科:英語・情報]

● 実践教科等: 情報(2単位)

● 時間数 : 2時間

● 対象生徒 : 高校2年生

● 対象人数 : 320人

1 単元名

「援助」する前に考えよう

2 単元の目標 (ESD の能力・態度)

- ・グローバル化の進む社会の一員として、国境を越えたキャリア観や生徒たち自身と世界とのつながりの深さを認識できるようになる。(つながりを尊重する態度)
- ・他者との話し合いを円滑に行い、意見をまとめられるようになる。(コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度)
- ・「援助」というものは多面的な分析を通して、互いの価値観に配慮しつつ、計画性を持って実施しなければならないことを理解する。(未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力)
- ・国際協力ということに対して、生徒たち自身がその存在意義について答えを出し、これから先、そのリーダーシップをとり、活動していくことのできる素養を養う。(批判的に考える力、進んで参加する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・モンゴルと日本の文化や国民性の違いに気づく。【多様性】
- ・発展途上国の教育環境と日本の教育環境の違いに気づく。【多様性】
- ・話し合いを行う中で、他者との価値観、意見の違いに気づく。【多様性】
- ・ワークショップを通して、社会と教育が相互に関連し、影響していることに気づく。【相互性】
- ・国際協力における相互扶助の関係に気づく。【連携性】
- ・話し合いや活動を行う上で、他者と協調することで、よりよい実践ができることに気づく。【連携性】
- ・ワークショップ内で援助計画を立てることで、未来に対する責任を持った、持続可能性に配慮のある計画性を持つ必要性に気づく。【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

- ・【学校教育目標との関連】本校(平成25年度 SGH アソシエイト校指定)の教育目標の1つとして、「グローバルリーダーの育成」がある。それは、現代社会に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できる人材の育成である。本校では、この教育目標の実現に向け、今年度より、ますます多くの国際的な経験の場を生徒に提供し、自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒を育成することに努めている。このように、国際的な経験の場を増やし、グローバルな視点を養っていく中で、生徒の自主性をより重視するためには、生徒自身が世界との関わり方や他者との協調、他者への援助について、自分自身で導き出した答えを持つことが重要であると考え。本単元は、生徒に、これからの国際的な活動の礎となる「国際化社会の一員である自覚」を持ってもらい、「国際協力の意義」について自身らが自らで答えを導き出すことをねらいとする。国際理解教育を授業という枠組みで扱うのは、本単元が初めてであるので、その導入的役割を果たす位置づけである。
- ・【教科:情報の教育目標との関連】高等学校の学習指導要領が定める教科情報の目標には、「情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行う能力を養い、情報社会に積極的に参画する態度を育てる」とある。本校では、上記の学校教育目標の実現に向け、情報の授業を以下のような体制で行っている。前期(4月~10月)では、2単位(週2時間)の情報の授業を、情報機器や情報通信ネットワークの活用を扱う1単位(週1

時間)と、効果的にコミュニケーションを行う能力(国際的な場でのプレゼンテーションを想定)を扱う1単位(週1時間)で行い、後期では、前期で得た知識を使って、生徒それぞれが設定した課題について探究し、その成果を英語でプレゼンテーションする(図1参照)。本単元は、前期の情報の授業で、特に、効果的にコミュニケーションを行う能力を扱う1単位(週1時間)で実施される。ワークショップでの話し合いを通して、問題に対して自分自身の意見を持つこと、自分の意見を発表すること、他者の意見を聴くこと、他者との話し合いでよりよい問題解決を考えること、を経験し、効果的なコミュニケーションについて理解を深めることがねらいである。

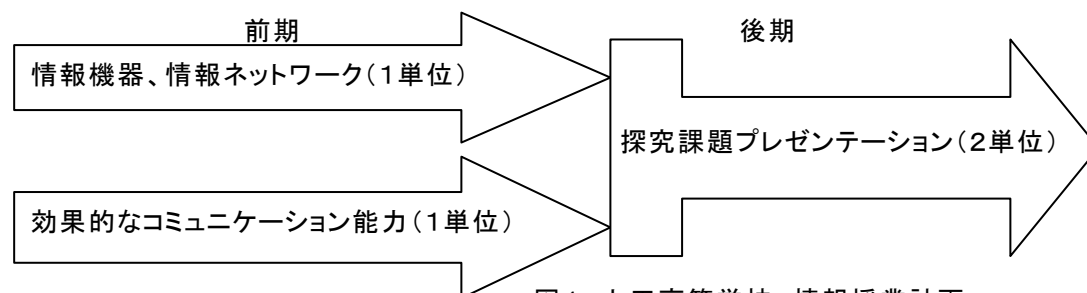


図1 上田高等学校 情報授業計画

(2)児童生徒観

- ・知識に富み、意欲に溢れている生徒が多く、将来的には、国際的なフィールドでリーダーとして活躍することが期待される。しかし、受動的に知識を得ることはできるが、自ら積極的に意見を考えたり、発表したりすることは苦手とする生徒もいる。
- ・国際的な視野や興味を持つ生徒も多いが、表面上の知識にとどまっている傾向にあり、具体的な世界とのつながり方や世界の現状を知る機会は少ない。
- ・対象学年320名の中に、本年度の夏季休業中に、海外研修として、フィリピンで発展途上国の現状を学んできた生徒たちがいる(約20名)。発展途上国の現状を実際に見て、問題意識を高め、さらに意欲的に国際的な活動に取り組んできている。

(3)指導観

- ・本単元は、ワークショップでの話し合いを中心に行うが、自ら意見を考え、発表することを苦手とする生徒もいるので、意見発表までのプロセスを明確な指示を与え、細かく段階を設定したり、発表の規模を徐々に広げたりするなどして、活動に参加しやすくする。
- ・本単元で行うワークショップでは、実際に国際的な支援を行う立場になったと想定し、その意義や問題点、計画性について話し合いを行っていく。この活動を通して、生徒の国際的な視野や興味を、実際の活動へとつながるようにする。
- ・海外経験を積み、国際的な活動に対する知識を得て、その活動への意識を高めている生徒がいるので、本単元の活動においても、先導的な役割を果たし、他の生徒への良い刺激となって、全体の意識向上へとつながることを期待する。

5 評価基準

観点	効果的にコミュニケーションを行う能力	主体的に意見を考え、発表する意欲・態度	他者と協力する意欲・態度	国際協力に関する知識・理解
評価規準	話し合いの際に、相手に自分の意見が伝わるように話すことができる。また、他者の意見を理解し、話し合いを建設的に進めることができる。	自らの意見を言葉にでき、グループ内、または、クラス内で発表することができる。	積極的に話し合いに参加し、自らの意見と他者の意見を考慮して、問題解決に臨むことができる。	国際協力として、援助を行う際に、注意すべき価値観の違いや持続可能な計画性について知り、実際に計画を立てることができる。
評価方法	ワークシート 話し合いの様子 意見発表	ワークシート 話し合いの様子 意見発表	ワークシート 話し合いの様子	ワークシート 話し合いの様子 意見発表

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	①国際協力の現場を知る。 ②ワークショップ「バーン村にて」	・国際化社会におけるキャリア観に触れる。 ・国際協力の実態を知る。 ・「持続可能(な援助)」という言葉の導入。 ・国際援助の活動を行う際の問題点や注意点について理解する。 ・話し合いを通して、他者との協働、効果的なコミュニケーション能力について学ぶ。	【ビデオ教材「隊員たちの声」視聴】 青年海外協力隊隊員のインタビュービデオ 1.吉田量子隊員(幼児教育) 2.池田佳史隊員(バスケットボール) 制作:教師海外研修モンゴルコースチーム ・国際協力の現場で実際に働く青年海外協力隊隊員のキャリア観や援助活動を通しての苦労や喜びを知る。 【ワークショップ「一枚の看板」】 『「援助」する前に考えよう-参加型学習とPLAがわかる本-』(開発教育協会)より ・「寄付」という国際援助を取り上げ、その運用の注意点や改善策をグループに分かれて話し合う。
2	①ワークショップ「再びバーン村へ」	・援助における重要な要素である「持続可能性」についての理解を深める。 ・他者の立場に立ち、異文化や異なる価値観を受容する態度を養う。	【ワークショップ「再びバーン村へ」】 『「援助」する前に考えよう-参加型学習とPLAがわかる本-』(開発教育協会)より ・国際援助の計画を、援助側、被援助側、コーディネーターなどのロールプレイで練っていく。

7 授業事例の紹介

小単元名【 ①国際協力の現場を知る ②ワークショップ「バーン村にて」 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 平成26年8月22日(金)第6限(14:50~15:45)

(イ)実施会場 131教室

(ウ)本時の目標

- ・青年海外協力隊隊員のインタビュービデオを見ることで、国際協力に携わる人のキャリア観、国際協力活動を行う上での苦労や喜び、異文化について知る。
- ・ワークショップ「バーン村にて」を通して、国際援助を行う際の問題点や注意点を生徒たち自身で見つけ出し、共有する。
- ・ワークショップ「バーン村にて」を通して、答えの決まっていない問いに対して、主体的に考え、自分の意見を発表できるようになる。
- ・ワークショップ「バーン村にて」を通して、他者との話し合いを行い、集団内で意見をまとめ、よりよい問題解決を提案できるようになる。
- ・本授業を通して、国際社会を生きる一員として、自分と世界の関わり方や国際協力の必要性、国際協力の意義について、生徒一人ひとりがそれぞれの答えを手に入れる。

(エ)指導のポイント

- ・国際理解や国際協力について授業で扱うことは初めてであるので、実際に国際協力の現場で働く青年海外協力隊隊員のインタビュービデオを見せることで、生徒たちの興味、関心を引き、円滑な導入を目指す。
- ・青年海外協力隊隊員のインタビュービデオの中で、「今の支援活動は持続可能だと思いますか。」や「現地のニーズと合っていると思いますか。」という質問がある。これらは、以後のワークショップ内で生徒たちが考えるべき観点と結びついており、ビデオ教材とワークショップが関連性を持っている。
- ・教員はできる限り、自分の意見や価値観を述べることは避け、ファシリテーターとしての役割に徹する。これにより、生徒の自由な発想を促し、意見を考えやすく、また、発表しやすくする。(実際は、最終的なフィードバックにて、ロールモデルという観点から、自らの意見や価値観も提示した。)

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 20分	ワークシートを配付		ビデオ	機材を準備しておく。	
	【インタビュービデオ】 「隊員たちの声」①吉田量子隊員(幼児教育)を流す。	メモをとりながら、インタビュービデオを見る。		青年海外協力隊の概要や吉田隊員の紹介を簡単に行い、ビデオ教材の理解を促す。	ワークシート
	【インタビュービデオ】 「隊員たちの声」①池田佳史隊員(バスケットボール指導)を流す。	メモをとりながら、インタビュービデオを見る。	ビデオ	池田隊員の紹介を簡単に行い、ビデオ教材の理解を促す。	ワークシート
展開 30分	【ワークショップ】 「バーン村にて」 ・グループワークの指示を出す。 ・場面の説明とQ1の問いかけを行う。 Q1「いくら寄付するか。」 ・話し合いの指示を出す。 ・グループごとに指名し、意見を発表させる。	・4人組になり、グループで机を合わせ、話し合える形式をとる。 ・場面の説明を聞き、Q1に対する自分の意見をまとめる。 ・グループで意見交換をし、発表者を決める。 ・グループごとに意見を発表し、クラス全体で共有する。	グループ 発表	・個人の意見はワークシートへ記録させる。 ・グループ内や他グループの意見もワークシートに記入させる。 ・発表された意見は、黒板に板書でまとめ、共有を促す。	ワークシート ワークシート 意見発表
	【ワークショップ】 「バーン村にて」 ・Q2の問いかけを行う。 Q2「その援助活動に賛成か反対か。」 ・話し合いの指示を出す。 ・グループごとに指名し、意見を発表させる。	・Q2に対する自分の意見をまとめる。 ・グループで意見交換をし、発表者を決める。 ・グループごとに意見を発表し、クラス全体で共有する。	グループ 発表	・個人の意見はワークシートへ記録させる。 ・グループ内や他グループの意見もワークシートに記入させる。 ・発表された意見は、黒板に板書でまとめ、共有を促す。	ワークシート ワークシート 意見発表
	【ワークショップ】 「バーン村にて」 ・Q3の問いかけを行う。 Q3「その援助活動の改善点は何。」 ・話し合いの指示を出す。 ・グループごとに指名し、意見を発表させる。	・Q3に対する自分の意見をまとめる。 ・グループで意見交換をし、発表者を決める。 ・グループごとに意見を発表し、クラス全体で共有する。	グループ 発表	・個人の意見はワークシートへ記録させる。 ・グループ内や他グループの意見もワークシートに記入させる。 ・発表された意見は、黒板に板書でまとめ、共有を促す。	ワークシート ワークシート 意見発表
まとめ 5分	【フィードバック】 ・本時のキーワードを考えさせて、感想とともに記入させる。	・本時のキーワードと感想を記入する。	ワークシート	・キーワードは端的にまとめさせ、印象に残るようにする。	ワークシート

(2)授業の振り返り

【国際協力の現場を知る】

段階		項目
P	計画	・生徒の国際理解や国際協力への興味、関心をかき立てる。(ねらい) ・グローバルなキャリア観や国際協力の現場について知る。(ねらい) ・「気づき」をワークシートに記入させることで、考えの内在化を図る。(工夫)
D	実施	・生徒たちに聴かせたい内容を項目立てして、青年海外協力隊隊員にインタビューをし、教材として編集した。(準備) ・国際協力と青年海外協力隊について、その概要を簡単に説明した。(授業) ・青年海外協力隊隊員のインタビュービデオを見せ、ワークシートへ「気づき」の記入を指示した。(授業) ・生徒に授業の振り返りを行わせた。(授業)
C	検証	・多くの生徒が国際協力を身近に感じるとともに、一部の生徒が主体的に活動始める意欲を持つようになった。(学習成果) ・多くの生徒が言語学習の大切さを再認識した。(学習成果) ・インタビュービデオを視聴する前に、取り上げられている青年海外協力隊隊員についての説明が不十分であった。(問題点)
A	改善	・インタビュービデオを視聴する際の事前情報として、登場する青年海外協力隊隊員の基礎情報、活動内容などは、ワークシートに記載しておく。(改善点)

【ワークショップ「バーン村にて」】

段階		項目
P	計画	・主体的に考え、自分の意見を発表する機会を与える。(ねらい) ・他者と話し合いを行い、集団内で意見をまとめる経験をさせる。(ねらい) ・国際協力の必要性やその意義について考えるきっかけを与える。(ねらい) ・活動を細かく段階分けし、明確な指示を与えることで、活動を円滑に進め、ねらいの達成を試みる。(工夫)
D	実施	・国際協力における問題点や注意点を見出せる、参加型学習教材を用いる。(準備) ・寄付という援助活動をテーマに、その活動の意義や注意点、改善点について、グループを構成し話し合いを行った。(授業) ・生徒に授業の振り返りを行わせた。(授業)
C	検証	・身近で、何気なく行っていた寄付や募金といった活動のもつ、問題点や注意点に気づき、その運用の難しさに気付いた。(学習成果) ・多様な価値観に触れ、それらを受容する態度が見られた。(学習成果) ・活動が授業時間内に終了しなかった。(問題点)
A	改善	・さらに10分の時間をこの活動に配分する。(改善点)

【単元全体を通して】

段階		項目
P	計画	・2つの教材(小単元)が相互に作用し、生徒の国際理解や国際協力に対する興味、関心、意欲を高める。(ねらい)
D	実施	・国際協力活動に焦点を当て、身近な題材で取り組める教材を使用する。(準備) ・インタビュービデオ内で、「持続可能性」という言葉を意識的に用いる。(準備) ・ワークショップ内で、「持続可能性」を検証するように指示を出した。(授業) ・生徒に授業の振り返りを行わせた。(授業)
C	検証	・ほとんどの生徒が、「持続可能性」が重要であることを認識した。(学習成果) ・ほとんどの生徒が、国際協力の必要性や意義を見出した。(学習成果) ・ワークショップのタイという設定が適切であったかを検討する。(検討課題) ・活動が授業時間内に終了しなかった。(問題点)
A	改善	・インタビュービデオの視聴を一つに削減し、ワークショップにさらに10分の時間を配分する。(改善点)

(3) 使用教材

①ビデオ教材「隊員たちの声」

教師海外研修モンゴルコースチームが、モンゴル派遣中に青年海外協力隊隊員にインタビューを行い、帰国後、教材として編集した。

1. 吉田量子隊員（幼児教育）
2. 池田佳史隊員（バスケットボール指導）

②ワークショップ「バーン村にて」

教師海外研修の事前研修にて行われた「一枚の看板」（『「援助」する前に考えよう』ワークショップ）の資料を、一部授業に合わせて変更を加えた。

配付した教材は、ワークシート（右図参照）と振り返りシートである。

(4) 参考資料等

『「援助」する前に考えよう-参加型開発とPLAがわかる本-』田中治彦、開発教育協会、2006年

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

生徒の感想より

- ・今回、グループでいろいろと話し合ってみて、本当に何が必要なのか、結論を出すのが難しいと思った。それでも、物資の支援ではなく、技術の支援を行えば、村がより良く、持続可能になっていくのではないかと思った。
- ・支援をするというのは、やはり簡単なことばかりではないと思いました。他国を支援する時には、気をつけることがたくさんあることを知ったので、これから活かしていきたいです。
- ・必要なものと支援できるものを互いに伝え合うのが、思ったより難しかった。みんなで話し合っ、考えを伝え合うのは、支援をするには必ず必要であると思った。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

各活動については、7(2)を参照。

【生徒の変容】

国際理解や国際協力に興味、関心を持つようになった生徒が多かった。加えて、「私には、今、何ができるか」ということを自らに問いかける生徒もあり、国際的な活動への意欲が湧いていることが確認できた。話し合いを通して、多様な価値観に触れ、それを受容する態度も培われた。

【課題と改善点】

- ・ワークショップの話し合いの時間配分は、不足傾向にあった。あまり長い時間を与えても、話し合いの効率を下げることになるので、事前にシミュレーションを行い、かつ、余裕のある時間配分を心掛ける。
- ・ワークショップ「バーン村にて」と「再びバーン村へ」を生徒の実態や他教材との関連性という観点で、作り直す必要がある。具体的に言えば、ビデオ教材がモンゴルをフィールドにしているので、ワークショップもモンゴルをフィールドにして作り変える。ワークショップの場面やロールプレイの状況がイメージしやすいように、詳細な情報を組み込む。（教師海外研修で得た情報や資料を参考とする。）

10 教師海外研修に参加して

国際協力について、その意義を明確化できた研修であった。研修に行く前は、国際協力は必要であると感じながら、生徒にその意義を伝える手段や言葉が思いつかずいた。しかし、今回の研修を通して、その意義を見出しつつ、国際協力や異文化理解について、いまだ悩んでいる青年海外協力隊隊員や教員がいることも知った。生徒たちにとっては、問題発見をし、自分たち自身で考え、悩み、答えを見つけ出ししていく機会を持つことが必要であるとわかった。

最後に、この研修で得られたかけがえのない繋がり、そして、それを与えてくれた関連機関、担当者、に深く感謝を表したい。

後期での課題研究・発表に可すて

世界の現状について考える — 「他国への支援」の観点から考えてみよう

1) JICA隊員へのインタビュー「隊員たちの声」から学ぶ

1人目:さん

活動内容や考えていることなど/印象に残ったことばなど

2人目:さん

活動内容や考えていることなど/印象に残ったことばなど

2) グループでのワークショップ — 「他国への支援」について考える

☆ワークショップの前提

あなたはタイのある村を旅行で訪れています。
そして村の道で下のような看板を見つけました。

↓タイ周辺の地図



お願い

この村の小学校では、教材費が不足しています。旅行者の方の10ドルの寄付をお願いします。

アイ子



MONGOLIA

学校名：学校法人上田学園 上田西高等学校

氏名：正村 真一

[担当教科：地歴公民]

- 実践教科等：地理B
- 時間数：7時間
- 対象生徒：高校3年生
- 対象人数：38人

1 単元名

モンゴル理解・日本の国際協力の在り方

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

- ①モンゴルを通して異文化を理解しようとする態度を育てる(多面的総合的に考える力)。
- ②日本の協力・支援を切に必要としている人がモンゴル(開発途上国)にいて、開発途上国からの支援要請を受けて日本が人の手を介した支援を実施していることから、日本が世界の人々と協力していく大切さ・支援の在り方を考えてもらいたい(他者と協力する態度)。
- ③JICAが今まで実施してきた国際貢献を知り、開発途上国で日本と途上国のために汗流し活躍している日本人がいることを理解する(他者と協力する態度)。
- ④相互扶助・国際貢献を考えることで、自らの高校卒業後の将来設計に対して多面的に視野を広げたい。夢を持ち、自ら行動することの価値に思いを巡らせたい(未来像を予測して計画を立てる力)。

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・日本の文化との比較を通して、モンゴルの自然・文化・社会を地理・歴史的観点から考察し、その違いに気づく。【多様性】
- ・モンゴルと日本との様々なつながりから、グローバル社会全体における相互性に気付く。【相互性】
- ・モンゴルと日本の物的・人的なつながりについて知り、互いに協力し合う大切さに気付く【連携性】
- ・東日本大震災を通して日本が今まで行ってきた支援の重要性に気づき、相互扶助について考え、将来の日本の国際社会で果たす役割について考えることができる【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

今後ますます国際化・多様化する社会の中では、「国際協力」「異文化理解」「共生」「持続可能な社会」は大切なキーワードになっている。お互いの違いを尊重しながら共に生きる心と、自ら考え、判断し、主体的に生きる力をはぐくむことが必要である。そのためには、知識習得を中心とした学習だけでなく、参加型学習により、自ら判断し行動していく授業の展開が求められる。そこで、フットラングージ・バーン村の実践を展開し、生徒の協調性・能動的な発言力を養うことができる。そして、生徒が身近な視点でとらえることができるように「目に見える形」を心掛けた。教師自身のモンゴル体験談、東日本大震災時の被援助国としての日本、生きた教材、青年海外協力隊員の生活を設定し、私たち自身と深い関わりにつづかせ様々な視点から考察させる。

(2)児童生徒観

国際教育は学校教育の柱の一つであり、修学旅行も海外、そして短期・長期の留学、国際交流も広く実施されており、外国文化に触れる機会が多い。しかし、開発教育という視点で、学校全体として、体系的、計画的に設定していないため、生徒の国際理解を深めることが十分にはできていない。担当のクラスは高校3年であり、クラスの6割の生徒は大学進学、3割が専門学校進学、1割の生徒が就職を希望し、おおかた進路が決定している生徒が多いが、「大学に進学するけどやりたいことがない。」と将来に対し不安を抱いている生徒も少なからずいる。国際協力に関心が高く、意欲的に発言する生徒もいる一方で、話し合いや発表において論理的に思考し、さらに考察した過程や結果を、根拠を示しながら表現すること、因果関係を推測すること、課題を多面的に考察することが苦手な生徒が多い。

(3)指導観

【全体より】

- ・国際社会に生きる一員として、多様な視点から物事を考察し、高校生である自分たちにできることは何か、また変容、将来像を予測し、より良い解決策は何が可能かを主体的に考える機会を設定した。
- ・現場で汗を流している隊員の生き方を示すことで、高校3年生の今、自分の将来設計キャリアの一助となる「美しい生き方」に焦点をあて生徒の自身の将来像に活かすことに留意した。
- ・モンゴルを通じた参加型学習を展開し、「国際協力」「異文化理解」「共生」「持続可能な開発」「相互扶助」のキーワードを念頭におき指導にあたる。
- ・社会のグローバル化が進み、世界が近くなったと言われる昨今、国際社会に生きていく生徒たちにとって、広く世界に目を向け、外国や外国の人々に関心を持ち、異文化理解・自国文化理解を進め、お互いに認め合い、尊重し、協力、共生する態度や能力を育てていきたい。

【地理的視点から】

- ・こうした学習は、地理Bの目標である「現代世界の地理的事象を系統地理的に、現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」方向性とも合致する。
- ・モンゴルにおける遊牧民の生活が、なぜそこでそのようにみられるのか、また、なぜそのように分布したり移り変わったりするのか、秩序などを成り立たせている背景や要因を、環境条件や他地域との結び付きなどと諸地域を比較しながら、人間の営みとのかかわりに着目して追究したい。

5 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考力・判断力・表現力	技能	知識・理解
評価規準	異文化へ意欲関心を示し、授業の学習内容や追究過程を応用させながら臨んでいる。	現代社会の相互扶助とはいったい何なのか、なぜ支援は必要なのか、を追究することができる。	追究過程において、各資料から検証に必要な社会的事象を読み取ることができる。	思考・判断の追究過程を説明することができる。「国際協力」「援助」「相互扶助」などの語を用いることができる。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 感想・アンケート

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	【写真から学ぶ、日本とモンゴルの共通点・相違点】	・自分と他者とのモノの見方や価値観の違いを知る。 ・モンゴルと日本の共通点や相違点について考える	・フォトランゲージ(模造紙に教師が選んだモンゴルを象徴する代表的な写真を張り付け、班ごとに自由に気づいたことを書き込む)を実施し、その後、写真のタイトルを設定し、班ごとに全体で発表をする。
2	【ワークショップで考える支援のあり方】	・援助は「ものやお金を贈る」ことでよいのか、「必要な援助とは何なのか？」国際協力について考える。 ・援助が現地に与える影響、してはいけない援助について考える。 ・現地の人々の意見を聞くことの必要性に気づく。 ・自分たちができることは何かを考える。	・『「援助」する前に考えよう-参加型学習とPLAがわかる本-』(開発教育協会)のワークショップのワーク1「1枚の看板」を実施し、寄付をするのかしないのか、寄付するとしたらいくらするのかとその理由を班の中で交換し合い、班ごとにまとめ、全体で発表し合う。 ・ワークシートに「気づき」を記入する。

3	【モンゴるんるんクイズ①問題編】	・モンゴルについての理解を深める。	・教師のモンゴル経験に基づいた、モンゴルを理解するための「モンゴるんるんクイズ」を実施する。 ＜問題の構成＞（全 63 問） ・自然環境 ・経済（モンゴル人年収・物価・貿易品目） ・モンゴル人、文化、生活（衣食住） ・モンゴル語 ・モンゴルの学校の様子 ・JICA 青年海外協力隊員の活動 ・教師海外研修参加教員 ・モンゴルと日本の関係
4・5	【モンゴるんるんクイズ②回答編】 （30 分） 【震災から考える相互扶助】 （30 分） 【現場で活動する青年海外協力隊員】 （30 分）	前時「モンゴるんるんクイズ①問題編」と同じ ・被災国としての日本の姿と、日本がこれまでに実施してきた国際貢献について知り、相互扶助について考える ・ODA の概要、JICA の活動を理解する。 ・現場のニーズについて理解する。	・前時に実施したクイズの答え合わせを行う。 ・東日本大震災時における救助活動、教師が実施したボランティア活動と各国からの支援について知り、「相互扶助」について考える。 ・ODA・JICA の概要について知る。 ・モンゴルで活動している青年海外協力隊員について知る。
6	【青年海外協力隊による出前講座】 講師：JICA 群馬デスク矢部哲也氏 （元青年海外協力隊ガボン派遣）	・人の手を介した温かい「生」の援助について理解する。 ・今後の自分の将来設計につなげて考え活かす。 ・夢を持ち、自ら積極的に行動することの大切さに気づく。	・青年海外協力隊員として、アフリカのガボンで 2 年間活動した矢部元隊員を招き、JICA の事業と青年海外協力隊としてのガボンでのボランティア活動について知る。 ・Q & A の実施（事前に矢部元隊員への質問を生徒に考えさせ、回答を準備していただいた）
7	【今自分ができていることを考えよう】	・身近な同じ高校生の「国際協力」における意見を読むことで、今の自分にフィードバックし、自分自身が今できること、そしてこれからやりたいことについて多面的に考える。	・「JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」において 2013 年度最優秀賞を受賞した、現在上田高校在学の青木至人君の作文を紹介し、「今の自分にできる国際協力」についてワークシートにおいて意見を記入する。

7 授業事例の紹介

小单元名【震災から考える相互扶助と、現場で活躍する青年海外協力隊】

（1）指導案

（ア）実施日時 11月11日（火）第2・3限（9:00～10:30）

※通常の授業時間を変更して 90 分間の連続した授業を実施した

（イ）実施会場 学習室2教室

（ウ）本時の目標

- ①モンゴルを通して異文化を理解しようとする態度を育てる。
- ②日本の協力・支援を切に必要としている人がモンゴル（開発途上国）にいて、開発途上国からの支援要請を受けて日本が人の手を介した支援を実施していることから、日本が世界の人々と協力していく大切さ・支援の在り方を考えてもらいたい。
- ③JICA が今まで実施してきた国際貢献を知り、開発途上国で日本と途上国のために汗水流し活躍している日本人がいることを理解する。
- ④相互扶助・国際貢献を考えることで、自らの高校卒業後の将来設計に対して多面的に視野を広げたい。夢を持ち、自ら行動することの価値に思いを巡らせたい。

（エ）指導のポイント

- ・モンゴルにおいて撮影してきた写真・動画、購入した多くのモンゴルグッズを利用し、視覚的に生徒の興味関心が引き出せるように提示する。
- ・東日本大震災の時の被援助国としての日本を紹介し、今まで日本が実施してきた国際貢献の大切さを「見える形」で提示し考えさせる。
- ・実際に活動した隊員の生の姿を伝えることで今後の自分のキャリアを考えることにつなげる。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 30分	<ステップⅠ(導入)> 実際のモンゴルグッズ(民族衣装や飲物)を用いて、五感で異文化を理解させる。				
展開 ① 30分	・前時に実施した「モンゴるんんクイズ」の答え合わせを行う。	・スライドを見ながら、前時に記入した回答用紙の答え合わせを各自で行う。	PP	・意欲を引き出すために4択の解答を生徒の実情に合わせて工夫したり、賞品(モンゴルグッズ)を準備する。	・学習活動の観察(姿勢・発言・参加意欲・態度)
	<ステップⅡ>(展開①) 日本が当時世界一の被援助国であったこと、援助をしてくれた国の多くは、今まで日本が援助活動を実施していた国が多いことに気づき、「相互扶助」について考えさせる。				
展開 ② 30分	・動画を流す	・東日本大震災時の、警察、消防、自衛隊による救助活動の様子について知る。	動画	・動画・スライドショーが続くので、質問を投げかけながらメリハリをつける。	・学習活動の観察(姿勢・発言・参加意欲・態度)
	・教師の体験談を話す ・ワークシートの配布と解説	・教師自身の石巻でのボランティア活動体験談を聴く。 ・震災時の各国からの支援について、空欄補充式のワークシートを使って知る。	スライド ショー ワークシート	・東日本大震災の甚大さにだけ気持ちが向かないように配慮する。 ・「相互扶助」のキーワードをおさえる。	・ワークシートの記述内容
まとめ	<ステップⅢ>(展開②) 日本の国際協力と、その一例として、青年海外協力隊が現場のニーズに基づいた活動を実施していることを理解させる。				
	・ワークシートの配布と解説	・ODAとJICAの概要について、空欄補充式のワークシートを使って知る。	シート		・ワークシートの記述内容
	・動画を流す	・モンゴルで活動している青年海外協力隊員の池田隊員ムービー・池田隊員にバスケット指導を受けている女子高生の動画を視聴する。	動画	・隊員(援助をする側)と、指導を受けている生徒(援助を受ける側)の両方の立場の声を伝え、2時限目において考えた援助のあり方(現場のニーズを聞く大切さ)と重ねて考えさせる。	
	・次時の説明	・次時の講師(元青年海外協力隊 矢部氏)を紹介する。			

(2) 授業の振り返り

「目に見える形」を意識して授業実践を行った。クイズにおいては、選択肢の写真を厳選し、スーター・タイ・デールなどのモンゴルグッズを利用し視覚に訴えた。「相互扶助」においては、先進国である日本が開発途上国に向けて援助を行うベクトルを考えてしまいがちであるが、東日本大震災時、世界一の日本は被援助国であり、手を差し伸べてくれた国の多くは日本が今まで援助をしてきた国である「目に見える形」での援助。授業後にJICA隊員の生の奮戦記の講演を聞くことで、「目に見える形」で国際協力を考え、さらには自分の今後のキャリアへつなげる「生き方」を深めることができた。

(3) 使用教材

- ・「モンゴるんんクイズ」スライド(抜粋資料)



・「日本は世界一の被援助国」ワークシート(空欄補充)

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災

(東北地方太平洋沖地震およびこれに伴う原子力発電所事故による災害)

外国からの日本への支援…(174)カ国 (43)の国際機関

阪神・淡路大震災の際に倍以上の支援国数

2011 年⇒日本は世界最大の(被援助)国!!!

金銭的支援は、174 ケ国・地域から合計約(1640億)円。

2011 年緊急人道支援 ソマリア 約 713 億円(被援助第2位)

(174)ケ国のうち(119)ケ国が日本の(ODA)対象国からの支援
(ODA)等過去の日本の(援助)に対する(感謝)に言及する国も数多い。

(4)参考資料等

・『地球の歩き方 モンゴル』ダイヤモンドビッグ社 2013

・一般財団法人 国際開発センター「東日本大震災への海外からの支援実績のレビュー調査」

<<http://www.idcj.or.jp/pdf/idejr201201.pdf>> (2015 年 1 月 20 日アクセス)

8 単元を通した児童生徒の反応/変化

[生徒たちの感想]

・世界には学校に行けない子供たちがたくさんいる中で、そのような子供たちを救ってあげることができたら良いなと思いました。私も困っている人がいたら助けたいです。

・私も次、もし外国で何かあった時には、少しでも力になりたいです。

・私は、違う国のことを少しも考えていなかったけれど、これからは何か他の国のためになるようなことを考えてみたいです。

・今回学習したことを胸に、将来できることがあれば、ボランティアや青年海外協力隊に積極的に参加して、発展途上の国へ行って現状を知り、どんな小さいことでも力になれば良いなと思いました。自分自身の視野を広げたいです。

・私にもできることはあるのか、このままで良いのかと考えさせられました。この学習を通して何かできることがあればやりたいと思った。

・自分は平和の中において与えられた生活を生きるのが精一杯ってというのは、自分への情けなさを感じました。まずはその国のことに興味を持つこと、知ることから始まると思った。私も国際活動に少しでも参加できるようにできることからやっていきたいと思います。

[考察]

「国際協力」をキーワードとして、「今、そしてこれから、自分ができることは何かあるのか?」と前向きに捉えている感想が多くみられた。また、モンゴルの異文化を理解することは、日本について、自分自身について改めて問いかけるきっかけとなり、自国・自己の理解にもつながるということに気づいた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

[成果の検証方法]

・授業の中でのワークシート、授業後のアンケートを分析し、生徒の学習状況の評価をした。

・授業力評価表から自己評価を実施した。

・授業見学に来た教師との相互評価を実施した。校内研修での発表や私学教育研修会において発表してフィードバックを得た。

[成果]

・教科書の切り取られた1ページでなく、モンゴルでの経験を通した生きた教材は、生徒の知的好奇心を喚起し、参加型学習においても自発的に取り組む様子が随所にみられ異文化を理解しようとする態度を育てることができた。教師自身が経験したことを通して、自分の目で感じ、気づくことの意義を改めて感じた。

・バーン村の実践から「必要な援助」について考えることができ、同じ高校生のエッセイから、国際協力を自分の遠いところにあるものではなく身近なものとして、日本が世界の人々と協力していく大切さ・支援の在り方を考えることができ、「自分にできる国際協力」として捉えることができたようである。

・教師の体験談、JICA隊員ムービー、生の青年海外協力隊員の講演などの実践から、JICAが今まで

実施してきた国際貢献を知り、開発途上国で日本と途上国のために汗水流し活躍している日本人がいることを理解することができた。

・東日本大震災の被援助国としての日本の姿から「相互扶助」を考え、日本は世界の国々とつながっていること、私たちは社会の一員であり、今も、高校卒業後も、現在の様々な課題をより良くすることができるのは私たちであるという将来像を実感することができた。

・教師が考えた以上に、生徒は異文化へ関心を示し、フォトランゲージにおいても様々な視点から考え発言してくれた。援助に関しても「相手を知り、相手の立場に立ってみる」というところまで深めて考えた生徒もいた。

[課題]

・他者と協力する態度を育むために、参加型の授業を精選した上で、実践機会を増やしていく必要性を感じた。さらに、モンゴルで入手した映像、写真、資料、経験談が数多く、授業において興味関心を引き出そうと「下手な鉄砲数撃ちゃ当たる」的な乱雑さで、柱が上手く通っていない中、利用した面が多々あった。今後は多くのネタを、柱を立てた上で、順序に沿い、精選し、利用していく必要性を感じた。

・異文化理解にあたって、遊牧民の暮らしが「スーテーツアイ⇒しょっぱい、まずい」「トイレ⇒汚い」「風呂⇒ない」から、日本と比較して「モンゴルは不幸せで、日本は幸せ」とステレオタイプの直結してしまう不十分な側面もあった。さらには、「何を持って幸福とするのか、モンゴル人は不幸で、日本人は幸せなのか？」と、「幸せのあり方、人の生き方」の問いを発し、単元目標に掲げている高校卒業後の将来設計に対してアプローチし、自らの生き方を深めていく必要があった。

・多面的なアプローチが十分でなかったため、ウランバートルの都市部に住んでいる人と、地方の遊牧民に焦点を当てて、モンゴルの一般的共通性と地方的特殊性の視点から追究し、モンゴルの地域の課題や将来像についても踏み込んでいく必要性を感じた。

[課題の改善策]

- ・検証に基づき、学習内容の見直しを行い、ワークシートなど作り直した。
- ・生徒の学習状況を把握しやすくするため、授業後のアンケートを作り直した。
- ・生徒に何を伝えたいのか、どうさせたいのか、計画の柱を念頭に実現のための工夫をする。
- ・発問、厚生、板書計画などについてじっくり研究、準備をする。
- ・教材の更なる焦点化および具現化をする。

10 教師海外研修に参加して

「先生たちに教わる生徒さんたちは本当幸せですね。」

モンゴルのバスケットボール指導で青年海外協力隊として活動している池田隊員の活動に触れ、最後にお別れする時に頂いた最上級の褒め言葉だ。自分がこの言葉に見合う人間かどうか置き換えてみた。「まだまだ対応しない・・・。」と。

以前より、青年海外協力隊の活動に興味があり、10 日間の教師海外研修を通して、2年間の長期の派遣を考えたいと思い応募した。クラスにおいても部活動(テニス部)においても、生徒に対して「挑戦し続けることの大切さ」を私は訴えてきた。では教師である私自身はどうだろう。教師という職業は、自分自身の世界に凝り固まってしまう傾向が強く、積極的に殻を破り、外の世界を見て、自分の視野を広げていかないと「裸の王様」になってしまいがちである。「口で言っているだけではない。」証しの一つとして、旅行ツアーではなかなか行けない開発途上国に飛び込み、新たな出会いの中で、自分自身を鍛え、知見を広げていきたいと切望した。

実際現地に行ってみると、見るモノ触れるモノの全てが脳みそを揺さぶり、他者の目を通してではなく、自分自身の肌で直接感じるものの大切さを改めて感じた。そして、国際協力の現場で奮闘しながら挑戦している隊員の姿は、純粋に「美しい生き方」に感じた。そのような隊員の「カッコ良い生き方」を伝えること、そして私自身挑戦していく姿を見せることが、生徒に考える有益な機会を提供できるのではないかと感じた。私自身、隊員たちの生の姿に触発され、情熱溢れるモンゴルチームメンバーとの出会いを通じて、新しく見えてきたもの、気づかされたことも多い。

生徒の感想の中に、「先生の授業から青年海外協力隊に積極的に参加し視野を広げてみたい」と。これだけでも救われる思いだが、これからも国際協力の学校の中の発信源として、能動的に挑戦し、少しでも池田隊員から頂いた言葉に近付けるように多くの機会を提供していきたい。



EL SALVADOR

学校名：川越市立今成小学校

氏名：今井 奈央子

[担当教科：小学校全教科]

- 実践教科等：道徳
- 時間数：4時間
- 対象児童：小学校4年生
- 対象人数：67人

1 単元名

日本、外国、自分を見つめよう

2 単元の目標（ESD の能力・態度）

本単元は、道徳の時間として扱い、大きく3つの主題から構成されている。

第一次に「日本のよいところを探そう」として、世界の中の日本に目を向け、日本の美しさや文化、技術の高さに触れ、日本を愛する心情を育てる(つながりを尊重する態度)。

第二次に「外国のよいところを探そう」として、外国の文化について知り、外国の人々や文化を大切に、日本人としての自覚をもって世界の人々との親善に努める心情を育てる(多面的・総合的に考える力)。

第三次に「自分のよいところを探そう」として、自分や友だちの特長に気付き、よい所を伸ばそうとする心情を育てる(つながりを尊重する態度)。

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

エルサルバドルの人々や文化について知り、世界には様々な国があり、多くの人々がそれぞれの考え方や知恵を持って暮らしていることに気付かせたい。また、一村一品運動の考え方を通して、自分や友だちの得意なこと、よいところを見つめ、互いに認め合うことができる態度を育てる。【多様性】

日本とエルサルバドルの共通点・相違点を見つける活動を取り入れる。また、両国の文化的な関わりについて紹介する。さらに、エルサルバドルで活躍する日本人ボランティアの方々の活動を紹介し、両国が互いに連携・協力していることを理解させたい。【連携性】

4 単元の指導について

(1)教材観

人は、生まれ育つ国から様々な影響を受けて、国に対する様々な思いを抱き、成長する。自国の伝統や文化、先人の努力に対する理解などを通して、たくさんのプラスとなる影響を受ければ、国の伝統や文化を継承し、貢献しようという生き方へと発展していくと考える。児童の視野を広げるために、わが国だけでなく、外国の人々や文化にも関心をもつように、日本人としての自覚を喚起し、国や郷土の伝統や文化を愛する心を養いたい。(第一次)

一方、地球規模での相互交流が増し、国際理解教育の必要性が叫ばれている昨今、自国だけでなく外国の人々や文化に関心をもつことが重要になってきている。外国の自然や文化などを踏まえた総合的な理解と、相手の立場に立った共感的理解、互いの問題を解決していこうとする受容的な関心や態度が必要である。(第二次)

さらに、エルサルバドルのサンビセンテ市で行っていた一村一品運動の「ないものを嘆くのではなく、あるものを生かす」という考え方を通して、自分自身の特徴についても振り返らせ、児童の自己肯定感を高めたい。自分の特徴を知ることは、他と比べて特に自分の目立つ点に気付くことであり、長所も短所も含まれる。しかし短所や欠点を探して「自分は〇〇ができない、〇〇が苦手だ」と悲観するのではなく、長所や好きなこと、得意なことを探して「自分は〇〇ができる、〇〇が好きだ」という考え方に切り替え、互いに認め合うことができる態度を育む。そのためには、児童が多様な個性や生き方に触れる中で、自分の特徴に気付くようにしたり、友だちとの交流の中で認め合う場をつくったりして、意欲を引き出すことが求められる。自分が生まれ育った日本のよさを再確認し、外国の多様な文化や人々の暮らしを知り、それらの学習を踏まえた上で自己を振り返らせたい。(第三次)

(2)児童生徒観

本学級は、高学年に近づき、社会的認識力が身に付きつつあり、視野も拡大してきている児童が多い。様々なメディアを通して、外国への関心を徐々に持つようになり、外国の情報を自分たちなりに得ている。しかし、社会科学習の内容はまだ地域社会中心であり、日本の伝統や文化に関心を持ち、そのよさを大切にしようという意識は高くない。これからの国際社会に生きていく児童に向けて、世界の中の日本を意識させ、国や郷土を大切に思う心情を育てていきたい。

外国への関心を持つ一方で、自分と異なる習慣や考え方をを持った相手に拒絶的な反応や、攻撃的な態度を示すこともある。違いに対して、どうしてそうするのだろう、調べてみよう、聞いてみようという、相手の立場を考えた対応が求められる。行ってみたい国を調べ、エルサルバドルの文化や人々について知ることをきっかけとし、諸外国の異文化を理解し、尊重しようとする態度を育みたい。このような態度が育まれることで、自分自身の文化や生活も見直すことができると思う。

また、自分と友だちを比較して考えたり、友だちの目を気にして自信をなくしたり、人と違うことに不安を感じたりしている児童も少なくない。友だちや周囲の人間から認められ、褒められることにより自分のよさに気づき、自信をもつことができるようになると思う。一人一人がすばらしい個性を持った存在であり、自分のよさや可能性を大切にしていこうとする心情を高めたい。

(3)指導観

第一次「日本のよいところを探そう」では、フォトランゲージを行い、日本の風景・伝統・文化・技術を想起させ、日本のよさ、すばらしさに共感させる。日本のどんなところを大切にしていきたいか、多様な意見を引き出すことにつなげる。

第二次「外国のよいところを探そう」では、前半で「行ってみたい国調べ」として、調べ学習とグループ学習での小発表会を行う。国名・国旗・衣食住や観光地など、自分が行ってみたい国の簡単な紹介を書くプリントを用意し、調べ学習を行う。その後、調べた国についてグループ内で小発表会を行う。さらに全体で共有するため、教室に掲示し、近くに世界地図も掲示する。自分が興味を持って調べた国だけでなく、友達の行ってみたい国を知ることで、様々な国に興味を持つきっかけとする。

後半では「エルサルバドルってどんな国？」として、主にスライドショーでエルサルバドルの街並みや人々の暮らしを紹介し、日本と比較させたり、文化的なつながりを確認させたりする。違いがあるからこそ、進歩や発展があり、理解し合って互いに向上していくこともできる。スライドショーを上映しながら、違いをよさとして受容できるような発問や言葉がけを意識する。教師自身のエルサルバドルでの体験や感想を交えながら授業を展開し、児童の異文化に対する驚きや好奇心を大切に、児童が「もっと知りたい、調べてみたい、行ってみたい」と主体的な活動につなげられるような授業展開を工夫する。教師の体験や感想を交えて語ることで、世界の多様性を身近に感じさせたい。これからの国際社会を地球規模で考えていく必要があることにも触れ、外国への興味関心を高めたい。

第三次「自分のよいところを探そう」では、得意なことやできること等の技能的な面だけでなく、性格的なよさまで広げて考えられるように助言したい。互いのよさを伝え合うグループ活動では、最初のうちは照れや緊張があり、なかなか伝え合うことができず、活動が進まないことが予想される。時間をたっぷり取って、児童の緊張をほぐしたい。

5 評価規準

観点	道徳的心情	道徳的判断力	道徳的实践意欲・態度
評価規準	・世界の中の日本に目を向け、日本の風景・伝統・文化・技術などに触れ、日本を愛する気持ちを高める。 ・外国の文化や人々に親しもうとする気持ちを高める。	・日本のよさ、すばらしさに気づき、大切にしていきたいという思いを持つ。 ・自分のよさ、友だちのよさに気付くことができる。	・外国の文化に関心を持ち、互いのよさを理解しようとする。 ・自分にできることを考え、実行しようとする。
評価方法	発言、挙手	発言、挙手、ワークシート	発言、挙手、ワークシート

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	日本のよい所を探そう 「日本ってどんな国？」 4-(6)愛国心※	世界の中の日本に目を向け、日本の美しさや伝統文化、技術の高さに触れ、日本を愛する心情を育てる。	1. グループ学習でフォトランゲージを行う。写真を見て気付いたことを挙げさせていき、その中から「日本のよさ」につながるキーワードを教師が拾う。写真の内容は、春の富士山と水田・茶道・夏祭り・平等院鳳凰堂・ロボット等、日本の風景・伝統・文化・技術を想起させるもの使用する。 2. 日本のどんなところを大切にしていきたいか、日本のよさを振り返る。
2	外国のよい所を探そう 「行ってみたい国調べ」 4-(6)国際理解※	自分が行きたい国の文化に関心を持ち、それらの国について調べ、理解を深める。	1. ワークシートを使用して調べ学習を行う。ワークシートは、行きたい国の国名、国旗、衣食住や観光地などの自由記述部分を設ける。 2. 調べた国についての発表会を5, 6人のグループで行う。 3. 授業後、ワークシートを教室に掲示し、全体で共有する。世界地図も並べて掲示し、様々な国に興味を持つきっかけとする。
3	外国のよい所を探そう 「エルサルバドルってどんな国？」 4-(6)国際理解※	世界中にある国の一例としてエルサルバドルについて知り、エルサルバドルの人々や文化に親しもうとする態度を養う。	1. スライドショーで、エルサルバドルの風土、衣食住、文化、人々について紹介する。マングローブ林やカエルキャラバンの様子も紹介し、ボランティアの方々の活躍に触れる。 2. エルサルバドルの小学校や子どもたちの様子をスライドで紹介した後、エルサルバドルの小学生に宛てた手紙を書かせる。
4	自分のよい所を探そう 「自分を見つめよう」 1-(5)個性伸長※	互いに認め合う態度を育てると共に、自己肯定感を高める。	1. 「町には時計台、おいしい木の実、美しい自然、伝統的なお菓子屋さんがあります。これらを生かして、あなたならどのように工夫して町興しをしますか。」と問いかけ、意見を挙げさせる。 2. サンビセンテ市の一村一品運動で実際に行われている活動を、写真を交えて紹介する。 3. 「〇〇ができない」ではなく「〇〇ができる、〇〇が好きだ」という考え方で自分について振り返らせる。 4. ワークシートに友だちのよいところを書かせた後、グループ活動で互いのよさを伝え合い、自己肯定感を高める。

※「小学校学習指導要領」第3章道徳、第2内容[第3学年及び第4学年]

7 授業事例の紹介

小単元名【エルサルバドルってどんな国？】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月29日(水)第5限

(イ)実施会場 視聴覚室

(ウ)本時の目標 世界中にある国の一例としてエルサルバドルについて知り、エルサルバドルの人々や文化に親しもうとする態度を養う。

(エ)指導のポイント

- ・違いをよさとして受容できるような言葉がけを意識する。
- ・教師の体験を交えて語り、外国への興味関心を高める。
- ・エルサルバドルの小学生に宛てて手紙を書く活動を通して、日本のよさを再確認するとともに、世界の多様性を身近に感じさせる。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	(1)前時を振り返らせる。 (2)「行ってみたい国調べ」で人気だった国をいくつか紹介する。	・日本のいいところを挙げ、授業を振り返る。 ・「行ってみたい国調べ」で出た国を振り返る。	全体指導	・前時で挙げた日本のよさを想起させる。 ・「〇〇ってどんな国？」と問いかけ、国調べで挙げた国を児童に紹介させる。	外国の文化や人々に親しもうとする気持ちを高める。 ・発言
展開 37分	(3)スライドショーを使ってエルサルバドルを紹介する。 ・風土 ・マングローブ林と漁民 ・町並み ・高台から見える景色 ・住居 ・カエルキャラバン ・食べ物 ・人々 ・日本とのつながり ・小学生 ・小学生との交流会 (4)エルサルバドルの小学生に手紙を書かせる。 ・発表させる。	・スライドショーを見て、エルサルバドルについて知る。 ・エルサルバドルの風景を写した写真を見て、どんなものがあるか挙げる。 「緑が多い、山、平屋の家」 ・マングローブ林と漁民についての話を聞く。 ・日本との違いに気付く。 「有刺鉄線、鉄格子、トタン屋根、銃を持ったガードマン、壁のペイントがきれい」 ・見えるものを挙げる。 「平屋が多い、緑もある」 ・日本との違いに気付く。 「中庭、明かりとりの窓」 ・カエルキャラバンについて知る。 ・日本の避難訓練との違いに気付く。 ・日本の食べ物と比較する。 ・プブサ、フリホーレス、バナナ等、代表的な食べ物について知る。 ・国民性について知る。 ・両国の文化的なつながりについて知る。 ・国は違っても、自分たちと同じように頑張っている子どもたちの様子を知る。 ・一緒に日本の遊びやラジオ体操をした話を聞く。 ・エルサルバドルの小学生に手紙を書く。(「エルサルバドルはここがすてきだね」「日本はこんな国だよ」の2点を中心に。) ・何名かの児童の発表を聞く。	全体指導	・エルサルバドルの国旗を掲示する。 ・位置を確認する。 ・国土が、沖縄と四国を合わせたくらいの面積であることを紹介する。 ・写真の中で気付かせたいポイントに目がいくように発問する。 ・漁民の苦労と、そこでのボランティアの方の活躍を紹介する。 ・異文化に興味を持ち、多様性を受け入れられるような声がけを意識する。 ・風土に適した造りであることを確認する。 ・日本から伝わった防災教育であることを確認する。 ・ボランティアの方の活躍を紹介する。 ・実際に食べた感想を交えて説明する。 ・「中米の日本」と呼ばれていること、勤勉であたたかな国民性、教師が実際に関わった人々を紹介し、身近に感じられるようにする。 ・日本のキャラクター、日本車、藍染、寿司など身近に感じられるものを例に紹介する。 ・藍染体験で染めたストールを見せる。 ・校舎内や校庭、授業風景、運動しているところ、休み時間の様子など、児童が自分たちと比較できるような写真を選ぶ。 ・エルサルバドルの玩具(実物)を紹介する。 ・エルサルバドルの小学生が日本に親しみを抱いていることを紹介し、親近感を持たせる。 ・焦点を絞り、取り組みやすくする。 ・互いの意見を全体で共有させる。	外国の文化や人々に親しもうとする気持ちを高める。 ・発言 ・発言 ・発言

終末 3分	(5)まとめる。 ・世界は195カ国であり、日本もエルサルバドルもその内の一つであることを確認する。	・エルサルバドルに興味をもてたか、振り返る。 ・教師の話聞く。		・様々な国に興味を持って調べたり、実際に行ってみたりしてほしいことを伝え、終了とする。	・挙手
----------	---	------------------------------------	--	---	-----

(2)授業の振り返り

[良かった点]

- ・児童の反応がよく、熱心に聞いていた。どの児童も外国の文化に興味を持てた様子であった。
- ・視点をしばって発問したことで、教師が気付いてほしいポイントに児童がしっかり注目できていた。

[改善点]

- ・時間内に収まったが、やや詰め込みすぎだったように思う。内容の精選が必要である。
- 改善案→「エルサルバドルの紹介」「ボランティアの方々の活躍」を分けて授業を行う。

(3)使用教材

- ・エルサルバドルについて説明する際に使用するスライドショー(PowerPoint で作成)
- ・スライドショーで使用する写真(風土、マングローブ林、町並み、高台から見える景色、住居、カエルキャラバン、食べ物、人々、日本とのつながり、小学生、小学生との交流会の様子など)
- ・エルサルバドルの玩具(けん玉、ヨーヨー等)
- ・藍染体験で染めたストール
- ・エルサルバドルの小学生が使用している教科書(四年生の国語、算数)
- ・スライドショーを上映するための機材一式(プロジェクター、スクリーン等)
- ・ワークシート「サンタヘマ小学校のみなさんへ」(エルサルバドルの小学生に手紙を書こう)

(4)参考資料等

該当なし

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

以下、児童の感想から一部抜粋して紹介する。

「日本ってどんな国？」

日本のよいところを大切にしたい。日本の技術はすごい。外国の人々に、日本のよさを伝えたい、知ってほしい。日本の四季は美しい。日本は食べ物が美味しいし、安全だし、住みやすいと思う。日本の自然を大切にしていきたい。

「行ってみたい国調べ」

自分の行ってみたい国について知ることができた。アメリカ、イタリア、フランス、ドイツが人気だということが分かった。発表会をして、色々な国について知ることができた。色々な国に行ってみたい。ほかの国についても、もっと調べてみたい。

「エルサルバドルってどんな国？」

エルサルバドルという国を初めて知った。遠くにある国なのに「中米の日本」と言われていると知り、驚いた。地震が多くて大変そうだった。日本のキャラクター、特にドラゴンボールが人気だなんてびっくりした。甘くないあんこが面白かった、美味しいのかな？ ププサがおいしそう、簡単そうだし自分も作ってみたい。エルサルバドルに行ってみよう。

「自分を見つめよう」

自分のいいところを見つけることができた。友だちから自分のよいところを褒められて、恥ずかしいけど嬉しかった。できることや好きなことを大事にしていきたい。苦手なことでも努力してクリアしたい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

第一次の授業では、児童からは「日本は自然が豊かである」という意見が多く挙がった。また、「食事も美味しく、安全であり、科学技術も発展している」という発言があり、日本のよさを認識していることがうかがえる。「外国の人々に日本のよさを知ってほしい」という意見や、「2020年の東京オリンピックでは、世界中の国からいろんな人が日本に来ると思う。」などの発言もあり、世界の中の日本として捉えられている。これらの発言から、第一次の単元目標を達成できたと考える。

第二次後半のスライドショーを使った授業では、短く具体的な発問を心がけた。また、写真を変えるたびに、できるだけ多くの児童の意見を聞くようにした。こうすることで、より多くの児童の考えを全体で共有することができ、更に活発に意見が挙がった。管理職からは「児童が目まぐるしく変えてスライドショーを見ていた。発言も積極的に出ていて、強く関心を持っていたことが分かる」とのコメントをもらった。さらに、授業後の様子としては、教室に掲示した世界地図を見て、色々な国を探す姿が見られた。以上のことから、第二次の単元目標を達成できたと考える。

第三次の授業では、自己肯定感が低い発言をしていた児童が、友だちから「〇〇くんは面白いことを言っていていつも楽しませてくれる」と言われて嬉しそうにしていた。また、授業後の学級の様子では、何事に対しても「よいとこさがし」をしようとする児童の姿が多く見られるようになった。こうした児童の変容から、第三次の単元目標に迫ることができたと考える。

今後の課題は、今回の授業実践だけでなく、海外研修で得たものを他の授業でどのように生かしていくかという点である。避難訓練の際に、カエルキャラバンと防災教育のことについて触れたり、キャリア教育の一環として、現地で活躍するボランティアの方々の生き方を紹介したりできると考える。年間指導計画と照らし合わせ、多様な視点で各教科に取り入れていきたい。

また、他の教員も授業を実践できるような教材や指導案を残して、次年度以降に引き継ぐ必要がある。海外研修で得たものを、より多くの児童に還元していきたい。

10 教師海外研修に参加して

研修前、エルサルバドルに対して「治安が悪く物騒な国」という印象を持っていた。しかし、実際に訪れて一番強く感じたことは、人々の温かさであった。世界の多様性を受け入れる心を忘れ、頭でっかちになっていた自分の先入観を恥じ、目が覚める思いがした。「広い視野をもち、異文化を理解し尊重するとともに、異なる文化をもった人々と共に生きていく資質や能力の育成を図る」という国際理解教育の大切さを再確認した研修であった。

国際協力の現場で、ボランティアの方々が現地の人々と一丸となって課題を解決しようと取り組む姿に感銘を受けた。「2年で現地の人々の考えを変えようということではなく、まずは礎を築き、次の人間に繋げる」という西田シニアボランティアの言葉に、これがESDの考え方のだと実感した。

また、エルサルバドルでは、行く先々で「日本の人々にとても感謝しています。帰ったら是非このことを伝えてください。」と言われた。日本から遠く離れたこの地で、これほどに日本に感謝の気持ちを抱いている人たちがいるということに驚いた。それはJICAの支援、ボランティアの方々の努力があつてのことである。各プロジェクトやボランティアの方々の仕事ぶりを視察させていただいたことで、身をもって感じることができた。

日本国大使や教育相副大臣から伺った話では、エルサルバドルは課題の多い国であり、改善の兆しが見えない問題もたくさんあるとのことであった。「他国の課題」ではなく、「国際社会が抱える課題のうちの一つ」としてとらえ、解決していこうとする受容的な関心や態度が必要であると改めて感じた。

この研修で自分が実際に経験してきたことを、授業だけでなく、様々な形で児童に伝えていきたい。そして、自分が伝えたことをきっかけに、一人でも多くの子が世界の多様な文化に興味関心を持ち、また、将来国際協力に関わる仕事に就いてくれれば、こんなに嬉しいことはない。



EL SALVADOR

学校名：川口市立飯塚小学校

氏名：樋地 香奈子

[担当教科：小学校全教科]

● 実践教科等：総合的な学習の時間、
道徳、社会科

● 時間数：8時間

● 対象生徒：小学校6年生

● 対象人数：39人

1 単元名

世界に目を向けて～これからあなたも世界市民～

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

- ・エルサルバドルの学習をとおして、世界の国々に関心をもち、多様な文化や生活、価値観があることに気付く。（多面的・総合的な思考力）
- ・エルサルバドルをはじめ、世界が抱える問題について知り、自分にできることや生き方を考えながら自分自身と向き合う。（自己の生き方の追究）
- ・エルサルバドルで活躍する日本人について学び、世界と日本のつながりに気付き、互いに助け合う共生の心を培う。（つながりを尊重する態度）

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・エルサルバドルと日本の生活を比較し、多様な文化や価値観があることに気づく。【多様性】
- ・エルサルバドルと日本のつながりに気づき、共生の大切さを学ぶ。【連携性】
- ・エルサルバドルが抱える問題について知り、自分にできることや生き方を見つめる。【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

児童はこれまで総合的な学習の時間において、福祉や身の回りの地域、日本の良さについて探究をしてきている。そして今、小学校卒業を目前にし、中学進学に向けての準備やこれからの自分の将来と向き合う時期となっている。そこで、世界に目を向け視野を広げながら、一歩深く自分の生き方を見つめてもらいたい、世界には多様な文化や価値観をもった人々がいること、そしてそういった自分とは異なる他者を受け入れ、共に協力し合って生きていくことの大切さを実感してもらいたいと考える。

学習指導要領解説には、「(7)国際理解に関する学習を行う際には、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動が行われるようにすること」とある。実際に児童自らが外国の生活や文化を体験することは難しい。そこで、教師である私自身が実際に訪問し体験したことを教材化することで、児童の興味が世界に向けられ、その関心を身近に引き寄せながら自己の生き方を探究していく態度を養うことができると考え、この教材を設定した。

(2)児童観

学級児童は、サッカーのワールドカップで日本と対戦した外国について興味をもったり、テレビの番組で様々な国の様子を知ったり、英語を習っていたりと、外国の人を目にする機会が多くある。校内にも国籍の違う児童や親が外国籍である児童もあり、直接関わりながら生活もしている。

そこで、本単元の前に児童に「行ってみたい国」についてのアンケートを行った。するとアメリカやヨーロッパ諸国、中国・韓国など、いわゆる先進国や日本に近い国の名前が多く挙がった。外国に対して興味をもっている一方で、アフリカ諸国や中南米地域などの発展途上国をはじめ、知らない国が多くあり、児童の中で「世界の国のイメージ」が偏ったものであることがわかった。

また、それぞれの国の文化や習慣など、深く考える経験が少ないと思われる。そこで今回は、児童がほとんど聞いたことがないであろう中米の「エルサルバドル」という国を教材にして、児童の視野を広げていきたいと考えた。

(3)指導観

児童にとっては、初めて名前を聞くような「エルサルバドル」という国の生活や文化をただ紹介するだけでは、知識理解の範囲で終わってしまうであろう。そこで、自分たちと同じ年の子どもたちがどんな学校生活を送り、どんなことを考えているかという部分に焦点をあて、具体的なもので自分たちと比べていく。その中で、自分たちとの共通点から他国をより身近に感じられたり、相違点から多様な価値観を学んだりすることができる考えた。

また単元全体をととして、フォトランゲージの手法をはじめ、体感型ワークショップや他国と自国との比較検討など、児童にとっては他教科でもあまり経験のない活動や学習形態を取り入れている。扱う教材については新鮮味があり、児童は意欲的に取り組むことができるであろう。しかし、初めてのことで戸惑う場面も多く見られると予想される。そのためグループでの活動を主とし、皆で課題と向き合い協力して解決していく態度を育てながら、国際協力という視点をふまえ、これからの自分たちの生き方に繋げていけるような支援をしていきたい。

5 評価規準

観点	ア 問題解決能力	イ 自己を見つめ、自己を高めていく力	ウ コミュニケーションの力
評価規準	情報を整理・分析しながら、世界が抱える問題や自分の生活に対する課題を見つけ、解決への道を考えようとしている。	世界の国の現状や課題を知り、その問題を自分と結びつけて、自分の生活や生き方を見つめ直そうとしている。	グループや全体での話し合い活動を通して、友達の考えの良さに気づき、自分の考えを伝えようとしている。
評価方法	ワークシート	ワークシート	模造紙、発言

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	【エルサルバドルについて知ろう】 〈総合的な学習の時間〉	・エルサルバドルの文化や自然について知り、世界の国に興味・関心をもつ。	・エルサルバドルについての基本的な知識を2択クイズにして行い、この国へのイメージや興味・関心をもつ。
2		・エルサルバドルの写真から様々な情報を見つけ出し、日本との共通点や相違点に気づく。	・5枚の写真をもとに、グループごとにフォトランゲージを行い、疑問に思ったことや気づいたことを自由に交流し合う。
3	【エルサルバドルと日本の学校を比べよう】 〈総合的な学習の時間〉	・エルサルバドルと日本の学校の時間割を比較し、自分たちの学校生活との共通点や相違点に気づく。	7 授業事例の紹介に詳しく記載
4		・学校の様子を写した写真から、エルサルバドルが抱える問題について考える。	
5	【幸せって何だろう？】 〈道徳〉	・エルサルバドルと日本の学校のそれぞれの良さや課題について考える。	・エルサルバドルと日本の子どもたちの幸福度を予想し、その理由からそれぞれの学校の良さや課題を話し合う。
6		・エルサルバドルの6年生にとったアンケートをもとに、幸せの価値観が多様であることや、教育の大切さについて考える。	・エルサルバドルの6年生にとったアンケートと同じ項目のものを事前に行っておき、自分たちの結果と比べ、考察する。
7	【世界に目を向け、今の自分にできることを考えよう】 〈道徳・社会科〉	〈道徳〉 ・世界の現状を体験的に知り、共生について考える。	・ワークショップ「世界がもし 100 人の村だったら」を行い、世界の現状を体感し学ぶ。
8		〈社会〉 ・青年海外協力隊の活動を知る。	・エルサルバドルで活躍する日本人の生の声を聞き、世界と日本のつながりを知ると共に、自分にできることを考える。

7 授業事例の紹介

小单元名【エルサルバドルと日本の学校を比べよう】

(1) 指導案

(ア)実施日時

10月27日(月)第2限(第3時)、10月29日(水)第2限(第4時)※本時として詳しく記載

(イ)実施会場 6年2組教室

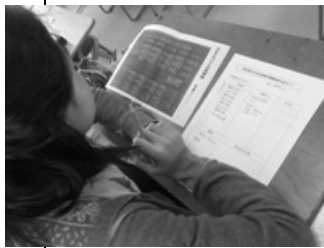
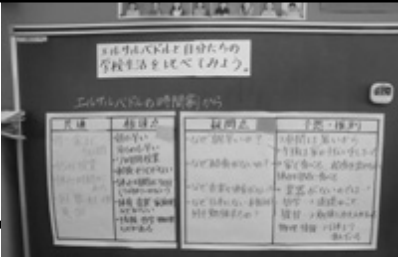
(ウ)本時の目標

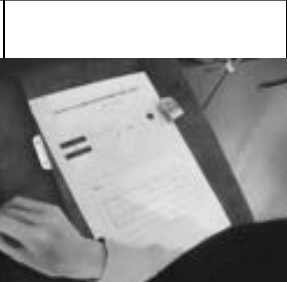
エルサルバドルと日本の学校生活を比べながら、それぞれの学校の特色や課題について考える。

(エ)指導のポイント

- ・時間割や現地で撮った写真をもとに「自分たちで読み取る」ということに焦点を置き、教師は中立的な立場をとることで、児童の自由な発想や気づきを大切にしたい。
- ・時間割の比較から出た疑問や気づきが、次のフォトランゲージでさらに考えを深めてつなげていけるよう、なるべく日本との違いがわかるような写真を選んだ。

(オ)本時の展開

時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
第3時	・エルサルバドルの時間割を見せ、授業の内容や時間に着目しながら、日本と同じところや違うところをたくさん見つけさせる。	・エルサルバドルと日本の時間割を比較し、共通点や相違点、疑問点をワークシートに書き出す。 	個人	・スペイン語を日本語訳にしたものを児童一人一人に渡す。 	・情報を整理・分析しながら、世界が抱える問題や自分の生活に対する課題を見つけ、解決への道を考えようとしている。 【ワークシート】
本時の導入10分	・前時の振り返りをする。	・前時に、個人で考えた気づきを表にしてまとめ、学級全体で共通理解を図る。	全体	 【共通点】 ・国語や算数など、日本と同じ教科が多くある。 ・月曜日から金曜日まで週に5日間ある。 【相違点】 ・始まる時間と終わる時間が早い。 ・休憩時間が長い。 ・給食やそうじがない。 ・音楽や体育の授業がない分、国語や算数などの授業が多い。 【児童の疑問や予想】 ・エルサルバドルの方が勉強に力を入れているのでは…？ ・早く帰って、午後は家の手伝いをしている…？ ・給食がない分、長い休憩時間の間に食べているのかなあ…。	
	・本時の課題を伝える。	・本時の課題をつかむ。			
	写真からエルサルバドルと日本の学校を比べよう				

展開 25分	①授業の様子 ②休み時間の様子 ③学校にあるもの ④掲示物の4種類の写真を使ってフォトランゲージを行わせる。	4種類の写真をグループごとに見て、気づいたことを模造紙に付箋で貼っていく。時間になったら、グループごと場所を移動し、別の種類の写真を見て回る。	グループ	話し合いが進まないグループには、具体的にみるポイントを助言しながら回る。	グループや全体での話し合い活動を通して、友達の考えの良さに気づき、自分の考えを伝えようとしている。
		これは何を しているん だろう…？		疑問がいっぱ い出てきたな あ、整理して みよう。	【模造紙・発言】
	学校の様子から予想される、この国の抱える課題について話し合わせる。	写真から気づいたことをもとに、この国が抱える問題について考え、意見交流をする。	全体		ぼく達は こう考えま した！
まとめ 10分	〈気づいたこと・疑問に思ったこと〉 - 使われていない、古びたピアノがある。 - 休み時間におやつを食べている子や、牛乳のようなものを配っている人がいたりする。 - 節水のポスターが多い。 - 写真に写っている子たちは皆笑顔。		〈考えたこと〉 - 楽器が足りないから音楽の授業がないのかな。 - 給食がない分、休み時間に食べている。自分で買えない子もいそう。 - 日本より水を大切にしている。資源が少ないのかな。 - 友達がいる、学校がとても楽しいのかもしれない。		
	それぞれの学校生活の違いをふまえながら、お互いの良さや課題を比べ合わせる。	エルサルバドルと日本の子どもの幸せ度を%に表し、その理由を考える。	個人		世界の国の現状や課題を知り、その問題を自分と結びつけて、自分の生活や生き方を見つめ直すとしている。
	〈子どものワークシートより抜粋〉 - 日本の学校の方が設備が良い。ご飯も外で食べるより皆で教室で食べた方がよいと思うから日本の方が幸せ。 - 日本もエルサルバドルも休み時間に友達と楽しく遊んでいるのが良い。節水のポスターが多いことから、エルサルバドルは日本より資源が多くないことがわかった。 - 日本の方が授業で使うものがたくさんあるから、恵まれている。でもエルサルバドルの子たちは私よりも授業を楽しそうに受けている。 - 日本では学校の皆で遊ぶことが少ないけど、エルサルバドルの子たちは他の学年やクラスの子たちとの交流が多いと思った。エルサルバドルの子の方が笑顔が多い。				
	次時の予告をする。				

(2) 授業の振り返り

[良かった点]

- ・児童にとってより身近な学校生活を比べ合うことで、児童自身の知りたいという興味を引き出すことができた。活動そのものや考えさせることは難しいことを要求してしまったが、児童は最後まで自分たちの生活と重ね合わせ振り返りながら、真剣に考えることができた。
- ・次時のねらいである「幸せとは何か」という視点につなげるため、エルサルバドルの貧しさや不便さを強調するのではなく、笑顔の写真や良さが伝わる資料も用意した。そのため、ただ「エルサルバドルの子たちはかわいそう、大変だ」にならず、「不便な中でもなぜこんなに笑顔なのだろう？」という疑問から、考えを広げる児童もいた。

[課題]

- ・フォトランゲージという手法に関して、児童の自由な気づきや発見を尊重しつつも、教師側のねらいに気づかせるための手立てをしっかり考える必要があった。また、そのための資料選びもより吟味して厳選しなければいけないところが、やってみて難しいと実感した。

(3) 使用教材

- ・本時のフォトランゲージで使用した写真(〈〉内は写真を見た児童の反応やつぶやき)

〈調理員さんみたいな人がいる！〉〈何の授業だろう…あれ？日本人？〉〈トイレは日本と同じかな？〉



〈節水ポスターがずらり！〉



〈ピアノ使えるのかな？〉

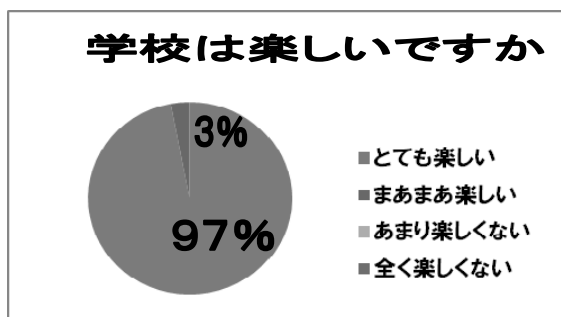
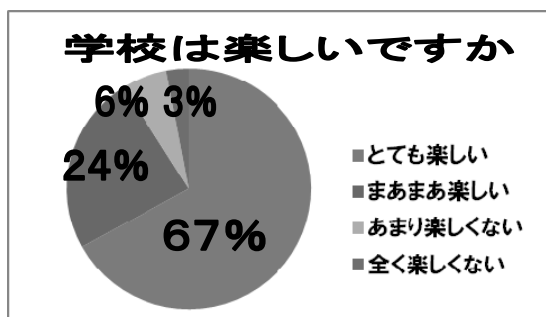


〈先生がいる！一体何しているの？〉



- ・エルサルバドルの6年生と学級の児童に実施したアンケート結果の一部(本時後の授業で活用)

(左：本校 6-2 児童、右：エルサルバドルの児童)



あなたが幸せな理由は何ですか

- 1 友達がいる 毎日楽しい 14 人
- 2 家族がいる 5 人
- 3 学校に行ける 3 人

- 1 学校がとても楽しい 3 人
- 2 学校で勉強できる
よりよい教育を受けられるから
先生がいるから 各 2 人

[アンケートの結果に対しての児童の反応]

児童はお互いの結果を見比べながら、特に幸せの感じ方が自分たちとは違っていることに、新鮮な驚きを感じているようであった。

(4)参考文献

特になし

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

「先生、この間テレビでエルサルバドルがサッカーの試合に出ていたよ」「インターネットで世界の国の幸福度ランキングを調べたら、日本は43位だったけど、エルサルバドルは11位だった！」

この発言は、単元を終えた後に普段の生活の中で児童が気づき、私に教えてくれた言葉である。また、国語の授業で意見文を書いた際、「日本は発展途上国などに比べて安全で豊かに暮らすことができる。学校にも通い勉強できる。その当たり前だと思っていたことに感謝をして、将来のために今は自分も勉強を頑張りたい。」と書く児童がいた。

この実践をととして、児童の国際理解への関心は高まり、また自己の生き方を見つめ直すきっかけとなったと考えられる。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

[成果]

上記8に記載した児童の反応及び変化のとおり、この実践をととして、児童の国際理解への興味は大いに高まった。また、フォトランゲージという手法をととして、多様な文化や生活、価値観があることに気づき、児童自ら多面的に物事を見て考える力が着実についたと考える。

特に、学習する前は中米の国だと聞いて、「貧しい」「発展途上」と、マイナスなイメージをもっていた児童が多くいたが、さまざまな視点からエルサルバドルを知っていくことによって、この国の良さに気づき、国際協力の大切さを考えることができた。さらに、その比較から自分達の教育環境の良さを知り、改めて自分の学ぶ姿勢を見直す児童もいたことが、一つの成果であると考えられる。

[課題]

「私自身が教材となり、まずは世界の現状を知ってもらいたい」という思いから実践計画を立てたため、今回の授業は教師主導の情報発信や活動が多かった。今後、他の先生方がこの単元を共通して実践していけるようにするために、また総合の学習の時間で求められる「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力の育成」や「探究的な学習」を踏まえた実践にしていくために、年間指導計画に沿った内容の改善が必要であると痛感した。

[改善策]

児童自身が興味のある国を様々な方法で自分で調べ、友達と交流を図る活動を取り入れる。その中で世界の課題に目を向けた児童の気づきを拾い、教師側からその1つとしてエルサルバドルという国を紹介し、世界の現状と課題やその解決策について考えていく展開を作りたい。

「誰にでもできる普遍性」「各教科、領域のねらいに沿った単元計画」を、来年度以降の自身の課題として、今後も授業実践に取り組んでいく。

10 教師海外研修に参加して

今回の研修をととし、まずは私自身が全く無知であったエルサルバドルという国の文化や生活について、国が抱える問題や日本の国際協力について等多くのことを学び、見識を広めることができた。

また、現地の人々と触れ合う中で、学校に通う子ども達の目がキラキラと輝いていたこと、ホームステイでお世話になった方の温かさや思いやりは、万国共通であることを改めて実感した。違いを知り、多様な価値観をどう認め合い協力していくかが、子どもたちにとっても世界にとっても課題である一方、忘れてはいけないのが、この人間としての共通性、普遍性ではないかと考えながら、今回の国際理解という授業実践をさせて頂くことができた。

この貴重な体験を、これからの未来を担う子どもたちに伝え、国際貢献のあり方や自己の生き方を考えさせながら、私自身も共に学び続けていきたいと考える。



EL SALVADOR

学校名：宮代町立須賀小学校

氏名：柿沼 秀典

[担当教科：小学校全教科]

● 実践教科等：総合的な学習の時間、
道徳、社会

● 時間数：7時間

● 対象生徒：小学校6年生

● 対象人数：79人

1 単元名

ともに生きる ～われら地球人～

2 単元の目標（ESD の能力・態度）

- 国際社会の一員として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする態度を育てる。
(批判的に考える力・他者と協力する態度・進んで参加する態度)
- 多くの人々の助け合いや協力によって成り立っている日々の生活や、自分が生きていることに対して感謝する心情を養う。
(つながりを尊重する態度)
- 開発をめぐるさまざまな問題と自分達の生活とのつながりを理解する。
(多面的、総合的に考える力)
- 外国の人々や文化への理解を深める。
(コミュニケーションを行う力)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・世界には様々な文化があることに気づく【多様性】
- ・日本の食生活は、外国から多くの食料を輸入することで成り立っていることに気づく【相互性】
- ・富の所有や食料の分配に関して、世界の各国、地域間で格差があることに気づく【公平性】
- ・国際社会の平和と発展や環境の保全には、一人一人が国際社会の一員として、自分達にできることを実践していくことが大切であることに気づく【連携性・責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

世界には、貧困・飢餓、紛争・戦争、環境破壊、人権侵害といった問題がある。だが、島国である私達日本人にとって、それらは遠い世界で起きていることと感じている人も多いだろう。しかし、それらの問題は、日本の社会のあり方や私たちのライフスタイルとも深く関係している。

商業的な利益や経済的な効率ばかりを優先する社会のあり方は、弱い立場に追いやられる人々を生み、現在と未来の全ての命にとって大切な地球環境を破壊してきた。

文化・民族・宗教などを異にする世界の人々がともに生きることのできる公正な社会をつくっていくことが、これからの大きな課題である。そのために、私達ひとりひとりが、こうした問題を知り、自分の問題として考え、その解決に向けて行動していくことが必要である。

本単元において、教師の実体験をもとに外国への理解を深めるとともに、開発をめぐるさまざまな問題と自分達の生活とのつながりを知り、国際社会の一員として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする態度を育てていきたい。

(2)児童観

本学級では、普段、外国の方に会うのは外国語活動指導の ALT だけという児童がほとんどであり、外国に精通している児童はいない。ただ、旅先などで外国の方を見たことがあるという児童は多い。現代において、日常生活の中で外国の方に会うことは珍しくない。将来、児童に外国の方と臆することなく接して欲しいと願い、朝の会などで外国のことを話題にしたこともあった。修学旅行先の箱根では、外国からも多くの観光客が来ていた。児童はすれ違ったときに話しかけようとしても始めは躊躇っていたが、一度声を掛けて気さくに接してもらえたことをきっかけに、知っている言葉でコミュニケー

ションをとろうとしている児童が多くいた。本単元において、エルサルバドルの文化に触れることで外国への理解を深めるとともに、自分達と違う文化を受容し、尊重しようとする心情を育てていきたい。

自分達と世界のつながりにおいて、5年生社会科「工業生産と貿易」の学習で、日本の輸出入の様子について統計資料を活用して調べ、主な輸出入品や輸出入相手先、その特色や変化を学習している。6年生の1学期には、総合的な学習の時間において環境問題を調べてきた。また、学習したことを生かして、キッズ ISO14000プログラム初級編に取り組み、約1ヶ月間家族でPDCA サイクルを行いながら、エコ活動に励んだ。プログラム終了後も、月に1回メーターチェックの日を設け、エコライフに取り組んでいる。そのため、どのような行動が地球環境に優しいか理解している児童が多く、意識をもってエコ活動を継続している児童もいる。本単元において、児童が開発をめぐる問題と自分達の生活との関わりを結びつけられるように授業を展開し、国際社会の一員として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする態度を育てていきたい。

(3)指導観

第1時では、児童に外国への興味関心を湧かせるために、児童にとって身近である教師が外国に行ってきたという体験談をする。「エルサルバドルでどのような時間を過ごしたのか」を写真や映像で紹介していくことで、文化の多様性に気づくことができるようにする。

第2時では、日本とエルサルバドルの地理的特徴や文化を比較して、日本の特色を理解させる。そして、外国人に対して日本のことを説明できるように、日本を紹介する手紙を書く。

第3時では、とうもろこし粉を使用したエルサルバドル伝統食「プブサ」づくりを行う。児童のイメージする主食とは、米、パン、麺である。プブサを食べることを通して、とうもろこしを主食としている国も多く、とうもろこしが主食になり得るということを体験的に学ぶ。ここでの学びが、現実的な方法ではないが、日本をはじめとした先進国が家畜の餌にしている大量のとうもろこしを支援に回せば、世界の飢餓を終わらせることができるという認識へとつながると考える。

第4時では、世界の各国、地域の状況差を理解させるために、「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを行う。富の分配では、一人一枚ずつあるはずのバスケットを「富裕層、中間層、貧困層」の富に応じて分けていき、富の分配がどれだけ不平等であるかを実感できるようにする。世界の各国、地域間の格差を学ぶために、児童にとって身近である食料を題材にする。

第5時では、飢えと先進国のつながりを明らかにしていく。毎年、世界人口を養うことのできる穀物が生産されているのにも関わらず、先進国が飼料として大量に消費していることが一因で飢える人々が存在するという現実。また、さまざまな経済活動に起因する環境問題が食料不足に結びつくことも学習し、自分にできることは何かを考える際に選択肢を広げられるようにする。

第6時では、青年海外協力隊OBの方を講師に招き、「なぜ日本が支援をするのか」「途上国の人々の暮らし」を専門的な視点から講義していただく。さらに、「なぜ青年海外協力隊を志したのか」も講話していただき、児童の今後の生き方を考えさせたい。

第7時では、国際社会の一員(地球人)として、世界で起きている様々な問題の解決に向けて、自分達にできることを考える。

5 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	① 開発をめぐる様々な問題について関心をもち、その解決に向け、自分にできることを実践しようとする。 ② 日々の生活や生きていることに感謝しようとする。 ③ 外国の文化に関心をもち、理解しようとする。	① ウェビング図で貧富の格差や環境問題の構造的なつながりを考えている。 ② 開発をめぐる様々な問題の解決に向け、自分達にできることを考えている。	① (フォトランゲージなど)資料から、必要な情報を読み取ることができる。 ② 物事を関連付けていくために、ウェビング法を用いている。	① 世界には、様々な文化があることを知る。 ② 開発をめぐる様々な問題と自分達の生活とのつながりを理解する。
評価方法	児童の活動の様子 感想用紙	学習シート 感想用紙	学習シート	学習シート 感想用紙

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	エルサルバドルを知ろう	○世界には、いろんな文化があることを知る。	1 写真を通して、エルサルバドルがどんなところでどんな生活をしているのか知る。 2 フォトランゲージを行い、エルサルバドルと日本のつながりを知る。
2	日本を紹介しよう	○日本の特色を理解し、説明できるようにする。	1 エルサルバドルと日本の比較を通じて、日本の特色に気づく。 2 エルサルバドルに日本を紹介する手紙を書く。
3	エルサルバドル伝統食「プブサ」づくりに挑戦	○エルサルバドルの食文化に触れる。 ○第5時の学習につなげるため、とうもろこしが主食になることを知る。	1 とうもろこし粉を使用したエルサルバドル伝統食である「プブサ」をつくり、試食する。
4	世界がもし100人の村だったら	○世界には多様な言語があることを実感する。 ○世界の国々の大まかな位置関係をつかみ、各大陸の大きさや人口を概観する。 ○世界全体の富の分配がどれだけ不公平であるかを体験する。	1 世界の言葉で「こんにちは」 2 大陸ごとに分かれてみよう 3 世界の富はだれが持っているの？ 4 太りすぎの人、栄養の足りていない人、中間の人、今にも死にそうな人の割合 5 「世界がもし100人の村だったら」の読み聞かせ ※DEAR発行教材「世界がもし100人の村だったら」を使用
5	日本と世界とのつながり	○世界の飢餓状況は自分達の生活とつながりがあることを理解する。 ○地球人として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする心情を育てる。	1 日本はどんな食料を多く輸入し、どこの国から輸入しているのか理解する。 2 日本が多くの食料を輸入していることが地球環境にどのような影響を及ぼしているのか考える。
6	世界で活躍する日本人	○世界の様々な問題の解決に向けて、現地の人々とともに生きている日本人がいることを知る。 ○海外青年海外協力隊OBの生き方に触れ、今後の自分の生き方を考える。	青年海外協力隊OBの講話を聴く。 1 日本が支援を行う理由 2 現地の人々や生活の様子 3 青年海外協力隊に応募した動機
7	地球人としてわたし達にできること	○開発をめぐる問題を、国際社会の一員として共に解決していこうとする態度を育てる。	1 これまでの学習を振り返り、世界で起きている様々な問題の解決に向けて、自分達にできることを考える。 2 単元を通しての感想を書く。

7 授業事例の紹介

小単元名【 日本と世界とのつながり 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月10日(水)第5校時

(イ)実施会場 6年2組教室

(ウ)本時の目標

○世界の飢餓状況は、自分達の生活とつながりがあることを理解する。

○国際社会の一員として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする態度を育てる。

(エ)指導のポイント

①世界とのつながりを考えさせるにあたって、児童にとって身近である食料をテーマにした。

②導入でどんな食料を多く輸入しているかをクイズにすることで、児童の興味関心を高める。

③「ハンガーマップ2013(国際連合世界食糧計画作成の写真)」を利用し、世界には飢餓で苦し

んでいる人がいることを視覚でわかるようにした。

④第7時で自分にできることは何かを考える際に選択肢を広げられるように、日本が食料を多く輸入している現状が地球温暖化等の環境問題につながっており、食糧不足へと発展していくことを学習内容に取り入れた。児童には、やや難しい内容であるため、グループワークで自由に発言させながら、核心に迫るものは板書し、共通理解を図ったり詳しく説明したりして学習を進めていく。

⑤まとめでは、開発をめぐる問題を自分達の問題と認識させ、国際社会の一員として共に解決していこうとする態度を育てるために、東日本大震災時には先進国だけでなくカンボジアの地雷原の村など途上国からも義援金をいただいた話をする。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	1 日本における食料輸入の現状	・「とうもろこし」「豚肉」「牛肉」「果物」「えび」「小麦」の中から輸入上位3品を考え、A3の白紙に記入する。 ・なぜ、とうもろこしが輸入額1位なのか考える。	グループ	○順位付けの理由が明確になるように、自分達の食生活やスーパーの売り場を思い起こさせて考えさせる。 ○ペットフードのとうもろこしを児童に見せ、とうもろこしを家畜の餌にしていることに気づけるようにする。	
展開 30分	2 世界の飢餓状況	・ハンガーマップ2013を見て、世界には飢餓で苦しんでいる人々がいることを知り、マップから飢餓の多い地域を読み取る。	グループ	○色が濃い部分はどこかを問いかけ、アジアやアフリカで飢餓が深刻であることに気づけるようにする。	
	3 餓えの仕組み	・世界には、世界人口全てを養える食料が生産されているにもかかわらず、なぜ餓える人がいるのか考える。	一斉	○生産された穀物の使い道を問いかけ、とうもろこし等を家畜の餌にしていること(自分達の食生活)が飢餓を生み出す一因になっていることを結び付けられるようにする。	
	4 日本は食料を主にどの国から輸入しているか	・「とうもろこし」「豚肉」「牛肉」「果物」「えび」「小麦」「大豆」のカードを、日本が多く輸入している国のマップの上にそれぞれ貼る。	一斉	○栄養が十分でない国からも輸入していることを確認する。	
	5 食物輸送による環境負荷	・飛行機や貨物船による輸送が、地球環境にどのような影響があるのか考える。	グループ	○主体的な学びとなるようにグループで行わせるが、意見があまり出ない状況であれば一斉指導に切り替える。 ○既習の地球の異変を思い起こさせ、二酸化炭素の排出がどのような問題へとつながっていくのかを考えられるようにする。	
					
		グループワークの様子			
	6 地球温暖化と食料不足の関係	・5の学習活動で考えたことを発表する。	一斉	○5の学習活動で話し合った内容をもとに、地球温暖化⇒砂漠化	◆世界の飢餓状況は自分達の食生活と

			・異常気象⇒食料不足までつながる過程を板書し、そのつながりを児童が視覚で理解できるようにする。 ○平成26年2月の大雪で、埼玉県も大きな被害を受けたことを紹介し、自分達の生活と結び付けられるようにする。 ○著書「世界がもし100人の村だったら」で掲載されていることを自分達の問題として認識させたい。	関わりがあることを理解できたか。 (学習シート・感想)
まとめ 5分	7 共助について	・東日本大震災時、カンボジアの地雷原の村から届いた義援金のお話を聞く。 ・授業の感想を書く。	一斉 ○自分達の生活を犠牲にしても、日本を思いやる慈悲深さを感じ取らせたい。	◆国際社会の平和と発展や環境の保全に関心をもてたか。(感想)

(2) 授業の振り返り

【 ○良かった点 ▲改善点 】

- 飢餓は環境問題など様々なことが複雑に絡み合っていることを考えられる教材・学習展開であった。エコ活動に取り組む必要性を実感できた。
- 「世界には餓えて苦しんでいる人がいるのにも関わらず、先進国が家畜の餌として穀物を輸入していること」や「日本は栄養不足の人口の割合10%前後の国も含めた多くの国から食料を輸入していること」に対して、児童は、違和感を抱いたり、普段の生活に有難みを感じたりした。
- 東日本大震災時、自分達の生活を犠牲にしてまで支援をしてくれた人々がいたことを知り、困っている人を助けたいという気持ちが芽生えた児童もいる。
- ▲学習内容が多かったために、児童の思考の深まりが浅かった。活動ごとに児童の感想を聞き、全体に広げていくことで、議論が深まったと考えられる。本時は学習内容5で終了し、6以降は次時に回すべきであった。
- ▲学習活動が多岐にわたり、本時の目標「世界の飢餓状況は、自分達の生活とつながりがあることを理解する」を十分に達成することができなかった。感想用紙に本時のねらいとは違い、輸入に関する内容を書いている児童もいた。教師自身がねらいを明確にもち、まとめていく必要があった。小単元名も「餓えのしくみ」等の方が適切だったのかもしれない。
- ▲本時では飢餓をテーマにして、途上国と自分達のつながりを考えた。注意しなければいけないことは、授業で扱った内容は飢餓を生む一因に過ぎないこと。また、飢餓も様々な問題の1つに過ぎないこと。切り捨てた情報も多い。偏った情報を与えてしまったのではないかという不安が残る。

(3) 使用教材

グループワーク使用教材ハンガーマップを切り取り、日本が中心になるように配置転換して貼付。A1サイズに拡大。拡大したものに飛行機と貨物船のイラストを貼付。

ハンガーマップ2013
(国際連合世界食糧計画作成)
黒板掲示用は、ポスター印刷で拡大

乾燥とうもろこし
(ペットショップで購入)

黒板掲示用に「とうもろこし」「豚肉」「牛肉」「果物」「えび」「小麦」「大豆」のイラストカード

(4) 参考資料等

- ・『世界から飢餓を終わらせるための30の方法』
特定非営利活動法人ハンガー・フリー・ワールド編集、合同出版(2012年)
- ・『世界の半分が餓えるのはなぜ?—ジグレル教授がわが子に語る飢餓の真実』
ジャン・ジグレル著、合同出版(2003年)
- ・『ハンガーマップ2013(世界の飢餓状況)』 国際連合世界食糧計画HPよりダウンロード

- ・農林水産物輸出入概況2013年(平成25年)確定値 (農林水産省 国際部国際政策課)
- ・『毎日新聞』4月16日「<東日本大震災>カンボジア・地雷原の村から義援金とお守り」

8 単元をとおした児童生徒の反応/変化

【 児童の感想を一部抜粋 】

- ・日本がどれだけ裕福な暮らしをしているのかがわかった。食べ物十分に食べられなかったり、電気、ガス、水道がなかったりする暮らしをしている人が世の中にはたくさんいるのだから、物を「あって当然」と思っただけなのではないかと思った。これからの世の中が平等になるといいなあと思う。
- ・最初のうちは「なんか授業が増えたなあ」と軽い気持ちだったが、1時間、2時間とこの授業を受けてみて気持ちが変わった。貧困の国のことを詳しく知り、実際にいった人からも話を聞き、そこに暮らす子ども達が東日本大震災で被災した日本人のことを心配し励ましてくれたことを知り、他の国の人を想う気持ちを学んだ。貧困の国は他にもある。その国のために私達ができることはまずこの国を知ることだと思う。
- ・学習を通してたくさんことを学んだ。1つ目は、世界に餓えている人がいるのは先進国にも原因があること。2つ目は、自分が幸せだということ。3つ目に身近にできることがあるということ。国産の野菜を買う、マイバッグを持って行くなどのそんな簡単なことで地球を救えるならやっていく。
- ・世界には餓えている人がいることを知った。そして、それらの改善策を自分達でできることもわかった。これまで自分はあまり募金をしなかったが、「してみよう」という心が芽生えた。少しでもいいから世界で困っている人達を支援したい。
- ・今まで、「途上国に住んでいる人は貧しくてとってもかわいそうだ」「世界が平等にならないかな、でも自分にできることなど何1つないな」とばかり思っていた。でも青年海外協力隊OBの方や先生の話聞いて、「貧しいから不幸せなんかじゃない」「自分にも今できることがある」と思えることができた。私はこれからの人生、この学習のことを忘れずに生きていきたい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【 単元を通して 】

- ・本学級39人中38人の児童が、単元の目標「国際社会の一員として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする心情を育てる」を達成できたと感じられる感想を書いていた。全員達成できなかったことは残念であるが、3学期の社会科の学習の中で、青年海外協力隊のインタビュー等を紹介し、国際社会の一員としての自覚を芽生えさせていきたい。
- ・児童の感想より、児童の価値観を揺さぶることができたと感じている。当たり前だと思っていたことが世界的視野で見れば、決して当たり前でないことを知り、単元の目標であった「日々の生活に感謝しようとする心情を養う」ことのできた児童が多くいる。

【 教職員の反応 】

- ・「途上国の生活の様子を知りたい」「大人でもあまり知らないことに対して児童がどのような反応を示すのかに興味があった」等の理由から、授業を参観して下さった先生方がいた。国際理解教育は教科に明確に位置付けられていないので実践するには教師自身の努力が必要になってくる。だが、国際協力に興味のある先生が意外と多いことを知った。長期休業中の校内研修で、本単元で使用した教材等を児童役になって体験していただき、手法を伝達していけば、国際理解教育が広まっていくであろうという手応えを得ることができた。

10 教師海外研修に参加して

8の児童の感想等から世界の様々な問題について学ぶことは、豊かな心の育成において大変意義のあることだと考えている。だが、今回は単元を複数の教科で構成することで授業時数を確保したが、単一教科や教科外で実施しようとすると授業時数の確保が困難な場合がある。教務主任や各教科主任と連携して、教育課程の中に位置づけていくことが必要である。

研修に参加して得た1番は人脈である。これまで学校で国際理解教育を行うことや話題にすることに抵抗があった。悩みを共有できる仲間ができたことは一生の財産である。また、国際理解教育は教員になる前から実践したいとずっと思ってきたことであり、今回の実践で手応えを得ることができた。今後も本実践の反省を生かして、ともに生きることでできる公正な地球社会づくりに参加するための教育を行っていく。そして、世界中の人々が笑顔で暮らせる世の中を、将来を担う子ども達とともに考え、行動し、創っていく覚悟である。



EL SALVADOR

学校名：所沢市立北野中学校

氏名：山口 翠

[担当教科：社会]

● 実践教科等：地理的分野

● 時間数：5時間

● 対象生徒：中学2年生

● 対象人数：35人

1 単元名

断ち切ろう、負の連鎖！

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

- ① エルサルバドルの学習を通して世界の多様な国や文化について興味を持ち、その違いを尊重する態度を育てる（つながりを尊重する態度）
- ② 「100人の村」の活動を通して世界の中の日本の立場を理解した上で世界の課題へ目を向け、よりよい解決策を考えようとする（批判的に考える力）
- ③ 「負の連鎖」を断ち切る解決策を話し合う活動を通して、仲間と協力して課題に取り組みやり遂げる楽しさに気づかせる（コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度、批判的に考える力）
- ④ 国際協力の現場で働く人々の生き方に触れ、これからの自分が国際社会にどのように関わっていくかを考えるきっかけを作る（進んで参加する態度、つながりを尊重する態度）

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・エルサルバドルの食、言語、習慣、教育などについて知る【多様性】
- ・途上国エルサルバドルと先進国日本の関わりを知る【相互性】
- ・どこの国であっても生命、教育の機会、健康などが保証される必要性に気づく【公平性】
- ・様々な課題に取り組む中で仲間の意見を聞き、自分の意見を表現しようとする【連携性】
- ・よりよい国際社会を作るために日本(自分)に何ができるか考える【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

社会科の教科の目標に「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ということが大きなねらいとして学習指導要領に記されている。グローバル化が進み、様々な地球規模の問題が深刻化する中で、世界の多様な文化や国の様子に触れることはこれから国際社会を生きるために必要不可欠なことであると考えます。前年度に世界の諸地域についての学習は終えており、気候やそれに合わせた生活の様子など世界全体の地理的な特色に触れているため、今回の取り組みはより、世界の課題や問題点に焦点を当てることを意識した。また、生徒にとって全く知識のないエルサルバドルという国を教師が見てきたことを通して学ぶ中で、多様な文化を尊重しあうことや、日本が世界の中で果たす役割の大切さを伝え、自分から関わっていく態度を養うことを目標に挙げた。

(2)児童生徒観

事前にエルサルバドルを知っていた生徒は学年の中に一人もおらず、地図帳で確認しても中米にある小さな国と捉えた生徒が大多数を占めた。夏休みが明けるとどんな国だったか、何を食べたか、何をしてきたのかと質問する生徒も多く、教師が見てきた国に対する関心は高いと感じた。前年度の世界の諸地域の学習の際には一つ国を選んで文化や歴史的遺産についてのレポート作成を行った。また、道徳の実践でも映像資料でスラムに住む子どもたちの生活に触れている。しかしそれらの問題に対して国際協力の現場や活動の内容などまで目を向けた実践はできていない。発展途上国の生活環境の悪さや食糧問題、平均寿命の違いなどデータとしての知識はあるが、自分たちの生活とつながっている意識は低い。課題へ取り組む意欲や協力性はあるため、知識を活用し自分たちの言葉で話し合い、課題を解決していく方向へ導きたい。

(3)指導観

今回の実践では ESD の能力である他者と協力し、コミュニケーションを行うことを授業の中に意識的に取り入れた。具体的には5, 6人の小グループで話し合って意見を出し合ったり、グループで意見をまとめたり、その意見を全体で共有したりする時間を多くとり、自分の言葉で表現する場面を作った。また、エルサルバドルの国について伝える際には数多くある写真や動画の中から発展途上国の課題に触れながらも、人々の笑顔や生活の様子、美しい風景などプラスの面も多く紹介するようにした。生徒たちが知っているアニメの話題や食べ物の違いなどから興味を持たせ、違うことの面白さや日本とのつながりが意識できるようにした。エルサルバドルに関する学習を通して世界の様々な国に興味を持ち、世界の諸問題を解決していこうとする姿勢を育てていきたい。

5 評価規準

観点	社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象について の知識・理解
評価規準	エルサルバドルの人々の生活を通して世界の多様な文化や国の様子について関心を持ち、意欲的に捉えようとする。	エルサルバドルや国際社会における課題について多面的・多角的に考察し、解決策を話し合う際にはその過程や結果を自分の言葉で表現できる。	エルサルバドルの人々の生活や、国の様子に関する様々な資料から有用な情報を適切に選択している。	エルサルバドルや国際社会における様々な課題について理解し、JICA の支援や国際協力についての知識を身に付けている。
評価方法	学習の様子・発言 授業の感想 話し合いの参加	ワークシートの記述 発言の内容	学習の様子 ワークシートの記述	発言の内容 授業の感想

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	この写真、何が見える？	さまざまな国の様子を知る 外国の風景や人に対する先入観に気づく エルサルバドルに興味を持つ	・各班1枚(計6枚)の写真に気づいたことを書き込んでいく⇒服装、風景、建物、持ち物などに注目させる ・その写真にタイトルをつける⇒読み取ったことをまとめるようなタイトルを話し合う ・各班の写真を見せながら読み取った内容と自分たちが考えたタイトルを発表する ・全部の写真に関する質問を出す
2	エルサルバドルを知ろう	エルサルバドルの国の様子を知る	・パワーポイントやクイズを通してエルサルバドルを知る⇒国の場所、言葉、食事、町の様子、病院、学校などから日本と違うこと、同じことを知る ・エルサルバドルの課題を知る
3	世界がもし100人の村だったら	世界の縮図を体験することで課題に気づく	・100人村のアクティビティに参加する 男女の割合、子どもと高齢者の割合、大陸ごとの人口の割合、主な言語、識字率などカードに記入してある人物になって体験する⇒気づいたことや感じたことをワークシートに記入して発表する
4	断ち切ろう、負の連鎖	学校にいけないことの連鎖を断ち切る方法を考える	・学校に行けないことで生じる連鎖を考える ・負の連鎖を抜け出すための方策を話し合う ・班ごとに発表する
5	世界で活躍する日本人	JICA の支援を知る 国際協力の方法を知る	・JICA の活動やエルサルバドルで活躍していた日本人の映像を見る ・それぞれの支援の内容や成果を知る

7 授業事例の紹介

小单元名【 断ち切ろう、負の連鎖 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月9日(木)第5限

(イ)実施会場 2年1組教室

(ウ)本時の目標

- ・学校に行けないことによって生じる問題を理解し、派生する問題を通してその後どのような影響があるかを気づかせる(思考・判断・表現)(知識・理解)
- ・教育を受けられない状況が様々な因果関係によって成立していることを理解し、この状況から抜け出すためにどうすればよいか考える(思考・判断・表現)

(エ)指導のポイント

- ・カードを利用して負の連鎖が目に見えるようにした
- ・「治安が悪くなる」というキーワードから前時までのエルサルバドルの学習と関連付けるようにした
- ・グループの話し合い活動を取り入れることで協力して課題に取り組みやすい雰囲気を作った

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動【予想される反応】	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	100人村の確認	・代表者3名が3種類のアラビア語で表記されたコップの液体を選んで飲む ・字が読めないことの不便さを思い出す	一斉指導	字が読めないということが学校に行けないということにつながっていることを気づかせる	関心を持って取り組んでいるか(意欲)
展開 35分	学校に行けない原因と結果がどのような連鎖になっているか考えさせる	・学校に行けない理由を周囲の人と相談して考える【近くにない・お金がない・親の代わりに働く・時間がない】 ・12枚のカードを原因⇒結果になるように並べる	グループ活動 話し合い	・原因⇒結果になるように自分たちでカード(付箋)を付け加えてもよい	発言(意欲) 班のカード(思考) 話し合いの様子(表現)
 カードの内容 学校にいけない・収入が少ない・読み書きができない・食料が買えない・仕事ができない・働くための技術や能力が身につかない・十分な栄養が取れない・収入の安定した仕事に就けない・学校に行く時間がない・子どもが親の手伝いをしなければいけない・自分の子どもも学校に行けない・病気になりやすい 代表のグループが黒板に並べる					
		・「治安が悪くなる」というカードを連鎖に組み込む(派生してどんな問題が起きるか気づく)		・エルサルバドルで起きている問題に近づく ・負の連鎖が他の問題も引き起こすことに気付かせる	発表の様子(思考・表現)
 手が止まるグループには治安が悪いとは具体的にどのようなことが起きることだろう?と考えるヒントを与える。生徒から出たイメージや言葉から話し合いが進むように導くように心がける。					
		【ルールを教えてもらえないから治安が悪くなる・食料を買うお金がないから盗む・つかまると学校に行けない・親がいないと生活できなくて犯罪を起こす治安が悪くなると大きな紛争につながる】			

□評価 A…他の人の意見を聞き、誰がどのような方法で連鎖を断ち切るのか述べられる B…他の人の意見を聞き、連鎖を断ち切る方法が述べられる C…他の人の意見を聞き、授業の感想が書ける				
	連鎖を断ち切るために誰が何をすればよいのかを考えさせる 各班で発表する	・負の連鎖を断ち切るための解決策を班で話し合う 【食料を援助する・医者を派遣する・学校にボランティアで教えてくれる人を雇う・給食を配る・字を教えてくれる場所を増やす】		・具体的に誰がどんなことをすればよいのか明確にしてプリントに記入させる ・話し合いが進まない所に支援に入る
まとめ 10分	連鎖を断ち切るための組織としてのJICAを紹介する	・JICAについて知る		エルサルバドルで出会った日本人を次回紹介する。掲示物でまとめたものを利用する

(2) 授業の振り返り

100人村の授業を行ってから時間が空いてしまったので字が読めない不便さの確認から実践した。学校に行けない原因は生徒の中からいくつも意見が出て全体の知識として共有できていた。連鎖を考えさせる取り組みになると何通りもある答えのため悩む班が多かったが、意見を出し合ってカードを並べる姿が見られた。「治安が悪くなる」のカードを連鎖に組み込むことは貧しいから盗む、食糧が手に入らないから奪うなど決めつける雰囲気にならないよう配慮が必要だと感じた。ただ、このカードを入れたことでエルサルバドルの状況と近づき、問題の複雑さを生徒が実感したように思う。班で考えて発表させるときに言葉だけでなく、誰が何をするのかを目に見える形で残しておくで最後に個人のまとめを書かせるときに手が進まない生徒への支援になると感じた。

(3) 使用教材

授業で使ったワークシート

断ち切ろう、負の連鎖！

＜活動の目標＞①学校に行けないことによって生じる問題を理解する
②学校に行けない状況から抜け出すために何をすればよいのか考える

＜活動の内容＞

① 配布したカードの「学校に行けない」を一番目に書いてそこからどのように他のカードがつながっていくか考えよう。
※項目が足りない場合や他のつながりが考えられる場合は白紙の紙に書いてつなげていくこと

【カードの内容】

学校に行けない	仕事ができない	学校に行く時間がない
収入が少ない	働くための技術や能力が身につかない	子どもが親の手伝いをしなければいけない
読み書きができない	十分な栄養が取れない	自分の子どもも学校に行けない
食料が買えない	収入の安定した仕事に就けない	病気になりやすい

② もしこの連鎖の中に「治安が悪くなる」というカードが入れるとしたらどこに入るか考えよう
※項目が足りない場合や他のつながりが考えられる場合は白紙の紙に書いてつなげていくこと

③ 負の連鎖を断ち切るために何が必要か考えてみよう

➡

を断ち切る！

➡

を断ち切る！

◎今日の活動を通して感じたこと、分かったことを書こう

組 番 名前

<参考資料(本時以外で使用した教材)>

[小単元1 フォトリンゲージで使用した写真]

これらの写真をA3に拡大したもの(カラー印刷にラミネートをかける)と同じ写真の白黒印刷したもの、模造紙を4分の1に切ったものを生徒に配布し、白黒のものを模造紙に貼らせて写真から気づいたことや見えたものをペンで書きこませる。

JICA 職員と現地警官



小学校の子どもたち



小学校の休み時間



ププサ作り



市場の様子

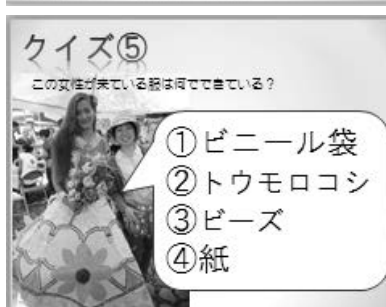
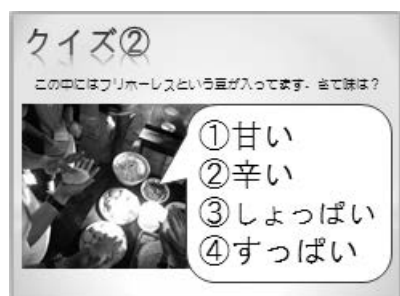


スチットの街並み



[小単元2 エルサルバドルを知ろう パワーポイント資料(一部)]

エルサルバドルの風景や食べたもの、体験してきたものを紹介する。国旗を黒板に掲示したり、藍染のスカーフなどを持っていき興味を引くような導入を心がけた。アニメの歌を歌ってくれた場面や小学校の交流の様子は動画で紹介した。



(4)参考資料等

- ・『ワークショップ版・世界がもし100人の村だったら』開発教育協会発行(2003年)
- ・『国際理解教育実践資料集』JICA地球ひろば編集、埼玉県立総合教育センター監修(2014年)
- ・国立教育政策研究所「ESDの学習指導課程を構想し展開するために必要な枠組み」

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_leaflet.pdf> (2016年1月4日アクセス)

・国立教育政策研究所 教育課程研究センター

「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料(中学校 社会)」

<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/chuu/02_chu_shaki.pdf> (2016 年 1 月 4 日 アクセス)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

【エルサルバドルを知る】の感想

- ・中米の日本と言われると親近感が湧きました。他にも日本との共通点が知りたい
- ・日本とエルサルバドルの交流する場はないのかな、と気になりました
- ・エルサルバドルの人との会話で笑い声が起きていて、私もいつか外国の人と仲良く話してみたい

【100人の村だったら】の感想

- ・私たちの普通の生活は世界ではほんのわずかの人ができない生活なんだとわかった
- ・世界に住む人全員が協力しないと恵まれない人が増えてしまうのがよくわかった
- ・エネルギーの使い方や富の分け方など平等でないことが多く、村として考えたらおかしいと思います
- ・世界の中でも恵まれている僕らは食べ物などを大切にしないといけないと思います
- ・自分が子や空爆を心配しないで生きていることや健康なことに感謝して生きていきたいです

【断ち切ろう、負の連鎖】の感想

- ・自分たちだけでは連鎖は止められなくても他の国の力を合わせれば止められると分かった
- ・連鎖を断ち切るには知識が身についている人など周りの人の協力が必要だと感じた
- ・日本は恵まれているけど見て見ぬふりをせず考えることが大切だと思います
- ・他の国が困っているときは国境関係なく助け合うことが大切だと思いました

単元全体を通して話し合い活動を意識して取り入れた結果、普段の授業でも少人数のグループで意見を聞きあったり教えあったりする姿が増えてきた。また、エルサルバドルの生活を知ることによって日本との違いに興味を持ち、さらに他の国へ関心を向ける生徒もいた。自分たちに何ができるかは規模が大きすぎる話のように感じて具体的な行動には表れないが、恵まれている環境で生活しているからこそ、世界で大きな役割を持っていると気づき、今を大切に生きて将来何かをしたいと感じた生徒が多かった。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

生徒たちの活動の様子、ワークシートの記述内容や意見交換での発言内容から、「2 単元の目標」に記載した目標が達成状況について検証し、今後の改善案を検討した。

[成果]

- ・生徒たちがエルサルバドルの国を知ることで世界の他の国への関心も高まった(目標①)
- ・100人村の取り組みから世界の諸問題を知ることによって自分たちの生活を振り返ることができた(目標②)
- ・5～6人のグループで課題に向き合い話し合う活動を意欲的に取り組み生徒が増えた(目標③)
- ・写真や映像から楽しく外国の人と関わり、日本人が活躍する姿に憧れを持つ生徒がいた(目標④)

[課題]

- ・話し合い活動の際に意見を言う人が偏る場面があった(目標③)
- ・自分たちができる具体的な活動がなかなかイメージできなかった(目標④)
- ・エルサルバドルに行った今年だけでなく毎年ここで得た資料などを使って実践ができるように年間の単元計画を立てることが必要

[改善案]

- ・恵まれていて幸せ、で終わらない活動や具体的に支援をしている姿を知識として伝える授業を行う
- ・ワークシートを配るタイミングは早い方が生徒が1時間の見通しができる
- ・話し合い活動では6人グループでも机は4つにして生徒同士の距離を短くする工夫が必要
- ・1年生の世界の諸地域の単元での実践と3年生のODAに触れる授業での実践を計画している

10 教師海外研修に参加して

全ての研修プログラムを通して多くの学び、多くの出会い、多くの気づきがあった。自分が途上国の現実を見てみたい、それを生徒に伝えられる授業がしたいと参加した研修の中で出会った人たちとのつながりは一生の財産になると感じている。誰かの疑問をみんなで共有し、同じものを見ても違う視点を持つ仲間刺激を受け、自分の言葉で語り合った時間はESDを常に体感していたのだと思う。研修で学んだ授業方法やたくさんの生きた資料をこれからも授業で活用し、実践を続けていきたい。



EL SALVADOR

学校名：木更津市立金田小学校

氏名：田仲 永和

〔担当教科：小学校全教科〕

● 実践教科等：総合的な学習の時間

● 時間数：6時間

● 対象生徒：小学校3年生

● 対象人数：23人

1 単元名

日本とエルサルバドルは似ている？似ていない？

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

- ・エルサルバドルと日本の共通点と相違点に目を向け、様々な角度から物事を考える力を育てる。
(多面的・総合的に考える力)
- ・エルサルバドルについて知り、異文化への興味・関心を深める。
(進んで参加する態度)
- ・エルサルバドルと日本の関わりを通して、自分たちの生活を振り返る。
(つながりを尊重する態度)
- ・エルサルバドルの現状を知り、自分にできることを考える。
(他者と協力する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・エルサルバドルの学校生活と日本の学校生活の違いに気付く。【多様性】
- ・貧困が犯罪を、貧困が犯罪を招く連鎖する状況を知る。【相互性】
- ・エルサルバドルと日本との関係から、自分とのつながりに気付く、共生の大切さを知る。【連携性】
- ・エルサルバドルの問題に向き合い、今の自分にできること・したいことを一人一人考える。【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

現代の国際社会に生きる限り、外国との関わりは避けられず、どんなに平凡な日々を過ごしていても、日常生活の中で外国と無関係に生きることは不可能と言ってもよいほど国同士の関係は近くそして複雑になってきている。

しかしながら、普段の生活の中で、外国に目を向けることは稀であり、意識してアンテナを張っていないと情報は入ってこない。平和で公正な世界を願う子どもたちを育てるためにも、＜(1)知る。(2)考える。(3)変わり、行動する。＞の3ステップを視野に入れ、本学年では、特に(1)～(2)のステップを中心に単元を構成したい。

国際理解教育という、他国との違いを知る、つまり異文化理解のイメージが強い。小学校学習指導要領解説(外国語活動、総合的な学習の時間)には、次のような記述がある。

【外国語活動】内容

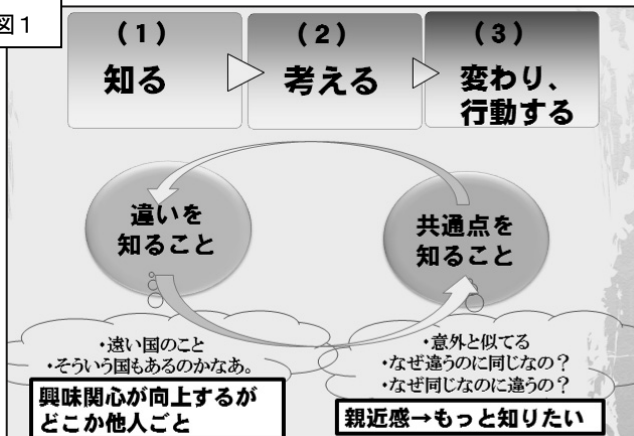
- (1)外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、・・・(後略)
- (2)日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。
- (3)異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、・・・(後略)

【総合的な学習の時間】内容の取り扱いについての配慮事項

(7)の解説

(前略)・・・広く様々な国や地域を視野に入れ、外国の生活や文化を体験し慣れ親しむことや、衣食住といった日常生活の視点から、日本との文化の違いやその背景について調査したり追究したりすることが重要である。

図1



学習指導要領の記述では「違い」が大きく強調され、「共通点」という視点がない。図1に示したように違いだけを学習すると、他国に一時的に興味はわくのだが、どこか他人事で意欲は持続しないのではないかと考えている。自分自身のこれまでの指導を振り返ってもそのような経験がある。

そこで、違いだけではなく、共通点を知ることにもメインとしてとらえ、この双方をスパイラル的に学習していけば、「意外と似ている」と親近感を感じた上で、「なぜ～は違うのに～は同じなの？」「なぜ～は同じなのに～は違うの？」と、より深く知りたいという主体的な学習意欲を引き出せるのでは、と考えた。

(2) 児童生徒観

本校児童に「行ってみたい国はどこか？」とアンケート調査をしたところ、欧米諸国がほとんどで、ブラジルW杯の影響で、ブラジルやアルゼンチンが数人いる程度であった。開発途上国と言われる国に行ってみたいと答えた児童はほとんどいなかった。

外国人と接する機会は学校(ALTの先生)か英会話教室に限られ、学区内で外国人を見かけることはほとんどない。それゆえ、外国と言えばTVなどで知るヨーロッパやハワイなどのイメージが強く、開発途上国に興味を持つ児童が少ない。JICAの組織や活動について知っている児童も皆無であった。

(3) 指導観

小学校3年生という発達段階も考慮し、写真・動画・体験をたくさん活用したい。共通点を学ぶのにはまず、けん玉などの遊び体験から入り、日本のアニメなどがエルサルバドルでも人気だということが分かる動画も見せる。さらに、久保隊員(小学校教諭)のインタビュー「エルサルバドルの子も日本の子もいいところは同じ」という場面から、違いばかりに視点が行きがちな児童に、共通点も考えさせたい。

また、ランキングシートを活用し、自分がやってみたいことを考え、話し合う時間を取りたい。一度だけでなく、数回活用することにより、児童の思考の変化が分かるので評価にも活用したい。

5 評価規準

観点	自己の生き方	知識・理解	他者や社会との関わり	関心・意欲・態度
評価規準	エルサルバドルと日本の共通点・相違点から、自分の生活を振り返ることができたか。	エルサルバドルの現状や日本の協力について知ることができたか。	世界の問題を知り、自分に今できることや将来したいことを考えることができたか。	積極的に意見を発表したり、友達と話し合いをしたりすることができたか。
評価方法	ワークシート記述 ランキングシート	ワークシート記述	ワークシート記述 ランキングシート	発言 グループ活動様子

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	エルサルバドルってどんな国？	エルサルバドルの概略を知り、これからの学習の土台を作る。	・似てる度%(1回目)を書く。 ・先生が何のためにエルサルバドルに行ってきたかを知る。 ・国の概要(場所・大きさ・国旗・食べ物・人の印象など)をパワーポイントで学ぶ。 ・スペイン語で簡単なあいさつを練習する。
2	エルサルバドルと日本は何がちがうの？	日本とエルサルバドルの違いが分かる写真を見て、異文化への興味関心を高めるとともに、自分たちとの違いに気づく。	・日本との違いが分かる写真でフोटランゲージを行い、グループごとに発表する。 ・フोटランゲージの写真やその他の写真を見てエルサルバドルの問題を知る。 ・「自分が今やってみたいこと」のランキングを、グループごとに話し合って決める。 ・似てる度%(2回目)を書く。
3	エルサルバドルと日本は似ているところもある？	遠く離れたエルサルバドルにも、自分たちとの共通点があることに気づき、親近感を持つ。	※7 授業事例の紹介(前半) 参照

4	エルサルバドルと日本の子どもたちは似ている？似ていない？	エルサルバドルの学校生活を知り、金田小学校との相違点や共通点に気付く。	※7 授業事例の紹介(後半) 参照
5	エルサルバドルの人たちは本当に幸せなの？	厳しい環境のなかでも、幸せに感じている人がいることを知り、幸せについて考える。	・エルサルバドル内戦について知り、それとともなって起こるエルサルバドルの様々な問題を知る。 ・学習の感想と似てる度%を書く。(5回目)
6	日本の協力を知り、自分にもできることを考えよう。	JICAの協力には様々な種類があることを知り、自分たちにもできることを考える。	・主にエルサルバドルのボランティアの活動を知る。 ・ランキングシートで自分たちがしたいことをグループごとに話し合い、その理由を発表する。 ・学習の感想と似てる度%を書く。(6回目)

7 授業事例の紹介

小单元名 【エルサルバドルと日本は似ているところもある？】

【エルサルバドルと日本の子どもたちは似ている？似ていない？】

ハンモックで遊ぶ金田小の児童

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月18日(火)第3～4限

(イ)実施会場 3年1組教室

(ウ)本時の目標

- ・遠く離れたエルサルバドルにも、自分たちとの共通点があることに気づき、親近感を持つ。
- ・エルサルバドルの学校生活を知り、金田小学校との相違点や共通点に気付く。

(エ)指導のポイント

- ・写真や動画資料の活用。
- ・けん玉、コマ、ヨーヨーで遊ぶ時間を十分に取る。
- ・＜似てる度%アンケート＞＜幸せ度アンケート＞結果を活用。
- ・ランキングシートの活用。

＜似てる度%＞日本とエルサルバドルがどれくらい似ているか「0～100」の数値で表したものだ。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 ① 10分	・似てる度%集計結果を示す。 ・クイズ問題を出す。	・前時の似てる度%の平均値から学習問題をたて、似てる度%を再度決める。(3回目) ・クイズ形式で、エルサルバドルの気候・火山・地震や、日本とエルサルバドル共通のおもちゃを知る。	一斉	○パワーポイント資料を活用する。	
展開 ① 30分	・けん玉などのおもちゃを配る。 ・アニメ動画をTVで再生する。 ・パワーポイント資料を見せる。	・けん玉などのおもちゃで自由に遊ぶ。 ・ドラゴンボールのアニメを視聴し、日本の文化がエルサルバドルで受け入れられていることを知り、親近感を感じる。 ・小学校教諭久保隊員の写真を見せ、次時の学習問題を作る。「日本とエルサルバドルの子どもはどこが同じ？」	個別 一斉	クイズ:どれがあるでしょう。 ① コマ回し ② たこあげ ③ けん玉 ヨロヨロもありません！ 小学校の先生(サンタヘマ・カトリック学校) くら 青年海外きょうりょくたいいん にいがた県出身。 かながわ県で先生をしていた。 日本とエルサルバドルの子どもたちは 同じところがあります。 どんなところが同じなんだろう？ ちがうところを考えるのもわずれずに。	
まとめ ① 5分	・ワークシートを配り書かせる。	・ワークシートに本時で学んだことをメモする。	個別		◎違いだけでなく、共通点に気づき、親近感を持つことができたか。

導入 ② 10分	・児童の予想を板書する。	・前時にたてた学習問題から、自分なりの予想を持ち、全員発表する。	一斉	○発表に抵抗がなくなるよう、予想をワークシートに書いたら隣同士で意見交換の時間を設ける。					
展開 ② 25分	・フォトランゲージ用の写真を配る。	・予想が正しいか確認するため、学校の写真でフォトランゲージを行い、共通点・相違点を見つけ、グループごとに発表する。	グループ	○限られた時間でたくさんの気づきが得られるよう写真を3種類使う。					
	・ビデオを再生する。	・久保隊員のインタビュービデオを視聴し、エルサルバドルと日本の子どもの良い所の共通点を知る。	一斉	○動画にテロップをつけて、大事なセリフを逃さないようにする。	◎自分のできることを考えることができたか。				
	・ビデオを再生する。	・学校訪問ビデオを視聴し、エルサルバドルの学校の雰囲気をつかむ。		○共通点だけでなく、相違点もしっかりつかめるようなビデオや画像を使用する。	◎学校生活の違いと共通点があったか。				
	・アンケート結果を示す。	・金田小学校とエルサルバドルの1000円(10ドル)の使いみちや、幸せ度アンケート結果を見て、自分たちとの共通点・相違点を考える。		幸せ度アンケート 「あなたは今幸せですか？」 <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%;"> エルサルバドル サンタヘマ校 小学校5・6年生 【とても幸せ】 【幸せ】 </td> <td style="width: 50%;"> 金田小学校3・4年生 【とても幸せ】 【幸せ】 </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center; font-size: 2em;">97%</td> <td style="text-align: center; font-size: 2em;">88%</td> </tr> </table>		エルサルバドル サンタヘマ校 小学校5・6年生 【とても幸せ】 【幸せ】	金田小学校3・4年生 【とても幸せ】 【幸せ】	97%	88%
エルサルバドル サンタヘマ校 小学校5・6年生 【とても幸せ】 【幸せ】	金田小学校3・4年生 【とても幸せ】 【幸せ】								
97%	88%								
まとめ ② 10分	・ランキングシートを配る。	・グループごとに話し合い、前回並べたランキングシートを並べかえる。	グループ						
	・ワークシートを配る。	・学習の感想と、似てる度%を書く。(4回目)	個別	※幸せ度アンケートは「とても幸せ」「幸せ」と答えた児童の割合。					

(2) 授業の振り返り

単元の第2時では違いに焦点を当てたフォトランゲージを行った。似てる度%のクラス平均値は約40%であった。第3～4時終了後の似てる度%は72%と、大きく上昇する。自分たちとの共通点を見つけ、うれしそうな児童の姿が見られた。やはり、共通点探しは親近感を抱くキーポイントだと感じた。

久保隊員のインタビュー

ーでのセリフ「日本もエルサルバドルも子どもは同じところがある。」を取り上げ、何が同じか予想させたことは、児童の反応も良く、成功だったと思う。「前向き」「頑張る気持ち」「勉強が分かったと喜ぶこと」が同じ良さということだったので、改善点はそのことがより分かるような写真や動画を用意することである。



(3) 使用教材

- ・エルサルバドル国旗(教室に掲示)
- ・エルサルバドルの小学校で使われている教科書
- ・エルサルバドル産コーヒー(第1時でチャック付ビニール袋に入れて香り体験。)
- ・けん玉、ヨーヨー、コマ(第3時で体験)
- ・ハンモック(校庭の木に取り付け、体験)
- ・藍染めシャツ(これを着て授業)
- ・藍染めスカーフ(手作り。教室黒板上に掲示)
- ・エルサルバドル代表サッカーユニフォーム(これも着て授業)

- ・青年海外協力隊インタビュービデオ(久保隊員・小学校教諭)
- ・ランキングシート→
- ・ワークシート↓

3年 国さいわい ワークシート①②③
番号 () 氏名 ()
エルサルバドルと日本のちがいは？

エルサルバドルと日本の共通点(同じところ・にているところ)は？

今日の感想(気づいたこと・考えたこと・ふしぎに思ったこと・びっくりしたこと・にる理由)

日本とエルサルバドルにる度 %

3年 国さいわい ワークシート④
番号 () 氏名 ()
自分がこれからやってみたいと思ったこと、その理由も書きましよう。

エルサルバドルの人たちにメッセージをどうぞ！(どんなことを伝えたいかな？)

まどめの感想(気づいたこと・考えたこと・ふしぎに思ったこと・びっくりしたこと・にる理由)

日本とエルサルバドルにる度 %

ランキングシート
やってみたいことに
ならべてみよう！

・こまている国への金活動にしよういよくする。

・ニュースで外国のことをやっていたら、しっかし見る。

・外国人に会ったら話しかけてみる。

・外国の人たちに自分たちのことを伝えるといよくする。

・外国語を勉強する

・外国の品物を調べる。

・家づくに今勉強したことを伝える。

・しょうらい、外国に行くためにちよ金する。

・外国のことを本やインターネットで調べる。

- ・フォトランゲージ用写真(街の風景・人物・学校など)



【第2時】①街中のファーストフード ②バラックで暮らす貧しい人 ③鉄格子の窓と銃を持つ警備



【第4時】①校庭で遊ぶ子ども ②小学校授業中の様子 ③休み時間のおやつタイム

1000円あったらどうする？

エルサルバドル5・6年生

- ・おもちゃを買う
- ・ちょ金する
- ・おやつを買う
- ・シャーペンを買う
- ・食べ物を買う・デザートを食べたい
- ・学校で必要なものを買う
- ・くつを買う・服を買う
- ・よい家を買うためにためる
- ・家族にあげる
- ・役に立つものを買う
- ・路上にいる子どもたちにあげる
- ・友だちのために使う
- ・自分のハンバーガーを買う

金田小3・4年生

- ・おかしを買う
- ・文ぼう具を買う
- ・本を買う
- ・おもちゃを買う
- ・ボールを買う
- ・ちょ金する
- ・旅行で使う
- ・クレーンゲームをする

幸せの理由

エルサルバドル

- ・友達や家族がいるから。
- ・勉強することができるから。
- ・学校に来ることができるから。
- ・遊ぶことができるから。
- ・いのちがあるから。
- ・プールに行けるから。
- ・スポーツができるから。
- ・けんこうだから。

※幸せでないと思った理由

- ・友達やみんな、自分と遊ばないから。

日本(金田小)

- ・友達や家族がいるから。
- ・勉強することができるから。
- ・学校に来ることができるから。
- ・遊ぶことができるから。
- ・いのちがあるから。
- ・スポーツ(野球・スキー)ができるから。
- ・けんこうだから。
- ・相手がよるこぶのかわれい
- ・いろいろなものがあるし、平和だから

※幸せでないと思った理由

- ・いじめられたから
- ・まだ夢がかなっていないから
- ・一週間ゲームができないから
- ・うれいことかなしいことも持てない

幸せってなんだろう？

(4) 参考資料等

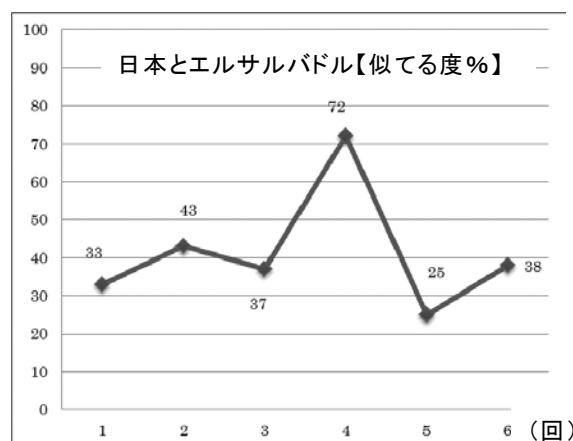
- ・『エルサルバドルを知るための55章』 細野昭雄・田中高(編著) 明石書店 2010年

8 単元をとおした児童生徒の反応/変化

授業ごとの似て度%の変化は右グラフの通りである。上がったりが下がりたりを繰り返していく。与えられる情報によって、いとも簡単にその国に対する印象が変わってしまうことが読み取れる。相違点探しの授業後には低くなり、共通点探しの授業後には高くなる。この「ゆさぶり」が学びを深めると思う。

第5時にはマフィアの実在による社会の負の連鎖を取り上げたため、大幅に下がっている。

また、下表に単元終了後の児童の【感想】と、【これからやってみたいこと】をまとめた。



感 想	これからやってみたいこと
・お店や学校があるし、売っているものもほとんどが同じようだった。 ・エルサルバドルに JICA の人が30人以上もいて、びっくりした。 ・エルサルバドルには日本と同じような人がいたから、なぜマフィアがいるのか気になる。 ・なぜ学校でおかしなものを食べていいのか。 ・コンビニがあることがわかった。 ・日本の車が多くてびっくりした。 ・コーラとか日本と同じでびっくりした。 ・マフィアがいて危険なのに幸せでびっくりした。 ・自分と同じでサッカーが好きでびっくりした。 ・すごく貧乏なことがわかった。 ・色々エルサルバドルのことが知れてうれしかった。 ・行ってみたいと思っていたけど、マフィアの話聞いて、ちょっと行きたくなかった。	・エルサルバドルの勉強をもっとしたい。 ・外国の人たちに自分たちのことを伝えたい。知ってもらいたい。 ・幸せ度が高いエルサルバドルに行ってみたい。 ・エルサルバドルに行って、実際に人を見てみたい。実際にどんな生活かを見てみたい。 ・幸せの理由をつきとめたい。 ・スペイン語を勉強したい。 ・いろんな国をインターネットで調べてみたい。 ・JICA の人を応援したい。 ・お金持ちになっている人なことをしたい。 ・JICA に入って困っている人を助けたい。 ・募金活動に協力したい。・日本を紹介したい。 ・JICA になって日本のやり方を教えてあげたい。 ・エルサルバドルの学校で授業を受けてみたい。同じところ違うところを体験してみたい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

○成果と●課題

- 児童の感想で「幸せの理由をつきとめたい」という児童がおり、探求心をかきたてることができた。
- 他学年(4・5・6年)でも1時間ずつ授業を実践したことで、児童の反応を比較し、当該授業の内容の難易度を調整したり、学習活動を精選したりすることにつながった。
- 教職員の授業参観や質問があり、授業内容に反映することができた。
- 本単元の目標は「自分にできることを考える」であったが、単に考えるだけで終わり、それ以上の自主的な活動にまで高めることができないことが、ワークシート記述やランキングの活動観察から分かった。改善策として、「変わり、行動する」ことまでを目標とした授業を単元末に設定するか、全学年の中での位置づけを明確にし、高学年で「変わり、行動する」ことができるように改善したい。

10 教師海外研修に参加して

成田空港を出発してから、エルサルバドル現地研修を経て、成田空港に帰着するまでがメインの研修であり、学ぶことも一番多いのではないかと参加前は考えていたが、実際は違った。海外研修を終え、授業実践や報告書などについて、共に参加したメンバーと意見交換する中で新たな発見があったり、更なる悩みが出てきたりしたからだ。

本研修へ参加しようと一歩踏み出したことで、そのチャレンジに値する大きな収穫があった。同じものを見てきたはずのメンバーが、全く違う視点や流し方で授業実践をした。きっとメンバー全員、「こうしたら自分の伝えたい思いが伝わるのではないかと、試行錯誤しながら考えたはずである。メンバーの中にも「共通点」と「相違点」があり、それを互いに認め合い高め合うまたとない機会になった。私にとって授業を考える過程は、楽しくもあり苦しくもあったが、それが一番の収穫だったと考えている。



EL SALVADOR

学校名：館山市立神戸小学校

氏名：下村 圭

〔担当教科：小学校全教科〕

- 実践教科等：総合的な学習の時間
- 時間数：7時間+
- 対象生徒：小学校4年生
- 対象人数：25人

1 単元名

つながろうエルサルバドル！

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

藍染め作品づくりなどを通して国際理解を深め、自分たちの生き方を見直し、今の自分にできることを考え、行動化することができる。

（つながりを尊重する態度）（コミュニケーションを行う力）（進んで参加する態度）

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・日本とエルサルバドルとの文化、地理、経済、歴史等の違いに気づく。【多様性】
- ・地球の動植物を生かす自然環境やエネルギーは限りあるもので、資源を大切にしなければいけないことを理解する【有限性】
- ・世界には教育を受けられず、そのためにまずしい暮らしをしている人がいることを知り、恵まれた環境にいる人が援助することの価値を学ぶ、【公平性】
- ・開発途上国の問題について考え、今の自分にできることを考え、行動する。【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

国際理解教育の推進は、「総合的な学習の時間」における重点項目の一つにあげられている。本校は千葉県最南端部に位置し、海、山などの自然にめぐまれたのどかな環境である。子どもたちが外国人と関わる機会は学校やその他の場面も含めて多くはない。しかし、中学を卒業すれば社会へ出ていき、多くのものを見、知ることになるだろう。世界はグローバル化が進んでおり、南房総地域で育った若者も決して無関係ではない。本校のある館山市を含む南房総地域は過疎化が進んでおり、「就職口が少ない」→「人口流出」の悪循環が生まれている。このような現状に危機感を抱くとともに、いっそ「南房総から世界へ」向かえる人材を育てることも可能なのではないかと考えた。そしてそれは日本のこれからの国際社会での進路とも合致すると考える。資源にとばしい我が国が、途上国へ輸出できるのは国際協力に長けた優秀な人材であろう。人類が競争ではなく共生への道を探る中、日本のありようとして大切なことだと考えた。そのような中で、子どもたちにとって、自分たちとは違う貧しい途上国が現実にいることを学ぶことは21世紀を生きる彼らにとってとても価値あることだと考える。そこから「自分たちにできることは何だろう」と考える心を大事にし、育むことこそ国際化社会に必要な教育だと考える。

本単元は、自身がエルサルバドルへ研修に行った際に体験したことを紹介する形で始められる。現地で撮影した写真を使ったフォトランゲージ・現地で集めたおもちゃや楽器、ハンモックなど・藍染めハンカチづくり・ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」・「ESDクエスト」らを使用し、日本とエルサルバドルの共通点・相違点について、実際に自分が触ったり、遊んだり、体験できるものを通して理解し、やがて開発途上国が抱える諸問題に気づき、自分たちに何ができるか考え、行動していくことを目指す。この学習を通して、子どもたちが世界各国の人々と共生していこうとする態度を養っていききたい。

(2)児童生徒観

受け身の子が多い。未知のものに関して、保守的な自分のものさしを使って対応している印象

を受ける。目の前にあるものに強く興味を示す子が多い。夏休みにエルサルバドルを訪れたことを予想させる便りを送ったので、そこで興味をもってくれた子が多かった。

(3)指導観

- ①身の周りのもの、実際の体験と合わせて具体物や実際の活動を取り入れて授業を展開していきたいと考えた。
- ②はじめは分かりやすい親近感から、自己の問題意識へ。その自然な流れは、後で振り返って他者への拡散行動にも活用できるよう意識させていきたいと考えた。
- ③枠のみのワークシートを用意し、毎回学習課題を書き込みながら同じ枠で学習を積み重ねた。
そこでは、子どもたちの疑問から学習課題がスタートし、分かったことや感じたことを書き留めた後、次の疑問から新しい学習課題が生まれ、次時につなげていくという形をとった。
- ④本学習過程では実際に何かをする、ということにこだわった。ささいなことでも、行動化してこそ意味があると考えゴールを設定した。

5 評価規準

観点	課題設定の能力	自己の生き方	学び方・ものの考え方	(問題解決の能力) ※7 時限以降
評価規準	エルサルバドルと日本との違いから、開発途上国が抱える諸問題について気づき、問題意識を持つことができる。	開発途上国のために、自分たちに何ができるか考えることができる。	開発途上国の諸問題について表現するためにどのような方法が適しているかを考えている。	(国際協力の大切さを、相手に応じて自分が伝えたい情報を取捨選択してまとめ、伝えようとしている。)
評価方法	ワークシート 発言	ワークシート 発言	ワークシート 発言	(発言) (制作物)

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	エルサルバドルってどんな国？	エルサルバドルの地理的条件、言語、文化に触れ、異文化への興味関心を高める。	クイズ フォトランゲージ 通貨紙幣、パスポートなど
2	エルサルバドルと日本の同じところを見つけよう！	おもちゃなどに触れ、主に日本と同じところ、似ているところを見つける。	おもちゃ、楽器、ハンモック、教科書 現地で服用した薬
3	藍染めハンカチづくり	藍染めハンカチづくりを通して日本とのつながりを感じる。	講師を招いてのワークショップで藍染めハンカチをつくる。
4	エルサルバドルと日本のちがうところを見つけよう！	エルサルバドルと日本のちがいが、エルサルバドルのかかえる問題について知り、感想や考えを出す。	フォトランゲージ
5	世界がもし100人の村だったら	国家や民族の多様性と世界の貧困、教育の格差などに気づく。	ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」の実施
6	日本とちがうまずしい国のために何ができるだろうか	JICAのボランティアの活動を知り、日本のはたらきについて考える。	JICAボランティアの写真・映像等
7	今のぼくたちに何ができるだろうか	途上国や地球環境のために自分たちに何ができるか考える。	＜授業の詳細を7に記載＞ 教材「ESDクエスト」の実施
十 今 後 の 展 開	広める計画を立てよう！	途上国や地球環境のための活動の計画をたてる。	役割分担し、劇・展示・読み聞かせ等で周知をはかる

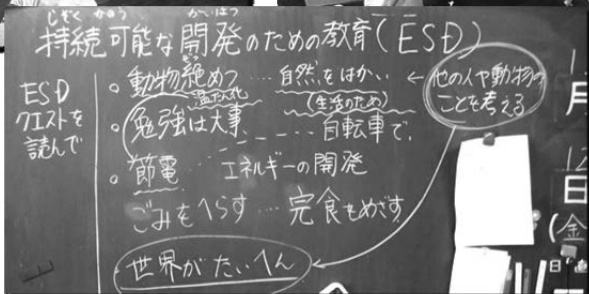
7 授業事例の紹介

小単元名【今のぼくたちに何ができるだろうか】

(1) 指導案

- (ア)実施日時 12月12日(金)第5・6校時
 (イ)実施会場 4年教室
 (ウ)本時の目標 途上国や地球環境のために自分たちに何ができるか考えることができる。
 (エ)指導のポイント 教材「ESDクエスト」を行って得た知識をもとに、自分の問題として考え、話し合いをしながら決めていく。実際に何をするか、決めたことを次回以降行動に移していく。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5	学習課題提示	今のぼくたちに何ができるだろうか			開発途上国が抱える諸問題について気づき、問題意識を持つことができる。 (ワークシート・発言)
展開 40	教材「ESDクエスト」を行う	「ESDクエスト」を見ながら思ったこと、意見を出していく。	一斉	分かったこと、気づいたことはワークシートに書き込ませる。	
		 地球の温暖化、生き物の絶滅、まずしい国や戦争の続く国。世界中でこれらの問題はつながっていることがわかるね。 「みんなの毎日が未来になる」 できることから始めていこう。		 【「ESDクエスト」の内容】	
25	自分たちに何ができるか考える	各班で意見を出し合い、ホワイトボードを使って提案していく。	班	発表した内容は黒板に掲示し、全員が確認できるようにする。	開発途上国のために、自分たちに何ができるか考えている。 (ワークシート・発言)
		たくさん勉強する。 地球を汚さないようにゴミをなるべく出さない。  せつ電すること。 ごはんを最後まで食べてむだにしない。 			
		 持続可能な開発のための教育(ESD) ESDクエストを讀んで ・動物絶滅...自然をほかい...他の人や動物のことを考える ・勉強は大事...自転車で... ・節電...エネルギーの開発 ・ごみを15秒...完食もめが ・世界がたい1人			

15	現状を多くの人に知ってもらうことが大事で、君たちはそれができる存在だということに気づかせる。	意見をさらに出し合う。 今回の授業「つながろうエルサルバドル」で得た知識を自分の周りに広げていくことに決める。 ○ミニJICA地球ひろばをつくらう。 ○どの子にも興味を持ってもらえるようはじめは楽しんでもらって、途中からまずしい国の問題を明らかにしていくのが良いね。	一斉	
「世界を変えるために、自分のまわりを変える」「ぼくたちが未来をつくる」				
まとめ 5	本時の学習をまとめ、次時の展開を予告する。			
		エルサルバドルのことを知ってもらおう計画を立てよう！		
		本時の感想を書く。		開発途上国のために、自分たちに何ができるか考えている。 (ワークシート・発言)

(2)授業の振り返り

〔良かった点〕

- ・子どもたちが世界の諸問題に対して当事者意識を持って考える姿が見られた。
- ・「ESDクエスト」を体験したことにより、日常の細かな行動が自分のできる一歩になるという認識が持てたこと。「今は日々の勉強をいっしょうけんめいやる」という意見が出たのが良かった。

〔反省点〕

- ・「ESDクエスト」は改めて世界の現状を認識するのに効果的だった反面、それ以外・それ以上の考えを引き出しづらくさせてしまったかもしれない。
- ・いささか教師が引っ張る形になってしまったこと。

(3)使用教材 ・「ESDクエスト」データ(電子黒板に投影)

・ワークシート(右)

(4)参考資料等 『ESDクエスト』文部科学省 (2013年)

つながろうエルサルバドル！
____月____日(____) ____時____分

学年 _____
名前 _____

やったこと	わかったこと、気づいたこと

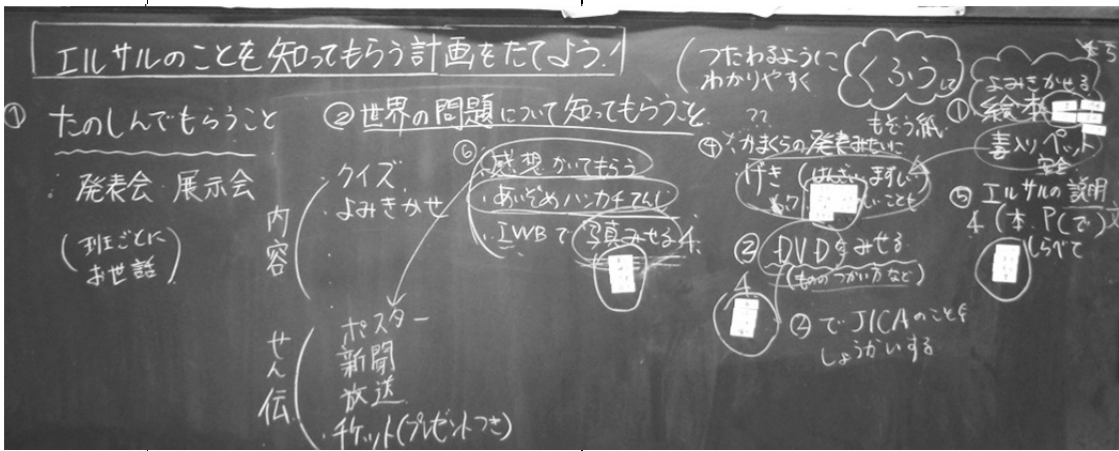
わかったこと・疑問 _____

あらいまわし _____

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

時限	小単元名	学習のねらい	感想
1	エルサルバドルってどんな国？	エルサルバドルの地理的条件、言語、文化に触れ、異文化への興味関心を高める。  【国旗やハンモックを教室に展示】	ふつうにじゅうを持っている人がいてびっくりした。 そんなに安全ではない。火山などじしんが多い国でくらしていくのが大変そう。 どんな生活をしているのか エルサルバドルでは日本のアニメが人気なのか じしんがあることやドラゴンボールというまんがあるところがいっしょなのがちょっとうれしかった。
2	エルサルバドルと日本の同じところを見つけよう！	おもちゃなどに触れ、主に日本と同じところ、似ているところを見つける。  【体験コーナーを設置した】	生水は飲まない(お腹をこわすから) サッカーが好きなのも同じ 昭和っぽいものがいっぱいあった。エルサルバドルは日本の過去の姿のよう。 木魚のような音が出る楽器があった。波のような音が出る楽器もあった。エルサルバドルにも日本と同じ遊び道具や楽器があつてうれしかった。 エルサルバドルの人は親切だと思った。

3	藍染めハンカチづくり	藍染めハンカチづくりを通して日本とのつながりを感じる。  【できあがった藍染めハンカチ】	あいぞめハンカチを作った時、楽しいかな～と思っていたら、本当に楽しくてうれしかった。ドラゴンボールといっしょで藍染めもやっているんだな。 日本の技術がエルサルバドルでも使われている。つながっている。他にもどんな技術を日本から学んでいるか。
4	エルサルバドルと日本のちがうところを見つけよう！	エルサルバドルと日本のちがいを、エルサルバドルのかかえる問題について知り、感想や考えを出す。 <内戦を描いた映画の紹介> 「サルバドル/遥かなる日々」 監督：オリバー・ストーン (1986年/アメリカ) 「イノセント・ボイス 12歳の戦場」 監督：ルイス・マンドーキ (2004年/メキシコ)	内戦をしてアメリカに逃げてきて仕事が見つからず帰ってきたがそこでも仕事が見つからなくてギャングになってしまった人がいることがわかった。内戦をもっとくわしく知りたい。 国によって、していることがちがって、まずしくらしをしている子、手伝いをしている子がいる。 ほかのどこかでもはたらいている人がいて、国が(世界が)成り立っていると思いました。 日本が平和な時に、エルサルバドルでは内戦が起きていた、ということ。内戦がおきて、まずくなってしまうととてもかわいそうな子供達だと思った。
5	世界がもし100人の村だったら	国家や民族の多様性と世界の貧困、教育の格差などに気づく。  【自分の国のあいさつをしながら言葉が通じる友だちをさがす】	世界には、字が読めない人が20%もいるんだな。学校にも行けずに、家の手伝いをしている人もいる。世界には車もない人がいる。 自分が字が読めない人だったらすごいいたいへんだったかもしれない。 世界にはまずしい人が本当にたくさんいることがあらためてわかった。中には自分の国の字が読めない人が20%いることがわかった。家がない人、車がない人がたくさんいる。 国によってかんきょうがちがう。字が読めない、学校にいけない子がいる。子どもなのはたらいて家族のためのお金をかせいで、学校に行きたいのに働かされている。他の国ではちがうげんじつがある。食料をたくわえられて、学校に行けて、字が読めるのが幸せだと思った。
6	日本とちがうまずしい国のために何ができるだろうか	JICAのボランティアの活動を知り、日本のはたらきについて考える。  JICAの援助 ボランティア36名(2014年現在) 	日本からまずしい国のためにわざわざ海をわたって行っている人がいる。 エルサルバドルはまずしいからそれを助けるためにエルサルバドルに行っているJICAはすごいと思いました。わたしもそんな人になりたいです。 ボランティアで行ってみたいくなったから大人になったらもしあったらできれば家族と行きたい。エルサルバドルはとても助かっている。なぜ家族を置いてまで行くのか。 お金あげるだけではダメなことがわかった。どうしたらJICAをおうえんするか、入れるのか。 まずしい学校、国のために、ボランティアで先生などその国のために働いている人がいると聞いてビックリした。 先生がみんなに答えを教えるみたいにみんながエルサルバドルの人々にお金や食べ物をあげていたら、エルサルバドルの人の力にならないことがわかった。

			JICA の人たちはほかの国のためにやり方などを教えてあげている。
7 まとめ	今のぼくたちに何ができるだろうか	途上国や地球環境のために自分たちに何ができるか考える。	＜自分たちにできることとして、下記板書のような「エルサルバドルのことを周りに広める」ためのアイデアが出された＞ 

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

[成果と課題①: 単元目標の達成]

本単元の最終授業では、途上国や地球環境のために自分たちにできることについて多数の意見が出され、今後、児童が実際に学んだことを周りに伝える活動を行うこととなった。このことから、単元目標の「今の自分にできることを考え、行動化することができる」をほぼ達成することができたのではないと思う。特に、具体物や体験を重視すること、本時の疑問が次時の学習課題となるよう毎授業の流れを構築したことが効果的に作用した。しかし、7(2)に記載したように、授業の途中でいささか教師がひっぱる形になったり、教材で想定されている以外の回答が出なかったという課題もあり、小単元一つ一つに子どもたちが主体的に取り組めるような丁寧な仕掛けをもっと盛り込むことができたならよかったと考える。

[成果と課題②: 授業のペース]

時期的にある程度集中させて実践したため、子どもたちの興味や集中が途切れることなく学習できた。今回はほぼ毎日授業を進めたが、感想や疑問を翌日の授業にすぐにフィードバックさせることに苦労したため、次回は一週間ほどのペースで行いたい。

[成果と課題③: 年間の指導計画への位置づけ]

また、本校の年間指導計画にどう位置づけていくか、その難しさが最大の課題と考えられる。今回の実践が、それっきりで終わらないようにするため、学年を越えた働きかけが必要になってくると思う。今考えられるのは、6年社会の国際協力の場面での授業が考えられるが、最終的には教育課程の中にしっかり組み込まれるよう働きかけていきたい。そういう意味でも、今回の実践が地方紙に取り上げられ、各学校、教員の意識を高めることに寄与できたのなら、そこにも意義があったのではないと思う。

10 教師海外研修に参加して

自分の考える「これからの教育」に、一歩踏み出せたと感じたのが7月の派遣前宿泊研修の時。それから半年で、その前の自分と比べるとずいぶん変わったと感じる。現地で関わることでできたエルサルバドル人や JICA ボランティア、仲間との関わり、帰国してからの授業実践の難しさと充実感、どれも今の自分を形づくる大切な要素だ。これからの開発教育普及を自らの使命ととらえ、時間をかけても焦らず取り組んでいきたい。



授業についての新聞掲載
「国際支援の大切さ伝える」
『房日新聞』2014年12月25日



EL SALVADOR

学校名：千葉市立鶴沢小学校

氏名：元吉 佑樹

[担当教科：小学校全教科]

● 実践教科等：道徳・社会科

● 時間数：全6時間

● 対象生徒：5年生

● 対象人数：35人

1 単元名

- ・世界で活躍する日本人(道徳)
- ・わたしたちの生活と環境(社会科)

2 単元の目標 (ESD の能力・態度)

道徳

- ・日本とエルサルバドルの小学校の比較を通して、多様な文化や生活があることを知り、自分たちの生活と同じところや異なるところがあることに気づく。(多面的・総合的に考える力)
- ・エルサルバドルで活動する日本人の思いを知り、夢や目標の大切さについて自分の考えをもつ。(未来像を予測して計画を立てる力)

社会科

- ・エルサルバドルで防災教育を行う日本人の姿を通して、日ごろから防災意識を高めることの大切さに気づく。(多面的・総合的に考える力)
- ・エルサルバドルでの「カエルキャラバン」の活動を知り、自分たちの避難訓練と比較して考えることで、これからの防災について関心をもち、自分たちにできることについて考える。(他者と協力する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

A.日本とエルサルバドルについて、自分たちの生活と同じところや異なるところがあることに気づく【多様性】

B.エルサルバドルで活動する日本人の思いや願いに触れ、国際協力の大切さやそれを行う人の使命感について考える。【連携性】【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

本実践に関して、

道徳は学習指導要領の内容[第5学年及び第6学年]の「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」の(4)「働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役立つことをする」や、(8)「外国の人々や文化を大切に作る心を持ち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。」に該当する題材である。

社会科は学習指導要領の目標(1)「我が国の国土の様子、国土の環境と国民生活との関連について理解できるようにし、環境の保全や自然災害の防止の重要性について関心を深め、国土に対する愛情を育てるようにする。」に該当する単元である。ここでは内容(1)我が国の国土の自然などの様子に好いて、次のことを地図や地球儀、資料などを活用して調べ、国土の環境が人々の生活や産業と密接な関連をもっていることをかんがえるようにする」のエ「国土の保全などのための森林資源の働き及び自然災害の防止」を扱う。

本実践では、子どもたちがエルサルバドルをより身近に感じることができるよう、現地の小学校で活動する久保隊員と石田隊員を取り上げる。今回の研修では、日本の国際援助は、現地で働く隊員の方々の思いや願いによって支えられていることが明らかとなった。子どもたちにとって具体的に捉えづらい「国際協力」という事象は、現地で活動している隊員の方々の姿や言葉によって具体化されると考えた。「誰かの役に立ちたい」「人のために自分の力を生かしたい」という人の思いがあつて

こそ、国際協力が成り立つということを強く感じた。そんな人々の姿を知ることは、子どもたちにとって今の自分と比較する対象となり、これからの自分を考えるきっかけになるであろう。教師が見てきた小学校の様子や隊員の思いや願いを具体的に調べたり触れたりし、普段の生活と比較をしながらこれからの自分たちには何ができるか、について考えていく。

(2) 児童観

本学級の子どもたちは、テレビやニュースに触れる機会も多く比較的社会事象に対して関心をもっている。社会科の前单元「情報化社会と私たちの生活」では、情報は人の働きによって発信され、その発達によって社会が変わってきていることを学び、これからの情報化社会の一員として自分たちには何ができるか、一人一人が真剣に考えることができた。そのような子どもたちに、本実践を通して国際社会を生きる地球市民としての自覚を育て、そのような社会ではこれから何が自分たちにできるのかについて考えられるようにしていきたい。

(3) 指導観

「国際協力」という社会的事象は、子どもたちにとっては具体的につかみづらいものである。そこで本実践では、教師が実際に現地で会い、お話を聞くことができた久保隊員と石田隊員の2名の具体的な人物を取り上げ、子どもが学習材をより身近に感じることができるようになりたい。

久保隊員は道徳で扱い、現地の小学校と日本の小学校との違いを資料から明確に読み取らせた上で、久保隊員へのインタビュービデオを視聴する。インタビューの中で久保隊員は、現地へ赴任した理由を語る。なぜ、国際協力の分野に飛び込んだのか、隊員の生の声を聴くことで人の思いに迫り、これからの自分について考えることができるようにしたい。

石田隊員は、「カエルキャラバン」の活動と共に扱う。日本で行っている、「素早く逃げる」ことに重点を置いた避難訓練と、現地で行われていた防災教育を比較し、どうしてこのような違いがあるのか問題意識をもたせたい。その上で、現地では一人一人に当事者意識を持たせ、災害が起きた時には自分にできることを実行できるようにさせたいという隊員の強い思いがあることに気づかせたい。日本とエルサルバドルの防災教育の違いに触れ、これからの防災について考えることができるようにしたい。

以上のように本実践では、道徳と社会科を通してエルサルバドルで活躍する日本人の思いや願いに触れ、国際協力の現場について理解を深めるとともに、子どもたちが自分自身を振り返り、これからの国際社会を担う一員としての自覚を養いたい。

5 評価基準(7で扱う授業事例に対応)

観点	道徳的心情	道徳的判断力	道徳的实践意欲・態度
評価規準	世界で人の役に立ちたいという隊員の思いに触れ、自分の力を役立てようとするものの価値に気づく。	日本とエルサルバドルの違いと同じところに気づき、どちらも価値のあるものだという思いをもつ。	自分にできることを考え、みんなのために実行しようとする。
評価方法	ワークシート	ワークシート	発言・行動

6 単元の構成

時限	小单元名	学習のねらい	授業内容
1	(道徳) 世界で活躍する日本人	○多様な文化や生活があることを知り、自分たちの生活と同じところや異なるところがあることに気づく。 ○エルサルバドルで活動する日本人の思いを知り、夢や目標の大切さについて自分の考えをもつ。	*7 授業事例の紹介 参照
1	(社会科) 自然災害を防ぐ	○日本ではどのような自然災害が起きているのかを	・3.11のニュース映像を視聴し、東日本大震災について想起する。

		知り、災害を防ぐ方法について疑問をもち学習問題をつくる。	・近年日本で起こった災害について教科書で調べる。 ・多くの災害が起きていることから生活を守る方法について問いかけ、学習問題をつくる。
2		○国や市町村が災害を防ぐために様々な取り組みをしていることに気づく。	・千葉市役所から配信されている防災メールをもとに、地域で行われている災害を防ぐ取組について調べる。 ・地域ではどのような取り組みを行っているのかについて、調べたことをもとにして考える。
3		○自然災害から身を守るには、自分たちにできることを行う必要があり、それはどんなことがあるのかについて考える。	・エルサルバドルで行われている「カエルキャラバン」の様子と日本での避難訓練の様子を写真で比較し、フォトランゲージを行う。 ・エルサルバドルでは、子どもたちは逃げるだけでなく防災に関わっていることに気づく。 ・「カエルキャラバン」を推進している石田隊員について知り、過去の阪神淡路大震災の経験がもとになっていることに気づき、自分たちにできることをしようとする意欲をもつ。
4 ・ 5	↓	○「カエルキャラバン」を参考にして、災害が起こった時に自分たちにできることを実際に体験し、災害時に行う意欲をもつ。	・災害が起こった時、どのような活動が必要になるのか調べる。 ・けが人の搬送の仕方や建物の下敷きになってしまった人の救出方法を知り、実践する。 ・身近なものでできる応急手当の方法を知り、実践する。

7 授業事例の紹介

単元名【世界で活躍する日本人】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月22日(月)第2限

(イ)実施会場 5-2教室

(ウ)本時の目標

- 日本とエルサルバドルの小学校の比較を通して、多様な文化や生活があることを知り、自分たちの生活と同じところや異なるところがあることに気づく。
- 現地で活動する日本人の思いを知り、夢や目標の大切さについて自分の考えをもつ。

(エ)指導のポイント

- ・現地の小学校の様子を示した写真をホワイトボードに貼り付け、友達と会話をしながら自分たちの生活と比較できるようにした。
- ・久保隊員のインタビュービデオを視聴し、生の音声を通して人物の思いに迫ることができるようにした。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 3分		1. 世界で活躍する日本人にはどんな人物がいるか考える。	一斉	・日本人が様々な分野で活躍していることがわかるよう、多様な意見を認める。	
展開 10分		2. エルサルバドルの小学校について、写真を見て日本との違いを調べる。	個別	・ホワイトボードに写真を貼りつけ、数人と話をしながら調べること	・現地の小学校と日本との違いについて、資料から調べたことを話したり書いたりしている。
10分	・教師が実際に会った人物であることを知らせる。 ・どうして久保隊員が「活躍」しているのか、考える。	3. 久保隊員について知る。		・人物の様子が具体的に伝わるよう、活動の様子を示す写真や映像を活用する。	

5 分	4. 久保隊員へのインタビュービデオを視聴し、国際協力をするに至った思いについて考える。	【久保隊員のお話】 ・あえて「壁」にぶつかりに来た。目の前の子どもたちのために何ができるか、真剣に考えるために活動に参加することを決めました。子どもたちは、日本も現地も同じ。成長する意欲に溢れています。
	【インタビュービデオ視聴】 	
10 分	5. 国際社会で活躍するとはどういうことなのかについて話し合う。	
5 分	6. 学習の感想を書く	【最終板書】

(2) 授業の振り返り

[成果]

- ・教師自身が体験したことや出会った人物を教材化したため、子どもたちにとっても入り込みやすい教材とすることができた。
- ・ホワイトボードに写真を貼りつけたため、子ども同士の交流が生まれ、一人一人の視点を生かして日本とエルサルバドルの学校の違いを調べることができた。
- ・久保隊員のインタビュービデオは、画像だけではわからない人となりを伝える役割を担った。人物の思いや願いがより強く子どもたちに伝わり、ねらいに即した活用ができた。

[課題]

- ・ねらいをより明確にする必要があった。本時では久保隊員の思いを学習指導要領の内容1-(2)でも、4-(8)でも扱うことができる。そのため、明確なねらいを教師がもっていなければ子どもの視点がぶれてしまい、ねらいに迫ることができなと感じた。
- ・子どもにとって遠い存在であるエルサルバドルという国や国際協力を、より身近に感じることができるようにする手だてのさらなる工夫が必要である。

(3) 使用教材

1. 現地の小学校の様子が分かる写真(右)



2. 久保隊員の授業の様子・インタビュービデオ(右)



3. ワークシート(資料添付なし)

(4) 参考資料等…特になし

8 単元をとおした児童生徒の反応/変化

※報告書記載時点で、社会科の授業は未実施のため道徳の授業についてのみ記載

久保さんは、エルサルバドルの子どもたちに、勉強を教えた。 うまくいなくてももう戦いみようと思う気持ちに本当に強い んだなと感じることができました。また、日本人の子どもとエル サルバドルの子どもは以外と同じ気持ちを知ることができました。	感想①:本報告書 内「3. ESD(持続 可能な社会づく り)の視点」に記 載の B(連携性・ 多様性)に対応
久保さんは、外国の子どものために教えるにきてい すごいいいと思いました。うまくいかなかったらもう戦い、成長 していくのは、今の私にはできないかもしれないけど、いつか 私も外国にいて、たれかの役にたたいと思いました。	感想②:「3. ESD の視点」に記載 の A(多様性)に 対応
エルサルバドルのようなあまり技術が ^あ 発達して いない国でも久保さん ^が 日本の便利な技術をおし えることで勉強も子ども達にわかりやすくなり子ども も達の ^き よくに立てるいいと思いました。	感想③:「3. ESD の視点」に記載 の B(連携性・多 様性)に対応
	感想④:「3. ESD の視点」に記載 の B(連携性・多 様性)に対応

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

※報告書記載時点で、社会科の授業は未実施のため道徳の授業についてのみ記載

1. 成果○と課題●(児童のノートや発言、授業の様子から判断)

○上記②の子どもの感想に示されているように、これまでの価値観が揺さぶられ、驚きや発見を生み出す学習にすることができた。特に海外の様子については子どもたちの関心が高く、さらに普段目にするとはまずないエルサルバドルという国を扱うことで、より子どもたちの学習に対する意欲を喚起することができた。(感想②→【多様性】や共通性)

○具体的な人物を扱ったこと。国同士のつながりや、国際協力・国際貢献は目に見えない。したがって、子どもにとっては捉えづらい事象となる。そこに、現実努力している隊員の方々を具体的な人物として扱うことで、国際協力の姿が見えるようになり、日本と外国との関係がわかりやすくなった。(感想①③④→【連携性】【責任性】)

●主要教科(国・算・社・理)の中で扱う国際協力の難しさ。学習指導要領に準拠した内容としては、6年生社会科が妥当であると考えられるが、他単元や他教科の中でコンスタントに扱う内容としては、とても難しさを感じる。今後も実践を積み重ねていく中で探ることが必要。

2. 課題の改善策

・「ESD の視点」と、各教科の学習指導要領との関連を図る。一例として、持続可能な社会づくりには、子どもたちに「主体性」を養うことの必要性を挙げる。学習を通してESDを「自分の問題」として捉えることは、遠い国の課題を人ごとにせず、自分にできることについて考えるための第一歩ではないだろうか。ESD を「主体性」という観点でとらえた時、利用可能な教科・領域の幅が広がっていくと考える。

10 教師海外研修に参加して

実際に体験した教師が一番の教材になることを、今回の研修に参加して改めて強く実感した。授業の中では、目の前で起こっていた出来事や、直接話をした人の事だからこそ子どもたちに話せる内容が多々あった。そして今回の研修では、私自身遠くに感じていた「国際協力」の具体的な姿をみることができたことや、それらが隊員の方々の思いや願いに支えられて成り立っていることを目の当たりにしたことが大きな収穫であった。これからは教師として、日本人として、国際社会の一員として自分に何ができるのかを、子どもたちと一緒に考えていきたい。



EL SALVADOR

学校名:松戸市立第四中学校

氏名: 沼田 麻人

[担当教科:社会科]

- 実践教科等: 社会科
- 時間数 : 3時間
- 対象生徒 : 中学校3年生
- 対象人数 : 37人×4クラス

1 単元名

なぜ、日本は発展途上国に約1兆円も援助するのか(援助の目的を知る)

2 単元の目標 (ESDの能力・態度)

- ・エルサルバドルの写真を見て、日本と異なる点を見つける。発見した相違点から、エルサルバドルが発展途上国の1つであることを理解する。(批判的に考える力)
- ・写真の分析(フォトランゲージ)を通して、班別学習を進める。(他者と協力する態度、コミュニケーションを行う力)
- ・エルサルバドルで働く日本人の活動を知る。(つながりを尊重する態度)
- ・ODA(政府開発援助)は各国の相互依存関係を背景にして考える(多面的、総合的に考える力)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・発展途上国(エルサルバドル)の様子を知る【多様性】
- ・JICAの支援の実態を知る【連携性】
- ・日本が途上国に多額の援助をしている目的を知る【相互性】
- ・ODA(政府開発援助)を「相互依存」の観点から考える【連携性、公平性】

4 単元の指導について

(1)教材観

本校では「言語活用」ということを重視している。そのため、今回の授業では「班での話し合い」と「自らの考えを書く」ことを中心に授業を展開した。

(2)児童生徒観

「エルサルバドル」や「中米」について、これまでの授業では一切触れていない。そのため生徒の知識はゼロに等しい。しかし、「発展途上国」についてのイメージは持っている。そこで、今回はエルサルバドルを発展途上国の一つの具体例として取り上げた。

(3)指導観

教師が体験したことや実際の映像を使うことができる点が、今回の授業の特徴である。そのため、それらを生かせるように授業を作った。また、生徒が授業で得た知識をもとにして自らの意見を主張できるような授業展開にした。

授業は私が受け持つ4クラスで行った。どのクラスも、生徒が比較的自由に発言できる雰囲気がある。しかし、話し合いが苦手な生徒が各班に1~2名程度いたり、班全体で活発な活動ができなかった班もあった。

5 評価規準

観点	エルサルバドルと現地で活躍する日本人への関心・意欲・態度。	一枚の写真を分析し、自らの言葉でまとめる思考力。途上国へ援助する目的を理解する思考力。	エルサルバドルと日本を比較する技能。	エルサルバドルの概要、青年海外協力隊、援助の目的についての知識。
----	-------------------------------	---	--------------------	----------------------------------

評価規準	・現地の日本人の活動に対して肯定的な感想が書けたか。	・「日本と違うところ」を5つ以上見つけられたか。 ・分析結果をもとにまとめられているか。 ・援助の目的と「相互依存」の関係をまとめられているか。	・日本と異なる点を探し出せているか。 ・他国の現状や伝統を偏見なく理解することができたか。	・エルサルバドルの概要を理解できたか。 ・青年海外協力隊の活動を理解できたか。 ・援助の目的を正しく理解できたか。
評価方法	・映像資料を視聴する様子。 ・回収したワークシートのコメント ・授業中の発言	・グループ活動での発言 ・回収したワークシートのコメント	・回収したワークシートのコメント ・授業中の発言	・回収したワークシートのコメント ・授業中の発言

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7 授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	エルサルバドル研修の報告 (学年集会)	エルサルバドルという小国の実態を理解する。 自分にとっての「幸福」とは何かを考える。	パワーポイントを使いながら現地の様子や研修目的を説明する。(現地で撮影した写真の提示。) エルサルバドルの位置を確認させる。 現地の小学5, 6年生(幸福度98%)と松戸四中(幸福度は87%)のアンケート結果を伝える。先進国と発展途上国の幸福度の違いを導入として、自分にとって幸福とは何かを考えさせる。
2	エルサルバドルの写真进行分析する	エルサルバドルの路上の写真などを通して、発展途上国についてのイメージをふくらませる。	6人一班で、エルサルバドルの路上の写真を見て、日本と異なる点を探す。その後、「エルサルバドルは日本と比べて、〇〇である」とまとめる。 エルサルバドルの基本情報についての説明を聞き、感想を書く。
3	なぜ、日本は途上国に援助をするのか	青年海外協力隊の活動を知る。 ODA(政府開発援助)の意味を理解する。	現地で撮影した青年海外協力隊の活動を見て、感想を書く。 約1兆円もの援助の目的は何かを考える。

7 授業事例の紹介

小単元名【エルサルバドルの写真进行分析する】

(1) 指導案(1時間目)

(ア)実施日時 11月14日(金)第2限

(イ)実施会場 図書室(大型テレビがあるため)

(ウ)本時の目標

- ・班での話し合いに積極的に参加する。
- ・エルサルバドルが日本と比べて経済的に貧しいことを、話し合いを通じて自ら発見する。

(エ)指導のポイント

エルサルバドルの路上等の風景写真を見て「自由に」意見を述べるのは、生徒にとって難しいと考えた。そこで、「日本と違うところを書こう」、「不思議に思ったこと、疑問に思ったことを書こう」という具体的な指示を出した。そして、最後に「エルサルバドルは日本と比べて、〇〇である」という課題文を出した。生徒は自由に意見を述べるのであるが、この3つの課題によって「発展途上国」の特徴を自ら発見することができた。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入・5分	ワークシート配布 エル・サルバドルの位置を探させる。	世界白地図に、エルサルバドルの位置に赤ペンで色を塗る。		・位置がわからない生徒には地図を見ることを促す。	
展開・15分	写真を配布 班での話し合い	6人一班で写真を分析する。 ①日本と違うところを自由に発言する。それをワークシートに記入する。 ②疑問に思ったことを自由に発言する。それをワークシートに記入する。	グループ活動	・自由に発言できる雰囲気を作る。 ・話し合いが停滞している班には、ヒントを出す。 ・生徒からの疑問には、教師もその答えを一緒に予想する。疑問が出たこと自体を褒める。	・協力して話し合いに参加しているか。 ・鋭い視点、ユニークな着眼点で写真を分析できているか。 ・他の班員の意見を尊重しているか。
5分	写真分析のまとめ	エルサルバドルは日本と比べてどのような国かを班でまとめる。	グループ活動	・分析した事実を基に自分たちの言葉でまとめさせる。	・写真の分析を踏まえて回答を導き出しているか。
10分	エル・サルバドルの基本情報を説明する	パワーポイントの資料を見ながら、基本情報の説明を聞く。説明内容はワークシートに記入し、そのデータに関しての自分の感想を書く。	一斉	・ワークシートには日本のデータも掲載した。日本と比較し、感想を自由に書かせる。	興味関心を持って説明を聞いているか。 ・日本と比較して感想を書いているか。
5分	発表原稿を書く。	ワークシートにそって、本時の活動を発表できるように班でまとめる。	グループ活動	・班での話し合いに消極的な生徒に声をかけながら机間巡視。	・自分たちの班の活動を過不足なくまとめているか。
まとめ10分	班ごとに発表(代表者1名)	発表時間は1分間。班の代表者が前に出てきて発表する。	発表	・発表する時に、その班が分析した写真をテレビに映す。	

小単元名【なぜ、日本は途上国に援助をするのか】

指導案(2時間目)

(ア) 実施日時 11月17日(月)第1限

(イ) 実施会場 図書室(大型テレビがあるため)

(ウ) 本時の目標

- ・発展途上国で活躍する日本人の活動内容とその志を知る。
- ・「なぜ、日本が発展途上国に多額の援助をするのか」を考える。

(エ) 指導のポイント

本時は二部構成である。前半は青年海外協力隊の活動を紹介し、活動内容や志の高さを確認させる。後半は、そこに多額の税金が使われていることを伝え、「なぜ、途上国に多額の援助をするのか」という問題につなげていく。最初に生徒の関心が高い「お金の問題」に疑問を持たせる。その疑問を導入にして、本時のテーマである「日本が援助する目的」について理解が深まるようにした。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
-------	------	------	------	---------	-------------------

導入・ 5分	前時の復習 「発展途上国」 という語句の 確認	前時の「エルサルバドルは 日本と比べて〇〇である」 の回答を確認する。 生徒の回答のような国を「発 展途上国」ということを確認 する。	一斉	・生徒たちの分析結 果をもとに「発展途上 国」に対するイメージ を持たせるようにする。	・自分達の分 析結果と「発 展途上国」と いう概念を結 びつけて考え られているか。
展 開 12分	青年海外協 力隊の活動 紹介(説明文、 映像資料)	ワークシートに書かれた青 年海外協力隊の活動につ いての紹介文を読む。 映像資料を見る。	映像 視聴	・まずは文字からイメ ージを膨らませて、映 像資料を見る。活動 内容の紹介は、映像 資料の補足の意味も ある。	・興味関心を持 って視聴し ているか。
5分	感想	映像を視聴した感想を書く。	個別	・視聴した映像資料を もとに、自分の言葉で 自由に記述させる。	・自分の感じた 事をどのように、 どれくらい書い たか。
6分	「なぜ、途上 国に援助す るのか」を考え させる。	パワーポイントの資料を見 ながら、教師の説明を聞く。	一斉	・海外での活動に対し ての肯定的な感想を 紹介した後に、援助 額が約1兆円もあるこ とを伝える。	・内容理解に 努めながら説 明を聞いてい るか。
5分	その答えを 予想させる。	ワークシートのヒントを参考 にして、答えを予想する。	個別	・ヒントをもとに考える ことを促す。	・課題内容を 理解し、真剣 に考えている か。
7分	援助する目 的を紹介す る。	パワーポイントの資料を見 ながら、教師の説明を聞く。	一斉	・「相互依存」の関 係があることを理解 できるように説明する。	・援助が日本 と途上国にと ってメリットが あることを理解 しているか。
3分	ワークシート に沿って、授 業内容をまと めさせる。	ワークシートの裏面にパワ ーポイントをもとにした問題 が用意されている。その問 題を解きながら、説明内容 を復習する。	個別	・説明された内容をも とに問題を解くことで、 知識の定着を図る。	
まとめ 7分	授業の感想	授業の感想を書き、提出す る。	個別	・自分の言葉で感想 を書かせる。授業で習 った正解を書くのでは なく、自分が思ったこ とや意見を書かせる。	・「相互依存」 に関わること が書けている か。

(2) 授業の振り返り

〔1時間目〕写真の分析(フォトランゲージ)は生徒も楽しそうに活動していた。一枚の写真を細かく見ると、様々な発見をすることができ、興味や疑問点が生まれる。多様な意見を級友の口から聞くことができたり、自分の思いつきや意見が班員に受け入れられた時に生徒は喜びを感じるようであった。しかし、活発な話し合いが展開されない班もあった。そのような班には教師が積極的に関わるようにした。フォトランゲージは、社会科の様々な場面で活用することができると思う。

「エルサルバドルは日本と比べて〇〇である」という課題を、生徒たちは次のようにまとめた。「ゴミが多い」、「ビルが全然ない」、「貧しい」、「治安が悪い」等。これらのまとめは生徒から出た言葉であるが、それが「発展途上国」のイメージとも重なる。2時間目の授業では発展途上国で活躍する日本人を取り扱う。その前提となる知識を生徒自ら導き出すことができた。

「エルサルバドルの基本情報」は教師主導で手短かに説明した。日本のデータもワークシートに掲載しておいたので、生徒は日本とエルサルバドルを容易に比べることができた。

〔2時間目〕青年海外協力隊の活動の映像を見せる前に、文章で補足説明をした。これは生徒が理解を深めるのに役立った。映像でしか伝わらない臨場感もあるが、映像の「背景」も同時に捉えさせることができた。途上国でボランティア活動に従事する日本人がいるということが、生徒には驚きだったようだ。そういうことを想像したこともなかった生徒に日本人の活躍伝えることができてよかった。

生徒達が肯定的な感想を持った青年海外協力隊には多額の税金が使われているという事実は、生徒の興味関心を引き付けることができた。また、援助の目的を教師が説明する前に、ヒントを参考に自

ら考える作業は重要であった。生徒の予想は完璧なものではなかったが、的外れな予想も少なかった。反省点としては、そのような素晴らしい予想を発表する場が作れなかったことである。

(3) 使用教材

- ・授業で使用したワークシートは次ページに縮小して掲載した。
- ・以下の写真は、小単元名【エルサルバドルの写真进行分析する】で使用したものの例である。



(4) 参考資料等

『エルサルバドルを知るための55章』細野昭雄・田中高編、明石書店、2010年

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

生徒の未知の国への興味関心は高かった。また、途上国でボランティア活動をする日本人に対する肯定的な感想が多かった。「なぜ、途上国に多額の援助をするのか」という質問に対して、人道的な理由しか思いつかなかった生徒たちが、この授業を通して「相互依存」の関係について理解を深めることができた。生徒の感想には以下のようなものがあった。

- ・途上国の人たちを援助に行ってる人たちがカッコよくて、でも1兆円という大金も使われているっていうのが衝撃的だった。
- ・発展途上国を援助するためだけに多額の税金を使うなら、国のために税金を使え、と思ったけれど、援助しているのはたくさんの意味があってそれが日本のためになることがわかった。
- ・互いに助け合い生きていく。これは「協力」のお手本であり、また基本でもある。今日の授業でその基本を見直すことができた。よく親に「人に頼ってばっかいないで自分がやりなさい」と言われるが、自分が頼られる存在になればいいだけ。そうすると協力関係が生まれる。
- ・映像見て、日本は改めて豊かだと思った。
- ・少し視点を変えれば、もっといろいろな途上国援助への意義を見つけられそうだなと思いました。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

Plan(授業案)―「なぜ、途上国に多額の援助をするのか」というテーマを考えさせる。そのための準備として、エルサルバドルの基本情報、青年海外協力隊の活動を理解させる。

Do(授業)―上記指導案の通り授業を行った。

Check(検証)―回収したワークシートを見ると、記述欄の文章量や内容には非常に個人差があった。枠いっぱい感想や意見を書けている生徒もいれば、1行程度しか書けていない生徒もいた。しかし、空欄という生徒はいなかった。書きたい意志はあったのに、どう書けばわからなかった生徒が3割程度いた印象である。そのような生徒に対して具体的な書き方を助言することが大切だと思った。

Action(改善)―次のクラスでは以下のような助言を行った。写真分析ではどのような点に着目するのか。感想は「正解」ではなく、「思ったこと」を書くこと。援助の目的を予想するときは、「ヒント」や教科書を参考にすること。

10 教師海外研修に参加して

この研修を通して貴重な体験ができた。その中でも特に印象に残ったのは次の2つである。

1つ目は、途上国支援の現場を見ることができた点である。実際に自分が現地に行って「感じたこと」をもとに授業を展開することができた。現地で撮った写真や映像を授業の資料とすることもできた。さらに、写真や映像資料については、その「背景」まで生徒に伝える事ができた。

2つ目は、異校種の先生方と出会い、研修中に一緒に活動し刺激を受けたことである。先生方の話を聞きながら、さまざまな着眼点を知ることができた。また、自分の意見や疑問を投げかけると必ず答えが返ってきた。活動を通じて自分の思考が深まっていくのを感じた。日頃味わうことができない種類の刺激を多く受けることができた。

小単元名【なぜ、日本は途上国に援助をするのか】のワークシート

年 組 番 氏 名： _____ 教 p158

【前回の授業】エルサルバドルは日本と比べてこんな国である。

- ・経済が苦しく開発が進んでいない国
- ・ゴミが多い国
- ・ビルが全然ない国
- ・土地が余っていて、治安が悪い国
- ・貧しい国
- ・校則がゆるい国
- ・穢国

◎ エルサルバドルのように貧しい国を「発展国」という。

【 エルサルバドルで活躍する日本人 】

(1) 石田さんは、エルサルバドルでどんな活動をしていると思うか。

(2) クリルという貝は、マングローブ林で取れる。しかし、ぬかるんだ土を敷きながら歩き回り、機嫌にからみ合ったマングローブの根元を手探りで探すなど、大変な重労働である。にもかかわらず、女性や子供が働き手となることも多かった。子供は、貝を取る仕事のため学校に行けないケースもあった。石田さんは、貝の養殖方法を教える活動をしている。貧しい漁民に効率よく貝を生産する方法を伝えている。効率よく貝が取れば、漁民は無駄な重労働から解放される。子供は学校に行く時間が【 】できる 【 】！

(3) 日本で小学校教師だった久保さんは、エルサルバドルの小学校で算数を教えている。エルサルバドルにも算数の教師がいるが、専門的な指導方法を学んでいない。現地の先生たちも「よりよい授業をしよう」と強く思っているが、その「技術」を知らないという感じだった。では、子供たちはどうか。「日本の子供とエルサルバドルの子供の良いところは何ですか？」という質問への久保さんの答えに注目してほしい。

(4) リハビリセンターで働く西田さん、エルサルバドルのマットが堅かったため、柔かいものに変えようとした。新しいマットが来るのに数か月かかった。日本の「当たり前」は通用しない。

(5) 加藤さんは農場でエルサルバドルに適した農作物の研究開発をしている。せっかくなのでハウスが突風で壊れてしまった。試行錯誤の連続だと言っていた。

感想

【 なぜ、途上国に援助するのか 】

途上国に援助する理由を、私は次のように予想しました。

キーワードは「相互依存」。「お互いに頼る」という意味。

ヒントー・日本の「食料自給率」や「石油・石炭」ってどういう状況だった？

- ・大気汚染や温室効果ガスって日本だけの問題？
- ・途上国には、感染症、治安の悪化、難民、麻薬などの問題がある。それらは日本には無関係？

小単元名【エルサルバドルの写真を分析する】のワークシート

年 組 番 氏 名： _____ 教 p158

エルサルバドルは四国と同じくらい面積。左の地図にエルサルバドルの位置を赤ペンで書き入れよう。

今日は各組で話し合っ、最後に発表します！

【写真を分析しよう！】

➢ 写真をよく見て！細かいところまでよく見て！班で話し合っ、日本と違っところを書こう。

箇条書きでまとめる。

➢ 不思議なこと、疑問に思っことを書こう。そして、その答えを予想してみよう！

➢ 写真を分析してわかったこと。

エルサルバドルは日本と比べて、_____である。

【エルサルバドルの基本情報】

	公用語	通貨	識字率	1人当たりのGDP	殺人発生率	終戦
日本	日本語	円	99%	37,539ドル	日本を「1」とする。	1945年
エルサルバドル	_____語	_____	_____%	_____ドル	_____	_____年
一言感想	エルサルバドルは、言葉とお金も外国のもの！					

写真に写っている人はどんな人？何をしているところ何が好き？想像してみよう！（時間的余裕のある班はやりましょう）



EL SALVADOR

学校名:長岡市立才津小学校

氏名: 渡辺 登

[担当教科:社会、外国語活動]

- 実践教科等: 社会科
- 時間数 : 6 時間
- 対象生徒 : 小学校 6 年生
- 対象人数 : 23 人

1 単元名

世界の人々とともに生きる

2 単元の目標 (ESD の能力・態度)

- (1) 世界の中の日本の役割について理解し、外国の人々と共に生きていくためには、A.異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であること、B.我が国が世界において重要な役割を果たしていることを考えるようにする。(多面的・総合的に考える力)
- (2) 発展途上国の社会の発展に対して、C.日本が資金協力だけでなく、持続可能な社会づくりを目指して技術協力にも力を入れていることを考えるようにする。(多面的・総合的に考える力)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・D.日本とエルサルバドルの食文化学校の様子等の相違点に気づく【多様性】
- ・E.世界平和を維持していくためには、相互依存や共生の考え方が大切だということに気づく【相互性】
- ・F.JICA のエルサルバドルに対する支援の様子を知り、JICA が現地の問題解決のために様々な方法を考えながら活動していることに気づく【連携性】

4 単元の指導について

(1)教材観

前単元「平和への歩みを見直そう」の学習では、「二度と戦争を起こさないためには、戦争の悲惨さを語り継いでいくことと、外国の人々と仲良くすることが大切」と児童とまとめをした。本単元では、前単元の学習を受けて「外国の人々と仲良くなるためにできることは何か」を単元を貫くテーマに設定した。

学習指導要領社会科では、「外国の人々の文化や習慣、日本人が世界の平和のために果たしている役割や国際連合の働き、地球環境について学ぶことを通して、外国の人々と共生するためには相互理解・相互協力が必要であることや、世界平和の大切さ、日本が世界において重要な役割を担っていることを理解させる」ことをねらっている。本実践では、以上のことを踏まえ、エルサルバドル共和国の文化や習慣、日本人ボランティアや JICA 専門家などの行っている活動を題材に学習を進めていく。

(2)児童観

社会科の学習には意欲的に取り組んでおり、各種テスト結果からも知識・理解力は高いといえる。一方で、本単元のテーマである「外国の人々と仲良くすること」については、事前アンケート(後述8参照)によると「スポーツ交流をする」「挨拶をする」以外に具体的な姿が描けていない実態があることが分かった。そこで、本単元の学習を通して、外国の人々と仲良くするためには何が必要なのか、エルサルバドルの様子や、JICA の活動を学ぶ中で考えを深めていく。そして、総合的な学習で行う長岡技術科学大学の外国人留学生との交流事業で実際にかかわる中で、考えたことを実践していく。

(3)指導観

海外への渡航経験がない児童の中には、「外国は危険」という先入観をもっている児童がいる。そのような中で治安上の問題を取り上げると「日本に生まれてきてよかった」と安易に考えることが予想されたため、本単元では、児童労働の解消について取り上げることにした。児童労働を身近な問題として捉えるために、エルサルバドルで広く食べられているププサの試食を行う。エルサルバドルではププサの原料であるトウモロコシを栽培するために一部で児童労働が行われている。児童労働のつらさを実感させてから、児童労働解消のためのプロセスを考える活動をグループで行う。エルサルバドルの子どもたちを助けるためのアイデアを出し合う活動を組むことで、より意欲的に学習に取り組めると考えた。

5 評価規準

観点	社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	観察・資料活用の技能・表現	社会的事象についての知識・理解
評価規準	発展途上国の課題や、その問題解決に取り組む JICA や国際機関の働きに関心を持ち、進んで調べようとする。	JICA や国際機関の支援の方法について考えを深め、資金協力や技術協力の意味を考える。	写真やグラフから社会的事象を読み取り、考えたことを分かりやすく表現する。	発展途上国の課題や JICA や国際機関の働きについて知る。
評価方法	発言やワークシートの記述	発言やワークシートの記述	ワークシート	ワークシートや単元テスト

6 単元の構成

時	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	エルサルバドルを知ろう ① (食・生活習慣・学校)	①エルサルバドルの様子に関心をもつ。 ②エルサルバドルと日本を比較し、相違点を考える。	・プブサともちから、食文化の違いに気づく。 ・日本とエルサルバドルの気候の違いを読み取り、住宅の違いとの関連を考える。 ・学校の様子をフォトランゲージで比較する
2	エルサルバドルを知ろう ② (自然災害、治安問題、児童労働)	③資料を適切に解釈し、社会的事象を正しくとらえる。 ④エルサルバドルの様子や社会問題について知る。	・自然災害の多さを資料から読み取る。 ・児童労働などの問題を資料から読み取る。 ・学校に通う児童の健康を増進するための学校で行っている間食について知る。
3	こんなところに日本人 ～エルサルバドル編①～ 	①国際協力活動に関心をもつ。 ②JICA による開発途上国の支援の仕組みを考える。 ③資料を適切に解釈し、考えたことを分かりやすく発表する。 ④日本が行っている資金援助と技術協力の様子を知る。	・児童労働が戦後日本にもあったことや、国際的な支援のおかげで復興できたことを知る。エルサルバドルで活躍する日本人ボランティア・専門家の活動を通して、JICA には技術協力と資金協力の2つの活動があることを知る。技術協力や資金協力がどのように現地住民の持続可能な生活向上に役立つことを考える。
4	こんなところに日本人 ～PNG 編～ 講師：JICA 新潟デスク 本田 龍輔さん 	②国際協力活動に大切な要素を考える。 ④JICA のボランティアの概要を知る。	・講演会から青年海外協力隊の PNG (パプアニューギニア) での活動について知る。
＜講演会後の児童の感想＞ ・私は「しかっこ」の話が印象に残りました。今、PNG では、森林減少で困っています。だから、「こ(行動する)」を意識して、少しでも自分にできることを考えていきたいです。 ・幸せについて考えました。PNG の人達は、「お金がなくても、家族と食べ物があれば幸せです」と言っていたそうです。私もこれからできることを考えたいです。			
5	こんなところに日本人 ～エルサルバドル編②～	②石田さんの防災教育活動がどのようにして現地の人々の持続可能な社会づくりにつながるのか考える。 ④JICA の資金協力の意義とその効果について知る。	・石田ボランティアの防災教育活動がどのような成果を上げ、持続可能な社会づくりに役立つのか考える。 ・JICA の資金協力により、牛乳が作られ、地元の小学校に配布され、児童の健康増進役立っていることを知る。
6	ユニセフや国連の働き	①ユニセフや国連の働きに関心をもつ。 ②子どもの権利条約や国連での日本の働きなどについて考える。 ④ユニセフや国連の働きについて考える。	・ユニセフのエルサルバドルで起きた大洪水の支援の資料を基にユニセフの活動について考える。ユニセフは国連の一つの機関であることを確かめ、その他の国連の活動を調べ、国同士が相互依存の関係にあり、お互い協力していく必要があることを考える。

7 授業事例の紹介 小単元名【こんなところに日本人～エルサルバドル編】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月 3日(水)第5限

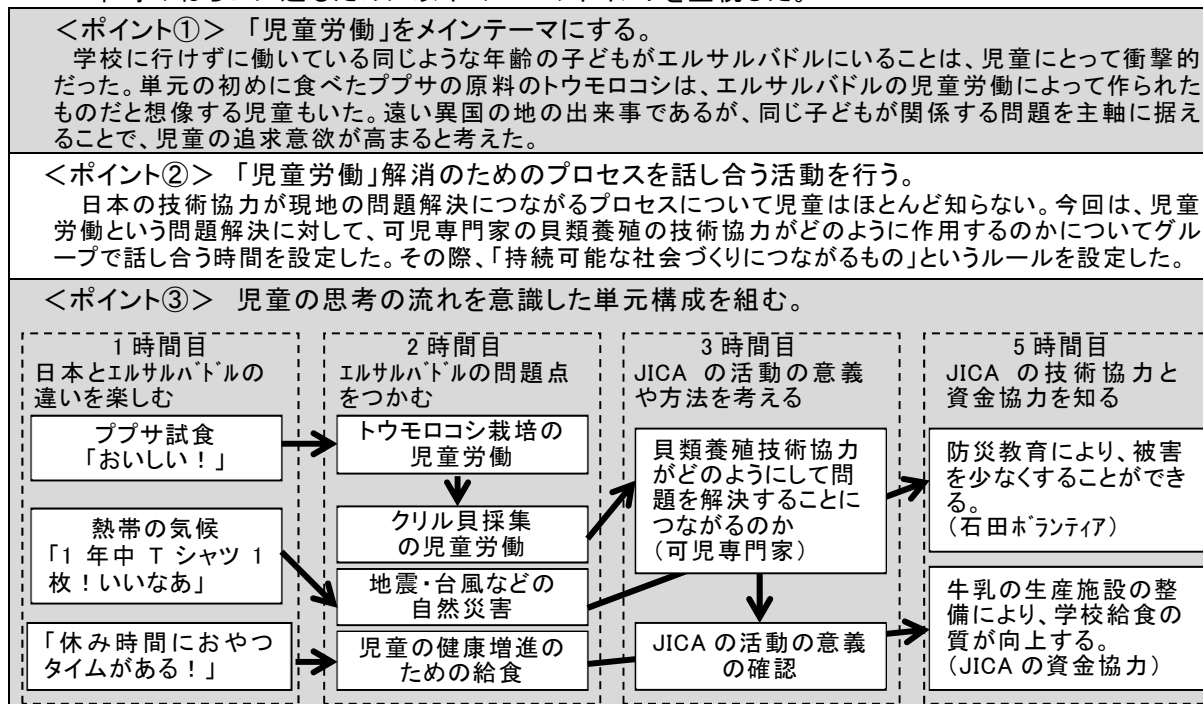
(イ)実施会場 6年生教室

(ウ)本時の目標

- ＜①社会的事象への関心・意欲・態度＞エルサルバドルで技術協力活動をする日本人に関心を持ち、資料などから意欲的に活動を調べようとする。
- ＜②社会的な思考・判断＞日本の技術協力や資金協力による開発途上国の支援の仕組みを考える。
- ＜③観察・資料活用の技能・表現＞写真から日本人ボランティアの活動の様子を読み取ったり、考えたことを分かりやすく発表したりする。
- ＜④社会的事象についての知識・理解＞JICAの活動の概要（ボランティアを通じての技術協力や資金協力の実際）について知る。

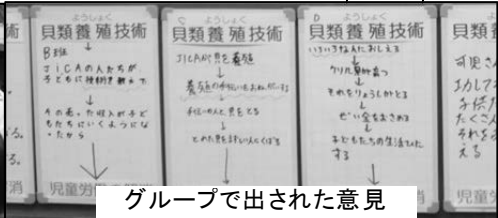
(エ)指導のポイント

本時のねらいに迫るために以下の3つのポイントを重視した。



(オ)本時の展開

過程時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 8分	・日本にも児童労働があったことをつかみ国際支援が行われたことを知る。	・児童労働について前時を振り返る。＜写真1＞	全体	・写真を示し、キーワードを板書する。	・児童労働について関心をもつ。(①…発言)
		この写真はどこの国の写真でしょうか。(フオランゲージ)			
		・戦後の児童労働の写真を示す。＜写真2、3＞		・日本にも児童労働があったことをおさえる。	
		   			
		この写真はどこの国の写真でしょうか。(フオランゲージ)			
		・「ケア物資」＜写真4＞の写真を示して資料から日本が戦後受けた支援について気づく。		・戦後7年間にわたり、4000億円の支援があったことをおさえる。	

展開 32分	・学習問題を立てる。	日本はエルサルバドルに対して何か援助をしているのでしょうか。			
		・援助内容について予想を立てる。 ・JICAの存在があることを伝え、学習問題を作る。	＜実際の授業では＞「どんな援助をしているか」との問いには「お金をあげている」「生活物資を渡している」「手助けしている」などで、技術協力と答える児童はいなかった。		
	学習問題：「JICA」は何をしている団体なのだろう？調べてみよう。				
	この写真の日本人は何をしている人でしょうか？写真をもとに考えてみよう。				
	・写真より日本人専門家の活動を知る。	・エルサルバドルのJICA専門家が何の仕事をしているか、3枚の写真から連想する。	全体	・可児さんがJICAを通じてエルサルバドルで活動していることを押さえる。	・写真から隊員の活動の様子について読み取っているか。(③…シート、発言)
					
	JICA 可児専門家	クリル貝の種苗		種苗のえさの培養施設	
	可児専門家の技術協力がエルサルバドルの人々にどのように役立っているのだろう。				
	・技術協力がどのようにエルサルバドルの人々の生活向上に役立っているのか考える。	・グループごとに貝類養殖の技術支援がエルサルバドルの人々の生活の向上にどのように役立っているのか班ごとに予想し、そのストーリーをホワイトボードに書く。 ・グループごとにストーリーを発表する。	班	・「貝の養殖技術を教える」「貝を探すのは大変な重労働」「貝はマングローブ林で育つ」「児童労働」「収入の安定」について必要に応じておさえる。	・ストーリーを考え、班で話し合っているか。(②…シート) ・わかりやすい発表か (③発言)
				＜実際の授業では＞ 「クリル貝の種苗をJICAが育てて、漁師に無料で配る」「貝を売ったお金で税金が増え、その税金で子どもを学校に行かせる」など子どもたちの発想から意見発表ができた。	
	話し合いの様子	グループで出された意見			
	・児童の発表をまとめ、JICAの技術協力の仕組みを知る。	＜まとめ＞貝類養殖の技術協力により、貝類の種苗生産を行い、マングローブ林で袋に入れて育てることで、収穫を容易にする。漁民の収入の安定化を果たすことで児童労働の解消につなげようとしている。			
	・その他の活動がどのように人々の生活向上につながっているかおさえる。	・技術協力が持続可能な社会づくりにつながることをおさえる。			
		・石田夏樹ボランティア…防災教育(技術協力) 災害を防いだり、避難や応急手当の方法を学んだりすることで、地震に対する備えを強くする。 ・JICAの資金協力を受けての牛乳生成施設の建設により、地元の学校のレファクシオン(軽食)に牛乳が提供され、児童の健康の向上に役立っている。(資金協力)			
	まとめ：JICAは、エルサルバドルの人々の持続可能な生活向上のために、技術協力と資金提供などの活動を行っている。				
	終末 5分	・授業の感想や知りたいことを書く。	＜児童の感想より＞貝の養殖を網に入れて行うことで児童労働の解消につながることが分かりました。エルサルバドルに協力している日本人がいてうれしかったです。可児さんの活動で児童労働がなくなるといいと思います。		
		・JICAの活動は、技術協力と資金提供があることが分かるか。(④…シート、発言)			

(2)授業の振り返り

※◎成果 ▲課題

＜①社会的事象への関心・意欲・態度＞エルサルバドルで技術協力活動をする日本人に関心を持ち、資料などから意欲的に活動を調べようとする。

◎ブブサを試食し、その原料のトウモロコシ栽培で、エルサルバドルでは児童労働が行われていることを知り、児童労働の解消に JICA の活動が役立っていることに関心をもつことができた。

＜②社会的な思考・判断＞日本の技術協力や資金協力による開発途上国の支援の仕組みを考える。

◎貝類養殖技術協力活動が児童労働解消につながるプロセスについてグループ内で話し合いを行った。「貝の育て方を漁師に教える」「JICA が貝の種苗を育て、漁師に無料で配る」などのアイデアが出され、子どもたちなりに技術協力のプロセスを意欲的に考えることができた。

▲一方で全体で話し合う時間がほとんどなく、プロセスを全体で練り上げる時間が取れなかった。グループごとに出されたアイデアを全体で話し合うことで、思考がさらに深まると考える。

＜改善策(Action)＞第 5 時に防災教育を例に防災教育がどのようにして持続可能な社会づくりにつながるかを考える活動を同様に言い、グループの発表をもとに全体で意見を練り上げることで、防災教育がそれを広め、住民達だけで行えるようになることで持続可能な社会づくりにつながる技術協力であることを考えることができた。

＜③観察・資料活用の技能・表現＞写真から日本人ボランティアの活動の様子を読み取ったり、考えたことを分かりやすく発表したりする。

◎写真から得られる情報をもとにグループでの話し合いを行った。教師海外研修で撮影した写真が役立った。ホワイトボードにグループの意見をまとめたことは、発表のしやすさにつながった。

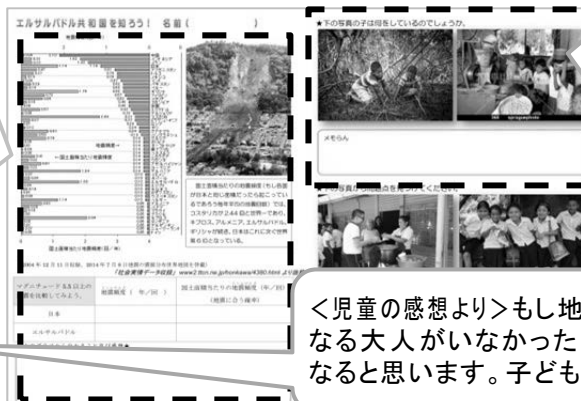
＜④社会的事象についての知識・理解＞JICA の活動の概要（ボランティアを通じての技術協力や資金協力の実際）について知る。

◎JICA の活動について、技術協力と資金協力の 2 つに分けて学習した。貝類養殖の技術協力が児童労働解消につながるプロセスについてはおおむね理解することができた。資金協力の様子については、牛乳生成施設の建設が、現地の子どもたちの健康増進につながることを理解できた。

(3)使用教材

※以下は第 2 時に使用したワークシート

1 年間の日本とエルサルバドルの地震の回数を読み取り、比較する。写真から地震被害の大きさをつかむ。さらに、200 万人が出稼ぎに国外へ出ていることを伝え、残された家族が地震に遭ったときのことを想像させた。



フォトランゲージに使用した写真をはり、手元で見られるようにした。メモ欄を設け、気づいたことや感想を書き込めるようにしている。

＜児童の感想より＞もし地震が起きた時に、頼りになる大人がいなかったら、私だったらパニックになると思います。子どもたちだけでは大変です。

(4)参考資料等 フォトランゲージで使用した写真の出典を以下に示す。それ以外は現地にて撮影

＜写真 1＞「マングローブ林でカニをとる少年たち」 <https://www.worldvision.ca/aboutus/media-centre/pages/default.aspx>

＜写真 2＞山田實「靴磨きの少年」那覇市国際通り 1956 年 <http://curatory.exblog.jp/20951402/>

＜写真 3＞「名古屋駅で靴磨きをしている少年たち」1947 年 <http://tokyokushu.blog.so-net.ne.jp/2013-11-01>

＜写真 4＞「CARE 物資を受け取り、喜ぶ子どもたち戦後」 http://www.careintjp.org/news/a/care_3009.html

8 単元を通した児童の反応/変化

(1)学習前アンケートと単元の振り返りより 児童アンケートや振り返り作文を以下のように分類した

学習前アンケート「外国の人と仲良くするためにできることは何か」		学習後 単元の振り返り作文の分類(複数回答) 「外国の人々と仲良くなるためにできることは何か」			
分類	人数	分類	ESD の視点	ESD の能力・態度	人数
一緒に遊ぶ・スポーツする	18 人	一緒に遊ぶ・スポーツする		コミュニケーション力	18 人
挨拶をする	8 人	お互いの文化を楽しむ活動をする	多様性	コミュニケーション力	8 人
一緒に問題を解決する	3 人	困っていたら助ける	連携性	他者と協力する態度	5 人
困っていたら助ける	3 人	一緒に食事をする		コミュニケーション力	5 人
文化を教える	3 人	コミュニケーション能力を高める		コミュニケーション力	5 人
プレゼント交換をする	3 人	震災の経験を生かし、外国の役に立つ	連携性	他者と協力する態度	2 人
英語を覚える	2 人	互いの違いを認め合う	多様性	つながりを尊重する態度	2 人
日本語を教える	1 人	お互いの国を理解する	多様性	つながりを尊重する態度	2 人
食事をする	1 人	税金を使って外国の人を助ける		他者と協力する態度	2 人
同盟を結ぶ	1 人	持続可能かどうか考える	未来像を予測して計画を立てる力		2 人
		外国をよく知る	多様性		2 人
		しっかりと先のことを考える	未来像を予測して計画を立てる力		1 人

	日本の素晴らしい技術を途上国に伝える	連携性	多面的・総合的に考える力	1人
	人の役に立つ仕事をする	未来像を予測して計画を立てる力		1人
	どの国にも平等に接する	公平性		1人

(2)学習後振り返り作文より ※ 2.単元の目標、3.ESDの視点に関連するものをくゝで示す

〈A〉お互いの文化を教え合ったり、行ったりすることです。お互いの文化を教え合うことで外国のお祭りや言葉を知り、仲を深めることができるからです。行うことでコミュニケーション力も高まります。

〈B.C.F〉JICAは、児童労働をしないと生活できない子どもたちのために、技術協力や資金協力をしていくことが分かりました。クリル貝の種苗を育て、子どもたちが手間のかかることをしなくてもいいようにいろいろ考えたのはすごいと思いました。日本人の活動を私は誇りに思いました。

〈D〉私が一番びっくりしたのは、年中気温がほぼ同じで、家のつくりが違ふことと、あんこが本当に甘くないことです。びっくりすることが多いので、もっと知りたいし、逆に日本のことも知りたいです。

〈E〉二度と戦争を起こさないように外国の人々と仲良くなるきっかけを作るアイデアがあります。〈中略〉日本は地震などの自然災害がとても多い国なので、災害を乗り越えた経験を生かして、他の国を助けられると思います。日本が他の国を助けると、日本が災害に苦しんでいるに、世界中のいろいろな国から助けが来て復興が早くできると思います。こうすれば、国どうしで助け合えるし、外国との交流も増えて外国の人々と仲良くなれるし、ずっと戦争が起こらないと思います。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

(1)成果と課題(Check)

成果	児童の変容	以下の児童の変容により、「多面的・総合的に考える力」の伸長が見られた。 ・上記8の(1)より、実践後の振り返り作文の分類項目 10 分類から 15 分類へと増加し、また、8 (2)のようにESDの能力・態度、ESDの視点に関する記述が多くみられるようになった。 ・授業前のアンケートに比べてより具体的な方法の記述がなされ、自身のコミュニケーション力の向上など、今後の自分の生き方についても前向きに考える様子がうかがえた。 ・8(2)〈E〉のように、防災教育の学習で考えたことをもとに、相互依存が大切な考え方であることに気づくなど、様々な社会事象を相互に関係づけている児童がいた。
	考察	「児童の思考の流れを意識した単元構成を組んだこと」が特に成果につながったと考える。ププサ試食からトウモロコシ栽培の児童労働、そして、クリル貝採集の児童労働から児童専門家の活動につなげたことは児童の思考の流れに沿っていたといえる。その中で、単元の目標、ESDの視点である〈A～F〉を達成するための活動を取り入れたことが成果に結びついたと考える。
課題	「多面的・総合的に考える力」の伸長は見られたが、「批判的に考える力」の育成に取り掛かれなかった。提示資料を解釈し、組み合わせる考える力は高まったが、一つの事象について自ら分析し、様々な立場があることを認識し、資料を収集するという活動を行うことができなかった。つまり、与えられた範囲内でなく、自ら問題を発見し、解決するという「批判的に考える力」の育成が課題である。	

(2)課題の改善策(Action)

「批判的に考える力」は、「多面的・総合的に考える力」の延長線上にあると見え、以下を改善する。

①社会問題を構成する複数の立場を発見し、自ら調べ、考えを練り上げる話し合い活動の充実
本実践では、与えられた複数の事象の関係性を考えることを通して、多面的・総合的に考える力の伸長を図ることができた。今後は、本実践のようなことを基礎トレーニングと位置づけ、複数回実践し「ものごとは様々な事象と関係している」ということを経験則として抑えたのち、例えばフォトランゲージから社会問題を発見し、その問題を構成する複数の立場を想像する。そして、正しく判断・思考するための資料を収集する活動を重視する。さらに、ワールドカフェ方式で話し合い活動を行うなど、効率よく児童が考えを練り上げられる話し合い方法を工夫することで批判的に考える力の育成を図っていく。
②多面的・総合的な考えの元となり、批判的に考える力の育成に資する題材の開発・精選
話し合い活動を充実させるためには、話し合いの元となる資料の精選がかかせない。児童実態に即し、多面的・総合的な考えの元となり、批判的に考える力の育成を図れる学習の題材や提示資料の開発・精選に努める。今回、グラフなどの資料と現地の写真からその因果関係を明らかにする手法は、多面的・総合的にものごとを考える力の育成に関連して手応えを感じたので、さらに研究を深める。

10 教師海外研修に参加して

「可児さんがエルサルバドルで児童労働の解消に向けて貝類養殖技術協力をしていることを知って、私は誇らしくなりました。」とは公開授業後の児童の感想である。実は私も同様なことを今回の教師海外研修で感じた。エルサルバドルの諸問題に対し、現地の方とともに解決に尽力しているJICA専門家・ボランティアの方々を大変誇りに感じた。グローバル化の中、ともすると経済競争ばかりに目が行きがちであるが、「世界の人々とともに問題解決にあたること」は人生をかけるにも値する素晴らしいことだと思う。今後もこのことを子どもたちに伝えていきたいし、自分自身も行動に移したいと考えている。

	学校名：村上市立朝日みどり小学校	● 実践教科等：外国語活動、家庭科、道徳 ● 時間数：6時間 ● 対象生徒：第5学年 ● 対象人数：25人	
EL SALVADOR	氏名：駒沢 玲子		[担当教科：小学校全科]

1 単元名

みんなちがって、みんないいね！！ ～日本とエルサルバドル～

2 単元の目標（ESD の能力・態度）

- ・ 世界の多様な文化・生活を知り、自分たちと同じところと違うところに気付き、外国への興味をもつ。（進んで参加する態度）
- ・ 世界の子どもたちの現状を知り、自分のできることを考えることができる。（他者と協力する態度）
- ・ 世界との貿易や世界の食料生産を知り、世界の実情を理解する。（批判的に考える力）
- ・ 「違い」を認め合いながら、豊かな人間関係をつくるために行動目標を自己決定できる。（多面的、総合的に考える力）

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・ エルサルバドルと日本の食文化や学校生活の違いに気付く。【多様性】
- ・ 貿易や食料生産を通して、日本と世界はつながっていることに気付く。【相互性】
- ・ 互いの「違い」を認め合い、自分と異なる意見や立場を大切にしながら自分ができることを考える。【連携性】

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元では、エルサルバドルの生活や地理的環境、食料生産などを通して、世界の实情や日本と世界のつながり、及び日本との違いについて理解を深めながら、豊かな人間関係を構築する素地を養うことをねらっている。

本校は、自然に恵まれた静かな環境にあり、隣接校との交流においては、容易に他校の児童と交流をもてない傾向にある。また、少人数であることや刺激が少ないことなどから、多様な価値を認め合いながら豊かな人間関係を構築することが苦手である。エルサルバドルの様子を学ぶことを通して世界の国々の暮らしや文化の違いを見つめ、学ぶことで、多様な見方や考え方を育てるのにふさわしい教材である。

単元の前半は、おもちゃで遊んだり「ププサ」を作ったり、エルサルバドルと日本の違いを「楽しい」と感じるように授業を展開し、後半では、エルサルバドルが抱える課題について考えさせる。それぞれの国には、良い所も悪い所もあり、それを互いに協力して解決していくことが、世界中の人の「幸せ」につながることに気付かせていく。

(2)児童生徒観

外国語活動で、英語を話したり世界の様々な文化を知ったりすることにとっても意欲的である。外国の食文化や遊びの違いに興味をもち、家庭学習で世界の国旗や主食などを調べてくる児童も多い。

児童同士の間人間関係においては、幼少期から同じメンバーで男女仲も良く良好な関係を築いている。今後、進学し新しい人間関係になっても、主体的に互いの違いを認め合い豊かな人間関係をつくれる児童になって欲しいと願い、本単元を構成した。

(3)指導観

私はこれまで、各教科、道徳教育を中心に、「子どもたちの自己肯定感を高め、将来の夢をもつ子を育成すること」を目指してきた。今年度、教師海外研修に参加し、日本と世界は、相互に依存関係にあることを実感できた。世界中の人々が「幸せ」になるためには、まずは、世界の实情について、

一人一人が「知る」ことである。「知る」ことが「考える」ことになり、将来、国際貢献する子どもの育成につながっていく。

私は、国際理解教育がねらいとする、「広い視野とともに異文化に対する理解や、異なる文化をもつ人々と共に協調して生きていく態度を育成すること」は、自分とは異なる人を認め、豊かな人間関係をつくることにつながると考えた。そこで、道徳教育を中心に、国際理解と親善の心を育てることを目標にした単元を構成し、日本と世界の「違い」と「つながり」を単元の柱として、本実践を行う。

5 評価基準

観点	世界の多様な文化・生活について興味・関心をもって学習に取り組む。 【関心・意欲・態度】	世界の現状を知り、自分にできることを考える。 【思考・判断・表現】	ププサ作りやフォトランゲージを通して、エルサルバドルと日本の相違点を見つける。 【技能】	世界との貿易や世界の食糧生産について理解する。 【知識・理解】
評価規準	世界の多様な文化・生活を知り、自分たちと同じところと違うところに気付き、外国への興味をもって学習に参加している。	世界の現状を知り、自分にできることを考え、発表したりワークシートに書いたりしている。	エルサルバドルの国民食を友達と協力して作っている。フォトランゲージでは、エルサルバドルと日本を比較して、見つけた相違点を書いている。	世界との貿易や世界の食料生産について理解している。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシートの記述	学習の様子 発言	学習の様子 ワークシートの記述	学習の様子 ワークシートの記述

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	エルサルバドルを知ろう！①	エルサルバドルの小学生に伝えたい日本のよさを考える。	- エルサルバドルの位置を世界地図で確認する。 - 日本や自分の住んでいる地域の良いところを考えてワークシートに書く。
2	エルサルバドルを知ろう！！②	エルサルバドルの写真や遊びを通して、エルサルバドルと日本とのつながりを知る。	- エルサルバドルについての写真（食事・学校や街の様子）を見たり聞いたりして、日本との違いを知る。 - エルサルバドルの「けん玉」で遊ぶ。
3	エルサルバドルの国民食「ププサ」を作ろう！	エルサルバドルの国民食「ププサ」作りを通して外国の食文化を知り、世界への興味をもつ。	「エルサルバドルクイズ」・「ププサ」の作り方を写真や映像で見る。 「ププサ」作りをする。 「ププサ」を試食する。 - 作り方・味・材料・食事の仕方などを意識して感想を書く。
4	おやつで元気！	子供たちにとって大好きなおやつを通して、食文化の違いや多様性について学ぶ。 おやつとお菓子の違いを知り、おやつを嗜好と健康の視点から考えるきっかけをつくる。	- おやつの特徴をつかむ。 - 各自好きなおやつを付箋紙に書く。 - 大きく4つ（素材そのまま/加工品・甘い/塩辛い）の特徴をあげた図に貼る。 - おやつの意味、おやつとお菓子の違いを説明する。 - 各国のおやつを探す。 - グループに用紙を1枚配り写真の中から各家庭のおやつを探し書き出す。 - カード「おやつリスト」を国ごとに配布

			し、写真の中から自分たちが書いたおやつを確認する。 ・ おやつを比べる。
5	みんな違ってみんな笑顔！！ ～日本とエルサルバドル～	世界とつながっていることに気づき、外国の人々や文化を大切にすることを育てる。 世界と日本との違いを知り、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努めていこうとする意欲や態度を育てる。	・ 日本や自分の地域の良いところを発表する。 ・ エルサルバドルクイズを考える。 ・ グループごとに、フォトランゲージをして日本との相違点や疑問点を出し合い、グループごとに発表する。 ・ エルサルバドルが抱えている問題について知る。 ・ これからの自分について考える。
6	みんな違ってみんな幸せ！！ ～世界で活躍する人々～	海外で活躍する日本人の姿や国際社会での日本の役割を知り、郷土を愛する心情を育てる。	・ JICAの役割を知る。 ・ JICAボランティアや専門家の活動写真やインタビューを見る。 ・ 将来の自分に手紙を書く。

7 授業事例の紹介

小単元名【みんな違ってみんな笑顔～日本とエルサルバドル～】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月21日(金)第3限

(イ)実施会場 5年生教室

(ウ)本時の目標

- ・ 世界の国や人とつながっていることに気づき、外国の人々や文化を大切にすることを育てる。
- ・ 世界と日本との違いを知り、日本人としての自覚をもって世界の人々との親善に努めていこうとする意欲や態度を育てる。

(エ)指導のポイント

① めあてを絞る

エルサルバドルの小学校や街の様子についての写真を提示して、クイズ形式でテンポ良く進めていく。関心を継続させるために、クイズの答えに解説を入れながら、エルサルバドルが抱えている問題に目を向かせる。

② 話し合い活動

4人～5人一組でフォトランゲージを行う。すぐに答えを出さずに、個人で考えさせたり近くの人と話し合わせたりする時間を設定し、その後、グループごとに発表させる。

③ 課題提示の工夫

本単元1時間目に書かせておいた、「エルサルバドルの人に伝えて欲しい日本の良さ」について出させる。次に、日本とエルサルバドルの違いが分かる写真を提示する。「写真から発見したこと」「日本にあるもの・ないもの」「日本との違い」を問う。また、全体の流れを、「楽しむ」→「興味をもつ」→「知る」→「考える」の流れにして、前後につながりをもたせながら、スムーズな学習の流れを組み立てる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	○学習活動・予想される児童の反応	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	1. 本時の課題を出す。	○日本や村上の良い所を確認する。	一斉	・ 国旗クイズをして注目させる。 ・ 事前に書いた日本の良さを確認させる。 ・ 日本の良い所の写真をスライドショーで写す。	
	T 日本や村上・朝日の良さは何か。	・ お米が美味しい。 ・ 自然がたくさんある。 ・ 四季がある。 ・ お祭りがある。			
		○ エルサルバドルと日本を比	一斉		

展開 20分		べてそれぞれの国の違いを知る。		・ ○×クイズ形式で行う。○は「立つ」、×は「座る」。立場を明確にすることで、全員をクイズに参加させる。 ・ エルサルバドルの食文化や街の様子の写真をスライドショーで紹介する。	エルサルバドルの多様な文化・生活を知り、自分と同じところと違うところに気づき、意欲的に学習に取り組んでいる。 (学習の様子・発言)
	T	エルサルバドルクイズをします。エルサルバドルの小学校の様子や街の様子を見ながらエルサルバドルのことを勉強します。 今日の問題、「みんな違ってみんな○○」○○の中には何が入るでしょうか。授業の最後に聞きますね。			
	2, フォトランゲージを行う。	・ 日本と同じで自然が豊かなね。 ・ エルサルバドルの小学校はにぎやかなね。 ・ 休み時間にはお菓子を食べているね。 ・ ノートは全教科で1冊なのかな？ ・ あれ？街の雰囲気が変わったね。 ・ ライフルを持っている人がいるね。	○ 写真を見て、日本との相違点や疑問点を出し合う。	グループ	
	T	写真を見て気付いたことや日本と違うところを見つけましょう。		・ 周りが「鉄線」で囲まれている家の様子が分かる写真を各グループに配る。 ・ 気付いたことを写真の貼った画用紙に書きこませる。	
	3, 日本との相違点、疑問点を見つけさせる。	・ 青空がきれいだね。 ・ 電信柱があるね。 ・ 商店がある。 ・ 日本製のトヨタ車がある。 ・ 道路に白線がないね。 ・ とげとげの針金が家のまわりにあるね。猿よけかな。 ・ 人と車が一緒に歩いている。危険だね。歩道もない。	○ グループごとに発表する。	グループ	
まとめ 15分	T	グループで見つけたことを発表しましょう。そして、疑問に思ったことをワークシートに書きましょう。		・ グループのリーダーに発表させる。 ・ 黒板に掲示する。 ・ グループの発表終了ごとに、自分と同じか違うか挙手させる。	エルサルバドルの街の様子から相違点を見つけて、画用紙に書いている。 (発言・画用紙への記述)
	4, エルサルバドルの課題を整理し、行動目標を自己決定させる。	・ 家の周りがとげで囲まれているのはどうしてだろう。	○ エルサルバドルが抱えている課題を知り、自分にもできることがないか考える。	個人	
	T	エルサルバドルと日本では、食文化や住居、学校・街の様子など日本と違うことがたくさんありました。また、教育の環境が整っておらず、体育のない学校もあることを知りました。先生はそのことを知って「どうにかしたい」と思い、エルサルバドルの子どもたちと楽しく体を動かせる「ラジオ体操」を教えてきました。自分のよさを生かして、みんなにもできることを考えよう。		・ エルサルバドルが抱えている諸問題(生活・教育・治安を中心)についてスライドをもとに話す。 ・ エルサルバドルが抱える問題について、どうしたら少しでも解決の方向に進めるか、自分ができることを考えさせる。	
		・ 私は、絵を描くのが得意			

	だから一緒に絵を描く。 ・身近なことから、できることがあるね。 ・ラジオ体操をしている子どもたちはみんな楽しそう。笑顔が素敵だね。				
	Ｔ 「みんな違ってみんな〇〇！！」には、エルサルバドルと日本で共通していえることが入るよ。どんな言葉が入るかな。			 ・エルサルバドルと日本の違いを認め合いながら、それぞれの国の良いところに目を向けさせる。	エルサルバドルの現状を知り、自分にできることを考え、ワークシートに書いている。 (学習の様子・ワークシートへの記述)
	・「みんな違ってみんな笑顔！！」だね。				

(2)授業の振り返り

① 良かった点

- ・写真や映像を活用することで、行ったことのないエルサルバドルを身近に感じ、興味をもって学習に取り組むことができた。
- ・フォトランゲージを通して、友達との考えの違いや共通点を見つけることができ、多様な見方や考え方に気付くことができた。
- ・エルサルバドルと日本の文化の違いを知ることで、他の国々にも興味をもつ子が増えた。中には、世界中の人を「幸せ」にしたいと、夢をもつ子もいた。

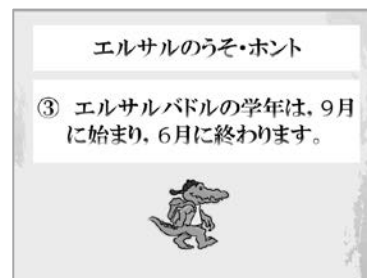
② 改善点

- ・フォトランゲージでは、家の周りを「鉄線」で囲まれた写真を提示した。「鉄線」から、エルサルバドルの治安の問題に目を向けるだろうと考えていた。しかし、子どもたちは、「道路に白線、歩道がない。」「車と人が一緒に歩いている。」など、自分たちの身近なことからの違いに目を向けていた。とても良い気付きだったのに、想定外の意見にとまどってしまった。子どもたちが考えたことをうまく生かすことができなかった。フォトランゲージでは、多様な考えを出すことがねらいであるので、「なるほど。」「おもしろいね。」「先生も気付かなかったよ。」など、子どもたちの気付きを受け止めながら授業を進められるようにしていく。
- ・今回は、道徳教育を中心に単元を構成した。次年度からは、各教科の導入などに位置づけて、どの学年でも誰でも国際理解教育ができるように指導計画を丁寧に作っていきたい。

(3)使用教材

①画像と動画

〔画像〕エルサルバドルクイズ「エルサルバドルのうそ・ほんと」スライド（３問）



〔動画〕現地の小学校で撮影したビデオ



休み時間の動画



子どもたちのノートの動画



ラジオ体操の動画

② 授業で使ったワークシートとフォトランゲージで使った写真

5年生 道徳「国際理解と親善」

みんながってみんな〇〇！名前（ ）

気付いたこと、感じたこと…何でも書いてね。
先生は、みんなの発見・感じる心を大事にしたいです！！
オール オーケー！！

（質問1）
グループの中の話し合いやグループの発表を聞いて、気付いたことや疑問に思ったことを書きましょう。

・道路にゴミ
・車と人がいっしょに行動
・

（質問2）
授業の感想（日本のいいところやエルサルバドルのいいところ・これからみんなで助け合っていかなければいけないこと等）や未来に向かって自分たちができることなど、感じたことをたくさん書きましょう。

・道路のせびを、しっかりして犯罪を する人が減るようになるために、エルサルバドル に働く所を、ふやす。そのために、子-の みんなと協力する。ほ金に協力する。 ☆かんは笑顔

授業で使ったワークシート



フォトランゲージで使った写真

(4) 参考資料等

- ・『わたしたちの地球と未来 エルサルバドル共和国』愛知県国際交流協会（2009 年）
- ・『写真で学ぼう！地球の食卓学習プラン10』開発教育協会（2012 年）

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

エルサルバドルの授業を通して、「日本からエルサルバドルにお金を寄付したい。」「治安改善のために、警察を雇う。」「エルサルバドルのおもちゃはおもしろい。」「ププサをもっと食べたい。」など、世界の様々な現状や遊び、食文化に興味をもつ子が増えた。また、自分とは違った考えを認め合う姿も多く見られるようになった。これまでの授業では、一部の児童の発言に流されることが多かったが、国際理解教育を進める中で、一人一人が自分の考えを堂々と発表できるようになり、各教科での発言回数も増えた。「人の考えを知るために、やっぱりコミュニケーションって大事だね。」「自分もみんなと違うよ。」「個性が光っていますね。」とつぶやく子など、互いに認め合う雰囲気になった。1学期にQU調査をした際、「非承認群」だったA子も2学期の終わりの調査では、「承認得点」を上げ、「学級生活満足群」となった。学校生活でもいきいきと学習したり遊んだりする様子が見られた。

道徳授業での夢作文では、将来の夢がパイロットになることだったB男は、「食料不足の世界の人に食料を届けるパイロットになりたい。」と、より具体的な夢を膨らませていた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

8に記載した児童の感想や態度から、異文化への興味関心が高まっていたり、互いの「違い」を認め合う姿が伺えたりしたので、単元目標の「外国への興味をもつ」「『違い』を認め合いながら豊かな人間関係をつくる」は達成できたといえる。しかし、「日本のつながり」や「自分にできること」については、まだまだ、身近なことと感じている児童は少なかった。今後、社会科と関連づけながら、「食料問題」「貿易」について学習を深めていく。また、当初、授業の時間数確保の問題があったが、この問題に対して、他教科との関連を図りながら年間指導計画に位置づけることで課題を解決した。

10 教師海外研修に参加して

日本人が世界で活躍していることを知り、日本人として誇りに思った。物資の支援だけでなく、現地に入り信頼関係を築きながら、人材育成をしている姿に感動した。コミュニケーションを大切にし、最後まであきらめない強い信念をもっている方々の姿がとても素敵だった。

帰国後、授業実践後など、常に、「自分には何ができるか。私にも役に立てることはないか。」など、考える日々が続いている。この経験とたくさんの出会いを多くの人に伝え、世界の国々に興味をもつ人が一人でも増えるように、授業実践を積み重ねていく。

9. 授業実践を終えて

この度、教師海外研修に参加した教員の授業視察や実践報告を聞かせていただいたので、これらを通した所感を述べます。

教師には、①教育に対する熱意と使命感を持っている、②豊かな人間性、責任感、協調性が備わっている、③子どものよさや可能性を引き出し伸ばすことができる、④常に学び続け、自己研鑽に励む、など不易とされるものと、世の中の流れや時代に合わせて教育に求められるものを素早く察知し、しなやかに対応することができる資質能力が求められます。

このような視点から、授業実践した教師を見ると、悩み喘ぎながらも、児童生徒のために意欲と使命感を持って授業づくりにチャレンジするとともに、今の学校教育に求められる①児童生徒主体の学習、②参加型・体験型・課題解決型の学習、③コミュニケーション能力の育成などが取り入れられており、正に教師に求められる資質能力を備えた姿でした。

ここでは、授業実践における視点として、次の3点をあげます。

①国内研修および海外研修の経験が授業にどのように生かされていたか

国内研修で学んだ持続可能な開発のための教育（ESD）の視点に立ち、開発教育の手法を実践するとともに、研修国の抱える開発課題を教材とする授業が行われていました。

②PDCAサイクルでの授業が実施（成果の検証と改善）できたか

毎時間ごとに児童生徒の反応をチェック（C）の中心に据え、児童生徒が国際協力や異文化を適切に理解できるように指導内容を修正（A）しながら授業を実施していました。

③教師海外研修で目指すスキルが修得できたか

世界が抱える課題を題材にしながら、国際協力の必要性和国際協力におけるJICAの役割を、教材化した研修国の事例を通して具体的に説明できる力が身につけていました。

学校における国際理解教育において成果を高めるには、主要先進国を対象とした学習を進めるとともに、世界の国々の約80%を占める開発途上国について学び、地球規模の様々な課題にどのように立ち向かうかを考えさせる取組が必要です。その点で、今回の授業実践は、児童生徒や学校が、新たな視点で世界を捉えるきっかけになったと感じています。

社会では、グローバル化が急速に進み、グローバル人材の育成が喫緊の課題となりました。そのような中では、本研修に参加した教師が今後も国際理解教育に力を発揮できるシステムづくりを行うとともに、校内や地域の学校全体で本研修の成果を共有することが、学校教育におけるグローバル人材の育成にとって、有効な手段の一つになると思います。

講道館柔道の創始者である嘉納治五郎氏の言葉に、「教育之事天下莫偉焉 一人徳教広加万人 一世化育遠及百世（教育のこと天下これより偉なるはなし、一人の徳教、広く万人に加わり、一世の化育、遠く百世に及ぶ）」というものがあります。地球規模の様々な課題を解決し平和な世界を築くためには、世代を渡って影響力を発揮する教育の力は欠かせません。本研修に参加した教師が今後も自己研鑽に励み、様々な場面で活躍し続けることを期待しています。

独立行政法人国際協力機構（JICA）東京国際センター
地域連携課 学校教育アドバイザー 仲山 嘉彦

10. 授業実践報告会

参加者の各都県で実施された国際理解教育セミナーやグローバルセミナーにおいて、地域の方々に教師海外研修の経験を生かした授業実践についての報告を行いました。

■新潟県報告会

イベント名：第7回国際教育研究会 ～ JICA 教師海外研修授業実践報告会～

日時：12月6日（土）13:00～16:45

場所：クロスパルにいがた

主催：にいがた NGO ネットワーク

後援：JICA 東京



■埼玉県報告会

イベント名：グローバルセミナー 2015 ～地域で育むグローバル市民～

日時：2月8日（日）10:00～16:40

場所：北浦和ターミナルビル

主催：埼玉国際協力協議会、(公財) 埼玉県国際交流協会、JICA 東京



■長野県報告会

イベント名：JICA 駒ヶ根平成 26 年度教師海外研修報告会 ～見て・聴いて・味わってモンゴル体験！～

日時：1月12日（月／祝）13:30～16:00

場所：松本市 M ウィング

主催：JICA 駒ヶ根



■群馬県報告会

イベント名：ぐんまグローバルセミナー 2015

日時：2月14日（土）13:00～16:30

場所：群馬県庁

主催：(公財) 群馬県観光物産国際協会、JICA 東京



■東京都報告会

イベント名：世界の課題を考える国際理解教育 ～ JICA 教師海外研修 東京都授業実践報告会～

日時：1月18日（日）13:00～17:00

場所：JICA 地球ひろば

主催：JICA 東京



■千葉県報告会

イベント名：国際理解セミナー ～グローバル人材の育成に向けて～

日時：2月15日（日）13:00～17:00

場所：千葉市生涯学習センター

主催：(公財) ちば国際コンベンションビューロー、JICA 東京



11. 学校・教員のための国際理解教育支援プログラム

JICAでは、世界の現状や開発途上国が抱える課題への理解を深めるため、学校現場で活用いただける国際理解教育／開発教育支援のための各事業を実施しています。

教員向けプログラム

●教師海外研修

開発途上国の現状、日本との関係や国際協力への理解を深め、その成果を子どもたちの教育に役立てることを目的とした研修です。校種や地域の違う先生方がチームとなって国内と海外の研修に取り組みます。研修で得た学びと感動を、授業や教材作成を通じて子どもたちに伝えてください！
毎年、全国で約160人の教員が研修に参加しています。



●国際理解教育セミナー

教員をはじめとした国際理解教育に関心がある方々を対象にした国際理解教育／開発教育の基本的な考え方を学ぶ講座を、各地のNGOや教育委員会、国際交流協会と協力して開催しています。ワークショップや参加型学習の手法を体験しながら、世界を学ぶ授業作りにお役立てください。



●グローバル教育コンクール

世界が抱えるさまざまな問題について考え、その解決のために行動できる人材を育成するため、学校現場などで活用できる素材を作品として募集しています。応募部門は次の二つ。

- ①「写真」部門・・・写真や映像を通して現地の人たちの暮らし、表情、そして言葉などと共に、「こんなことを、伝えたい！」というメッセージをお寄せください。
- ②「グローバル教育取り組み」部門・・・学校や市民団体での国際協力や教育への取り組みをはじめ、NPOやNGOなどの国内・海外での活動について報告ください。

●青年海外協力隊（現職教員特別参加制度）

教員の方々が身分を保持したまま、青年海外協力隊または日系社会青年ボランティアへ参加するための制度です。毎年、春募集時（3～5月）に募集しています。

児童・生徒向けプログラム

●国際協力出前講座

開発途上国の実情や日本との関係、日本の国際協力について知っていただくために、教室にJICAボランティアの経験者が講師としてお伺いします。講座は、異文化理解、多文化共生、保健教育や農業、医療、スポーツ、音楽といったテーマや、対象国や地域を決めて行うことも可能です。また、道徳や人権学習、ボランティア学習、環境教育、キャリア教育などの授業でも活用されています。



●国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

毎年、開発途上国や国際協力をテーマに中学生・高校生を対象としたエッセイコンテストを開催しています。上位入賞者には、開発途上国でのJICA事業の現場視察など研修に参加する機会が与えられます。コンテストの開催概要や募集作品のテーマについては、毎年6月頃にJICA地球ひろばのHPで発表されます。



国際理解教育／開発教育のための教材

●ぼくら地球調査隊 小冊子5種

環境、感染症、教育、食料問題など、私たちの身近で起こっている地球規模の課題について、楽しく学ぶことができます。

※ホームページよりダウンロードいただけます



世界の水問題
(環境)



学校に行けない
世界の子どもたち
(教育)



砂漠化する惑星
(環境)



いのち、輝け！
(保健・公衆衛生)



世界の食料
(食糧)

●ぼくら地球調査隊 ウェブコンテンツ

博士と3人の子どもたちが世界を旅しながら地球について学ぶウェブコンテンツです。アニメーションを見ながら、地球で起きている様々なことを知り開発途上国を身近に感じることができます。



「JICA地球ひろば」のご案内

●JICA地球ひろば

JICA地球ひろばでは、開発途上国の暮らしの現状や、地球が抱える問題、国際協力の実情などを、見て・聞いて・さわって体験できる展示と、開発途上国での活動体験談や参加型体験学習を組み合わせたプログラムを実施しています。修学旅行、社会科見学等の団体訪問も受け入れており、年間約1万人に見学いただいています。

開館時間：10時～20時（平日）／10時～18時（土・日・祝）

休館日：第1・第3月曜日、年末年始 ○入館無料

連絡先：〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

TEL：03-3269-2911／0120-767278

詳しくはコチラ

JICA地球ひろば



検索

あなたの近くのJICA相談窓口

●JICAデスク

開発途上国で活動した経験を持つ国際協力推進員が、皆さんのお越しをお待ちしています。

東京都(23区外)八王子市役所市民活動推進部 多文化共生推進課内 Tel: 042-620-7437

✉ jicadpd-desk-hachiojishi@jica.go.jp

※東京都(23区)については、JICA東京(Tel: 03-3485-7680)までお問合せください。

埼玉県 (公財)埼玉県国際交流協会内 Tel: 048-833-2992

✉ jicadpd-desk-saitamaken@jica.go.jp

千葉県 (公財)ちば国際コンベンションビューロー内 Tel: 043-297-0245

✉ jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp

群馬県 (公財)群馬県観光物産国際協会内 Tel: 027-243-7271

✉ jicadpd-desk-gunmaken@jica.go.jp

新潟県 (公財)新潟県国際交流協会内 Tel: 025-290-5650

✉ jicadpd-desk-niigataken@jica.go.jp

長野県 (公財)長野県国際化協会内 Tel: 026-235-7186

✉ jicadpd-desk-naganoken@jica.go.jp

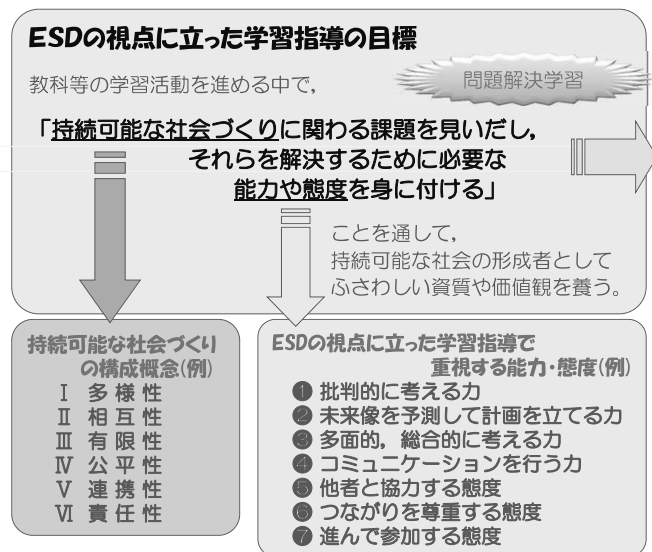


おわりに

現代社会を取り巻く状況は、日々刻々と変容の度を高めるとともに、地域の結び付きを複雑なものとしており、将来在るべき自己や社会の姿は、想像することすら困難な時代となっています。次世代を担う子供たちには、このような困難を乗り越え、持続可能な社会を構築すべく、「厳しい挑戦の時代」を生き抜く力が求められています。

そのような中、国際協力機構と文部科学省（国立教育政策研究所）では、グローバル時代の初等中等教育を考える国際シンポジウムを開催するなど、価値観や文化、社会や経済の仕組みの違いを活かしながら、協力して地球規模の困難な課題を解決する力を育成するための教育の在り方について研究を重ねてきました。今回の教師海外研修では、そこで議論となった「持続可能な開発のための教育（ESD）」を教育課程上に位置付けることを視野に、必要とされる資質・能力とは何かを試行する取組となっています。報告書の様式も大幅に改められ、右図にある枠組みを踏まえて、「単元の目標」には ESD で重視する能力・態度を、「ESD の視点」としては持続可能な社会づくりの構成概念を明示することが求められています。これは、これまで積み上げてきた国際理解教育／開発教育の理念を、それと密接に結び付く平和や人権などの社会的視点とともに、貧困撲滅などの経済的視点、防災などの環境的視点等との関係において捉え直し、改めて国際理解教育／開発教育の充実を図ろうとするものです。

図 ESD の学習指導過程を構想し、展開するために必要な枠組み



(http://www.nier.go.jp/kaiatsu/pdf/esd_leaflet.pdf による)

実際の海外研修や事前事後の国内研修においても、そのような巨視的な視点から授業への反映が検討されました。特に、モンゴル、エルサルバドルの滞在中には、両派遣団ともに意欲的な現地取材がなされ、そこで体験、見聞したできごとを、どのようなねらいの下、どのような資料を用いて、どのような手法で展開するのか、昼夜を分かたず議論が重ねられました。一つの授業を作り上げるのに、約 10 日間の現地調査を伴う教材研究を行えることは大変得難い経験であり、一方で、経験した多くのできごとを授業という形に吟味、昇華していくことは大変困難なことでした。しかし、だからこそできあがった本報告書は、一つ一つが情報提供してくれた現地協力者の想いが詰まったものであり、授業者の試行錯誤の賜物であろうかと思われます。授業者にはこれからも継続して、この授業をブラッシュアップしていくことが期待されるわけですが、本報告書をご覧になった方々にも、授業者や本事業関係者の意を汲んでいただき、掲載されました指導案をクリティカルかつクリエイティブに再構成して活用していただければと願う次第です。

上図を掲載するリーフレットには、「ESD の視点に立った学習指導を進める上での留意事項」として、「能力・態度」「教材」「人」という「3つのつながり」の重要性を示しています。このうち「人のつながり」は、一義的には児童生徒、地域、多様な立場や世代、過去や将来世代のつながりを示していますが、本研修を主催する国際協力機構の関係者や現地の方々、そしてもちろん研修に参加した先生方、それに加えて本報告書を手に取っている皆さんを含めた「人のつながり」もあろうかと思えます。様々な人々の「つながり」により作成された本報告書が、さらなる「つながり」を求めて広く活用されることを願ってやみません。

平成 26 年度 教師海外研修報告書
～国際理解教育の授業実践事例集～



独立行政法人 国際協力機構 国内事業部 東京国際センター 地域連携課

〒151-0066

東京都渋谷区西原 2-49-5

Tel:03-3485-7680

<http://www.jica.go.jp/tokyo/>